第2節　火山灰分析

下田遺跡の火山灰

山田一郎、庄子貞雄（東北大学農学部）

下田遺跡（平鹿郡大森町板井字下田）の８ＳＤ－１および８ＳＤ－２の両試料が火山灰かどうか、火山灰とすれば、この地域に分布する灰白色火山灰かどうかを検討した。尚、比較の為に平鹿遺跡（平鹿郡増田町字平鹿）の分析結果も示した。

第１表には両試料の粒径組成を示した。両試料とも＞２㎜部分や２～0.2㎜部分が少ない、細粒の粒径組成であった。８ＳＤ－２の試料の＞0.2㎜部分は、岩片が極めて多かった。

第２表には１次鉱物組成を示した。８ＳＤ－１の試料は、重鉱物含量、重鉱物組成、軽鉱物組成とも平鹿遺跡の灰白色火山灰と類似していることから、灰白色火山灰と考えられる。８ＳＤ－２の試料、重鉱物含量と重鉱物組成は平鹿の試料と類似していた。しかし、軽鉱物部分では火山ガラス中に灰白色火山灰に比べ顆粒状の形態をもつガラスが多く、また0.2㎜以上部分では岩片がほとんどであることから、８ＳＤ－２の試料が純度の低い灰白色火山灰であるかどうかは不明である。

試料名	＞2㎜	2－0.2㎜	0.2㎜＞(wt%)	備考
８ＳＤ－１	0	9	91	
８ＳＤ－２	1	8	92	＞0.2㎜部分に岩片極めて多い

第１表　粒径組成

試料名	重鉱物組成(粒数%)				軽鉱物組成（粒数%）							重鉱物含量
	シソ輝石	普通輝石	角閃石	磁鉄鉱	－火山ガラス(形態別)－ スポンジ	繊維	扁平	顆粒	斜長石	石英	風化粒	(wt%)
８ＳＤ－１	54	9		36	20	3	7	36	26	1	7	10
８ＳＤ－２	46	13		41	13	1		62	24			9
平鹿	48	18	1	33	54	6	7	18	14	1		4

第２表　１次鉱物組成

第4章　まとめ

調査の結果、縄文時代前期～平安時代の合計57基の遺構を検出した。遺構の所属する時期は遺構内出土遺物や周辺の遺物出土状況から以下のように考えられる。

縄文時代前期（8遺構）

SK113土坑　SK51土坑　SK95土坑　SK96土坑　SKI91竪穴遺構　SK116土坑　SK120土坑　SK121土坑

縄文時代晩期（19遺構）

SI37住居跡　SK21土坑　SK19土坑　SK41土坑　SKP52ピット　SK33土坑　SK62土坑　SK63土坑　SK34土坑　SK35土坑　SK53土坑　SK70土坑　SK45土坑　SK39土坑　SK44土坑

SKP77ピット　SKP105ピット　SKP40ピット　SKP46ピット

縄文時代晩期または弥生時代後期（5遺構）

SI26竪穴住居跡　SK25土坑　SK32土坑　SK22土坑　SK23土坑

平安時代（25遺構）

SI69竪穴住居跡　SI74竪穴住居跡　SK87土坑　SK89土坑　SK90土坑　SK13土坑　SB92竪穴住居跡　SI93竪穴住居跡　SK98土坑　SI100竪穴住居跡　SK99土坑　SK108土坑　SK101土坑　SN107焼土遺構　SN103焼土遺構　SN102焼土遺構　SK112土坑　SK115土坑　SK11土坑　SN110焼土遺構　SK30土坑　SX130柱穴群　SB24建物跡　SK14土坑　SK16土坑

以下では、1．縄文時代前期初頭の土器、2．縄文時代・弥生時代の遺構と遺物、3．平安時代の遺構と遺物、について若干のまとめを行いたい。

1．縄文時代前期の土器について

第Ⅰ群土器で器形が判明したのは復元できた1個体のみで、他はすべて破片である。復元土器は尖底の深鉢形土器で、胴部がやや膨らみ口縁部が外反気味に立ち上がる。底部破片の中には平底や平底風の丸底のものも少量含まれるが、尖底のものが多い。縄文が施文されている破片は胎土に繊維を含み、焼成は良好である。連続刺突文が施文された破片の大部分と、ループ文の施文された破片の一部には繊維を含まず、細粒砂を多く含むものもある。

以下では、文様構成要素による遺物の分類を行い、出土グリッド毎の文様構成要素の組成を中心に本遺跡における第Ⅰ群土器の把握を試みたい。尚、第160図（1）では出土破片点数と出

土破片点数別グリッド数とは反比例の関係にあるが、サンプル数が少ないことによる組成比の誤差を小さくし、かつ検討対象グリッド数を多くするために、ここでは文様の判明した破片が15点以上のグリッドを対象とした。これは第Ⅰ群土器が出土したグリッド数の15%にあたるが、出土破片総数の76%、文様判明破片数では80%にあたる。

第160図（1）は出土状況をグリッド毎の文様判明破片数で表現したものである。調査区南側の丘陵頂部を取り囲むように斜面に遺物の集中が見られ、捨場が形成されている。さらにそれは丘陵頂部の西、北、東の3ブロックに分かれる。北西側に続く尾根上には遺物は少なく、捨場が途切れている。

第3表は部位別の出土破片数、文様判明破片数、文様判明破片における各文様構成要素別の破片数、そのうちの斜行縄文の原体別破片数を示したものである。分類は52ページ～53ページの遺構外出土土器の項で行った分類を用いる。地文は斜行縄文が最も多く文様判明破片の91%を占める。その他には半截竹管や棒状工具端部による連続刺突文、ループ文、結束羽状縄文、非結束羽状縄文、組紐文がある。口縁部には文様帯を構成しないが、口唇に半截竹管や棒状工具端部，撚紐原体閉端による刺突、撚紐原体側面押圧、撚紐原体回転押圧、指頭押圧による装飾が施されるものもある。胴部には装飾を加えないものが多いが、コンパス文、綾絡文、撚紐原体閉端刺突も少量見られる。底部周縁から底面にかけて半截竹管や棒状工具、撚紐原体閉端による刺突を施すものもある。

最も多い地文はRL又はLRの正撚りの単節斜行縄文である。これには0段が2条のものと多条のものがある。破片数のRLとLRの比率は、合計数ではRLが58%であるが、グリッド単位でみると25～100%とかなりのバラつきがある。そこで各グリッドにおける地文の単節斜行縄文のRL、LRの比率と捨場の3ブロックの関係をみると、第4表に示すように9グループにまとめることができる。第5表（1）はこの9グループをRL比率の小さい順に並べて地文及び口唇、胴部、底部の装飾文における各文様構成要素の比率を集計したものである。

各項目をRL比率の順に比較すると以下のような特徴を見いだすことができる。

地文では複節斜行縄文のRLRlで⑧が極端に大きい。同様のことは複節斜行縄文のLRLrの⑥、連続刺突文の②、ループ文の⑧にもみられる。これらはLRLrの⑥を除いて、各グループに含まれるグリッドの中の特定の1グリッドで集中して出土したことによる。②ではLC36、⑧ではLL39である。このグリッドを除いた数値では極端な突出をせず、⑧のRLRlは2%、ループ文は0%、②の連続刺突文は3%となる。これらは②や⑧としての傾向を示すものではなく②や⑧の内部における土器の廃棄場所間の差異を示すものである。ただし⑥のLRLrは⑥に属する3グリッドとも10%前後の共通した値となっており、⑥でLRLrの比率が大きくなるのは⑥の傾向と認められる。

ブロック	グリッド	文様判明数	文様不明数	破片総数	部位別数 口縁部	部位別数 胴部	部位別数 底部	地文 単節斜縄文 RL	地文 単節斜縄文 LR	地文 複節斜縄文 RLRl	地文 複節斜縄文 LRLr	1 連続刺突文	6 ループ文	4 結束羽状縄文	その他	口頸部装飾文 1a	2a	2b	2c	2d	2e	2不明	2f	4f	不明	胴部装飾文 1(ア)(ア)	2(イ)(イ)	2(ウ)(ウ)	4(ウ)	(エ)	2(オ)	4(オ)	底部装飾文 1A	1B	2B	2C	2C'	2D	その他・不明	単節斜縄文RL:LR比率 RL:LR	区分
西	LB35	95	110	205	7	194	6	49	24	2	3	2		3	12		1	1	1	3			1				1	7	1	1	74	2						2	2	67:33	[illegible]
西	LB36	27	20	47		46	1	12	5	1		1			3																25						1			71:29	[illegible]
西	LC34	78	31	110	14	94	2	26	33	1	3	3		6	7			1		2			6	1	4		1	1	2	2	56	2				1		1		44:56	[illegible]
西	LC35	22	29	51	4	47		6	8	1	2	3			2		1		1			1	1					1			14								1	43:57	[illegible]
西	LC38	221	35	256	21	233	2	120	25	30		1	33		13			1	13	1	5				1			51		4	117									83:17	[illegible]
西	LD34	52	16	68	10	56	2	14	27	2		2	1	1	5	1			1	2			3	1	2						41	1						1	1	34:66	[illegible]
北	LF38	17	5	22	2	20		11	3			1			2	1			1												15									79:21	[illegible]
北	LG39	64	78	142	3	138	1	46	5	1		2	1	3	6					3									1		54	2						1		90:10	[illegible]
北	LG40	15	28	43	45			10							5																15									100:0	[illegible]
北	LG41	15	5	20	3	17		9	2	1					2			1					2					1			11									82:18	[illegible]
北	LH39	42	41	83		83		18	10	1	1	1	2	3	6																36	1								64:36	[illegible]
北	LH41	21	8	29	3	26		4	4	1	7				5					1			2								18									50:50	[illegible]
北	LI39	59	34	93	6	87		25	12	2	2	2	6		10	1		1					4				1	1			44									68:32	[illegible]
北	LJ40	118	58	176	23	150	3	30	21	1	18	2	4		44	1	1	4		1			11		5			1			91							2	1	59:41	[illegible]
北	LJ39	85	77	162	5	155	2	34	34	1	2	1	3	2	8			1				2	1		1		2	6	1		66	1						1	1	50:50	[illegible]
北	LJ49	22	31	53	3	30		5	10	1					2			1					2								19									47:53	[illegible]
北	LK38	63	29	92	5	85	2	15	44			1			3	1		1		1			2								53				1				1	25:75	[illegible]
北	LK39	46	24	70	4	65	1	13	20		5	5	1		2	1		1					2			2					36		1							39:61	[illegible]
北	LK40	57	21	78	6	71	1	21	17	4	5	4		2	4			2	1	1	1	1				1			1		44	1		1						55:45	[illegible]
北	LK41	27	11	38		38		9	14				1		2													1			25									39:61	[illegible]
北	LL38	15	11	26		26	1	6	9						2																17							1		40:60	[illegible]
北	LL39	134	84	218	9	207	2	29	61	3	11	18	1		11	3		1	1	1	1		2			3				1	105							1	1	32:68	[illegible]
東	LM32	16	27	43	1	41	1	3	6		2				5								1								14							1		33:67	[illegible]
東	LM35	22	26	48		48		16	4			1			1												1	1			21									80:20	[illegible]
東	LM36	28	10	38	3	33	2	12	6			1			3				2												28							2		67:33	[illegible]
東	LN32	16	2	18	2	16		6	5		2			1	2								2								13	1								55:45	[illegible]

第3表　第Ⅰ群土器類別破片数表

グリッド・RL比率(%)	25	32	33	34	39	40	44	45	47	50
北	LL36	LL39			LL39 LL41	LL38			LJ49	LJ39 LJ41
西				LJ34			LC35	LC34		
東			LM32							
区　分	①	②			③		④		⑤	

グリッド・RL比率(%)	55	59	64	67	68	71	78	80	82	83	98	100
北	LR40	LJ40	LR39		LJ39		LF39		LG41		LG39	LG40
西				LR35	LC33	LR36				LC36		
東	LR32			LM26				LM35				
区　分	⑥		⑦				⑧				⑨	

第4表　グリッド別RL比率区分表

複節斜行縄文のRLRlは⑧でLC36から多く出土しているが、それを除くと0～3％と全体に小さく、特に大きい差異は認められない。複節斜行縄文のLRLrは②～④では5％前後であるが⑤でやや小さくなる。しかし⑥ではそれ以外と比べて突出して高い値をとる。⑦では小さく、⑧⑨では出土していない。全体に単節のLRと同様に②から⑧にかけてしだいに比率が小さくなる傾向を示す。⑥のみが突出している。

連続刺突文は、②のLL39で突出した大きい比率を示すが、LL39を除くと②では3％である。③④は5％前後、⑤～⑨は1～3％とやや小さくなる。全体として②から⑨にかけてゆるやかな減少傾向を示している。その中でやや小さめの①及びLL39以外の②、⑤～⑨、とやや大きめの③④とに分けられる。

ループ文は⑧のLC36で突出して多く出土したが、それを除くと全体に0～3％と小さい値で、一貫した傾向を示している。

結束羽状縄文はほとんど含まれない①～③と2～6％含まれる④～⑨で差異がある。

以上から、すべての地文の組成が単節斜行縄文におけるRL比率の順と明確な相関関係をもつわけではなく、すべての地文に共通した明確な傾向性は認められない。しかし複節斜行縄文のRLRl、LRLrにおける⑦⑧間、連続刺突文における④⑤間、結束羽状縄文における③④間の差異は単節斜行縄文におけるRL比率の順とある程度の相関関係をもつとみられる。

次に装飾文を検討する。まず口唇施文では、口唇施文が行われる比率が、①～⑦では約50％であるのに対し⑧⑨では90％以上で約2倍となり大きな差異が認められる。また①～⑦の中では、①～③は口唇施文のうちの$^{1}/_{3}$～$^{1}/_{2}$が1aであるのに対し、④～⑦では1aの比率は極めて小さい。また①～③は1aと2b～2eが施文されるのに対し、④～⑦では2aが現れ、2a～2eが施文され1aはほとんどなくなる。⑧⑨では2b～2eが施文され1a、2aはない。このように口唇施文では①～③、④～⑦、⑧～⑨と大きく3グループに分かれる。

胴部、底部装飾文では、Aは②③でややあるものの④～⑨ではほとんどない。胴部、底部装

飾文のうち部分的に刺突や沈線を加える手法であるイ、およびB、C、C'は②③を除いて、①～⑦までは含まれるが⑧⑨ではない。ウは③～⑨に含まれる。⑧ではLC36で多く出土したため比率が高いがLC36以外の3グリッドでは4％である。口唇施文及び胴部、底部装飾文全体でみると約半数には口唇施文がなく1aとアが比較的多く含まれる①～③、約半数に口唇施文がなく1aとアがほとんどなく2a、イ、ウが含まれ装飾文のバラエティーが広がる④～⑦、90%以上に口唇施文があり、胴部、底部にはウ以外の装飾文は施さない⑧⑨の3グループに大別される。

以上みてきた各文様構成要素の特徴から、地文の単節斜行縄文のRL比率と装飾文の関係によって①～⑨をさらにA群、B群、C群の3群にまとめることができる（第5表（2））。これでみると地文にも一定の傾向性が認められる。

さて、このA～C群は、同時期における廃棄場所によるバラエティーなのか、それとも捨場が形成されていく間の時間的変遷を示しているものなのかが問題となる。そこで、次に各グループに含まれている特徴的な文様構成要素間に時間的変遷の過程が認められるかどうか検討してみる。

底部では、1Aは表館式に含まれる要素である。表館式に現れる連続刺突文は広い間隔の刺突から刺突の間隔が次第に狭くなり、半截竹管の内側を使用する押引文へと変遷する。A群に属する1Aの底部周縁と底面には間隔の狭い連続刺突が放射状に半截竹管で施文され、B群の1A'は平行の半截竹管押引文が施文されている。ともに1点しか出土していないのでこれだけでは断定できないが1Aより1A'が後出的である。また、LC33グリッドから出土した平底風丸底の第23図101は、器形は表館式にみられるものであるが、底面に装飾される連続刺突文の施文原体は撚紐原体閉端である。これは本来の表館式の底部を施文原体を変えて模倣したもので、表館式の影響下に製作されたものと考えられる。尖底部に装飾文を施文する破片は2B、2C、2C'の3点のみであるが尖底部の周縁に撚紐原体閉端刺突を巡らす2Bは、器形は尖底であるが第20図76と施文部位、施文手法が共通する。そこで底部の装飾文は、表館式の半截竹管による連続刺突文からの影響で、表館式の連続刺突文土器によく似た第23図101や尖底土器の底部に施文する2B、2Cが製作され、さらに2Cと同一の施文原体ながら施文手法の異なる2C'が製作されるという変遷が考えられる。

胴部ではアは1に、イ、ウは2と4とに施文される。施文原体も1、アは半截竹管や棒状工具であるのに対し、イ、ウ、2、4、は撚紐原体である。したがって地文と装飾文は共通する施文原体を用い、原体の種類と文様には強い相関関係が認められる。

イはループ文原体の閉端刺突による馬蹄形の刺突（a）と、先端まで撚りあげた通常の撚紐原体による閉端刺突（b）に細分される。（b）は底部装飾文2Bが胴部にも施文されたもの

区分	グリッド数	文様判明率(%)	単節斜縄文 RL:LR比率の平均値 RL : LR	地文の比率(%) 複節斜縄文 RLR(l)	LRL(r)	1連続刺突文	6ループ文	4結束羽状縄文	胴部・底部装飾文の比率(%) 1(ア)(ア)	2(ア)(イ) 2B 2C 2C'	2(ウ) 4(ウ)	1A 1A'	2(オ) 4(オ) 2D	(エ)	その他不明	口唇部装飾文の比率(%) 1a	2a~2e 2不明	2f	4f・その他不明	2類中口唇施文の比率	1a・2a~2f・2人のみのみ(%) 1a	2a~2e 2不明	2f	2類中口唇施文の比率	備考
①	1	68	25 : 75			2				2			98			20	40	40		50	20	40	40	50	
②	3	61	33 : 67	2	6	10	1	0.5	2			0.5	89	0.5	8	20	35	30	15	54	24	41	35	54	A
③	3	66	39 : 61		5	5	2		2		1		93		4	25	25	50		33	25	25	50	33	
④	2	63	44 : 56	2	5	6		6		2	5		87	2	4		33	39	28	45		46	54	46	
⑤	3	52	49 : 51	2	2	1	2	2		2	6		91		1		45	45	9	50		50	50	50	B
⑥	3	70	56 : 44	3	12	3	2	2	0.6		1	0.6	92		5	3	39	42	16	48	4	46	50	48	
⑦	6	55	68 : 32	3	2	3	3	3	0.3	1	4		89	0.4	5	5	53	42		56	5	53	42	56	
⑧	4	79	81 : 19	11		1	12				21		66	2	5	4	85	8	4	92	4	88	8	92	C
⑨	2	43	95 : 5	1		3	1	4			1		95		5		100			100		100		100	

第5表(1)　RL比率別破片類別比率表

区分	グリッド数	文様判明率(%)	単節斜縄文 RL:LR比率の平均値 RL : LR	地文の比率(%) 複節斜縄文 RLR(l)	LRL(r)	1連続刺突文	6ループ文	4結束羽状縄文	胴部・底部装飾文の比率(%) 1(ア)(ア)	2(ア)(イ) 2B 2C 2C'	2(ウ) 4(ウ)	1A 1A'	2(オ) 4(オ) 2D	(エ)	その他不明	口唇部装飾文の比率(%) 1a	2a~2e 2不明	2f	4f・その他不明	2類中口唇施文の比率	1a・2a~2f・2人のみ 1a	2a~2e 2不明	2f	2類中口唇施文の比率	備考
A	7	64	35 : 65	1	5	7	1	0.2	2	0.3	0.3	0.3	92	0.3		21	34	34	10	50	23	38	38	50	Ⅰ期
B	14	59	58 : 42	2	5	3	2	3	0.3	1	4	0.2	90	0.5		3	42	42	14	50	3	49	49	50	Ⅱ期
C	6	66	86 : 14	9		1	10	1			16		72	1		3	86	7	3	93	4	89	7	93	Ⅲ期

第5表(2)　時期別片類別比率表

で、連続刺突文の影響で製作されたものである。（ａ）の施文原体はループ文原体の先端である。しかし地文がループ文の破片にイが施文されたものはない。ループ文も連続刺突文と同様に表館式、早稲田６類などに用いられる文様で、２を地文とする土器に（ａ）が施文されるのは、イが連続刺突文とともにループ文の影響下で製作されたことを示すものと考えられる。

アとウは装飾の視覚的効果は共通する。特にウの中でも復元土器にみられるように地文の中に２条一組で横位に数段施文されるものはアと極めて類似した視覚的効果を表現している。底部における１Ａから第23図101への変化は文様の視覚的効果を共通させながら施文原体が半截竹管から撚紐原体へ変化したものであるが、２ウは胴部においても同様の発想で１アからの影響によって２の一部に発生したものと考えられる。したがって胴部装飾文は、１ア、６→２イ、２ウの変遷が想定できる。

このように底部、胴部には、地文または底部装飾文としての連続刺突文と胴部装飾文のコンパス文の視覚的効果を、地文が斜行縄文の土器に撚紐原体を用いて模倣して表現するという共通した動きの存在が認められる。これは施文原体は撚紐を用いるという原則を維持しつつ表館式の文様構成要素の一部を受容した過程を示しているといえる。

口唇施文は、１にはすべてａ、２にはａ～ｆが施文される。２ａでは第21図80がLD33グリッドで底部の第23図101と共伴している。施文手法からすればやはり１ａの影響のもとに製作されたものと考えることもできる。２ｂ～ｅは２の口唇施文の量的な主体をなすものである。口唇施文手法の漸移的変遷は、ａ→ｃ・ｂ→ｄ→ｅ、あるいはこの逆が考えられるが、底部、胴部装飾文と地文の関係を考慮すれば１・６から２への影響という方向が想定されるので、口唇施文は１ａ→２ａ→２ｃ・２ｂ→２ｄ→２ｅの変遷になるものと考えられる。

このような文様構成要素の系譜の変化をさきに大別したＡ～Ｃ群にあてはめてみると、底部、胴部についてはＡ群→Ｂ群→Ｃ群の順に変遷することがわかる。しかし、口唇施文については上述のような単純な変遷はしていない。２ａ～２ｅの中では２ｂ～２ｅがＡ群～Ｃ群のいずれにも含まれるのに対し２ａはＢ群のみで、数量的にも２ｂ～２ｄと比べて少ない。この２ａのあり方は胴部の２イ、底部の１Ａ、２Ｃ、２Ｃ′と共通する。２ａの第21図80がLD33から底部の第23図101と共伴しているが、LD33は単節斜行縄文の破片はRLが６点のみで破片数が少なく、これだけからは①～⑨のどこに含まれるのかは判然としない。ただLRの比率が高いＡ群よりはRLの比率が高いＢ群かＣ群に含まれる可能性が高い。また第23図101が１Ａの模倣によって製作されたものとすればＡ群かＢ群に含まれそうである。以上からLD33はＢ群に含まれるものと考えたい。２ｂ～ｅはＡ～Ｃ群のいずれにも含まれるので、Ａ～Ｃ群がどのような順で変遷しても本遺跡の土器には当初から存在していた文様構成要素であるといえる。ただしＡ群では比較的２ｂが多くＣ群では比較的２ｄが多いので、Ａ群→Ｃ群の順の変遷を反映しているものと

も考えられる。

以上のような様相を考慮すれば、各文様構成要素の特徴から大別したA～C群は、A群→B群→C群の時間的変遷を示すものと考えられる。さらにA群→B群→C群の変遷は地文の単節斜行縄文のRLとLRの比率がLR主体からRL主体へ漸移的に変化していくことと対応しており、A～C群の中における①→⑨も時間的変遷を示すものと考えられる。したがって本遺跡では大きく3期の変遷が認められ、A群が第Ⅰ期、B群が第Ⅱ期、C群が第Ⅲ期となる。

第Ⅰ期～第Ⅲ期の変遷をグリッド毎に表したものが第160図（2）である。これでみると北側と西側の遺物集中区域は、調査区南部の丘陵頂部側から北西側に続く細い尾根をはさんで尾根の線に対称に両側斜面に捨場が形成され、東側から西側へと広がっていくことがわかる。さらにやはり丘陵頂部を囲む位置にある東側にも捨場が形成され、丘陵頂部に近いところから次第に遠いところへと北西側に広がっていくようである。このように捨場が形成されるのは、丘陵頂部が人間活動の主要な場で、北西側及び南側に続く尾根は通行に利用されたことによるものと考えられる。

下田遺跡の第Ⅰ期～第Ⅲ期の土器群の編年的位置付けは、連続刺突文土器の1、a、ア、Aの要素から、第Ⅰ期は表館式の比較的新しい段階に並行し、第Ⅱ期、第Ⅲ期は表館式に後続する時期にあたる。最近は表館式に後続するものとして早稲田6類をあてることが多い。そしてその根拠として主に早稲田6類a、bと表館式の文様構成や施文手法における型式学的検討が行われている。しかし本遺跡では第Ⅰ期～第Ⅲ期のいずれにも早稲田6類a、bが含まれていない。そして主体となる土器は第Ⅰ期、第Ⅱ期、第Ⅲ期のいずれも斜行縄文のみが施文された土器で、従来の分類によれば早稲田6類cにあたるものである。早稲田6類cが主体となり早稲田6類a、bを含まない例は岩手県滝沢村の仏沢Ⅲ遺跡の第Ⅱ群土器にもみられる。仏沢Ⅲ遺跡第Ⅱ群土器は尖底深鉢形土器で、地文がほとんどLRまたはLRLrなどの最終段をLにするものであること、地文のほかには口唇に施文があるものとないものがあること、口唇施文は指頭押圧が多く、撚糸原体閉端刺突や撚糸原体側面押圧、撚糸原体回転押圧も若干含まれることから下田遺跡第Ⅰ期に先行するものと考えられる。

本遺跡の土器群や仏沢Ⅲ遺跡第Ⅱ群土器を早稲田6類cにあてたとしても、半截竹管押引文を施文する早稲田6類a、bを中心とした土器編年とは適合しない。従来早稲田6類cとされてきた斜行縄文のみが施文される土器は、表館式や早稲田6類a、bと従属的に共伴し、単独では土器編年を構成する型式とはされていなかった。しかし本遺跡の土器は、表館式と並行関係にあってその影響を受けながらも独自に変遷するものである。また、同様な様相を示す仏沢Ⅲ遺跡第Ⅱ群土器とは前後関係が想定される。今後、早稲田6類cとされてきた斜行縄文のみが施文される土器の時期、系譜、地域的広がりの再検討が必要である。

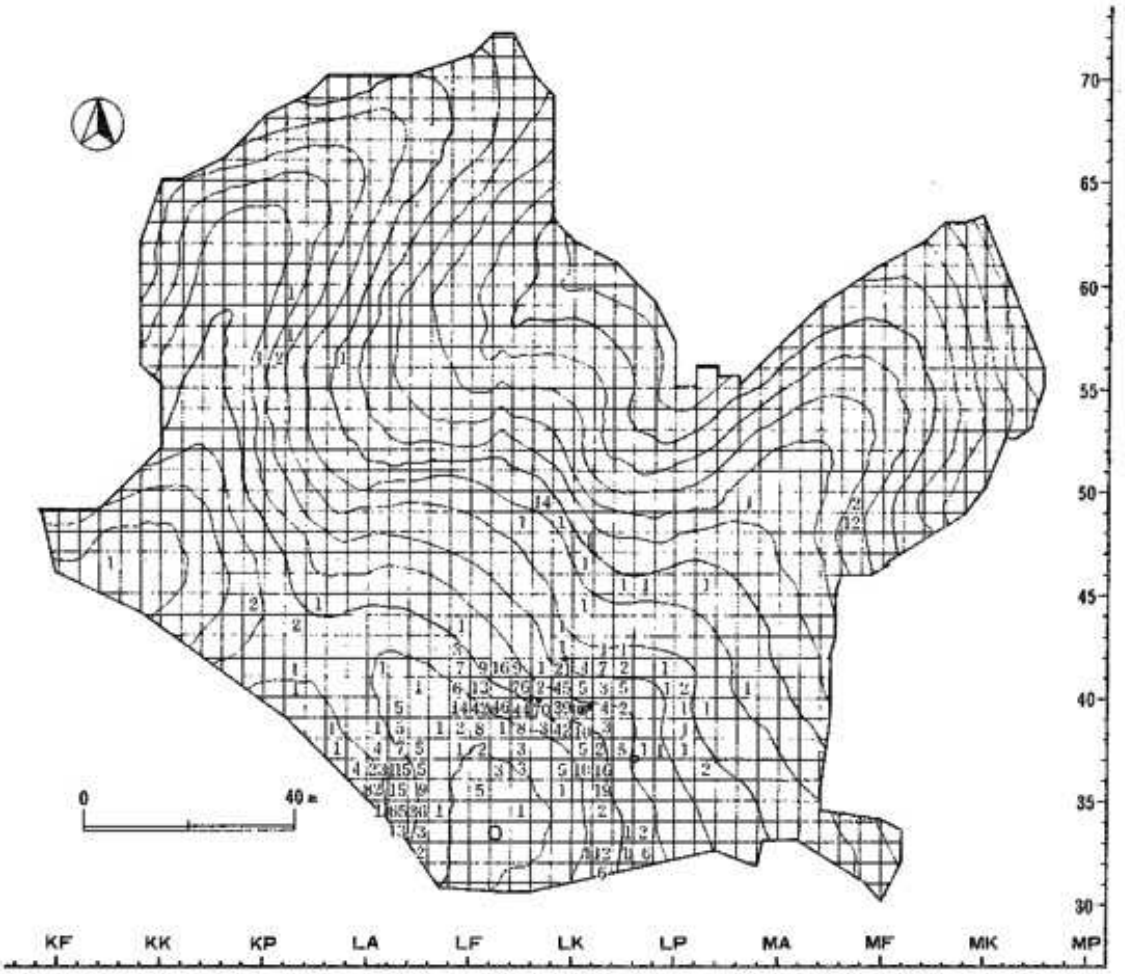
さて、3時期にわたる土器群の変遷を土器製作の背景にある集団の規制という側面から考えてみると以下のような解釈ができる。

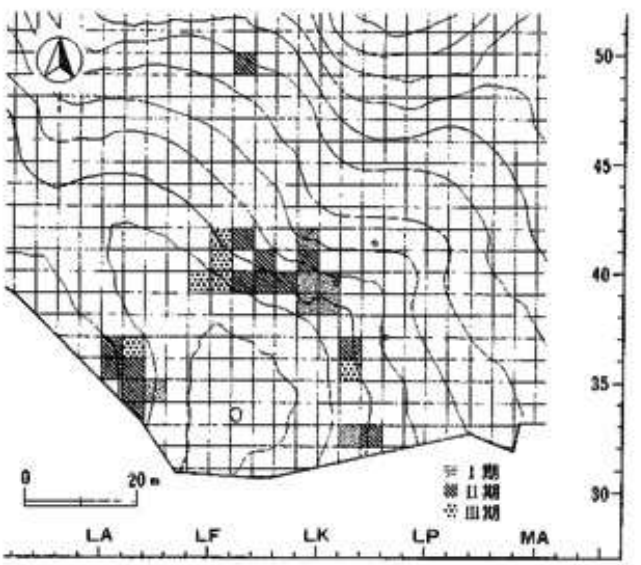
仏沢Ⅲ遺跡第Ⅱ群土器に後続する第Ⅰ期では比較的多く含まれる単節斜行縄文のLRや連続刺突文が、第Ⅲ期では減少し、単節斜行縄文のRL、結束羽状縄文、綾絡文が増え、口唇施文比率が高くなるという変化の中で、第Ⅱ期は第Ⅰ期から第Ⅲ期に移行する過渡的様相ととらえることができる。すなわち、第1期では、口唇施文手法は指頭押圧のほかに撚紐原体閉端刺突、撚紐原体側面押圧がかなりの比率を占め、地文の単節斜行縄文のRL比率も高く、仏沢Ⅲ遺跡第Ⅱ群土器よりも口唇施文手法や地文にかかわる規制はやや緩やかになっていたようである。この地文がLRの単節斜行縄文を主体とする土器群が表館式の連続刺突文土器群と接触して、施文具は撚紐原体を踏襲しながら施文部位や文様構成要素を模倣する変化が生じ、それと同時に単節斜行縄文のRL比率がさらに高くなっていく。第Ⅱ期では、最終的には定着した文様とはならないがこの変化の過程で様々な装飾文が生まれる。結束羽状縄文、綾絡文も現れる。本遺跡の3時期中最も個体別のバラエティーに富み、第Ⅰ期までの土器にかかわる規制が次第に緩んでいくかのようである。それが第Ⅲ期になると第Ⅰ期、第Ⅱ期にみられた表館式の影響を受けた刺突などの装飾をもつものがなくなって、わずかに綾絡文のみが残る。地文の単節斜行縄文のRL比率は80%以上、口唇施文比率も90%以上になる。これは再び土器にかかわる規制が強まったことを表すものと考えられる。しかしその規制の内容は第Ⅰ期以前に戻ったのではなく、第Ⅱ期の様々な試行の中から綾絡文、結束羽状縄文などを取り入れ、口唇施文を原則としてすべての土器に行い、地文の単節斜行縄文は原則としてすべてRLを用いるという新たなる内容なのである。

土器製作にかかわる規制は、土器製作を行う人々と密接に関係している。本遺跡において生活を営んだ人々は、仏沢Ⅲ遺跡第Ⅱ群土器を製作した人々の伝統を強くひく人々である。本遺跡を生活の場としながら、仏沢Ⅲ遺跡の人々にはなかった、表館式の土器を製作し使用した集団との交流があったことを推測させる（第Ⅰ期）。そしてそのような表館式の土器をもつ人々との交流を契機に地文に斜行縄文のみを用いる従来の伝統が解体に向かい変質する（第Ⅱ期）。しかし、その中から新しい規制が生み出され、再び集団としての自己同一性を保持していく（第Ⅲ期）。本遺跡の土器の変化はこのような過程を表わしていると考えられる。

2. 縄文時代・弥生時代の遺構と遺物について

縄文時代前期の土坑のうち底面中央にピットをもつSK113は陥し穴と考えられる。またSK51土坑も底面に4個の小ピットがあり、SK113土坑と同様に陥し穴と思われる。SK95土坑は大きな平石で蓋をされた袋状の小土坑で、土坑内に何かを埋め込み焚火によって開口部を閉塞し





第160図　グリット別文様制明破片出土数と捨場の変遷

たものと考えられる。墓壙とも考えられるが、縄文時代前期初頭の墓壙は類例がなく断言できない。同様の規模・形態で隣接するSK96も同じ性格の同様の土坑であろう。SKI91竪穴遺構は南部丘陵頂部にあり、その北側、南側、東側の斜面には縄文時代前期の捨て場が形成されていた。この捨て場の中心に位置し、捨て場の形成がSKI91竪穴遺構を取り囲むように進行すると考えられることから、SKI91は斜面に捨て場が形成されるに至る諸活動が行われた中心的施設であったと考えられる。

石器類の大半はフレークであるが、石核や分割された石材も多数出土した。不定形石器、篦状石器、フレーク、石核、2次加工のある剥片の多くは縄文時代前期の土器の分布範囲から出土している。2次加工のある剥片には石器の未製品も含まれており、本遺跡は縄文時代前期の石器製作を行っていた場所であると考えられる。

石器（Tool）の中で最も多いのは不定形石器である。不定形石器のc_2類は折れ面をそのまま残して他の側縁に2次加工を施したもので、「折断調整石器」とされる石器の一部であると考えられるが、形態や2次加工の施される部位、2次加工の技法などを詳しく分析するには至らなかったので、「折断調整石器」という用語は使用せず不定形石器の一部に含めた。

篦状石器は不定形石器に次いで多く出土したToolである。篦状石器a類は本遺跡の篦状石器の主体をなすものである。篦状石器b類はこのa類の形態と製作技法を踏襲しつつ、素材剥片の節理面やヒンジフラクチャーを利用して2次加工を省略したものである。これに対して篦状石器c類は側縁加工のしかたや表裏全面に2次加工が施され素材剥片の剥離面を残さないこと等、製作技法が大きく異なっている。篦状石器の出土地点も縄文時代前期の土器の分布範囲と一致しており、a類が主体となりc類がほとんど含まれないという状況は縄文時代前期初頭における篦状石器の一つのあり方を示しているといえる。

石器の原石には、第3紀中新世の硬質泥岩層（女川層）に含まれる頁岩を用いている。下田遺跡内の南東部丘陵の標高の低いところでは、女川層軟質部分の泥岩が露出している場所があったが、頁岩の露頭はなかった。しかし、下田谷地遺跡との間の沢では、沢が現在の状態まで埋没する前の土層中下部に、女川層の頁岩の転石が含まれる層があり、遺跡周辺には女川層が露出する露頭あるいは女川層を侵食する沢があったことを示唆している。本遺跡は、石器の原石が入手しやすいという立地条件の下で、石器製作が行われ、廃棄物であるフレーク、石核、2次加工のある剥片などが土器とともに丘陵頂部をとりまく斜面に捨てられ、捨場が形成された遺跡と考えられる。先に土器の分析から人々の交流を推測したが、本遺跡おける異系統の土器をもつ人々の交流は、石器の原石の採取と石器製作と密接な関係があると考えられる。

縄文時代中期から後期初頭の土器は、破片が少数出土したのみである。第33図260・261は沈線区画文の中に綾杉状の沈線を充填するもので、中期末の北陸地方の大杉谷式に見られる葉脈

状文と考えられる。県内では海岸部と雄物川流域を中心に葉脈状文の施文された土器の破片が出土している。現在までのところ、男鹿市泉野遺跡・秋田市坂ノ上A遺跡・坂ノ上E遺跡・湯ノ沢D遺跡・西仙北町上野台遺跡・大曲市太田遺跡・田沢湖町黒倉B遺跡で出土し、雄物川町根羽子沢遺跡が最も南に位置する。本遺跡も太田遺跡と根羽子沢遺跡の中間に位置し雄物川流域に於ける葉脈状文土器の出土分布に一例を加えた。北陸系土器はすでに前期から県内各地で出土しており、中期末の葉脈状文土器も今後さらに類例が増加することが予想される。

後期初頭の土器は隣接する下田谷地遺跡でも出土している。本遺跡第Ⅲ群土器の第33図264～268などは下田谷地遺跡出土の後期初頭の復元土器（第27図132）と同時期のものである。本遺跡で縄文時代前期土器に次いで多く出土した晩期の土器は大洞BC式～C_1式で晩期前半のものである。SI37竪穴住居跡を中心に南西部丘陵頂部から北東と南東に伸びる尾根上に遺構と遺物が集中し、この範囲が晩期の生活範囲を示すものと考えられる。土器は深鉢形土器が多く、浅鉢形土器、鉢形土器が含まれ、注口土器が2個体である。赤色顔料を塗った土器もあるが少ない。SK33土坑・SK62土坑・SK63土坑は土壙墓の可能性も否定できないが、土坑内に含まれていた多くの土器片に完形のものがなくすべて破片であること、埋土が人為的堆積で埋土中には焼土粒や炭化物粒を含むこと、晩期前半の他遺跡で見られる土壙墓のようにベンガラを振りかけた痕跡がないことから、居住に伴って出る廃棄物を居住地の周囲で焼却し埋め立てたような土坑であるとも考えられる。

丘陵頂部から北東と南東に伸びる尾根には、晩期の遺物の分布範囲の外縁付近に人為的に埋められた土坑がそれぞれ1基構築され（SK41土坑・SK21土坑）、SK41土坑付近からは赤色顔料の塗られた小型の壺形土器、皿形土器と台付鉢形土器が出土した。この小型赤色の壺形土器と皿形土器は本遺跡内では他に出土していない特殊なもので、居住域の外縁における葬送も含めた何らかの祭祀遺構と考えられる。

第Ⅴ群土器は弥生時代後期の土器である。朱塗りの注口土器一点以外は甕形土器で、壺形土器や高坏形土器、蓋形土器を伴っていない。注口土器は沈線文が描かれているが、そのモチーフは変形工字文にその源流を求めることができ、器形や焼成前の着色の手法から天王山式の影響下に製作された土器と考えられる。胴部下半には細かい撚糸文が施文されているが、この撚糸文は他の甕形土器に施文されている撚糸文と類似している。甕形土器は胴部文様がa_1～c類と変化に富んでおり、口縁が平縁で突起をもつものがなく、交互刺突や連弧文が施された土器が1点もないことから天王山式よりは時期が下がり、湯舟沢遺跡の第Ⅲ類（湯舟沢式土器）に後続する時期にあたると思われる。

第Ⅴ群土器の分布する範囲にはSI26竪穴住居跡・SK25土坑・SK32土坑・SK22土坑・SK23土坑があるが、遺構内から出土した遺物によって弥生時代の遺構であると断定できるものはな

い。しかし、SI26竪穴住居跡は壁に沿って多数の柱穴がめぐること、地床炉と思われる焼土が僅かにあることから、湯舟沢遺跡3区で検出された弥生時代後期の竪穴住居跡と類似しており、弥生時代後期のものである可能性もある。今後の類例の増加を待ってさらに検討する必要がある。

3. 平安時代の遺構と遺物について

平安時代の遺構は25遺構である。遺構間には切り合うものもあり、すべて同時期ではなく遺構間に時間差がある。そこでまず遺構の切り合い関係や遺構内出土遺物の接合状況から、各遺構群の中での前後関係を検討する。

中央部遺構群：SI69竪穴住居跡とSI74竪穴住居跡の床面出土遺物が接合すること、埋土の火山灰堆積状況が類似すること、SI69-P1やSI74-P4のように主に坏形土器が多量に入っている土坑が伴い柱穴配置が類似することから、同時期に営まれ廃棄されたものと考えられる。SI69竪穴住居跡を切っているSK89土坑、SK89土坑と形態、規模、埋土の状態が極めて類似するSK90土坑は、埋土に火山灰が全く含まれておらず火山灰降下以前に埋め立てられたと考えられる。SK87土坑も埋土中に火山灰を含まず火山灰降下以前に埋没した土坑である。

南部遺構群：切り合い関係からSB92建物跡はSI93竪穴住居跡、SK98土坑より新しい。周溝に火山灰が堆積した時点では壁材が存在していたと考えられるので、火山灰堆積以降まで存続した建物跡である。SI100竪穴住居跡は火山灰堆積以前に廃棄されている。SI100竪穴住居跡床面出土土器とSK101土坑埋土上面出土土器が接合しており、埋土が人為的堆積であるSK101土坑はSI100竪穴住居跡が廃絶する以前に埋め立てられたと考えられる。SK108土坑は、隅丸方形でやや深い土坑であること、底面と壁が焼け、底面には炭が堆積することからSK101土坑と同様の機能をもった土坑であると考えられる。しかし埋土は自然堆積であり、使用後しばらくは放置されていたと考えられる。SK101土坑が構築され使用された後SK108土坑を構築し、その際の排土を用いてSK101土坑を埋め立てたということも考えられる。SK108土坑は一定期間は放置され自然に埋まりかけるが、埋没しきる前にその凹みを利用して火が焚かれている。このとき形成された焼土はSK108土坑の周辺で検出された浅い凹地で火が焚かれた跡であるSN103・107・102各焼土遺構と一連のものと考えられる。SK108土坑の埋土中には、底面から上部の焼土に至るまで火山灰が含まれておらず、上部の焼土が形成されたのも火山灰堆積以前であったと推測される。SK108土坑の埋土中から出土した須恵器甕形土器は中央部遺構群のSI74竪穴住居跡床面出土の破片と接合しているので、両遺構は廃絶時期が同じ頃で、須恵器は人為的に投棄されたものである。SK30土坑は火山灰堆積以前の廃絶である。SX130柱穴群はこれらの遺構が埋没した後に掘り込まれている。SX130柱穴群の範囲から出土した土器も火山

灰が堆積する遺構から出土する土師器とは様相を異にしており、より新しい時期の建物群であると考えられる。SK112・115土坑は出土土器から判断してSX130柱穴群とほぼ同じ時期と考えられる。SK111土坑も形態がこれらに似ることから同じ時期と思われる。

東部遺構群：SB24建物跡のＰ１・Ｐ２は柱を抜き取った後の凹みに火山灰が堆積し、溝の底面近くにも堆積していたことから、SB24建物跡は第Ⅰ期、第Ⅱ期とも火山灰堆積以前にすでに廃絶していたと考えられる。第Ⅰ期のＰ４は抜き取りではなく切り取りであり、第Ⅱ期にはＰ３をそのまま利用していることから第１期は比較的短期間であったと考えられる。第Ⅰ期の柱穴配置はSB92建物跡と類似する。斜面を掘り込んで平坦面を作出し建物の周囲に溝をめぐらすことも共通しており、SB24建物跡第Ⅰ期の建物はSB92建物跡とほぼ同時期に構築されたものと思われる。

北部遺構群：SK14土坑、16土坑とも火山灰堆積以前の廃絶である。

次に各遺構出土の遺物について前後関係を検討する。

火山灰堆積後まで存続していたと思われるSB92建物跡からは、口縁が大きく外反する皿形土器（第120図189・190）が出土している。この器形の皿形土器は他にSI69・74・100各竪穴住居跡から出土している（第84図１・第90図34・第95図58・第101図101・第132図216・217）。さらにこの3遺構からは口縁があまり外反しない皿形土器も出土している（第84図２・第101図99・100・第132図223）。したがって、皿形土器の口縁部は第54図２のようにほとんど外反しないものから次第に外反気味になって、99・100・223を経て、189・190のような大きくめくれるように外反する形態に変化すると考えられる。口縁部が大きく外反しない皿形土器と外側にめくれるように大きく外反する皿形土器が共伴するSI69・74・100各竪穴住居跡と後者のみが出土したSB92建物跡の他の遺物も形態と器種構成に時期差を見出すことができる。

SB92建物跡出土の杯形土器は口径が約11cmと小さく口縁部と胴部に屈曲があり、口縁部をやや肥厚させながら強く外側に引き出している（第120図192・193）。このような特徴をもつ杯形土器は、SI69・74・100各竪穴住居跡でも出土しているが（第90図35・第96図70・第133図230など）、これらの遺構にあっては、この形態は杯形土器の主体とはなっておらず、胴部から口縁部がゆるやかに外反する器形や口縁端部のみを短く外反させる器形が主体である。したがって、口縁部の形態はゆるやかに外反するものから、外反する口縁を強調して大きく外側に引き出すものへと変化していくと考えられる。これは皿形土器の形態変化と軌を一にするものである。他の遺構から出土した杯形土器を比較してみると、SK99土坑出土の杯形土器（第137図255）は口縁が大きく外反しており、後出的である。SK87土坑出土杯形土器（第102図108）、SK108土坑出土杯形土器（第138図256）、SK101出土杯形土器（第139図258）は、SI74竪穴住居跡カマドの支脚に使われていた杯形土器（第93図44）と極めて類似する。SI74竪穴住居跡と

SK108土坑は須恵器壺形土器が接合しており同じ頃に廃絶したと考えられるが、SK87土坑、SK101土坑もその時点までには廃絶していたものと思われる。

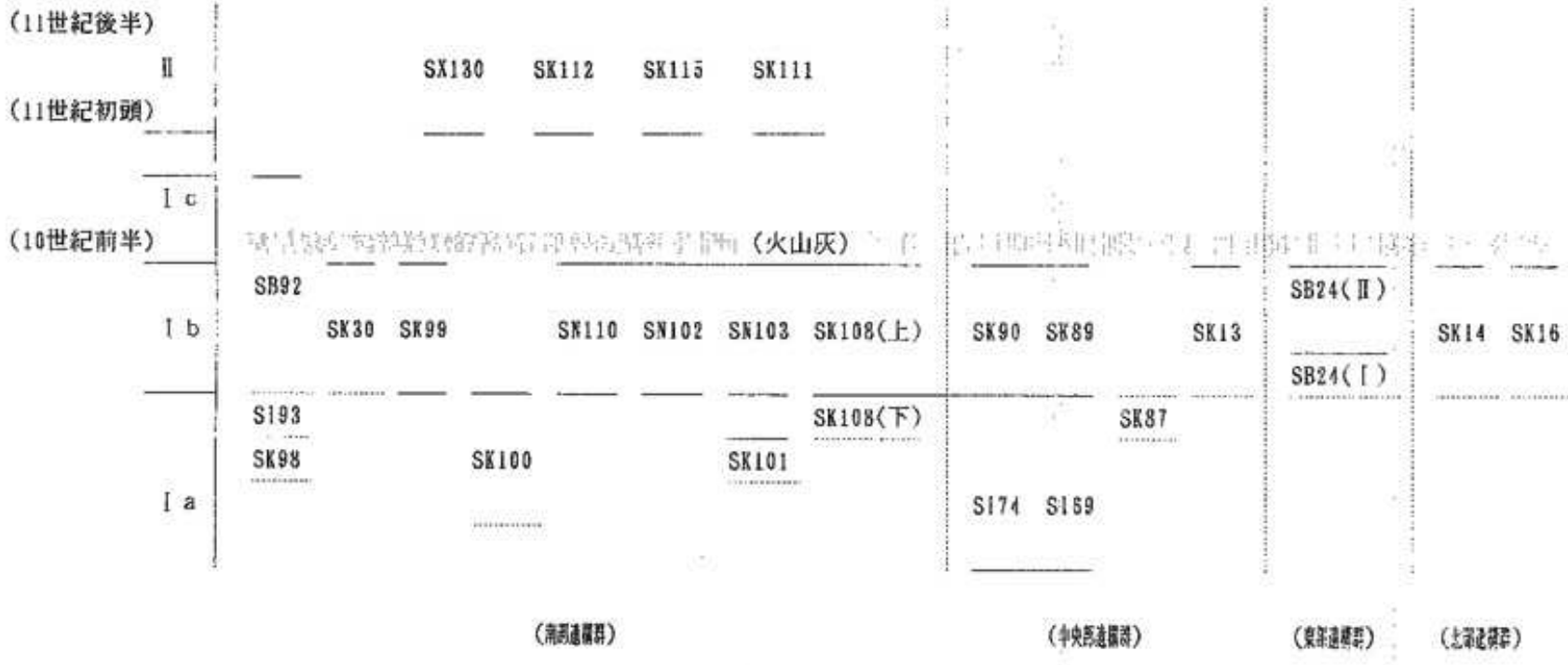
SB24建物跡出土の甕形土器は口縁部が内湾気味に丸みを帯びてやや上方に屈曲して立ち上がり、先端が内傾気味に上方に引き出され、口唇部は丸くやや肥厚気味である（第153図353・354・第154図356）。東部遺構外出土の甕形土器も同様の特徴をもつものがある（第157図367）。それに対してSI74竪穴住居跡やSI69竪穴住居跡、中央部遺構外出土の同様の甕形土器では口唇部が上方やや外反気味に引き出されているものが多い。SI69竪穴住居跡を切っているSK89土坑出土の甕形土器（第104図120）はSB24建物跡出土のものにより近い形態になっており、口唇部を内傾気味に上方に引き出し、口唇部を丸く肥厚気味につくるのは後出的な要素であると考えられる。

鍋形土器はSI100竪穴住居跡とSB24建物跡で出土した他、南部遺構外と東部遺構外で出土している（第131図215・第149図348・第155図360・361・第158図371）。215・348は胴部が湾曲せず底部から直線的に立ち上がるのに対し、360はやや膨らみをもち、361・371では大きく膨らんでいる。口縁部のつくりは、やや上方に屈曲して外反するものと（215・348・360）、口縁部が横に広がり、口唇が上方につまみ出されるもの（361・371）がある。これらは製作技法はすべて同じで同一器種における時間的変遷を示すものと考えられる。SB24建物跡とSK89土坑、SK90土坑出土の甕形土器の口縁部が類似し、SK89土坑がSI69竪穴住居跡を切っていること、SI69・74・100各竪穴住居跡の杯形土器や皿形土器は共通する特徴をもっていることから考えて、本遺跡においてはSB24建物跡及び東部遺構外出土の鍋形土器のほうがより後出的と思われる。

以上のような各遺構と出土遺物の状況から、本遺跡に平安時代の集落としてSI69・SI74・SI100各竪穴住居跡が営まれてからSB92建物跡の焼失を最後として21遺構が廃絶するまでをⅠ期、これらの21遺構が埋没した後に営まれた遺構をⅡ期の2時期にまとめることができる。Ⅰ期はさらにａ・ｂ・ｃの3小期に分けられる。Ⅰａ期はSI69・SI74・SI100各竪穴住居跡とそれに伴ってSK101・SK108・SK87各土坑が営まれる。Ⅰｂ期はこれらの竪穴住居跡が廃絶しSB92建物跡、SB24建物跡と南部の焼土遺構群やSK89土坑、SB90土坑さらに北部、南部、中央部にも他の遺構と離れて土坑が構築される。SB24建物跡は比較的短期間の間に立て替えが行われる。Ⅰｃ期は、Ⅰｂ期の遺構が廃絶した後遺構内の凹地に火山灰が堆積した時点で存在していたSB92建物跡が焼失するまでである（第6表）。

次に、Ⅰ期とⅡ期の実年代について、遺物、火山灰、^{14}C年代から検討する。

Ⅰ期は土師器が圧倒的多数を占め、須恵器は極めて少ない。土師器のうち内面が黒色処理されるものも極めて少ない。秋田県における古代土器の編年的研究は須恵器杯形土器によって行



第6表　平安時代遺構変遷表

われており、本遺跡では直接当てはめることはできない。そこで便宜的に土師器杯形土器の器形を須恵器杯形土器の編年に当てはめてみると、本遺跡で主体となる杯形土器は、器形、法量が七窪窯跡（羽後町）、物見窯跡（横手市）の須恵器杯形土器に類似し、9世紀後半～10世紀前半の実年代が与えられる。山形県内では、境興野遺跡、北田遺跡、宅田遺跡などで本遺跡と類似する甕形土器や羽釜、鍋形土器が出土している。実年代は10世紀前半とする見解と10世紀後半とする見解がある。岩手県内では、腰性遺跡で羽釜、鍋形土器が共伴し、須恵器と内黒土師器の杯形土器を含まない資料を10世紀末から11世紀初頭としている。古館Ⅱ遺跡では本遺跡SB92建物跡から出土した土師器短頸壺（第121図200）と類似する土師器短頸壺が出土し、平安時代後期としている。

これらの実年代は10世紀の紀年銘のある遺物との共伴関係から得られたものではないが、本遺跡Ⅰ期の土器群はおよそ9世紀後半から11世紀初頭の年代幅の中で把握できる遺物であるといえる。

遺構内に堆積する火山灰と炭化物については自然科学的分析を行い第3章に掲載した。これによれば、SI69竪穴住居跡南壁壁溝内で検出した火山灰は平鹿遺跡で検出された灰白色火山灰と同じものである。灰白色火山灰は陸奥国分寺跡における検出状況から10世紀前半とされている。また、下田遺跡の他の遺構や、下田谷地遺跡の平安時代の遺構の中にも火山灰が堆積しているが肉眼的観察では、これらは下田遺跡と下田谷地遺跡の間の沢で泥炭層中に層状に堆積していた火山灰と同じものと思われる。この泥炭層中の火山灰は分析の結果10世紀前半（915A.D.）に噴出したとされる十和田a火山灰に対比されている。SI69竪穴住居跡以外の遺構で検出された火山灰も灰白色火山灰または十和田a火山灰のいずれかであると考えられる。火山灰の年代は考古学資料や文献資料から得られたものであるが、ここではその根拠を厳密に検討することはできないので、時間幅をもたせておよそ10世紀前半頃と解釈しておきたい。

^{14}C年代測定の結果によれば、SI69竪穴住居跡の南壁壁溝内から火山灰とともに検出した炭化物とSK101土坑底面に堆積した炭化物は近世のものとなる。また、SK30土坑で火山灰を挟んで上下から採取した炭化物は上が8世紀、下が15世紀と、新旧が逆転した結果であった。これらの結果は遺構・遺物から得られる所見と大きく矛盾する。これは炭化物が試料として採取される以前または採取後に何らかの変成作用を受けたためと思われる。これに対しSB92建物跡の炭化壁材から得られた920±160A.D.という年代は、火山灰が10世紀前半の降下であること、土師器が出土したことと矛盾しない。

以上の自然科学的分析の結果と遺物から得られた年代幅を総合すれば、Ⅰ期は10世紀前半頃までであると考えられる。横手盆地のこの時期の遺跡には平鹿遺跡、内村遺跡等がある。本遺跡ではSI69・74・100各竪穴住居跡とSB92建物跡の出土遺物の比較から杯形土器・皿形土器の

口縁部の外反がしだいに大きくなり、外側めくれるようにまたは引き出されるようになるものが後出的であるとした。この傾向からみると、平鹿遺跡は本遺跡よりも若干先行し、内村遺跡とはほぼ同時期と思われる。

Ⅱ期に属するSX130柱穴群の柱穴の１基からは瑞花双鸞八陵鏡が出土した。瑞花双鸞八陵鏡では寛弘四年（1007年）銘のものがあり、瑞花双鳳八陵鏡とともに10世紀末から11世紀前半に盛行するとされている。したがって本遺跡出土の瑞花双鸞八陵鏡も11世紀前半頃のものと推定される。鏡の伝世や、SX130柱穴群が多数の建物跡の重複であることを考慮すれば、SX130柱穴群など４遺構と、それに伴うと思われるⅠ期以前の土師器とは異なる特徴をもつ土器群の年代も11世紀初頭～後半頃と考えられる。

引用参考文献

七飯町教育委員会　『峠下聖山遺跡』　1979(昭和54年)

青森県教育委員会　『長七谷地貝塚』　青森県埋蔵文化財調査報告書第57集　1979(昭和54年)

青森県教育委員会　『表館遺跡－発掘調査報告書－』　青森県埋蔵文化財調査報告書第61集　1981(昭和56年)

青森県教育委員会　『庶渠遺跡発掘調査報告書』　青森県埋蔵文化財調査報告書第63集　1981(昭和56年)

青森県教育委員会　『発茶沢遺跡発掘調査報告書』　青森県埋蔵文化財調査報告書第67集　1982(昭和57年)

青森県教育委員会　『今別町山崎遺跡(１)(２)(３)発掘調査報告書――一般国道280号(今別バイパス)道路改良工事関係―』　青森県埋蔵文化財調査報告書第68集　1982(昭和57年)

青森県教育委員会　『和野前山遺跡調査報告書』　青森県埋蔵文化財調査報告書第82集　1984(昭和59年)

青森県埋蔵文化財調査センター　『大石平遺跡発掘調査報告書―むつ小川原開発事業関係埋蔵文化財調査報告書―』　青森県埋蔵文化財調査報告書第90集　1985(昭和60年)

青森県教育委員会　『表館遺跡調査報告書Ⅱ』　青森県埋蔵文化財調査報告書　第91集　1985(昭和60年)

青森県教育委員会　『発茶沢遺跡発掘調査報告書』　青森県埋蔵文化財調査報告書第96集　1986(昭和61年)

青森県教育委員会　『大石平遺跡Ⅱ発掘調査報告書―むつ小川原開発事業関係埋蔵文化財調査報告書―』　青森県埋蔵文化財調査報告書第97集　1986(昭和61年)

青森県埋蔵文化財調査センター　『上尾駮(１)遺跡Ａ地区―むつ小川原開発事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書―』　青森県埋蔵文化財調査報告書第112集　1988(昭和63年)

青森県教育委員会　『上尾駮(１)遺跡Ｃ地区発掘調査報告書』　青森県埋蔵文化財調査報告書第113集　1988(昭和63年)

青森県教育委員会　『上尾駮(２)遺跡(Ⅰ)―むつ小川原開発事業に係る埋蔵文化財調査報告書―』

青森県埋蔵文化財調査報告書第114集　1988(昭和63年)
青森県教育委員会　『発茶沢(1)遺跡発掘調査報告書—むつ小川原開発事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—』　青森県埋蔵文化財調査報告書第116集　1988(昭和63年)
青森県教育委員会　『表館遺跡(1)発掘調査報告書』　青森県埋蔵文化財調査報告書第123集　1989(平成元年)
秋田県教育委員会　『中田面・重兵衛台Ⅰ・Ⅱ・根洗場遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第74集　1980(昭和55年)
秋田県教育委員会　『内村遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第82集　1981(昭和56年)
秋田県教育委員会　『平鹿遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第101集　1983(昭和58年)
秋田県教育委員会　「白長根館Ⅰ遺跡」　『東北縦貫自動車道発掘調査報告書XII』　秋田県文化財調査報告書第120集　1984(昭和59年)
秋田県教育委員会　『羽根子沢遺跡発掘調査報告書—国道107号線改良工事に伴う緊急発掘—』　秋田県文化財調査報告書第176集　1988(昭和63年)
秋田県教育委員会　「上野台遺跡」　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅲ—上野台遺跡・寺沢遺跡・半仙遺跡—』　秋田県文化財調査報告書第180集　1989(平成元年)
秋田市教育委員会　「坂ノ上遺跡」　『小阿地』　1976(昭和51年)
秋田市教育委員会　「坂ノ上E遺跡」　『秋田市秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』　1984(昭和59年)
秋田市教育委員会　「湯ノ沢D遺跡」　『秋田市秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』　1985(昭和60年)
秋田県男鹿市教育委員会　『泉野遺跡発掘調査概報』　男鹿市文化財調査報告書第1集　1976(昭和51年)
田沢湖町教育委員会　『黒倉B遺跡第1次発掘調査報告書』　1985(昭和60年)
田沢湖町教育委員会　『黒倉B遺跡第2次発掘調査報告書』　1986(昭和61年)
秋田県雄物川町教育委員会　『秋田羽根子沢遺跡発掘調査報告書』　1987(昭和62年)
仁賀保町教育委員会　『立沢遺跡発掘調査報告書』　1987(昭和62年)
秋田市羽後町教育委員会　『七窪遺跡発掘調査報告書』　羽後町文化財調査報告書第8集　1988(昭和63年)
重要文化財鈴木家住宅修理委員会　『重要文化財鈴木家住宅修理工事報告書』　1982(昭和57年)
岩手県教育委員会　「大渡野遺跡」　『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』　岩手県文化財調査報告書第32集　1979(昭和54年)
岩手県教育委員会　「宮手遺跡」　『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』　岩手県文化財調査報告書第52集
(財)岩手県埋蔵文化財センター　『二戸市沢内B遺跡(昭和53年度)』　岩手県埋蔵文化財センター文化財報告書第7集　1979(昭和54年)
財団法人岩手県埋蔵文化財センター　『金ケ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書(Ⅱ)水沢市膳性遺跡』　岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第34集　1982(昭和57年)

財団法人岩手県埋蔵文化財センター 『上里遺跡発掘調査報告書二戸バイパス関連遺跡発掘調査』岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第55集 1983(昭和58年)

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 『古館Ⅱ遺跡発掘調査報告書一東北縦貫縦貫自動車道花巻南インターチェンジ関連遺跡発掘調査一』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第103集 1986(昭和61年)

二戸市教育委員会 『中曽根Ⅱ遺跡発掘調査報告書(本文編)・(図版編)』 1981(昭和56年)

滝沢村教育委員会 『湯舟沢遺跡(第1分冊・第2分冊)』 滝沢村教育委員会文化財調査報告書第2集 1986(昭和61年)

滝沢村教育委員会 『仏沢Ⅲ遺跡』 岩手県滝沢村教育委員会文化財調査報告書第5集 1987(昭和62年)

盛岡市教育委員会 『大館遺跡群一昭和57年度発掘調査概報一』 1983(昭和58年)

盛岡市教育委員会 『大館遺跡群(大新町遺跡・大館町遺跡)一昭和58年度発掘調査概報』一 1984(昭和59年)

盛岡市教育委員会 『大館遺跡群(大新町遺跡)一昭和59年度発掘調査概報』一1985(昭和60年)

盛岡市教育委員会 『大館遺跡群(大新町遺跡・大館町遺跡)一昭和60年度発掘調査概報一』 1986(昭和61年)

山形県教育委員会 『境興野遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第46集 1981(昭和56年)

山形県教育委員会 『関B遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第47集 1981(昭和56年)

山形県教育委員会 『北田遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第48集 1981(昭和56年)

山形県 山形県教育委員会 『北田遺跡第2次発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第53集 1982(昭和57年)

山形県 山形県教育委員会 『関B遺跡第2次発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第68集 1983(昭和58年)

山形県 山形県教育委員会 『新青渡遺跡第1次発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第67集 1983(昭和58年)

山形県 山形県教育委員会 『宅田遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第72集 1983(昭和58年)

川西町教育委員会社会教育課 『道伝遺跡発掘調査報告書』 1984(昭和59年)

宮城県教育委員会 「宇賀崎貝塚」 『金剛寺貝塚・宇賀崎貝塚・宇賀崎1号墳他』 宮城県文化財調査報告書第67集 1980(昭和55年)

宮城県教育委員会 『今熊野遺跡Ⅱ』 宮城県文化財調査報告書第114集 1986(昭和61年)

仙台市教育委員会 『昭和55年度三神峯遺跡発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第25集 1980(昭和55年)

佐藤達夫・二本柳正一・角鹿尚三 「青森県上北郡早稲田貝塚」 『考古學雑誌』43巻2号 1957(昭

和32年）

佐藤達夫・渡辺兼庸　「六ヶ所村表館出土の土器」　『上北考古会誌』1　1960(昭和35年)

佐藤達夫・二本柳正一　「六ヶ所村尾駮出土の土器」　『上北考古会誌』2　1961(昭和36年)

富樫泰時　「雄勝町院内岩井堂第二洞穴下層の土器について」　『秋田考古学』第24号　1964(昭和39年)

名久井文明　「青森県声野遺跡の土器群について」　『考古學雑誌』57巻2号　1971(昭和46年)

広瀬都巽　『和鏡の研究』　1978(昭和53年)

岡村道雄　「縄文時代石器の基礎的研究とその具体例―その1―」『東北歴史資料館研究紀要』vol. 5

白鳥良一　「多賀城跡出土土器の変遷」　『研究紀要Ⅶ』　1980(昭和55年)

武藤康弘　「小阿地遺跡C地区出土の縄文時代前期前半の遺物について」　『秋田考古学』第37号　1981(昭和56年)

熊谷常正　「岩手県における縄文時代前期土器群の成立―条痕文系土器群から羽状縄文土器群へ―」『岩手県立博物館研究報告』第1号　1983(昭和58年)

岩見誠夫・船木義勝　「秋田県の須恵器および須恵器窯の編年」　『秋大史學』32　1985(昭和60年)

岩見誠夫・能登谷宣康・船木義勝　「山形県の須恵器及び須恵器窯の編年」　『山形考古』第4巻第2号　1988(昭和63年)

高橋亜貴子　「岩手県における縄文時代前期前葉の特徴ある縄文原体をもつ土器について―岩手県滝沢村仏沢Ⅲ遺跡出土例を中心として―」　『東北日本の縄文文化をめぐる諸問題』　1988(昭和63年)

武藤康弘　「東北地方北部の縄文前期土器群の編年学的研究―表館式、早稲田第6類土器をめぐって―」　『考古學雑誌』第74巻第2号　1988(昭和63年)

三浦圭介　「表館遺跡出土の早・前期の土器群について」　『第4回縄文文化検討会シンポジウム　東北・北海道における縄文時代早期中葉から前期初頭にかけての土器編年について』　1989(平成元年)

熊谷常正　「岩手県の早期後半から前期初頭の土器群について」　『第4回縄文文化検討会シンポジウム　東北・北海道における縄文時代早期中葉から前期初頭にかけての土器編年について』　1989(平成元年)

相原淳一　「宮城県・山形県における早期から前期初頭にかけての土器編年について」　『第4回縄文文化検討会シンポジウム　東北・北海道における縄文時代早期中葉から前期初頭にかけての土器編年について』　1989(平成元年)

三宅徹也　「早稲田6類と表館式との関係」　『第4回縄文文化検討会シンポジウム　東北・北海道における縄文時代早期中葉から前期初頭にかけての土器編年について』　1989(平成元年)

番号	時期	部位	出土地点	器厚(cm)	文様・施文方法	分類	備考	挿図	図版
55	前	口	LL39	0.5	連続刺突文・工具キザミ	1 a	同一個体－65, 69, 70, 72	20	28
56	前	口	LL39	0.8	連続刺突文・工具キザミ	1－a	同一個体－65, 69, 70, 72	20	28
57	前	口	LL39	0.9	連続刺突文－工具キザミ	1 a	同一個体－65, 69, 70, 72	20	28
58	前	口	LK39	0.8	連続刺突文－工具キザミ	1－a		20	28
59	前	口	LM30	0.8	連続刺突文－工具キザミ	1 a		20	28
60	前	口	LI40	0.65	連続刺突文－工具キザミ	1 a		20	28
61	前	口	LF39	0.7	連続刺突文－工具キザミ	1－a		20	28
62	前	胴	LK40	0.8	連続刺突文	1		20	28
63	前	胴	LL39	0.8	連続刺突文	1		20	28
64	前	胴	LK36	0.8	連続刺突文	1	同一個体 56～70, 72	20	28
65	前	胴	LK40	0.8	連続刺突文	1		20	28
66	前	胴	LC34	0.55	連続刺突文	1		20	28
67	前	胴	LM36	0.9	平截竹管押引文	1		20	28
68	前	胴	LK39	0.6	連続刺突文・コンパス文	1（ア）	同一個体－56～58, 65, 72	20	28
69	前	胴	LK39	0.65	連続刺突文・コンパス文	1（ア）	同一個体－56～58, 65, 72	20	28
70	前	胴	LH29	0.8	コンパス文	（ア）		20	28
70	前	胴	LL39	0.8	連続刺突文・コンパス文	1（ア）	同一個体 56～58, 65, 72	20	28
72	前	胴	LO33	0.6	連続刺突文・コンパス文	1（ア）		20	28
73	前	胴	LL39	0.8	連続刺突文・コンパス文	1（ア）		20	28
74	前	底(平)	LK39	0.8	連続刺突文＝連続刺突文	1－A		20	28
75	前	底(平)	表採	0.8	連続刺突文＝連続刺突文	1－A		20	28
76	前	底(丸)	LK40	1.9	羽状縄文・羽状縄文	1 A		20	28
77	前	口	LI48・LI43	0.7	RL(r多)－棒状工具側面キザミ	2 a		21	28
78	前	口	LC35	0.8	RLR(ℓ)＝棒状工具側面キザミ	2－a	口縁突起あり	21	28
79	前	口	LB35	0.9	RLR(ℓ)＝棒状工具側面キザミ	2－a		21	28
80	前	口	LD33	0.8	LRL(r)＝棒状工具側面キザミ	2－a		21	28
81	前	口	表採	0.8	LRL(ℓ)＝棒状工具端部刺突	2－b		21	28
82	前	口	LI39	0.8	RL(r多)＝縄原体閉端刺突	2－b		21	28
83	前	口	LD35	0.95	RL(r多)＝縄原体閉端刺突	2－b		21	28
84	前	口	LJ59	0.5	RL(r多)＝縄原体閉端刺突	2－b		21	28
85	前	口	LC36	0.9	RL(r多)＝縄原体閉端刺突	2－b		21	28
86	前	口	LC36	1.0	RL(r多)＝縄原体閉端刺突	2－b	同一個体－84, 149	21	28
87	前	口	LK39	0.8	RL(r多)－縄原体閉端刺突	2－b		21	28
88	前	口	LI40	1.2	RL(r多)＝縄原体閉端刺突	2－b		21	28
89	前	口	LC34	0.95	RL(ℓ多)－縄原体閉端刺突	2－b		21	28
90	前	口	KB56	0.65	RLR(ℓ)＝縄原体閉端刺突	2－b		21	28
91	前	口	LK45	0.9	LR(ℓ多)＝縄原体閉端刺突	2－b		21	28
92	前	口	LJ49	0.7	LR(ℓ多)＝縄原体閉端刺突	2－b	同一個体－98(底), 146, 147	21	28
93	前	口	LG41	0.9	RLR(ℓ多)・縄原体閉端刺突－無	2（イ）－f		21	28
94	前	口	LI39	0.7	RL(r)・縄原体閉端刺突・無	2（イ）－f		21	28
95	前	胴	LM35	1.05	LR(ℓ)＝縄原体閉端刺突	2（イ）		21	28
96	前	胴	LC34	1.0	（不明）＝縄原体閉端刺突	7（イ）		21	28
97	前	胴	LB35	0.85	（不明）＝縄原体閉端刺突	7（イ）		21	28
98	前	胴	LJ39	1.1	（不明）＝縄原体閉端刺突	7（イ）		21	28
99	前	胴	LJ38	1.1	（不明）＝縄原体閉端刺突	7（イ）		21	28
100	前	口～底(尖)	LC36	1.25	[illegible] RL(r多)・[illegible]	2（ウ）－c－D		22	28
101	前	底(丸)	LD33	0.9	[illegible]	3－B		23	28
102	前	底(尖)	LK38	1.3	LR(ℓ多)＝縄原体閉端刺突	2－B	同一個体－146, 147, 87(口縁)	23	28
103	前	底(尖)	LC34	1.0	LR(ℓ多)－棒状工具刺突	2－c		23	28
104	前	口	LL41	1.25	RL(r多)－指頭押圧	2 c		23	28
105	前	口	LC30	0.85	RL(r多)＝指頭押圧	2－c		23	28
106	前	口	LK40	0.8	RL(r多)＝指頭押圧	2－c		23	28
107	前	口	LM30	0.9	RL(r多)－指頭押圧	2－c		23	28
108	前	口	LF39	1.1	RL(r多)＝指頭押圧	2－c		23	28
109	前	口	LC35	0.9	RL(r多)＝指頭押圧	2－c		23	28
110	前	口	表採	1.1	LR(ℓ多)＝指頭押圧	2－c		22	28
111	前	口	LC36	0.85	LRL(ℓ多)－指頭押圧	2－c		23	28
112	前	口	LM36	0.6	LRL(ℓ多)－指頭押圧	2－c	同一個体－173, 174, 214, 230(F)	23	28
113	前	口	LM30	0.9	（不明）＝[illegible]・[illegible]	7－b・c		23	28
114	前	口	LK33	0.8	RL(r多)－縄原体側面刺突	2－d	口縁部突起あり	23	28

第7表　遺物観察表（1）（縄文土器第Ⅰ群）

番号	時期	部位	出土地点	器厚(cm)	文様・施文方法	分類	備考	挿図	図版
115	前	口	LJ34	1.0	RL(rℓ)－縄原体側面押圧	2－d		23	28
116	前	口	LD34	0.75	RL(ℓℓ)－縄原体側面押圧	2－d		23	28
117	前	口	LH43	0.9	LR(r)－縄原体側面押圧	2－d		24	28
118	前	口	LK40	0.9	RLR(ℓ)－縄原体側面回転	2－e		24	28
119	前	口	LL39	0.95	LRL(r)－縄原体側面回転	2－e		24	28
120	前	口	LC36	0.95	RLR(ℓ)－縄原体側面回転	2－e	同一個体－121	24	28
121	前	口	LC36	1.1	RLR(ℓ)－縄原体側面回転	2－e		24	28
122	前	口	表採	0.7	RL(rℓ)（[illegible]）－無	4－f		24	28
123	前	口	LJ39	0.65	RL(rℓ)－無	2－f		24	28
124	前	口	LD34	1.0	LR(rℓ)－無	2－f		24	28
125	前	口	LK30	0.8	LR(rℓ)－無	2－f		24	28
126	前	口	LC34	1.0	RL(rℓ)－無	2－f		25	29
127	前	口	LC33	0.9	RL(r)（[illegible]）－無	4－f		25	29
128	前	口	LL36	0.85	RL(r)－無	2－f		25	29
129	前	口	LL34	0.9	LR(r)－無	2－f		25	29
130	前	口	LC34	0.9	LR(r)－無	2－f		25	29
131	前	口	LL38	1.0	RLR(ℓ)－無	2－f		25	29
132	前	口	LM32	0.85	LRL(r)－無	2－f		25	29
133	前	口	LI39	0.8	LRL(r)－無	2－f		25	29
134	前	口	LI40	0.8	LRL(r)－無	2－f		25	29
135	前	口	LJ38	1.05	RLR(rℓ)－無	2－f	補修孔あり	25	29
136	前	口	LH40	0.7	RLL(rℓ)－無	2－f	同一個体－166,178	25	29
137	前	口	LH40	0.75	RLL(rℓ)－無	2－f	同一個体－166,178	25	29
138	前	口	LK38	1.0	RL[LR(ℓ)・L(r)]－無	2－f		25	29
139	前	口	LJ42	0.5	L(r)－無	2－f	同一個体－191	25	29
140	前	口	MF48	0.9	RL(ℓℓ)－無	2－f	同一個体－177	25	29
141	前	口	LC34	0.85	結束羽状縄文－無	3－f	同一個体－205～207	25	29
142	前	口	LD34	1.05	結束羽状縄文・複節文－無	3(つ)－f	同一個体－205～207	25	28
143	前	胴	LD54	1.05	LR(ℓℓ)	2		25	29
144	前	胴	LC34	1.1	LR(ℓℓ)	2		26	27
145	前	胴	LC36	0.9	LR(ℓℓ)	2		26	28
146	前	胴	LL40	1.0	LR(ℓℓ)	2	同一個体－98(口縁),87(口縁)	25	29
147	前	胴	LK39	1.0	LR(ℓℓ)	2	同一個体－87(口縁),98(口縁)	26	29
148	前	胴	LK36	1.0	LR(ℓℓ)	2		26	29
149	前	胴	LC36	1.05	RL(rℓ)	2	同一個体－84,111	26	29
150	前	胴	LC35	1.15	RL(rℓ)	2		26	29
151	前	胴	LI40	0.8	RL(rℓ)	2		26	29
152	前	胴	LB35	0.85	RL(rℓ)	2		26	29
153	前	胴	LJ34	1.1	RL(rℓ)	2		26	29
154	前	胴	LR42	1.05	RL(rℓ)	2	同一個体－155～157	26	29
155	前	胴	LI39・LH40	1.1	RL(rℓ)	2	同一個体－154,156,157	27	29
156	前	胴	LI40	0.9	RL(rℓ)	2	同一個体－154,155,157	27	29
157	前	胴	表採	1.1	RL(rℓ)	2	同一個体－154～156	27	29
158	前	胴	LI40	0.8	LRL(r)	2		28	29
159	前	胴	LI40	0.8	LRL(r)	2		28	29
160	前	胴	LK30	1.1	LRL(r)	2		28	29
161	前	胴	LM31	0.95	LRL(r)	2		28	29
162	前	胴	KP56	0.85	RLR(ℓ)	2		28	29
163	前	胴	LC36	1.05	RLR(ℓ)	2		28	29
164	前	胴	LC36	0.7	LRR(ℓℓ)	2		28	29
165	前	胴	LM31	0.9	LRR(ℓℓ)	2		28	29
166	前	胴	LM32	0.7	LRR(ℓℓ)	2		28	29
167	前	胴	LM32	0.75	LRR(ℓℓ)	2		28	29
168	前	胴	LM31	0.9	RLL(rℓ)	2	同一個体－137(口縁),136,171	28	28
169	前	胴	LJ41	0.8	RLL(rℓ)	2		28	29
170	前	胴	LH39	0.85	RLL(rℓ)	2		28	29
171	前	胴	LI40	1.0	RLL(rℓ)	2	同一個体－137(口縁),136,168	28	29
172	前	胴	LJ39	0.6	LRL(ℓℓ)	2		28	28
173	前	胴	LM41	1.0	LRL(ℓℓ)	2	同一個体－108(口縁),230(ドッテ),213,214	28	29
174	前	胴	LM38	0.9	羽状縄文 [LRL(ℓℓ)・RL(rℓ)]	4	同一個体－108(口縁),230(ドッテ),213,214	28	29

第8表　遺物観察表（2）（縄文土器第Ⅰ群）

番号	時期	部位	出土地点	器厚(cm)	文様・施文方法	分類	備考	挿図	図版
175	前	胴	LK41	1.0	RLR(r多)	2		29	30
176	前	胴	LA39	1.1	RLR(r多)	2		29	30
177	前	胴	ME48	0.9	LR(ℓ多)	2	同一個体 140(口縁)	29	30
178	前	胴	LL36	1.15	RLR(r多)	2		29	30
179	前	胴	LB35	0.9	RL(ℓ多)	2		29	30
180	前	胴	LD54	0.6	RL(ℓ多)	2		29	30
181	前	胴	LB35	0.8	RL(ℓ多)	2		29	30
182	前	胴	ME48	1.0	RL(ℓ多)	2		29	30
183	前	胴	LC38	1.1	RL(r多)	2		29	30
184	前	胴	KI46	1.0	RL(r多)	2		29	30
185	前	胴	LC36	1.0	RL(r多)	2		29	30
186	前	胴	LC36	1.05	RL(r多)	2		29	30
187	前	胴	LG40	1.0	RL(r多)	2		29	30
188	前	胴	LC35	0.9	RLR(r)	2		29	30
189	前	胴	LL39	1.05	RR(ℓ)	2	同一個体 235(ドングリ)	29	30
190	前	胴	LH39	1.1	RL(r多)	2		29	30
191	前	胴	LJ39	0.9	L(r)	2	同一個体－139(口縁)	29	30
192	前	胴	LI39	0.9	網絡文	6		29	30
193	前	胴	LT39	1.05	RL(r多)	2		29	30
194	前	胴	LL39	1.0	LR{L(r)・R(ℓ)}	2		29	30
195	前	口	LC33	0.9	LR(ℓ)・撚絡文－側	2(ウ)		30	30
196	前	胴	LJ39	1.2	RL(r)・撚絡文	2(ウ)	同一個体－198	30	30
197	前	胴	LG35・表採	0.9	RL(r多)・撚絡文	2(ウ)		30	30
198	前	胴	LJ39	1.1	RL(r)・撚絡文	2(ウ)	同一個体 196	30	30
199	前	胴	表採	1.0	RL(r)・撚絡文	2(ウ)	同一個体 200	30	30
200	前	胴	LB35	0.85	RL(r)・撚絡文	2(ウ)		30	30
201	前	胴	LM35	0.95	RL(r)・撚絡文	2(ウ)		30	30
202	前	胴	表採	0.9	LR(ℓ多)・撚絡文	2(ウ)		30	30
203	前	胴	LD33	0.85	RL(r多)・撚絡文	2(ウ)		30	30
204	前	胴	LB36	0.8	L(r)・撚絡文	2(ウ)		30	30
205	前	胴	LC34	1.15	結束羽状縄文・撚絡文	3(ウ)	同一個体 142(口縁),141	30	30
206	前	胴	LC39	1.1	結束羽状縄文・撚絡文	3(ウ)	同一個体－141,142	30	30
207	前	胴	LJ39	0.95	結束羽状縄文・撚絡文	3(ウ)	同一個体－141,142	30	30
208	前	胴	表採	1.1	結束羽状縄文	3		30	30
209	前	胴	LB35	1.1	結束羽状縄文	3		30	30
210	前	胴	LD39	1.1	結束羽状縄文	3		30	30
211	前	胴	LH39	1.15	結束羽状縄文	3		30	30
212	前	胴	LL32	1.1	結束羽状縄文	3		30	30
213	前	胴	LM36	1.0	縄端結節文{LRL(ℓ多)・LR(r多)}	4	同一個体-108,172,174,230	31	30
214	前	胴	LM36	0.9	縄端結節文{LRL(ℓ多)・LR(r多)}	4	同一個体-108,173,174,230	31	30
215	前	胴	LH39	1.15	縄端結節文RL(r多)	4		31	30
216	前	胴	LL37	0.9	縄端結節文RL(r多)	4	同一個体－236(ドングリ)	31	30
217	前	胴	LC33	1.05	縄端結節文RL(r多)	4		31	30
218	前	胴	LH36	1.0	縄端結節文RL(r多)	4		31	30
219	前	胴	LI39	0.75	ループ文	5	同一個体－222	31	30
220	前	胴	LT39	0.85	ループ文	5		31	30
221	前	胴	LI40	0.8	ループ文	5		31	30
222	前	胴	LI39	0.8	ループ文	5	同一個体－219	31	30
223	前	胴	LH39	0.75	ループ文	5		31	30
224	前	胴	LJ39	1.1	ループ文	5		31	30
225	前	胴	KR40	1.0	ループ文	5		31	30
226	前	胴	KR45	0.9	ループ文	5		31	30
227	前	胴	LC38	0.85	ループ文	5		31	30
228	前	胴	LC36	0.85	ループ文	5		31	30
229	前	胴	LC30	0.8	ループ文	5		31	30
230	前	胴	LG40	1.0	LRL(ℓ多)	2	裏面ドングリ圧痕 108(口縁)	32	30
231	前	胴	LL39	1.05	LR(ℓ多)	2	裏面ドングリ圧痕	32	30
232	前	胴	LB35	1.0	(不明)	7(エ)	裏面ドングリ圧痕	32	30
233	前	胴	LB36	0.95	(不明)	7(エ)	裏面ドングリ圧痕	32	30
234	前	胴	表採	1.05	RL(r多)	2	表面ドングリ圧痕	32	30

第9表 遺物観察表(3)(縄文土器第Ⅰ群)

番号	時期	部位	出土地点	器厚(cm)	文様・施文方法	分類	備考	挿図	図版
235	前	胴	表採	1.05	RL(F)	2(ｴ)	[illegible] 同一個体 185	32	30
236	前	胴	LC39	0.95	[illegible]	4(ｴ)	[illegible] 同一個体 216	32	30
237	前	胴	表採	0.8	(不明)	7(ｴ)	[illegible]	32	30
238	前	胴	LC36	0.85	(不明)	7(ｴ)	[illegible]	32	30
239	前	胴	LM36	1.0	RL(r5)	2	貫通孔	32	30
240	前	尖底	LG39	1.2	RL(r5)	2D		32	30
241	前	尖底	LR35	1.35	LR(r5)	2D		32	30
242	前	尖底	LD34	1.0	RL(r5)	2D		32	30
243	前	尖底	LL38	1.15	LR(r5)	2D		32	30
244	前	尖底	LR39	1.1	(不明)			32	30
245	前	尖底	LR36	1.0	(不明)		沈線あり	32	30
246	前	尖底	LB35	1.1	RL(r5)	2D		32	30
247	前	尖底	LD34	0.8	LR(r5)	2D		32	30
248	前	丸底	LJ39	1.35	(不明)			32	30
249	前	尖底	LL39	0.85	RL(r5)	2D		32	30
250	前	尖底	LG38	0.8	RLR(r)	2D		32	30
251	前	尖底	KR42	0.85	(不明)			32	32
252	前	平底	表採	0.7	(不明)			32	30

第10表　遺物観察表（4）（縄文土器第Ｉ群）

番号	器種	部位	出土地点	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	表面技法	裏面技法	残存率(%)	挿図	図版
1	皿	口	S169	12.6	—	—	ロクロ	ロクロ	10	84	—
2	皿	口~底	S169	12.7	5.2	3.35	ロクロ	ロクロ	口・35 底・100	84	40
3	杯	口	S169	12.85	—	—	ロクロ	ロクロ	15	84	—
4	杯	口	S169	13.0	—	—	ロクロ	ロクロ	15	84	—
5	杯	口	S169	13.4	—	—	ロクロ	ロクロ	13	84	—
6	杯	口~底	S169	14.8	6.6	5.7	ロクロ	ロクロ	口・10 底・70	84	40
7	杯	口~底	S169	15.0	5.9	5.75	ロクロ	ロクロ	100	84	40
8	杯	口~底	S169	11.5	4.8	5.2	ロクロ	ロクロ	80	84	40
9	杯	口	S169	12.0	—	—	ロクロ	ロクロ	15	84	
10	杯	口	S169	12.15	—	—	ロクロ	ロクロ	8	84	—
11	杯	底	S169		4.8		ロクロ	ロクロ	100	84	—
12	杯	底	S169・LG46	—	4.2	—	ロクロ	ロクロ	40	84	—
13	杯	底	S169	—	4.8	—	ロクロ	ロクロ	—	84	—
14	杯	底	S169		4.2	—	ロクロ	ロクロ	40	84	—
15	杯	底	S169		4.5		ロクロ	ロクロ	40	84	—
16	杯	底	S169		5.0	—	ロクロ	ロクロ	50	84	—
17	杯	底	S169	—	5.0	—	ロクロ	ロクロ	30	84	—
18	甕	口	S169	12.8	—	—	ロクロ	ロクロ	30	85	41
19	甕	口	S169	13.2	—	—	ロクロ	ロクロ	85	85	41
20	甕	口~底	S169	15.35	6.7	—	ヘラケズリ	ロクロ	口・90 底・100	85	41
21	甕	口	S169	15.5			ロクロ	ロクロ・[illegible]	50	85	41
22	甕	口	S169	16.1			ロクロ	ロクロ	45	85	41
23	甕	口	S169	19.45	—	—	ロクロ	ロクロ	13	86	41
24	甕	口	S169	19.5		—	ヘラケズリ	ナデ	45	85	41
25	甕	口	S169	23.6		—			8	86	41
26	甕	口	S169	22.05		—	ロクロ・ナデ	ロクロ	10	86	41
27	甕	口	S169	19.9	—	—	ロクロ	ロクロ	50	87	41
28	甕	口	S169	26.0	—	—	ロクロ・ヘラケズリ	ロクロ・ヘラケズリ	13	87	41
29	甕	底	S169	—	—	—	ヘラケズリ	ヘラナデ	30	88	41
30	甕	底	S169	—	—	—	ヘラケズリ	ヘラナデ・ナデ	30	88	41

第11表　遺物観察表（5）（平安時代）

番号	器種	部位	出土地点	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	表面技法	裏面技法	残存率(%)	挿図	図版
31	甕	底	S169	22.05	丸底	–	タタキ目	–	—	88	41
32	甕	底	S169	—	丸底	–	タタキ目			88	41
33	甕	底	S169	–	丸底	—	ヘラケズリ・ロクロ・タタキ目	ナデ		89	40
34	皿	口	S169	12.0	–	–	ロクロ	ロクロ	15	90	
35	杯	口	S169	11.8	–	–	ロクロ	ロクロ	28	90	
36	杯	口	S169	12.5	–	–	ロクロ	ロクロ	12	90	—
37	杯	口〜底	S169	13.25	5.3	5.65	ロクロ	ロクロ	口・83 底・100	90	40
38	杯	底	S169		4.6		ロクロ	ロクロ	100	90	
39	杯	底	S169	—	4.9		ロクロ	ロクロ	100	90	40
40	杯	底	S169	—	5.2	–	ロクロ	ロクロ	100	90	–
41	甕	口	S169	14.65			ロクロ	ロクロ・輪積痕	30	90	–
42	甕	口	S169	15.5			ロクロ	ロクロ	15	90	–
43	[illegible]	–	S169	(鍔)17.0	(胴)3.8	(鍔高)0.7				90	—
44	杯	口〜底	S174	13.1	4.8	4.5	ロクロ	ロクロ	口・72 底・100	93	40
45	杯	口	S174	12.7		—	ロクロ	ロクロ	10	93	—
46	羽釜	口〜底	S169・S174	18.1	10.4	29.0	ロクロ・ヘラケズリ	ロクロ・ヘラケズリ	口・58 底・45	93	40
47	甕	口	S174	13.3	7.4	14.2	ロクロ	ロクロ	口・78 底・100	94	42
48	甕	口	LJ48・S174	24.1	–		ロクロ・ヘラケズリ	ナデ	60	94	–
49	杯	口	S174	11.4	–	—	ロクロ	ロクロ	10	95	—
50	杯	口	S174	12.0	—		ロクロ	ロクロ	15	95	
51	杯	口〜底	S174	12.2	7.2	5.65	ロクロ	ロクロ	口・35 底・10	95	42
52	杯	口	S169・S174	12.3	—		ロクロ	ロクロ	12	95	
53	杯	口	S174	12.7	—		ロクロ	ロクロ	10	95	
54	杯	口	S174	12.8	—	—	ロクロ	ロクロ	10	95	–
55	杯	口	S174	12.8	–	–	ロクロ	ロクロ	15	95	
56	杯	口	S174	13.0	–	—	ロクロ	ロクロ	10	95	—
57	杯	口	S174	13.95	–	–	ロクロ	ロクロ	50	95	42
58	皿	口	S174	13.95	–	—	ロクロ	ロクロ	23	95	
59	杯	口	S174		—		—	ロクロ		95	—
60	杯	底	S174	—	4.5	–	ロクロ	ロクロ	50	95	–
61	杯	底	S174	—	4.8	–	ロクロ	ロクロ	20	95	–
62	杯	底	S174	—	4.8	—	ロクロ	ロクロ	20	95	–
63	杯	底	S174		5.0		ロクロ	ロクロ	30	95	—
64	杯	底	S174	—	4.8	—	ロクロ	ロクロ	100	95	—
65	杯	底	S174	—	5.2	–	ロクロ	ロクロ	100	95	–
66	杯	底	S174	–	5.4	–	ロクロ	ロクロ	100	95	–
67	杯	底	S174	–	5.4	—	ロクロ	ロクロ	20	95	–
68	杯	底	No.8トレンチ	–	6.0	—	ロクロ	ロクロ	100	95	–
69	皿	底	S174	–	5.0		ロクロ	ロクロ	100	95	–
70	杯	口	S174	12.7	–	–	ロクロ	ロクロ	10	95	–
71	杯	口	S174	14.0	–	—	ロクロ	ロクロ	12	96	—
72	杯	口	S174	12.15	—	–	ロクロ	ロクロ	30	96	42
73	杯	口	S174	14.0	—	–	ロクロ	ロクロ	12	96	–
74	皿	口〜底	S174	12.15	4.4	4.1	ロクロ	ロクロ	口・45 底・50	96	—
75	杯	口〜底	S174・LG45・LI44・LK45	14.15	5.4	5.45	ロクロ	ロクロ	口・70 底・20	96	42
76	杯	口〜底	S174	14.4	6.4	6.2	ロクロ	ロクロ	口・15 底・100	96	42
77	杯	口	S174	16.9	–		ロクロ	ロクロ	45	96	42
78	杯	口	S174	19.9	–		ロクロ	ロクロ	8	96	–
79	須恵 杯	口	S174	12.0	–		ロクロ	ロクロ	15	97	42
80	須恵 壺	底	S174	—	8.4	–	–	–	45	97	43
81	甕	底	S174	13.0			ロクロ・ヘラケズリ・ナデ	ロクロ・ナデ	5	97	—
82	甕	底	S174	15.85		–	ロクロ・ヘラケズリ・ナデ	ナデ・輪積痕	13	97	–
83	甕	底	S174・LJ47	14.0			ロクロ	ロクロ	11	97	–
84	甕	底	S174	16.3		–	ロクロ	ロクロ	13	97	–
85	甕	底	S174・LJ45	19.9	–		ロクロ・ナデ	ロクロ・ナデ	15	98	43
86	甕	底	S174	20.1		–	ロクロ・ヘラケズリ・ナデ	–	7	98	
87	甕	底	S174	23.5	–	–	ロクロ・ナデ	ロクロ・ナデ・輪積痕	18	98	43
88	甕	底	S174	21.2	–	—	ロクロ	ロクロ	10	98	–
89	甕	底	S174	23.1	–	—	ロクロ	ロクロ	15	98	43
90	甕	底	S174	22.2		–	ロクロ	ロクロ	7	98	—

第12表　遺物観察表（6）（平安時代）

番号	器種	部位	出土地点	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	成形技法	調整技法	観察数(%)	時期	図版
91	甕	底	S174・LJ47	21.6	…	…	ロクロ	ロクロ	8	99	43
92	甕	底	S174	25.1	—	…	ロクロ	ロクロ	5	99	—
93	甕	底	S174	25.0	—	—	ロクロ	ロクロ	3	99	43
94	甕	底	S174	—	11.9	—	ヘラケズリ	ロクロ	3	99	43
95	甕	胴	S174	—	—	—	ロクロ・ヘラケズリ・ヘラナデ	ナデ	—	100	43
96	甕	底	S174	—	丸底	—	ヘラケズリ・ヘラナデ	…	—	100	—
97	杯	底	S174	…	6.6	…	…	ロクロ	35	101	—
98	杯	底	S174	…	4.4	…	ロクロ	ロクロ	100	101	…
99	皿	口～底	S174	11.7	4.4	2.7	ロクロ	ロクロ	口-20 底-100	101	42
100	皿	口～底	S174	12.2	4.9	3.1	ロクロ	ロクロ	口-73 底-100	101	42
101	皿	口	S174	14.85	…	…	ロクロ	ロクロ	16	101	—
102	杯	口	S174	15.0	…	…	ロクロ	ロクロ	20	101	—
103	杯	口～底	S174	11.7	4.7	4.2	ロクロ	ロクロ	口-46 底-100	101	42
104	杯	口	S174	12.8	…	…	ロクロ	ロクロ	35	101	—
105	杯	口	S174	13.7	…	…	ロクロ	ロクロ	13	101	—
106	杯	口	S174・LJ45	13.5	…	—	ロクロ	ロクロ	18	101	—
107	杯	底	S174	—	10.0	—	—	ヘラナデ	48	101	42
108	杯	口～底	SK87	13.95	4.4	4.8	ロクロ	ロクロ	口-7 底-100	102	…
109	杯	底	SK87	—	4.2	—	ロクロ	ロクロ	30	102	…
110	杯	底	SK87	…	4.9	…	ロクロ	ロクロ	20	102	…
111	杯	底	SK87・LK45	—	4.9	…	ロクロ	ロクロ	45	102	—
112	杯	底	SK87	—	5.0	…	ロクロ	ロクロ	35	103	…
113	杯	底	SK87	—	4.9	…	…	ロクロ	85	103	—
114	杯	底	SK87	—	5.4	…	ロクロ	ロクロ	10	103	—
115	高台杯	底	SK87・LJ45	…	6.0	…	ロクロ	ヘラミガキ・黒色処理	30	103	…
116	甕	口	SK87	21.6	…	…	ロクロ	ロクロ	9	103	43
117	甕	口	SK87	21.5	—	—	ロクロ	ロクロ	7	103	43
118	甕	口	SK87・LJ45	22.1	—	…	ロクロ	ロクロ	7	103	43
119	甕	底	SK87	…	8.4	—	ロクロ	ロクロ	10	103	43
120	甕	口	SK89	27.6	—	—	ロクロ・ヘラケズリ	ナデ	10	105	43
121	杯	底	SK89	…	5.0	—	ロクロ	ロクロ	100	105	…
122	甕	胴	SK89・90	—	—	…	ヘラケズリ	ナデ	—	105	—
123	杯	底	SK90	—	4.6	…	—	ロクロ	20	104	—
124	甕	口～底	SK90・LJ45・46, LK45・46	14.1	5.4	9.18	ロクロ・ヘラケズリ・黒色処理	ロクロ	口-20 底-30	104	43
125	甕	胴	SK89・90	—	—	—	タタキ目	ナデ	—	104	—
126	杯	口～底	LJ45	12.7	5.5	5.6	ロクロ	ロクロ	口-13 底30	107	44
127	杯	口	No.8トレンチ	14.35	…	—	ロクロ	ロクロ	3	107	…
128	杯	口～底	LJ46	13.35	4.4	4.75	ロクロ	ロクロ	口-10 底-50	107	44
129	杯	口～底	LJ45	15.9	6.0	5.2	ロクロ	ロクロ	口-10 底-50	107	44
130	杯	口	LJ45	15.6	…	…	ロクロ	ロクロ	10	107	…
131	杯	口	LJ47	12.8	—	—	ロクロ	ロクロ	12	107	—
132	杯	口	LJ45	13.4	—	…	ロクロ	ロクロ	5	107	—
133	杯	口	LJ45	12.5	—	…	ロクロ	ロクロ	10	107	—
134	杯	口	LJ44	13.4	—	…	ロクロ	ロクロ	12	107	—
135	杯	口	中央部表採	13.1	—	…	ロクロ	ロクロ	15	108	—
136	杯	口	LJ45	11.2	—	…	ロクロ	ロクロ	10	108	…
137	杯	底	LJ45	…	5.2	…	ロクロ	ロクロ	40	108	—
138	杯	底	LK46	—	6.2	—	ロクロ	ロクロ	90	108	—
139	杯	底	LK45	—	—	4.4	ロクロ	ロクロ	100	108	…
140	杯	底	LK45	—	5.0	…	…	…	60	108	…
141	杯	底	LJ45	—	5.2	…	ロクロ	ロクロ	55	108	…
142	杯	底	LJ47	…	4.9	…	ケズリ	ロクロ	70	108	…
143	杯	底	LK45・LJ44	—	5.0	…	ロクロ	…	50	108	…
144	高台杯	底	LJ45	—	6.8	…	ロクロ	ヘラミガキ・黒色処理	30	109	44
145	高台杯	底	LK44	—	5.2	…	ロクロ	ヘラミガキ・黒色処理	30	109	…
146	高台杯	底	LJ47	—	6.8	…	ロクロ	ロクロ	100	109	44
147	杯	口～底	LK46	13.25	5.8	5.7	ロクロ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	20	109	…
148	甕	底	LJ45	…	6.4	…	ロクロ	ロクロ	100	109	44
149	杯	口	LJ46	16.2	7.4	7.6	ロクロ	ロクロ	70	109	44
150	甕	口	LJ45	10.0	…	…	ロクロ・ヘラケズリ	ナデ	10	110	…

第13表　遺物観察表（7）（平安時代）

番号	器種	部位	出土地点	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面技法	内面技法	残存率(%)	挿図	図版
151	甕	口	No.8トレンチ	11.5	—		ナデ・ヘラケズリ	ナデ	20	110	—
152	甕	口	LI45	14.1	—	—	ロクロ	ロクロ	10	110	—
153	甕	口	LI45	13.0	—	—	ナデ	ナデ	7	110	—
154	甕	口	LK45	13.3			ナデ・ヘラケズリ	ナデ	18	110	44
155	甕	口	LJ45・LK45	12.85	—		ロクロ	ロクロ	25	110	—
156	甕	口	LK46	14.5			ナデ・ヘラケズリ	ナデ	7	110	—
157	甕	口	LJ45	16.3	—	—	ロクロ	ロクロ	10	110	—
158	甕	口	LK45	16.1			ロクロ	ナデ・指頭圧痕	15	111	—
159	甕	口	LI45	16.75			ロクロ	粘土紐の跡	12	111	—
160	甕	口	中央部表採	17.2	—	—	ロクロ	ロクロ	4	111	—
161	甕	口	LJ45	11.0	—	—	ロクロ	ロクロ	15	111	—
162	甕	口	LJ45	13.7			ロクロ	ロクロ	10	111	
163	甕	口	LJ45・LJ45	13.5			ロクロ	ロクロ	30	111	44
164	甕	口	LK45	14.0			ロクロ	ロクロ	25	111	
165	甕	口	LK45	14.0			ロクロ	ロクロ	10	111	—
166	甕	口	LJ46	14.0			ロクロ	ロクロ	30	111	44
167	甕	口	LK45	14.5			ロクロ	ロクロ	75	111	44
168	甕	口	LJ45	20.0		—	ナデ	ロクロ	10	112	—
169	甕	口	LK46	26.0	—		ロクロ	ロクロ	25	112	—
170	甕	口	LJ45	21.5	—		ロクロ	ロクロ	20	112	—
171	甕	口	LJ45	25.0	—	—	ロクロ・指頭押痕	ロクロ・指頭押痕	5	112	—
172	甕	口	LK44	23.0	—	—	ロクロ	ロクロ	15	112	—
173	甕	口	LJ45	23.0			ナデ	ナデ	15	112	44
174	甕	口	LJ46	23.0			ロクロ	ロクロ	10	113	
175	甕	口	LI45	23.0			ロクロ	ロクロ	10	113	
176	甕	口	LI47・LI48	24.0	—	—	ロクロ	ロクロ	5	113	—
177	甕	口	LK45	25.0	—	—	ロクロ	ロクロ	10	113	—
178	甕	口	LI45	26.0	—	—	ロクロ	ロクロ	20	113	44
179	甕	口	LK45	17.0	—	—	ロクロ	ロクロ	40	114	44
180	甕	口	LK45	16.0	—	—	ロクロ	ロクロ	40	113	
181	甕	口	LJ45・LI47・LK45	24.0	—	—	ロクロ	ロクロ・ヘラナデ	20	113	
182	甕	口	LJ45	20.0			ロクロ	ロクロ	10	113	
183	甕	口	LJ45	25.0	—		ナデ	ナデ	20	114	
184	甕	口	LJ45	25.0		—	ナデ	—	30	114	
185	甕	口	LJ45	21.0	—	—	ロクロ	ヘラミガキ・黒色処理	10	114	44
186	甕	底	LJ45	—	9.6	—	—	ナデ	30	114	43
187	甕	口	LI46	22.0	—	—	ロクロ	ロクロ	10	115	
188	甕	口	LJ46	26.0	—		ロクロ	ロクロ	10	115	44
189	皿	口	SB92	12.8	—	—	ロクロ	ロクロ	55	115	45
190	皿	口	SB92	13.5	—	—	ロクロ	ロクロ	30	115	45
191	杯	底	SB92	—	4.8	—	ロクロ		40	115	
192	杯	口	SB92	11.0	—	—	ロクロ	ロクロ	15	115	
193	杯	口	SB92	11.0	—	—	ロクロ	ロクロ	20	120	45
194	高台杯	底	SB92	—	15.5	—	ロクロ	ロクロ	30	120	45
195	甕	口	SB92	13.0	—	—	ロクロ・ヘラケズリ	ロクロ	10	120	45
196	砥石	—	SB92	(長さ)4.8	(幅)2.1	(厚さ)0.7	—	—	—	120	
197	[illegible]	胴	SB92	—	—	—	ヘラケズリ	ナデ	—	120	
198	砥石	口	SB92	(長さ)5.15	(幅)3.6	(厚さ)1.1	—	—	—	120	
199	砥石	口	SB92	(長さ)5.8	(幅)3.3	(厚さ)2.4	—	—	—	120	
200	碗	口	SB92	15.5	—	—	ロクロ・ヘラケズリ	ナデ	45	121	45
201	杯	口	SI93	13.0	5.0		ロクロ	ロクロ	10	124	
202	杯	底	SI93	—	6.0		ロクロ	ロクロ	25	124	
203	杯	底	SI93	—	—	—	—	—	60	124	
204	甕	口	SI93	17.0	—		ロクロ	ロクロ	5	124	45
205	甕	口	SI93	16.7	8.1		ロクロ	ロクロ	20	124	45
206	甕	底	SI93	—	—	—	—	—	83	124	
207	壺	口	SI93	16.0	丸底	—	—	—	—	125	45
208	甕	口〜底	SI93	22.0	6.8	—	ロクロ・ヘラケズリ	ナデ・指ナデ	口・胴 底・—	125	45
209	杯	底	SK98	—	—	—	—	—	82	126	
210	杯	口	SI100	20.8	—	—	ロクロ	ロクロ	20	129	

第14表　遺物観察表（8）（平安時代）

番号	器種	部位	出土地点	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	表面技法	裏面技法	残存率(%)	挿図	図版
211	甕	口～底	SI100	21.4	10.4	—	ロクロ・ヘラケズリ	ロクロ・ヘラナデ・ナデ	口・25 底・55	129	46
212	甕	口	SI100	23.0	—	—	ロクロ・ヘラケズリ	ロクロ	30	130	46
213	甕	底	SI100	—	11.0	—	ヘラケズリ	ナデ	30	130	46
214	甕	口	SI100	25.75			ロクロ・ヘラケズリ	ロクロ	70	131	46
215	鍋	口	SI100	32.6	—	—	ロクロ・ヘラケズリ・タタキ目	ロクロ	15	131	46
216	鉢	口	SI100	12.0		—	ロクロ	ヘラミガキ・黒色処理	10	132	—
217	鉢	口	SI100	14.0		—	ロクロ	ロクロ	10	132	—
218	杯	口	SI100	15.0	—		ロクロ	ロクロ	15	132	
219	杯	口	SI100	12.4	—	—	ロクロ	ロクロ	20	132	—
220	杯	口～底	SI100	13.0	5.2	5.2	ロクロ	ロクロ	口・70 底・65	132	—
221	杯	口～底	SI100	13.2	4.5	5.6	ロクロ	ロクロ	口・23 底・100	132	—
222	杯	口	SI100	13.0		—	ロクロ	ロクロ	18	132	—
223	椀	口～底	SI100	11.8	4.5	2.5	ロクロ	ロクロ	口・60 底・70	132	—
224	杯	口	SI100	11.0	—		ロクロ	ロクロ	15	132	
225	杯	口	SI100	11.8		—	ロクロ	ロクロ	10	132	—
226	杯	口	SI100	12.0	—		ロクロ	ロクロ	15	132	—
227	杯	口～底	SI100	11.4	5.0	5.1	ロクロ	ロクロ	口・30 底・55	132	
228	杯	口～底	SI100	13.6	4.7	5.3	ロクロ	ロクロ	口・70 底・100	132	—
229	杯	口～底	SI100	13.1	—	—	ロクロ	ロクロ	口・30 底・100	132	—
230	杯	口	SI100	13.1	—	—	ロクロ	ロクロ	25	133	—
231	杯	口	SI100	14.75		—	ロクロ	ロクロ	13	132	—
232	杯	口	SI100	14.0	—		ロクロ	ロクロ	20	133	—
233	杯	底	SI100	—	6.0	—	ロクロ	ロクロ	100	133	—
234	椀	口～底	SI100	13.7	7.0	7.75	ロクロ	ロクロ	口・10 底・45	133	
235	椀	口	SI100	15.2	—		ロクロ	ロクロ	20	133	
236	椀	口～底	SI100	17.0	8.0	7.6	ロクロ	ロクロ	口・20 底・100	133	47
237	盤	口～底	SI100	14.0	7.2	12.6	ロクロ	ロクロ	口・30 底・70	134	46
238	甕	口	SI100	23.4			ロクロ・ヘラケズリ	ロクロ	100	134	46
239	甕	口	SI100・SK101・LD35	29.4	—	—	ロクロ	ロクロ	口・30 底・33	135	46
240	壺	口～底	SI100・LN33	5.8	5.6	5.5	ロクロ	ロクロ	口・30 底・33	135	47
241	粘土板	底	SI100	3.4	5.3	5.8	—	—		135	—
242	壺	底	SI100		5.4	—	—	—	70	135	47
243	壺	底	SI100		4.4	—	—	—	20	135	
244	壺	胴	SI100	—	—		ロクロ	ロクロ		135	—
245	[illegible]	胴	SI100	—	—	—	[illegible]			136	—
246	[illegible]	胴	SI100	—	—	—	[illegible]	—	—	136	—
247	[illegible]	胴	SI100	—			[illegible]	—	—	136	—
248	[illegible]	胴	SI100	—	—	—		—	—	136	—
249	[illegible]	胴	SI100	—	—	—		—		136	—
250	[illegible]	—	SI100	(長さ)5.1	(幅)4.7	(厚さ)1.55	—	—	—	136	—
251	[illegible]	—	SI100	(長さ)5.4	(幅)4.7	(厚さ)1.1	—	—	—	136	—
252	[illegible]	—	SI100	(長さ)4.7	(幅)3.1	(厚さ)0.75	—	—	—	136	—
253	石匙	—	SI100	(長さ)8.65	(幅)4.0	(厚さ)1.9	—	—	—	136	—
254	石匙	—	SI100	(長さ)8.15	(幅)4.3	(厚さ)2.0	—	—	—	136	—
255	杯	口	SK99	11.0	—	—	ロクロ	ロクロ	10	137	47
256	杯	口	SK108	12.0	—	—	ロクロ	ロクロ	8	138	47
257	銅片	—	SK108	(長さ)6.95	(幅)6.5	(厚さ)2.1		—	—	138	
258	杯	口～底	SK101	13.7	5.6	4.6	ロクロ	ロクロ	口・6 底・100	139	—
259	杯	口～底	SK101	—	5.0	—	ロクロ	ロクロ	100	139	
260	[illegible]	—	SK101	(長さ)4.5	(幅)4.0	(厚さ)0.7	—	—		139	
261	甕	底	LN32	—	5.9	—	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・指ナデ	43	139	—
262	石匙	—	SK101	(長さ)5.6	(幅)2.4	(厚さ)0.7	—	—		139	—
263	扁平礫	—	SK101	(長さ)7.35	(幅)5.4	(厚さ)1.8		—		139	—
264	杯	口～底	SK112・LP33	11.25	5.5	3.8	ロクロ	ロクロ	口・60 底・50	141	47
265	杯	口～底	SK112	12.0	6.6	4.6	ロクロ	ロクロ	口・13 底・5	141	—
266	杯	口	SK112・LP33	11.0	—	—	ロクロ	ロクロ	7	141	—
267	杯	口	SK112	11.1	—	—	ロクロ	ロクロ	7	141	
268	杯	口	SK112・LB32	12.0	—		ロクロ	ロクロ	15	141	47
269	杯	底	SK112		3.3	—	ロクロ	ロクロ	30	141	—
270	杯	口	SK112・LN32	11.0			ロクロ	ロクロ	22	141	47

第15表　遺物観察表（9）（平安時代）

番号	器種	部位	出土地点	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	表面技法	裏面技法	残存率(%)	挿図	図版
271	杯	口	SK112・LR33	11.0	—		ロクロ	ロクロ	7	141	—
272	杯	口	SK112	11.9	—	—	ロクロ	ロクロ	6	141	47
273	杯	口	SK112・LR33	12.1	—	—	ロクロ	ロクロ	10	141	47
274	杯	底	SK112・LR33		5.0	—	ロクロ	—	40	141	—
275	甕	口	SK112・LR32	9.1	—		指おさえ	[illegible]・ナデ	20	141	47
276	甕	口	SK112・LR33	7.1	—	—	指おさえ	ナデ	5	141	—
277	甕	口	SK112・LR33	8.0			指おさえ	指おさえ	10	141	47
278	甕	口	SK112	7.1	—	—	指おさえ	指おさえ	12	141	47
279	甕	口	SK112				ナデ	ナデ		141	47
280	[illegible]	-	SK115	(長さ)5.1	(幅)2.7	(厚さ)0.8		—	—	142	—
281	杯	口~底	SK115	9.5	4.2	3.8	ロクロ	ロクロ	口-10 底-25	142	—
282	杯	底	SK115	—	6.4	—	ロクロ	ロクロ	30	142	—
283	杯	口	SK115	19.8	—	—	[illegible]	ナデ	10	142	47
284	杯	口	SK115	17.0	—	—	指おさえ	指おさえ・漆	30	142	47
285	杯	口	SN110	9.0			ロクロ	ロクロ	10	143	
286	杯	口	SN110	7.0	—	—	ロクロ	ロクロ	7	143	
287	和鏡	—	SX130	9.4		0.45		—		143	47
288	甕		SX130	—			ナデ	ナデ	—	143	47
289	杯	口	LP32・LO32	13.0	—	—	ロクロ	ロクロ	10	145	-
290	杯	口~底	LN32	12.8	5.0	5.0	ロクロ	ロクロ	口-45 底-100	145	47
291	杯	口~底	LQ32	13.2	4.3	4.2	ロクロ	ロクロ	口-20 底-100	145	47
292	杯	口~底	南部表採	13.7	7.8	5.1	ロクロ	ロクロ	口-30 底-15	145	—
293	杯	口	LN32	17.2	—	—	ロクロ	ロクロ	10	145	—
294	杯	口	LS34	11.6	—	—	ロクロ	ロクロ	25	145	—
295	杯	底	LR33	—	4.9	—	ロクロ	ロクロ	100	145	—
296	杯	底	LP34	—	5.4	—	ロクロ	ロクロ	70	145	
297	杯	底	LS34	—	5.2	—	ロクロ	ロクロ	40	145	
298	杯	口	LP34	11.0	—	—	ロクロ	ロクロ	10	146	—
299	杯	口	LR34	11.0	—	—	ロクロ・漆	ロクロ	10	146	
300	杯	口	LR33	11.0	—	—	ロクロ	ロクロ・漆	10	146	
301	杯	口	LM33	6.0	—	—	ロクロ	ロクロ	10	146	
302	杯	口	LS34	13.3	—		ロクロ・漆	ロクロ・漆	10	146	-
303	杯	口	LR34	12.0	—	-	ロクロ・漆	ロクロ・漆	10	146	—
304	杯	口~底	LS34	11.4	5.6	—	ロクロ	ロクロ	70	146	48
305	杯	口	LO32	12.4	—		—		—	146	—
306	杯	口	LP35・LO32	13.0	—	—	ロクロ	ロクロ	40	146	48
307	杯	底	LM34・LQ32	5.6	—	—	ロクロ	ロクロ	90	146	47
308	杯	底	LO32・LP32	4.8	—	—	ロクロ	ロクロ	50	146	—
309	杯	底	LR33	—	5.8	—	ロクロ	ロクロ	20	146	-
310	杯	底	LP35	—	5.0	—	ロクロ	ロクロ	50	146	—
311	杯	底	LR32	—	4.8	—	ロクロ	ロクロ・漆	70	146	—
312	杯	底	LS34	—	5.0	—	ロクロ	ロクロ	20	146	—
313	杯	底	LS34	—	4.8	—	ロクロ	ロクロ・漆	100	146	47
314	杯	底	LR33	—	5.0		ロクロ	ロクロ	25	146	—
315	杯	底	LN32	—	5.1		ロクロ	ロクロ	35	146	
316	杯	底	LN32		4.8	—	ロクロ	ロクロ	100	146	47
317	杯	底	LR33	—	5.0	—	ロクロ	ロクロ	15	146	—
318	杯	底	LS34		6.0	—	ロクロ	ロクロ・漆	20	146	48
319	杯	底	LR32	—	6.2	.	ロクロ	ロクロ	40	146	—
320	杯	口~底	LR53	10.8	4.6	3.3	ロクロ	ロクロ	口-15 底-100	47	48
321	杯	口~底	LP34	11.0	5.0	5.6	ロクロ・漆	ロクロ・漆	口-70 底-100	147	47
322	杯	口~底	LP34	12.2	4.8	3.8	ロクロ・漆	ロクロ・漆	口-10 底-100	147	47
323	杯	口	LR32・LR33	11.6	—	—	ロクロ	ロクロ	20	147	48
324	杯	口	LR33	12.0		—	ロクロ・漆	ロクロ・漆	10	147	
325	杯	底	LP34		4.4	—	ロクロ・漆	ロクロ・漆	100	147	48
326	杯	底	LP34	—	5.6	—	ロクロ	ロクロ	30	147	—
327	杯	底	LR33	—	5.2	—	ロクロ	ロクロ	100	147	
328	杯	底	LQ32	—	5.6	-	ロクロ	ロクロ	30	147	
329	杯	底	LO32・LP32	—	5.1	—	ロクロ	ロクロ	40	147	
330	杯	口	LP35	7.0	—		ロクロ	ロクロ・漆	5	147	

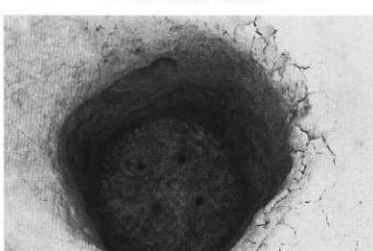
第16表　遺物観察表（10）（平安時代）

番号	器種	部位	出土地点	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	表面技法	裏面技法	残存率(%)	挿図	図版
331	杯	口～底	LR34	9.5	2.8	口4.4底3.9	ヘラケズリ	ナデ	口・10 底・100	47	48
332	杯	口～底	LP34	11.7	5.2	4.0	指おさえ・ロクロ・ヘラケズリ・ナデ	ロクロ・ナデ	80	147	48
333	杯	口	LP34	11.0	—	—	ヘラケズリ	漆・指おさえ	15	147	48
334	杯	口	LP34	12.0	—	—	ヘラケズリ・ナデ	ナデ	13	147	48
335	杯	口	LQ32	10.0		—	ロクロ・粘土紐痕	ロクロ	10	147	48
336	杯	底	LP34	—	4.8		ヘラケズリ	ナデ	40	147	48
337	杯	口	LN32	15.0			ヘラケズリ・ナデ	ナデ	15	147	48
338	甕	口	LR33	15.4	—	—	指おさえ	ナデ	5	148	
339	甕	口	LR33	16.0			粘土紐痕・ナデ	ナデ	5	148	48
340	甕	口	LN32	17.0			ロクロ	ロクロ	10	148	48
341	甕	口	LN32	20.0	—	—	ロクロ	ナデ	15	148	48
342	甕	口	LQ32	19.8	—	—	指おさえ・ヘラナデ・横ナデ	ナデ	15	148	48
343	甕	口	LQ32	16.6	—	—	指おさえ・ナデ・ヘラケズリ	指おさえ・ナデ	8	148	48
344	甕	口	LJ31	19.0	—	—	ナデ・ヘラケズリ	ナデ	7	149	
345	甕	口	LS34	19.7	—		ロクロ	ロクロ	13	149	48
346	甕	口	LN32	20.0	—	—	ロクロ	ロクロ	16	149	48
347	甕	口	LT34	18.0	—		ロクロ	ロクロ	15	149	
348	鍋	口	LM39	25.4			ロクロ	ロクロ	5	149	
349	杯	口	SB24	16.2	—		ロクロ	ロクロ	10	153	48
350	杯	底	SB24・MF49	6.0	—	—	ロクロ	ロクロ	20	153	—
351	甕	口	SB24・MF47	17.6			ロクロ	ロクロ	10	153	48
352	甕	口	SB24	17.0			ヘラケズリ・ナデ	ナデ	10	153	
353	甕	口	SB24・MF46	18.4		—	ロクロ	ロクロ	7	153	—
354	甕	口	SB24	19.2	—	—	ロクロ	ロクロ	7	153	48
355	甕	口	SB24・MF45	21.6	—	—	ロクロ	ロクロ	20	153	48
356	甕	口	SB24・MF47・48、MH48	19.6		—	ロクロ	ロクロ	35	154	48
357	甕	底	SB24・MF47	—	2.0	—	磨滅	ナデ	20	154	—
358	甕	底	SB24・MF47		9.6	—	ヘラケズリ	ヘラナデ	90	154	48
359	羽釜	口	SB24・MF47・MH48		18.6	—	ロクロ	ロクロ	17	154	49
360	鍋	口	SB24・MF47	36.0	—	—	ヘラケズリ・タタキ目	ナデ・タタキ目	15	155	49
361	鍋	口～底	SB24・MF46・MF47	38.5		18.2	ヘラケズリ・タタキ目	タタキ目	7	155	49
362	杯	口	MH48・MF47	11.2	—	—	ロクロ	ロクロ	25	156	49
363	皿	口～底	MH48	8.4	3.4	1.8	ロクロ・漆	ロクロ・漆	口・90 底・100	156	50
364	甕	口	MH48	15.0	—	—	磨滅	磨滅	10	156	49
365	甕	口～底	MF49,MH47・48・49,MF47	18.0	8.0	19.0	ナデ・ヘラケズリ	ナデ	口・50 底・50	156	49
366	甕	口	MJ48・MF47・MH48	20.8	—	—	ヘラケズリ	ナデ	40	156	49
367	甕	口	MF47	18.4	—	—	ロクロ	ロクロ	25	157	49
368	甕	口	MH49	22.2	—	—	ロクロ	ロクロ	20	157	49
369	甕	底	MH48・MI48・MI49・MF46	—	8.6	—	ヘラケズリ	ナデ	30	157	49
370	甕	底	MJ49	—	—	—	タタキ目	ナデ	—	157	50
371	甕	底	MF47・48,MI47・48,MJ49	43.6	—	—	ヘラケズリ・タタキ目	タタキ目	20	158	50

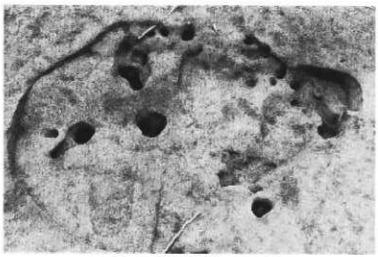
第17表　遺物観察表（11）（平安時代）

1　調査後近景　（南東▷北西）

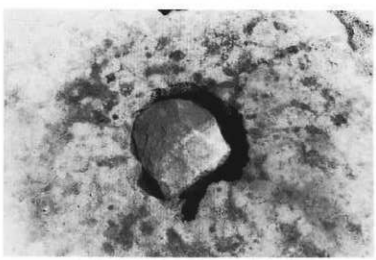
2　SK113土坑　（南▷北）



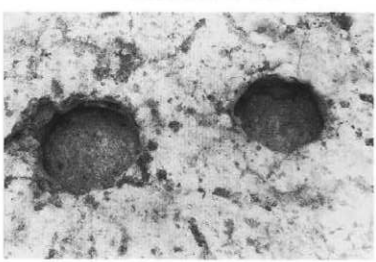
3　SK51土坑　（北▷南）



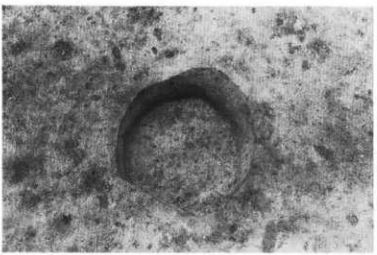
1　SK91 竪穴状遺構　（西▷東）



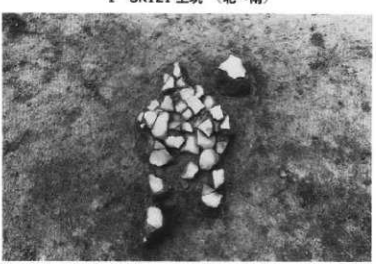
2　SK95 遺物出土状況　石　（南▷北）



3　SK95・96 土坑　（東▷西）



1　SK121 土坑　（北一南）



2　LC36 遺物出土状況　（南東▷北西）

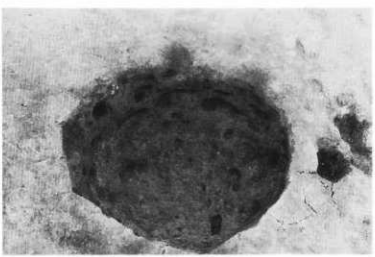
3　LC・LD34 遺物出土状況　（南▷北）

1　SI37 住居跡　（西▷東）

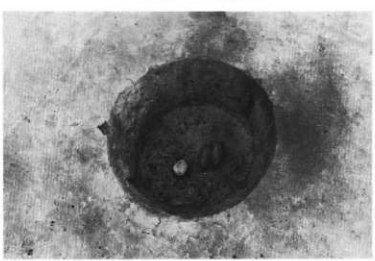
2　SK37 土坑　遺物出土状況　（東▷西）

3　SK36 土坑　遺物出土状況　（東▷西）

1　SI26 竪穴住居跡・SK32 土坑　（南▷北）



2　SK25 土坑　（東▷西）



3　SK21 土坑　（東▷西）

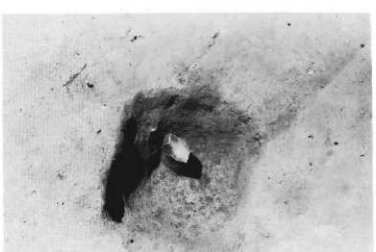
1　SK41 土坑　（北東▷南西）

2　SKP52 ピット　遺物出土状況　（南▷北）

3　SK33 土坑　遺物出土状況　（南東▷北西）

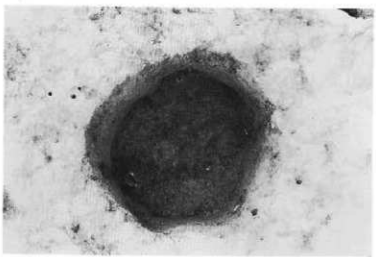
1　SK62 土坑　遺物出土状況　（西▷東）

2　SK62・63 土坑　（北▷南）

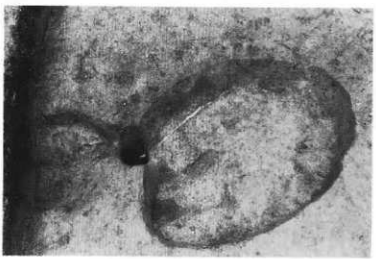


3　SK34 土坑　遺物出土状況　（東▷西）

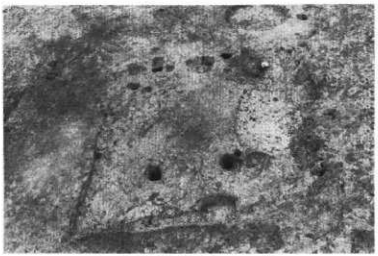
1　SK53土坑　遺物出土状況　（西▷東）



2　SK70土坑　（東▷西）



3　SK44・39土坑　（東▷西）



1　SI69 竪穴住居跡　（西▷東）

2　SI69 竪穴住居跡　P1 土層断面　（北▷南）

3　SI69 竪穴住居跡　P1 遺物出土状況　（北▷南）

1　SI74 竪穴住居跡　（北東▷南西）

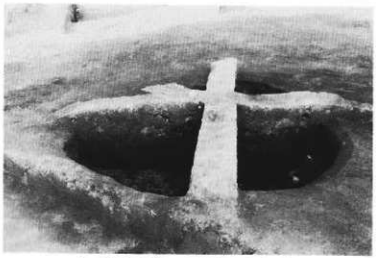
2　SI74 竪穴住居跡　カマド遺物出土状況　（東▷西）

3　SI74 竪穴住居跡　P4 土層断面　（北▷南）

1　SI74 竪穴住居跡　P4 遺物出土状況　（北▷南）

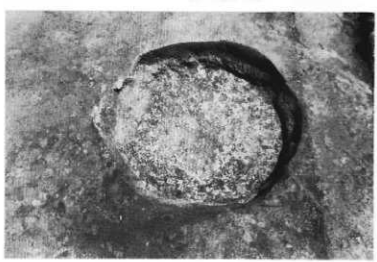
2　SK87 土坑　（西▷東）

3　SK90 土坑　確認面　（北西▷南東）



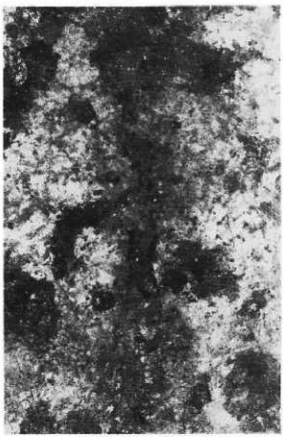
1　SK90 土坑　土層断面（西▷東）

2　SK90 土坑（北▷南）



3　SK89 土坑（南▷北）

1　SB92 建物跡　（西▷東）

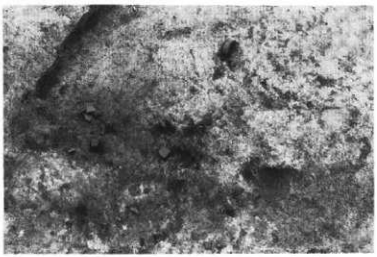


2　SB92 建物跡炭化壁材　（西▷東）

1　SB92 建物跡　炭化壁材　（南東▷北西）

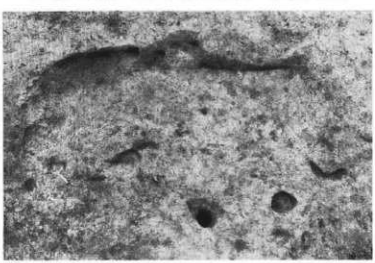
2　SB92 建物跡　遺物出土状況　（南▷北）

3　SI93 竪穴住居跡　遺物出土状況　（東▷西）

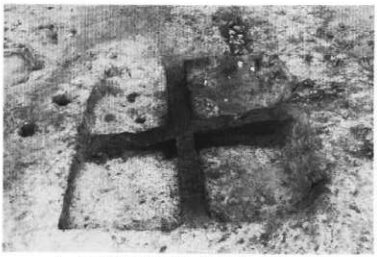


1　SI93 竪穴住居跡　遺物出土状況　（南▷北）

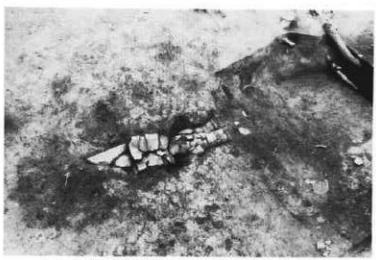
2　竪穴住居跡　カマド遺物出土状況　（南東▷北西）



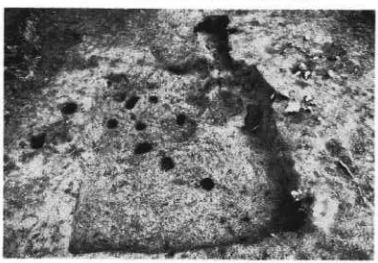
3　SK98 土坑　（南▷北）



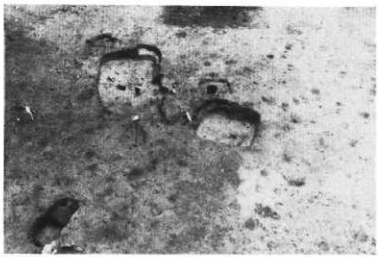
1　SI100 竪穴住居跡　土層断面　（北▷南）



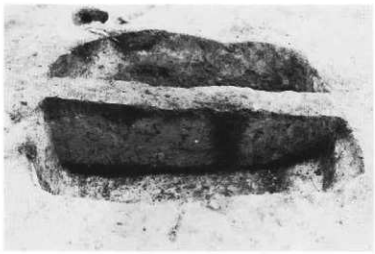
2　SI100 竪穴住居跡　煙道　（南東▷北西）



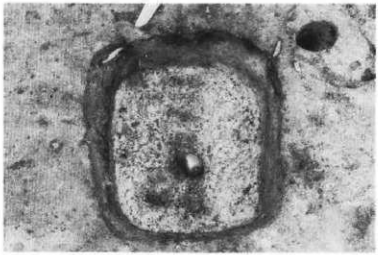
3　SI100 竪穴住居跡　完掘　（北▷南）



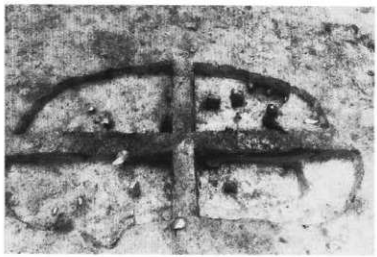
1　SK101・108土坑　（東▷西）



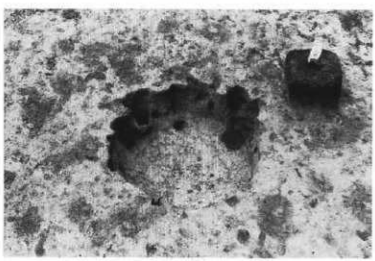
2　SK101土坑　土層断面　（東▷西）



3　SK101土坑　遺物出土状況　（北▷南）



1　SK108 土坑　遺物出土状況　（北▷南）

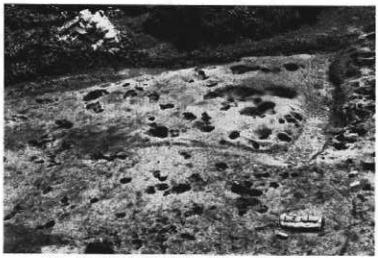


2　SK112 土坑　（西▷東）

3　SK115 土坑　遺物出土状況　（北▷南）

1　S×130柱穴群　（東▷西）

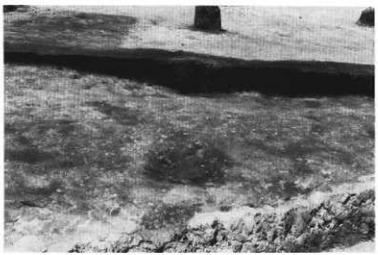
2　S×130柱穴群　和銕出土状況　（南東▷北西）



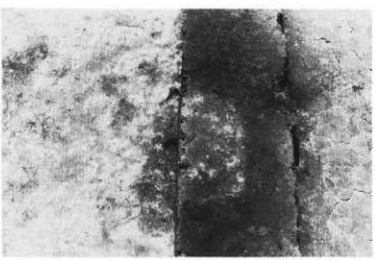
1　SB24 掘立柱建物跡　完掘　（北西▷南東）

2　SB24 掘立柱建物跡　火山灰　（東▷西）

3　SB24 掘立柱建物跡　柱穴　（南▷北）



1　SB24 掘立柱建物跡　柱穴確認面　（南▷北）



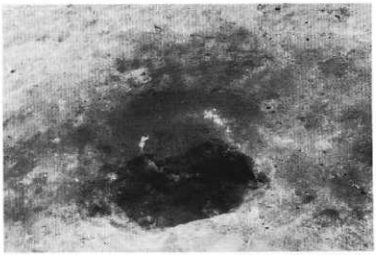
2　SB24 掘立柱建物跡　柱穴確認面　（東▷西）

3　SB24 掘立柱建物跡　土層断面　（南▷北）

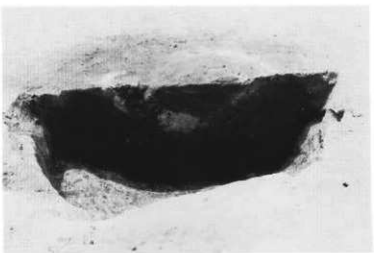
1　SK30 土坑　火山灰　（南▷北）

2　SK30 土坑　土層断面　（東▷西）

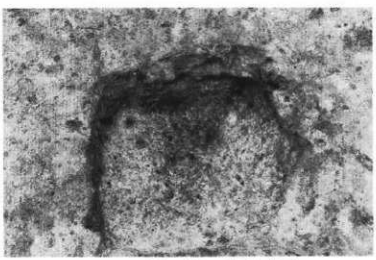
3　SK30 土坑　完掘　（南▷北）



1　SK14 土坑　確認面　（北▷南）

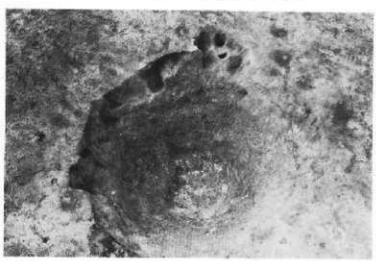


2　SK14 土坑　土層断面　（北東▷南西）



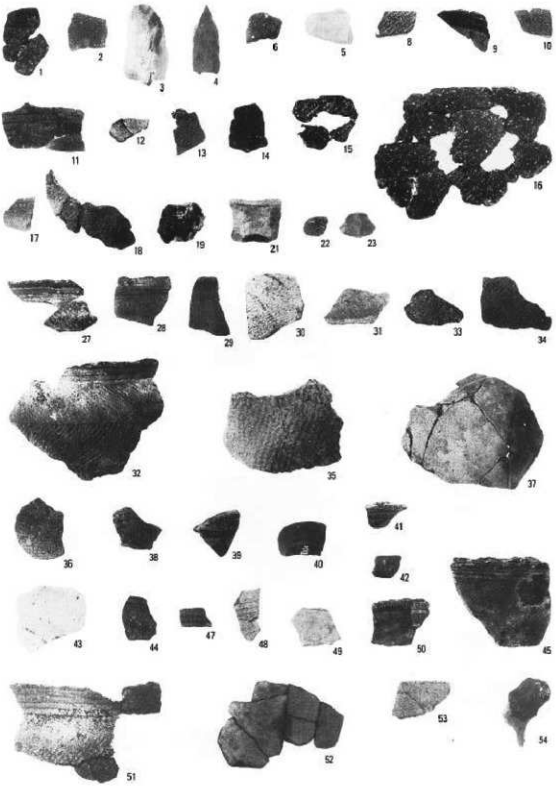
3　SK14 土坑　完掘　（南東▷北西）

1　SK16土坑　土層断面　（南▷北）

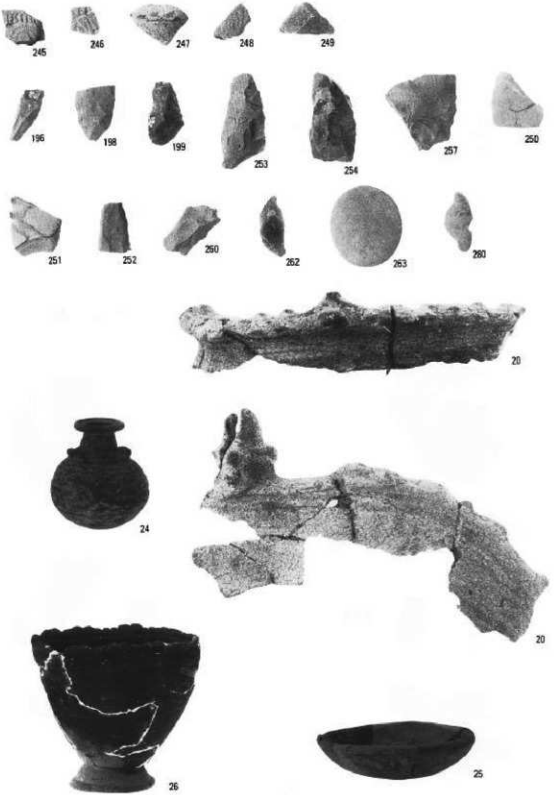


2　SK16土坑　（南▷北）

3　SK13土坑　土層断面　（北東▷南西）

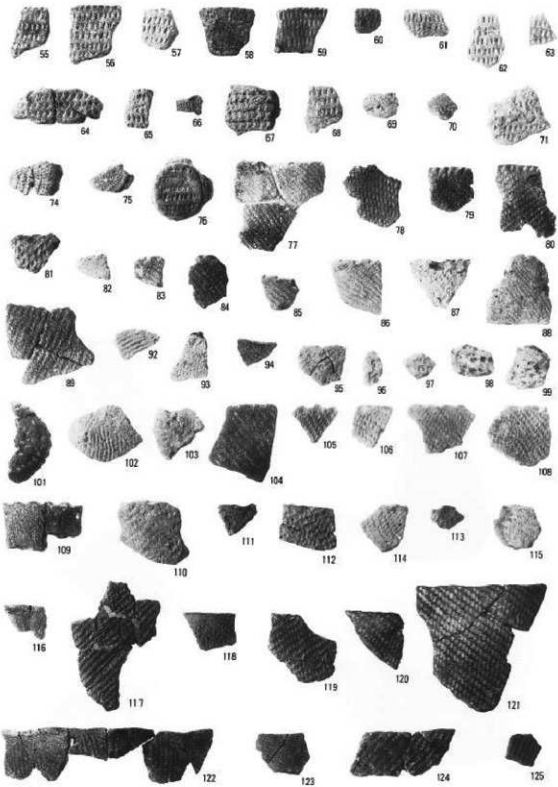


遺構内出土遺物（1）

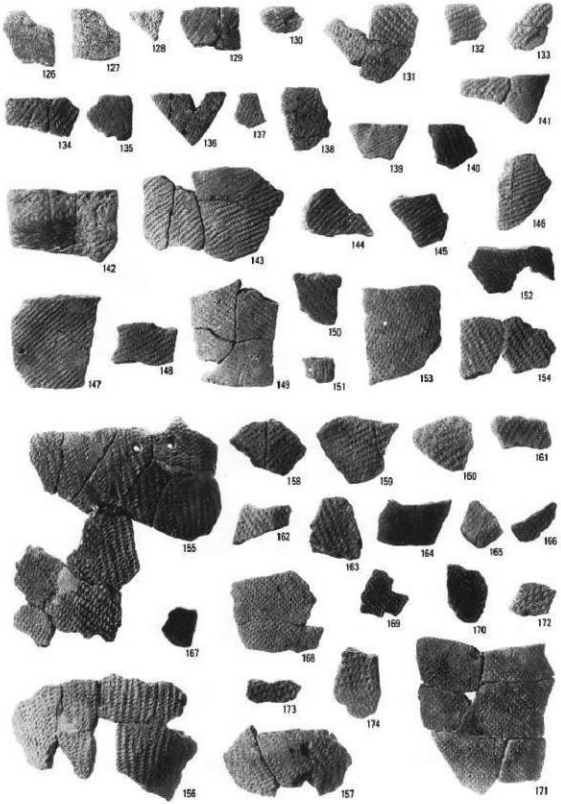

245
246
247
248
249
196
198
199
253
254
257
250
251
252
260
262
263
280
20
24
20
26
25

遺構内出土遺物（2）

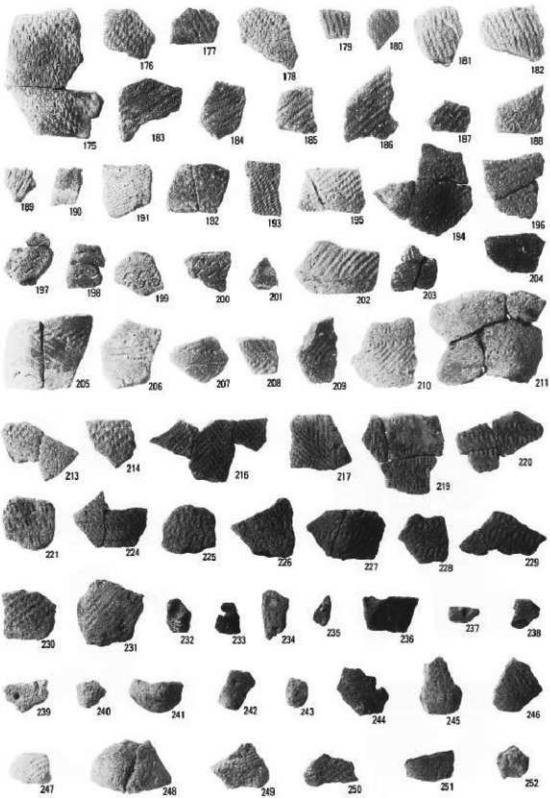
遺構外出土土器（1）



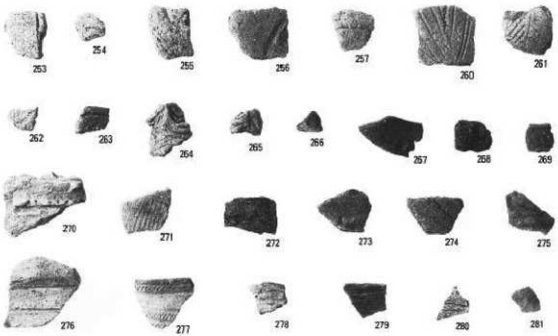
遺構外出土土器（2）　第Ⅰ群



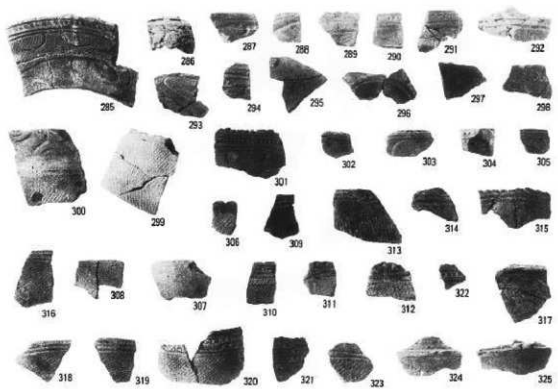
遺構外出土土器（3）　第1群



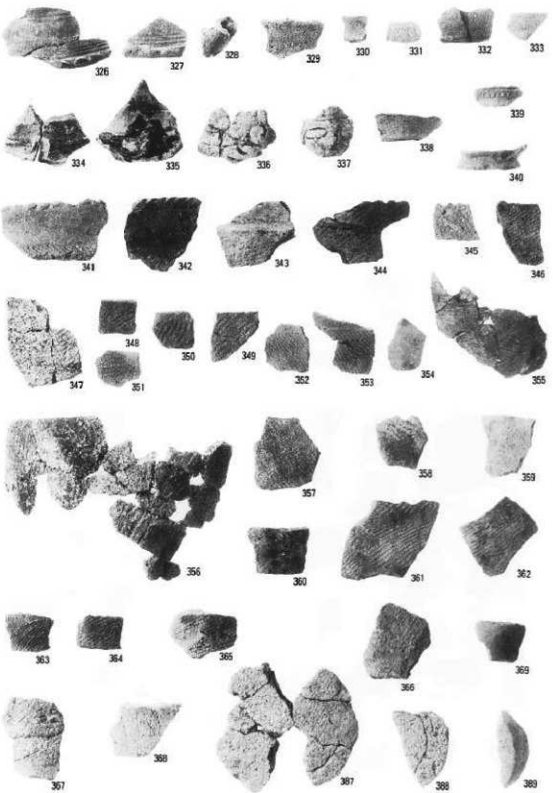
遺構外出土土器（4） 第Ⅰ群



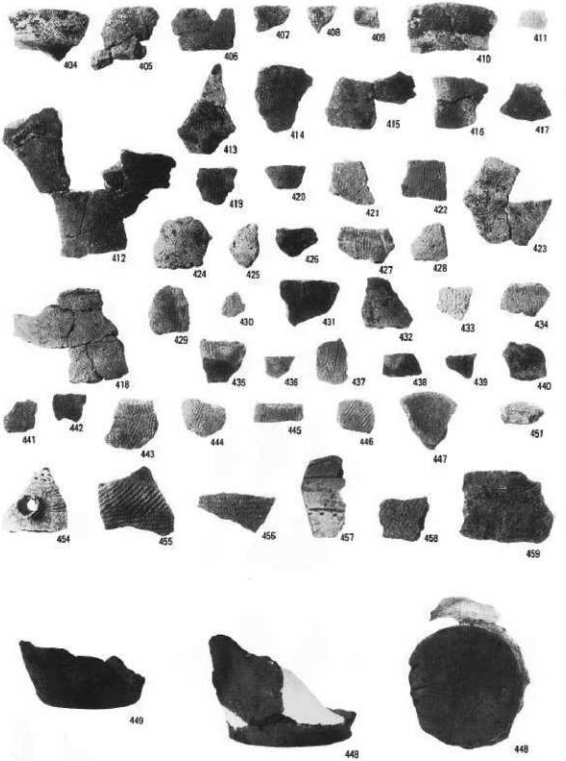
遺構外出土土器（5）　第Ⅱ群・第Ⅲ群



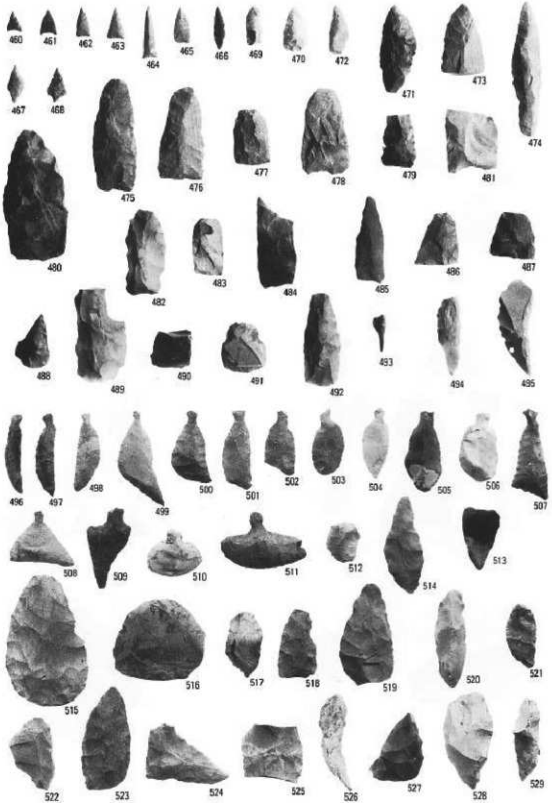
遺構外出土土器（6）　第Ⅱ群・第Ⅲ群



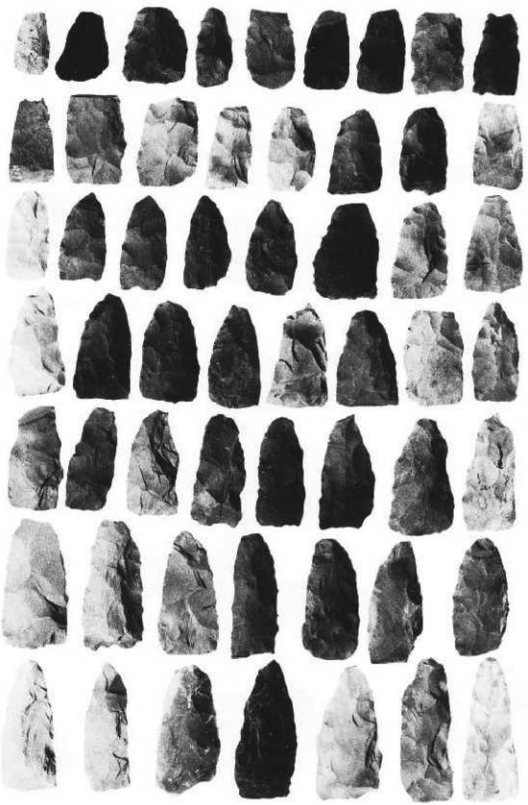
遺構外出土土器（7） 第Ⅳ群



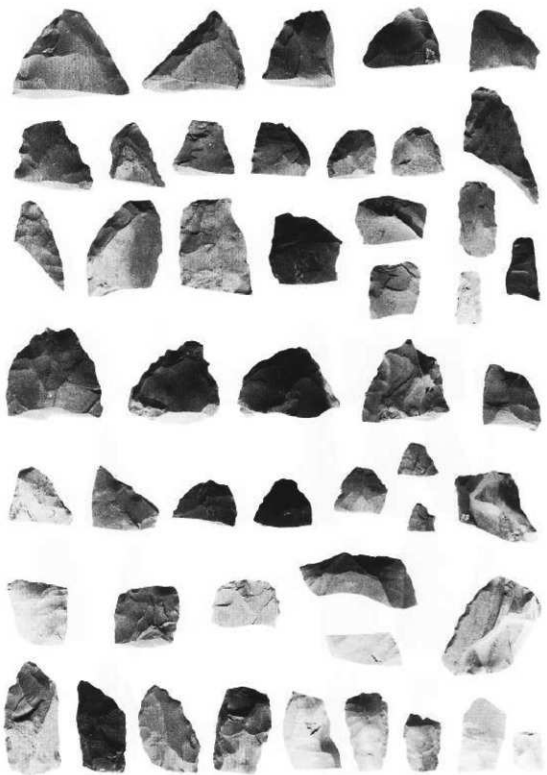
遺構外出土土器（8） 第Ⅴ群


460
461
462
463
464
465
466
469
470
472
471
473
474
467
468
475
476
477
478
479
481
480
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
514
513
515
516
517
518
519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
529

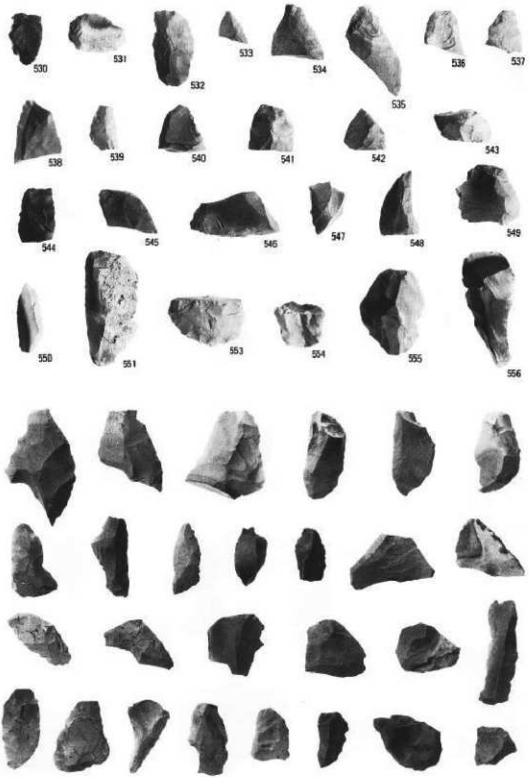
遺構外出土石器（1）



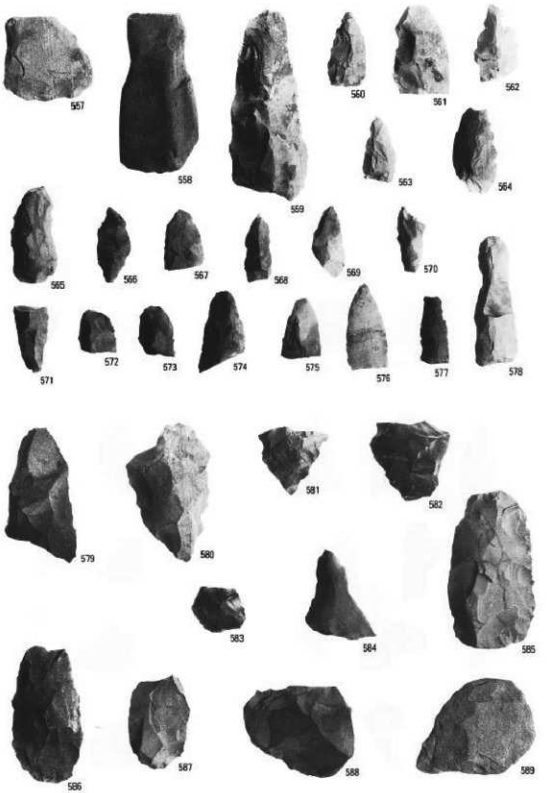
遺構外出土石器（2）



遺構外出土石器（3）


530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550
551
553
554
555
556

遺構外出土石器（4）

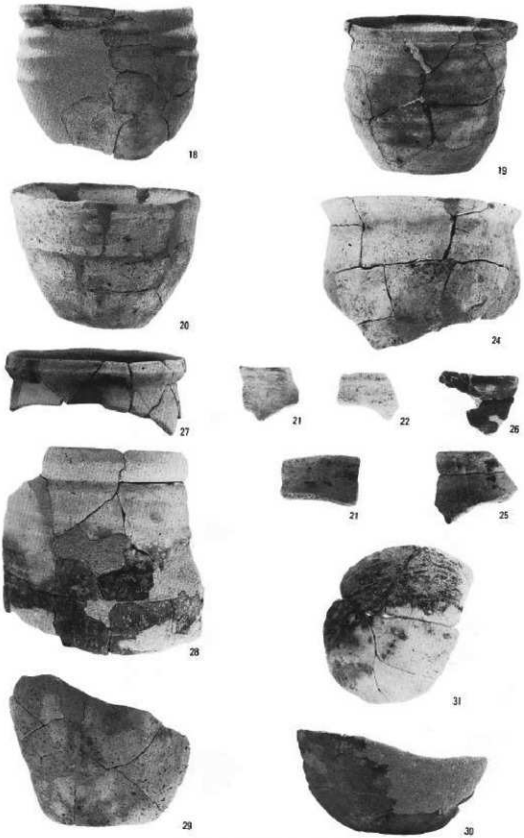

557
558
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
579
580
581
582
583
584
585
586
587
588
589

遺構外出土石器（5）

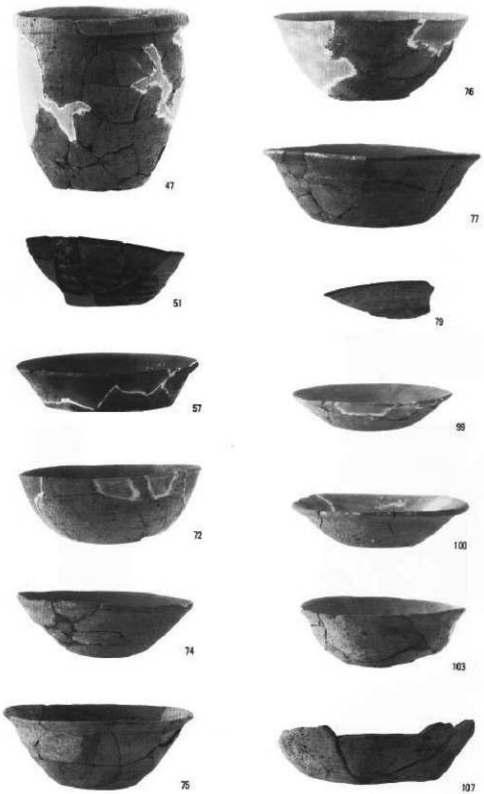
590
591
592
593
594
595
596
597
598
599
600
601
602
603
604
605
606
607
608
609
610
611
612
613
614

遺構外出土石器（6）

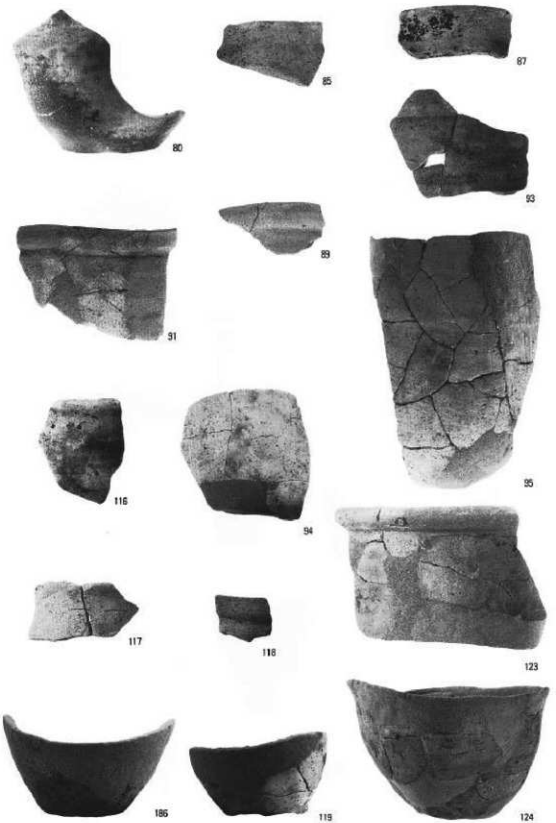
平安時代遺構内出土土器（1）



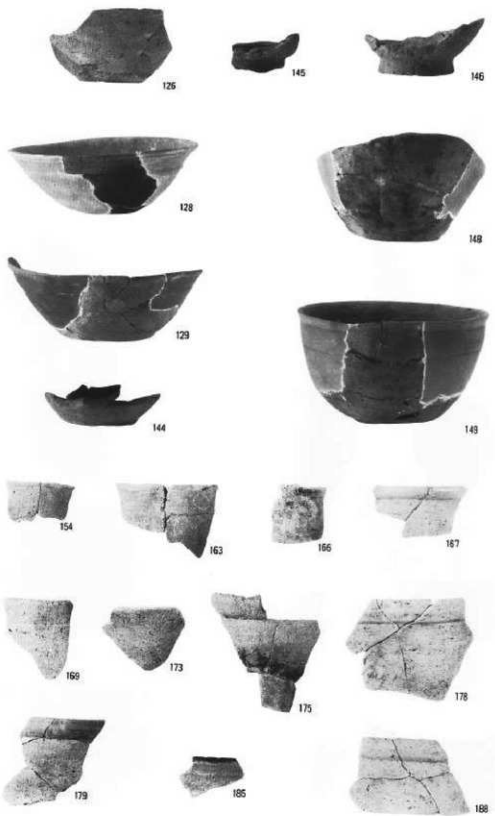
平安時代遺構内出土土器（2）



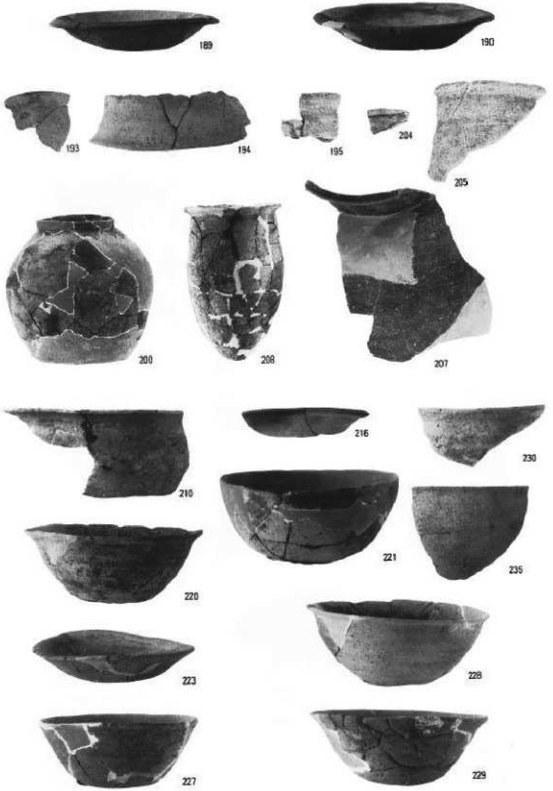
平安時代遺構内出土土器（3）



平安時代遺構内出土土器（4）



平安時代遺構外出土土器（1）



平安時代遺構内出土土器（5）

238

211

212

214

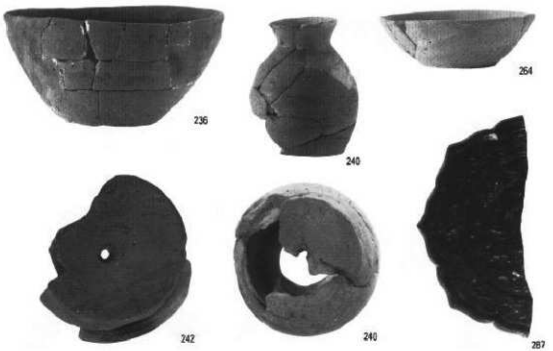
239

215

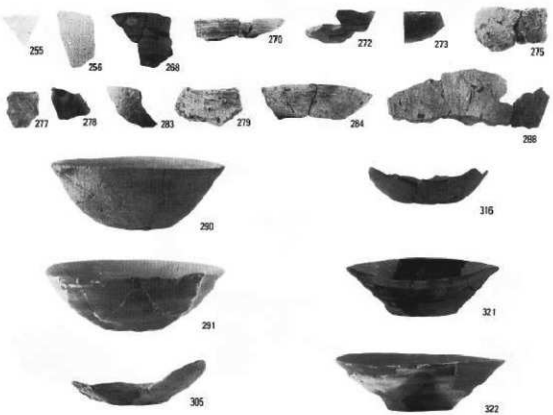
213

237

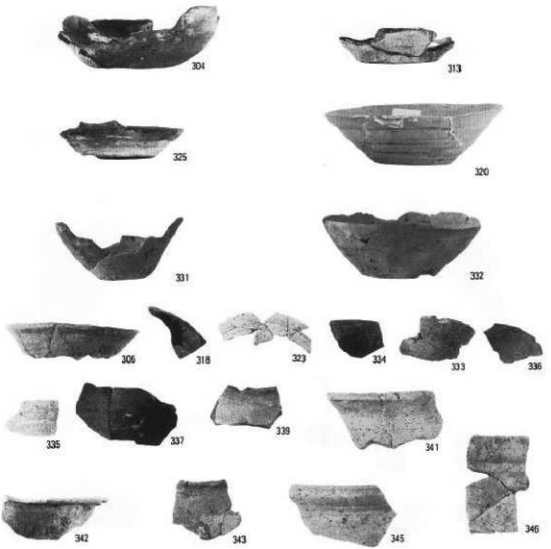
平安時代遺構内出土土器（4）



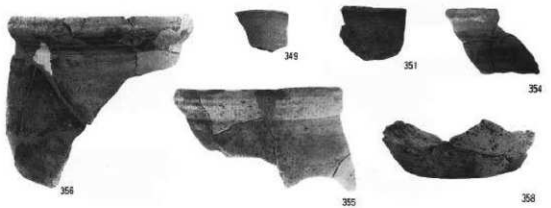
平安時代遺構内出土土器（7）



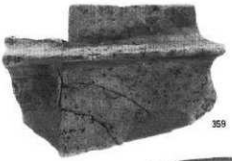
平安時代遺構外出土土器（2）



平安時代遺構外出土土器（3）

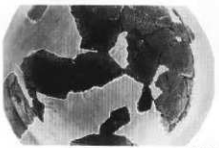


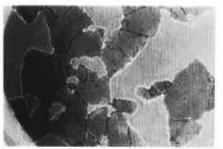
平安時代遺構内出土土器（8）


359

360

361


361 裏


361 裏

平安時代遺構内出土土器（9）

362

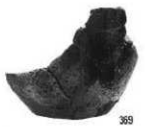
364

365

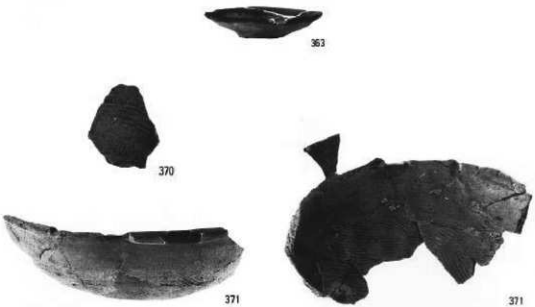
366

368

367

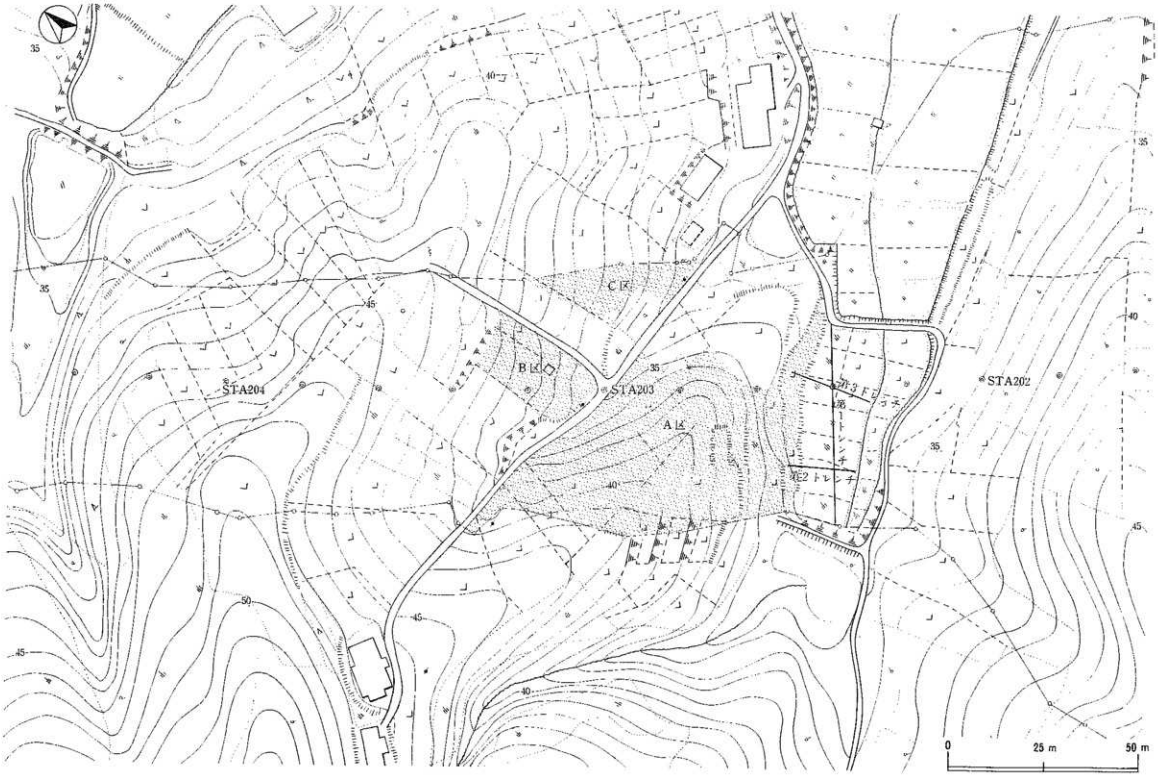

369

平安時代遺構外出土土器（4）

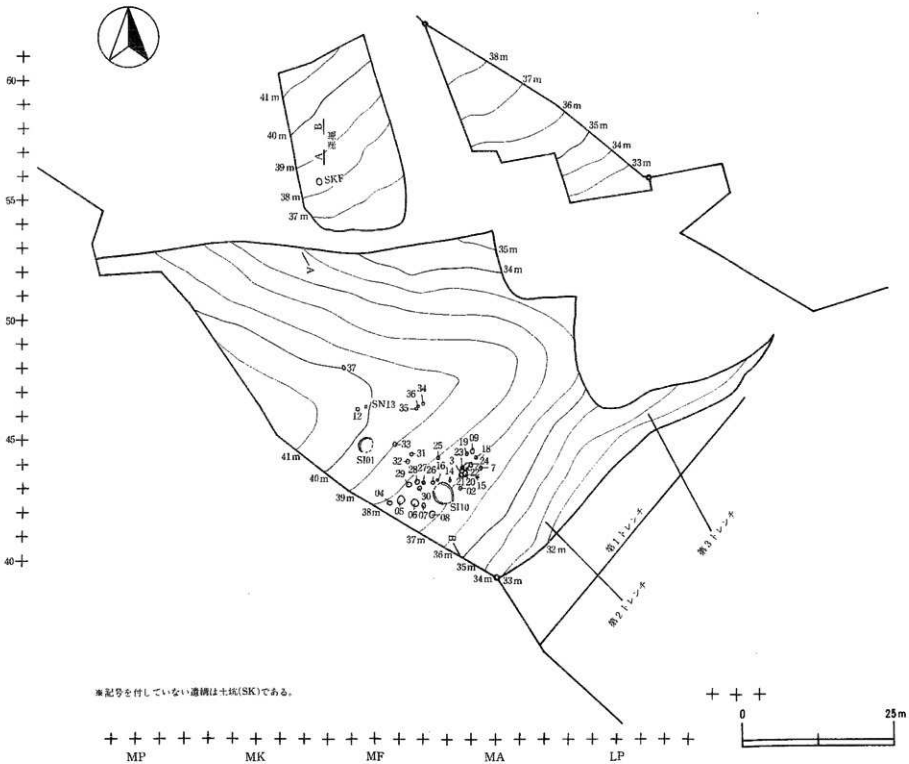


平安時代遺構外出土土器（5）

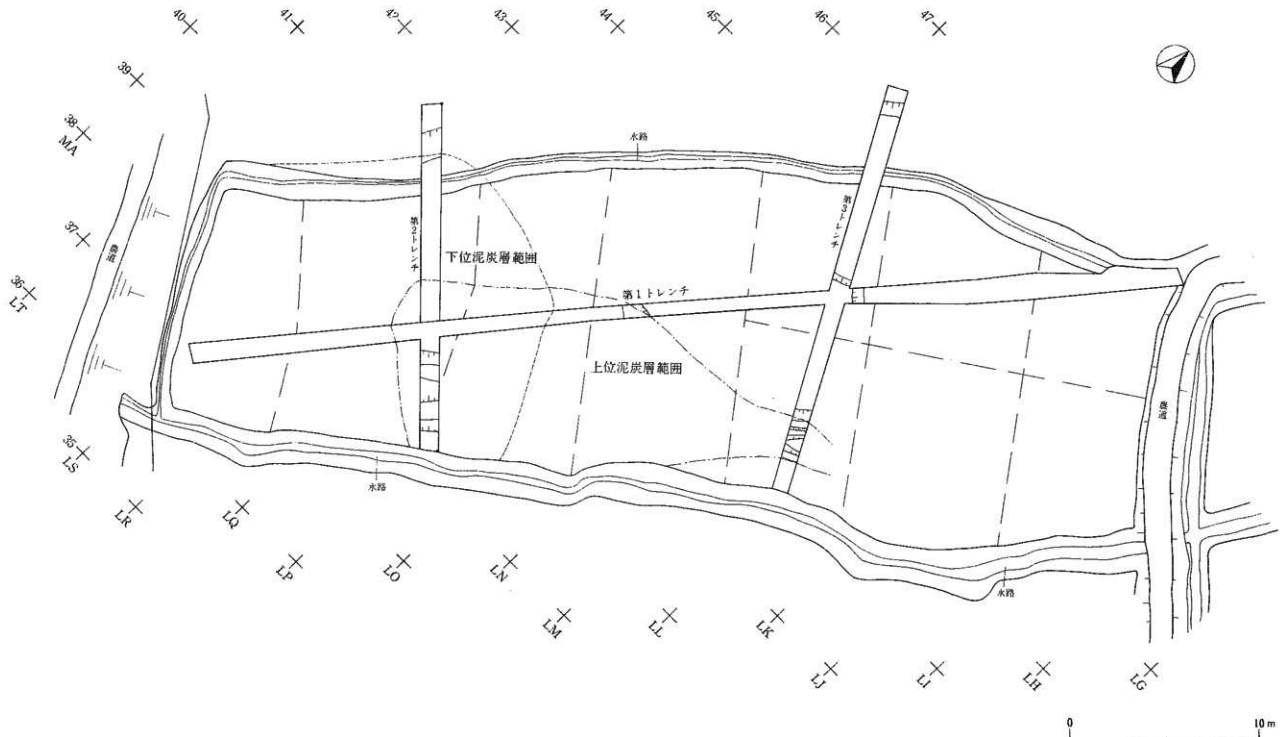
下田谷地遺跡



第1図　遺跡周辺地形図


SKF
SN13
SI01
SI10
第1トレンチ
第2トレンチ
第3トレンチ
※記号を付していない遺構は土坑(SK)である。
0
25m
MP
MK
MF
MA
LP

第2図　遺構配置図


40
41
42
43
44
45
46
47
39
38
MA
37
36
LT
35
LS
LR
LQ
LP
LO
LN
LM
LL
LK
LJ
LI
LH
LG
水路
第2トレンチ
下位泥炭層範囲
第1トレンチ
上位泥炭層範囲
第3トレンチ
農道
0
10 m

第3図　水田部分平面図

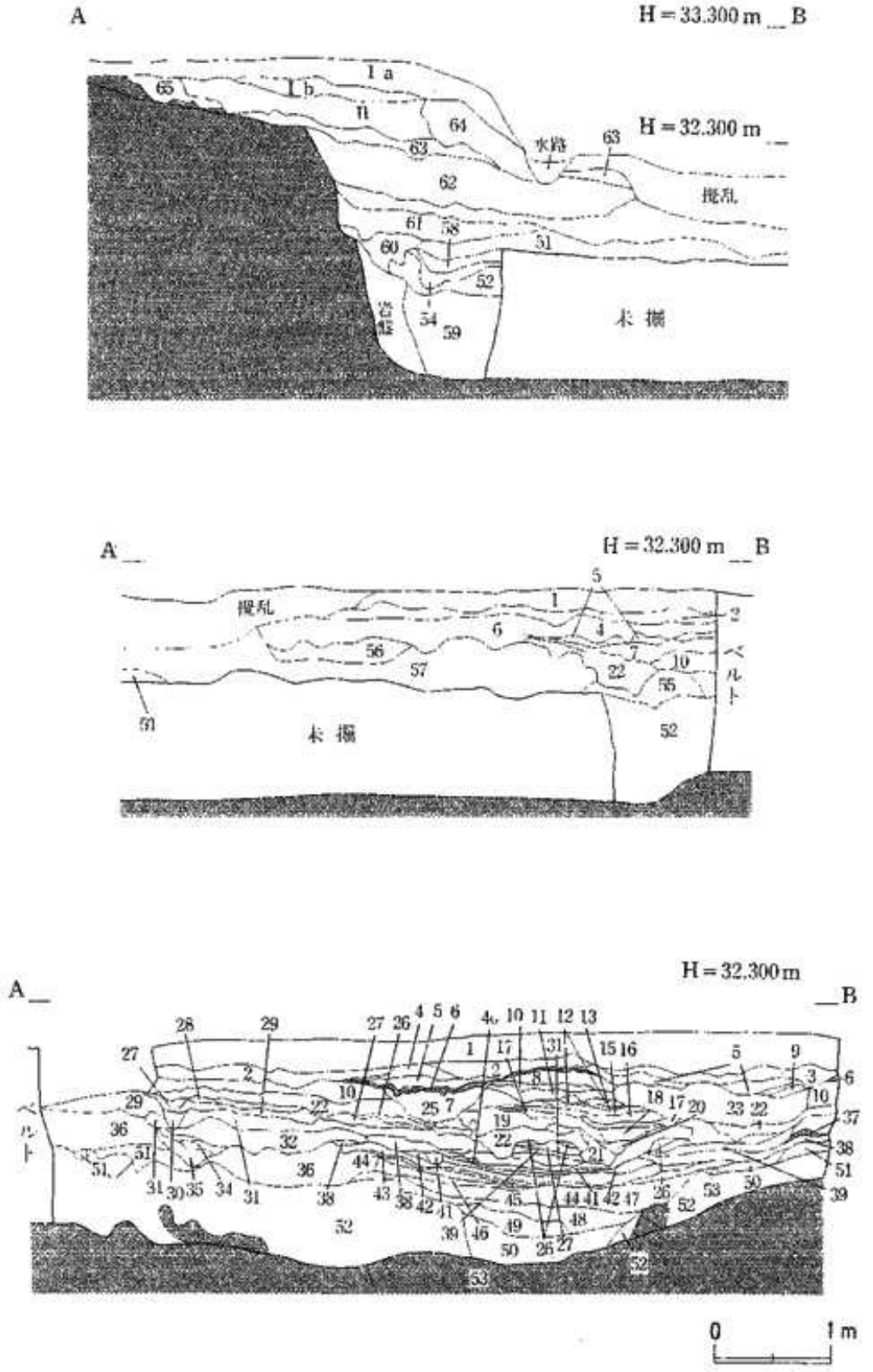
第1章　調査の概要

第1節　遺跡の概観

遺跡は大曲市街地の南西方向にあり、大曲駅から直線距離にして約6.8kmである。市街地の国道13号から大曲橋を渡り、主要地方道大曲・大森・羽後線をやや南下すると内小友地区に至るが、そこの九十九沢集落の入り口を右折し市道に入り、寺山地区の入り口を左折し、山の東裾沿いに行くとほどなく遺跡に行きあたる。

遺跡は西方の出羽山地から連続して延びる標高30～42mの丘陵上にある。丘陵の南東部及び北西部には小さな沢が形成されている。その台地の先端部及び斜面に遺構が構築され、また、遺物が包蔵されている。南東部の沢は平鹿郡と大曲市の境界で、この沢をはさんで南東側（平鹿郡側）には下田遺跡があり、また、北西側の沢をはさんだ北側には九十九沢窯跡がある。発掘調査前の現況は畑地を主とし、一部原野が含まれているが、開墾時にローム がかなり削平されている所も多かった。また、この台地には東西に走る私道がある（第1図）。

遺跡の基本層位はA区では表土からロームまで5層に分けられる。詳細は第5図を参照していただきたい。A区は馬の背状となった頂部から斜面の中腹までは1－a層（耕作土）があるのみで、その下は4層地山（ローム）となる。中腹からそのやや下までは1－a層の撹乱された1－b層、さらにその下に遺物包含層である2層とローム漸移層である3層の堆積が薄いながらも部分的に観察された。1－b層は斜面を下がるにしたがって畑の区画の肩部で厚くなり、2・3層が部分的にみられたにすぎないが、これは前述のようにこの土地を畑地として造成した際に、上から下に向かって削平しながら平坦部を作り出していった結果である。B・C区は2層以下が残っておらず、1－a層（耕作土）のみであった。水田部分では3本のトレンチを設定（第2・3図）し、泥炭層を確認した。詳細は第3章の自然科学的分析にゆずるが、第2トレンチの土層断面（第4図）観察によれば、泥炭層は2枚あり、縄文時代と考えられる下位の泥炭層までの深さは1.85mで、上位の泥炭層は平安時代の火山灰を挟在している。層位は下位より、砂層→泥炭層→巨礫を交えた砂層や砂まじりの泥炭層→泥炭層→テフラ（火山灰）→泥炭層→表土というふうに複雑な堆積状況を示し、このことは土石流のような激しい流れと、小さな沢状の流れの時期があったことを物語るものである。石器の原材料となりそうな頁岩が採取できたが、これらはおそらく沢となったこの地点に流れこんできたものであろう。それは、B区の深掘部分（第6図、図版8）でも同じ様な礫が確認できたことからも推定できる。



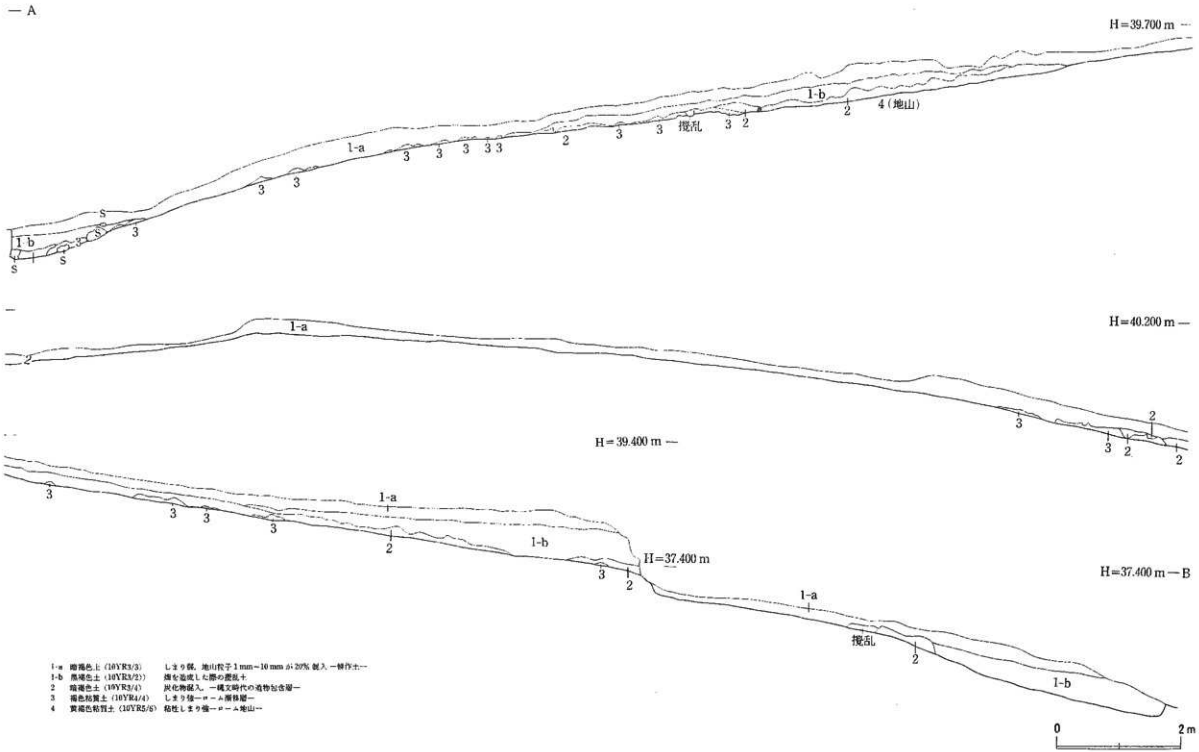
第４図　水田部分第2トレンチ断面図

第1表　水田部第2トレンチ土層観察表（1）

番号	色調	記号	粒子	粘性	硬度	混入物			備考
						炭化物	砂	砂	
1	黒褐色土	10YR2/3	細かい	あり	あり	20%	20%		[表土]
2	黒褐色土	10YR2/3	細かい	あり	あり	1 mm～3 mm　5%	5 mm～20 mm　15%		
3	黒褐色土	7.5YR5/2	細かい	あり	やや欠	2 mm～5 mm　3%			やや泥炭を呈する
4	黒色土	10YR2/1	細かい	あり	あり	1 mm～2 mm　1%	若干		
5	黒褐色土	7.5YR5/2	細かい	あり					[泥炭]
6	黄褐色土	10YR5/6	やや粗い	あり					[火山灰] 泥炭を含む
7	黒褐色土	7.5YR2/2	細かい	あり		0.1 mm～0.5 mm　1%	5 mm～12 mm　10%		
8	黒褐色土	10YR2/2	細かい	あり	あり	2 mm～4 mm　3%	3 mm～10 mm　5%		
9	黒褐色土	7.5YR2/2	細かい	あり		0.1 mm～0.5 mm　1%	5 mm～12 mm　10%	若干	
10	黒褐色土	10YR2/3	細かい	あり	やや欠	2 mm～3 mm　2%	3 mm～30 mm　10%	多量	
11	黒褐色土	10YR2/2	やや粗い	あり	あり	4 mm～5 mm　5%　ブロック状あり	5 mm～15 mm　10%	多量	
12	黒褐色土	10YR2/2	細かい	あり	あり	3 mm～5 mm　10%	5 mm　5%	極細 10%	
13	黒褐色土	10YR2/2	細かい	あり	あり	3 mm　1%	10 mm　50%	極細 5%	
14	黒褐色土	10YR2/3	やや粗い	あり	あり	3 mm　2%	10 mm～30 mm　70%	多量	
15	黒褐色土	10YR2/2	細かい	あり	あり	1 mm～3 mm　15%　ブロック状あり	2 mm～10 mm　20%	5%	
16	黒褐色土	10YR2/2	細かい	あり	あり	5 mm　5%　ブロック状あり	2 mm～20 mm　70%	極細多量	南東方向ほど多量に含む
17	黒色土	10YR2/1	細かい	あり	あり	2 mm　50%	2 mm～10 mm　10%	極細 10%	
18	黒褐色土	10YR2/3	やや粗い	あり	あり	3 mm　5%	2 mm～30 mm　60%	極細多量	
19	黒褐色土	10YR2/2	細かい	あり	あり	1 mm～5 mm　3%	3 mm～50 mm　60%	極細若干	
20	黒色土	10YR2/1	細かい	あり	あり	1 mm～2 mm　5%	1 mm～10 mm　15%		
21	黒褐色土	10YR2/2	細かい	あり	あり	1 mm～2 mm　2%	10 mm～30 mm　50%	若干	
22	黒色土	10YR1.7/1	細かい	あり	あり	ＳＩ状　ブロックあり	1 mm～10 mm　10%	少量	10YR3/1 黒褐色粘土ブロック多量含む
23	黒褐色土	10YR2/3	やや粗い	あり	やや欠		5 mm～40 mm　80%	多量	[泥炭 50% 含む] 堆積方向右から左、奥から手前、貞岩性の砂を含む
24	黒色土	10YR2/1	細かい	あり	あり		3 mm～20 mm　90%	多量	
25	黒色土	10YR2/1	細かい	あり	やや欠	1 mm　1%			[泥岩粒を含む]
26	黒色土	10YR2/1	細かい	あり	あり	1 mm～2 mm　20%	2 mm～5 mm　2%	若干	
27	黒褐色土	10YR2/2	細かい	あり	あり	1 mm　2%	3 mm～50 mm　20%	10%	礫堆積方向左～右
28	黒褐色土	10YR2/2	細かい	あり	あり		3 mm～20 mm　40%	多量	
29	黒褐色土	10YR3/1	やや粗い	あり	あり		3 mm～20 mm　90%	多量	礫堆積方向左～右
30	にぶい黄褐色土	10YR4/3	やや粗い	あり	あり		5 mm～10 mm　20%	多量	
31	灰黄褐色土	10YR4/2	やや粗い	あり	あり	1 mm　50%	5 mm～20 mm　50%	多量	礫堆積方向左～右ほぼ中央付近で左平
32	灰黄褐色土	10YR4/2	粗い	なし	あり		多量	多量	礫堆積方向左～右奥から手前

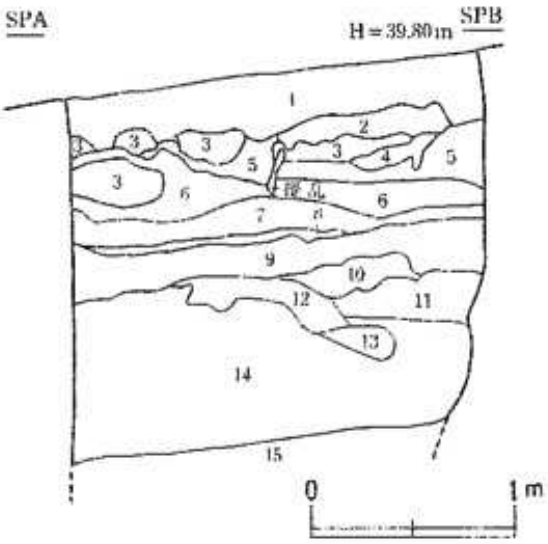
第2表　水田部第2トレンチ土層観察表（2）

番号	色調	記号	粒子	粘性	硬度	混入物			備考
						炭化物	礫	砂	
33	黒褐色土	10YR3/1	細かい	あり	あり	1 mm　2%	2 mm～40 mm　15%	50%	
34	にぶい黄褐色土	10YR4/3	細かい	あり	あり	1 mm～2 mm　2%	2 mm～10 mm　90%	多量	
35	黒褐色土	10YR3/1	細かい	あり	あり	1 mm～2 mm　3%	2 mm～10 mm　2%	若干	10YR5/3にぶい黄褐色粘土ブロック
36	黒褐色土	10YR3/3	やや粗い	あり	あり		5 mm　90%	多量	
38	黒褐色土	10YR3/1	細かい	あり	あり	1 mm～5 mm　10%	5 mm～10 mm30%	多量	
39	黒褐色土	10YR3/1	細かい	あり	あり	1 mm～5 mm　5%	1 mm～5 mm　5%	10%	
40	黒色土	10YR3/1	細かい	あり	あり		3 mm～10 mm　50%	10%	
41	黒色土	10YR2/1	細かい	あり	やや欠	若干　水分多く含む	2 mm～5 mm　10%		[泥炭]
42	黒褐色土	10YR3/1	細かい	あり	やや欠	1 mm　1%	2 mm～7 mm　50%	20%	
43	黒色土	10YR2/1	細かい	あり	あり	水分多量に含む　シミ状		若干	泥炭をブロック状に含む
44	黒褐色土	10YR2/2	細かい	あり	やや欠	1 mm　1%	1 mm～5 mm　40%	50%	[泥炭]
45	黒色土	10YR2/1	細かい	あり	あり	1 mm　1%　ブロック状に2%	2 mm～4 mm　ブロック状2%	極細30%	部分的に泥炭を含む
46	黒褐色土	10YR3/2	細かい	あり	あり		3 mm～10 mm	多量	
47	黒褐色土	10YR2/2	細かい	あり	あり	2 mm　1%	5 mm～20 mm　1%		[泥炭]
48	黒褐色土	10YR3/1	細かい	あり	あり		5 mm～30 mm　90%	多量	礫堆積方向左～右
49	黒褐色土	10YR2/3	細かい	あり	あり		5 mm～10 mm　10%	多量	[泥炭]
50	礫層						10 mm～こぶし大		礫方向左～右，炭から手前頁岩性の礫含む
51	灰褐色土	7.5YR4/2	細かい	あり	あり				[泥炭] 頁岩性の礫混入
52	褐褐色土	7.5YR3/4	粗い	なし	あり				[泥炭] 植物根多量に含む
53	灰オリーブ	7.5YR6/2	細かい	あり	あり				水分含む
54	黒褐色土	10YR3/2	細かい	あり	あり			多量	[泥炭]
55	黒色土	10YR1.7/1	細かい	あり	あり	若干	5 mm～50 mm　70%		
56	黒褐色土	10YR3/1	細かい	あり	あり		多量		地山ブロック多量
57	灰オリーブ	7.5Y6/2	細かい	あり	あり				部分的に泥炭　北西部において7.5Y6/3オリーブ黄に移行する
58	黒褐色土	10YR2/3	細かい	あり	あり				[泥炭層]
59	黒褐色土	10YR2/3	細かい	あり	あり		多量		[泥炭層]
60	褐色土	10YR4/4	細かい	あり	あり			多量	
61	にぶい黄褐色土	10YR4/3	細かい	あり	あり		5 mm～20 mm　5%		
62	明黄褐色土	10YR6/3	細かい	あり	あり		部分的		6YR6/3にぶい黄褐色6/3～6/6部分的に
63	黒褐色土	10YR2/3	細かい	あり	あり	若干	5 mm～30 mm　2%		地山粒・ブロック多量
64	黒褐色土	10YR2/2	細かい	あり	あり				根による撹乱を受け，多孔性に富む
65	黒褐色土	10YR3/4	細かい	なし	あり				地山粒及びブロック30%



1-a　暗褐色土（10YR3/3）　しまり弱，地山粒子1 mm～10 mmが20%混入 ―耕作土―
1-b　黒褐色土（10YR3/2）　畑を造成した際の撹乱土
2　暗褐色土（10YR3/4）　炭化物混入，―縄文時代の遺物包含層―
3　褐色粘質土（10YR4/4）　しまり強―ローム層移層―
4　黄褐色粘質土（10YR5/6）　粘性しまり強―ローム地山―

第5図　遺跡基本土層図



第6図　深掘土層断面図

1　明褐色土（7.5YR5/6）　粘性強，しまり強，白くもろい礫（中粒）5%混入
2　明黄褐色土（10YR6/6）　粘性強，しまり強，白くもろい礫（極小～大粒）10%，炭化粒（極小粒）1%混入
3　黄褐色土（10YR5/6）　粘性強，しまり強，白くもろい礫（極小粒）10%，炭化物（極小粒）1%混入
4　橙色土（7.5YR6/8）　粘性強，しまり中，白くもろい礫（極小～極大粒）5%，炭化物（極小粒）1%混入　この層より，白くもろい石礫（20 cm）がわずかに混入
5　明褐色土（7.5YR5/8）　粘性強，しまり弱，白くもろい礫（極小～極大粒）15%混入
6　明褐色土（7.5YR6/6）　粘性強，しまり弱，白くもろい礫（小～大粒）10%混入
7　橙色土（10YR6/8）　粘性強，しまり弱，白くもろい礫（中～大粒）が遭って，斑状に20%混入
8　黄褐色土（10YR7/8）　粘性弱，しまり弱，ボロボロしている
9　淡黄橙色土（10YR8/3）　白くやわらかい礫土体層，小礫もしくは巨礫（50～300 mm）混入
10　にぶい黄橙色土（10YR7/4）　粘性中，しまり弱
＋褐色土（10YR4/6）　品色土，ボロボロしている
11　変質はにぶい黄橙色（10YR7/4）でややもろく，中は黒褐色（10YR2/3）で硬い質者
12　にぶい黄橙色土（7.5YR6/8）　粘性中，しまり弱，部分的ににぶい橙色土10%混入
13　明黄褐色土（10YR7/6）　粘性弱，しまり弱，ボロボロしている
14　淡黄橙色土（10YR8/3）　シルト，粘性弱，しまり強，にぶい黄橙色（10YR6/4）ブロック20%混入
15　淡黄橙色（10YR8/3）・岩盤
6・7層が深めの土坑の断面にあたる

第2節　調査の経過

調査は昭和63年5月9日から開始した。さっそくA区中央部の45・47ラインの粗掘を始め、MA45・MB45グリッドにて竪穴住居跡らしいプランを確認した。この辺は第2層の遺物包含層（黒色土）がよく残っているようだ。表土からは縄文時代の土器、石剣・石匙などの石器が出土した。A区南側斜面下の水田部分では、範囲確認調査時に2枚の泥炭層の存在が確認されており、トレンチを入れた場所の平板測量をして平面図とトレンチの断面図作成を行った。業者委託をしたグリッド杭打設は今日で終了した。5月10日、A区北側斜面である49ラインの粗掘を行い、中ほどでは南側斜面と同様、包含層が残っている事を確認した。11日、A区の排土が多くなり、昨日搬入されたベルコンが使えるようになるまで、C区の粗掘をすることにした。本区は表土が薄く作業の進行は順調である。縄文時代の土器・石器、平安時代の土器（土師器）が少量出土した。16日、ベルコンが使えるようになったため、A区の粗掘を再開。南側斜面のMF42グリッドでは土坑、MF43グリッドでは炉跡らしきプランを確認し、石皿や石製品が出土した。この辺は遺物包含層が比較的厚く残っており、遺構・遺物が多くありそうなので、しばらくはこの辺の粗掘を集中的に行うことにした。17日、3棟のプレハブが設置され、埋蔵文化財センターより発掘資材が到着。プレハブ内外の整理・整備を行う。

5月24日、A区の土層観察用ベルトの写真撮影、断面図作成。26日、A区で検出していたSK02～SK06土坑、SI01竪穴住居跡の確認状況写真撮影後、精査を開始する。5月30日、A区南側斜

面の粗掘が進み、今日で終了した。遺構精査は継続して行う。6月1日、水田部分第2トレンチから花粉・火山灰分析資料のサンプリング。2日、A区のMA43グリッドで竪穴住居跡らしきプランを検出。その周辺で火山灰が混入した土坑があるようだ。6日、A区のSK03・20～23・土坑の5遺構が重複していることが判明。10日、A区の土坑精査がだいぶ進んできた。SI10竪穴住居跡を検出し、写真撮影を行う。SK20～24土坑を精査した結果、SK20・24に平安時代と思われる火山灰が埋土に混入していることが明らかとなる。

6月14日、A区の粗掘が終了しB区にその主力を移す。A区の遺構精査に集中的に入る。20日、A区の北側斜面下にある水田部の道路造成工事が始まる。23日、粗掘はB区からC区に移る。24日、A区尾根部のpit群の精査に入る。7月4日、A区土坑群・pit群の精査が進み、終了の見通しがついてきた。7日、A区の遺構精査と全体写真撮影が終了。8日、B・C区の遺構精査を開始し、撤去準備も併せて行う。C区の竪穴状遺構としていたものは全て根による撹乱であることが判明した。午後、専門指導員戸沢充則氏の来跡を仰ぎ、遺構・遺物について指導を受けた。12日、資・器材の搬出・運搬後、道路公団に現場を引き渡し、調査を終了した。

第2章　調査の記録

前述したように、遺跡は標高30m～42mの丘陵上にあり、その南東部および北西部には小さな沢が入り、それらに開析された、西から東へ張り出す2つの馬の背状の台地が形成されている。

調査対象地は、中央北側をほぼ東西に走る私道により分断されている。調査を進行するにあたり、便宜上この私道を境界に大きく二分し、北側においてはさらに東西に二分した。したがつて、私道の南側をA区、北側西部をB区、北側東部をC区として実施した。A区の南側斜面と南隣する下田谷地との間は水田で、トレンチ調査の結果、縄文時代と平安時代の泥炭層を確認した（第3・4図、図版5・6）。詳細は第3章の自然科学的分析を参照していただきたい。

遺構はA区の尾根部から南側斜面にかけて集中して検出された。その内訳は、縄文時代の竪穴住居跡2軒、土坑30基、フラスコ状土坑1基、焼土遺構1基、柱穴様ピットがあり、他に平安時代の土坑3基である。遺構の多くはローム上面で確認した。

第1節　検出遺構と遺物

1　縄文時代

(1)　竪穴住居跡

SI01竪穴住居跡（第7・8・46図、図版9・10）

東西に馬の背状となったA区の頂上部付近MF44・45グリッドに位置し、標高39.5～39.8mのローム上面(Ⅳ層上面)にて検出した。検出時にはすでに南東側の壁が残っておらず、また、一部撹乱を受けていたためその全様は不明である。残存する壁及び柱穴の配置から長軸(南北)275cm、短軸（東西）235cmの楕円形プランを呈し、ほぼ中央に石囲炉を付設する竪穴住居跡と考えられる。壁が残存する北西側で埋土は8層に分層できた。褐色土・暗褐色土を主体とし、ローム粒子・炭化物を混入する自然堆積を呈する。残存壁高は8～15cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。南西側の一部で壁溝を検出し、上幅10～18cm、深さ3～5cmで、底面には径10～16cm、深さ5～18cmの略円形の小ピットを伴う。埋土はローム粒子・炭化物を小量混入する褐色土を主体とする。床面は北西から南東にかけて緩く傾斜しているが、平坦で堅緻である。柱穴は全部で13本検出した。径14～20cmの略円形を呈し深さ4～50cmで、埋土はローム粒子・炭化物を若干混入する色土である。壁際（P－4・6・10・11・13）及び壁から30～40cm内側（P－1～3・5・7～9・12）に配置されると考えられるが、主柱穴は特定できなかった。炉跡は本住居跡

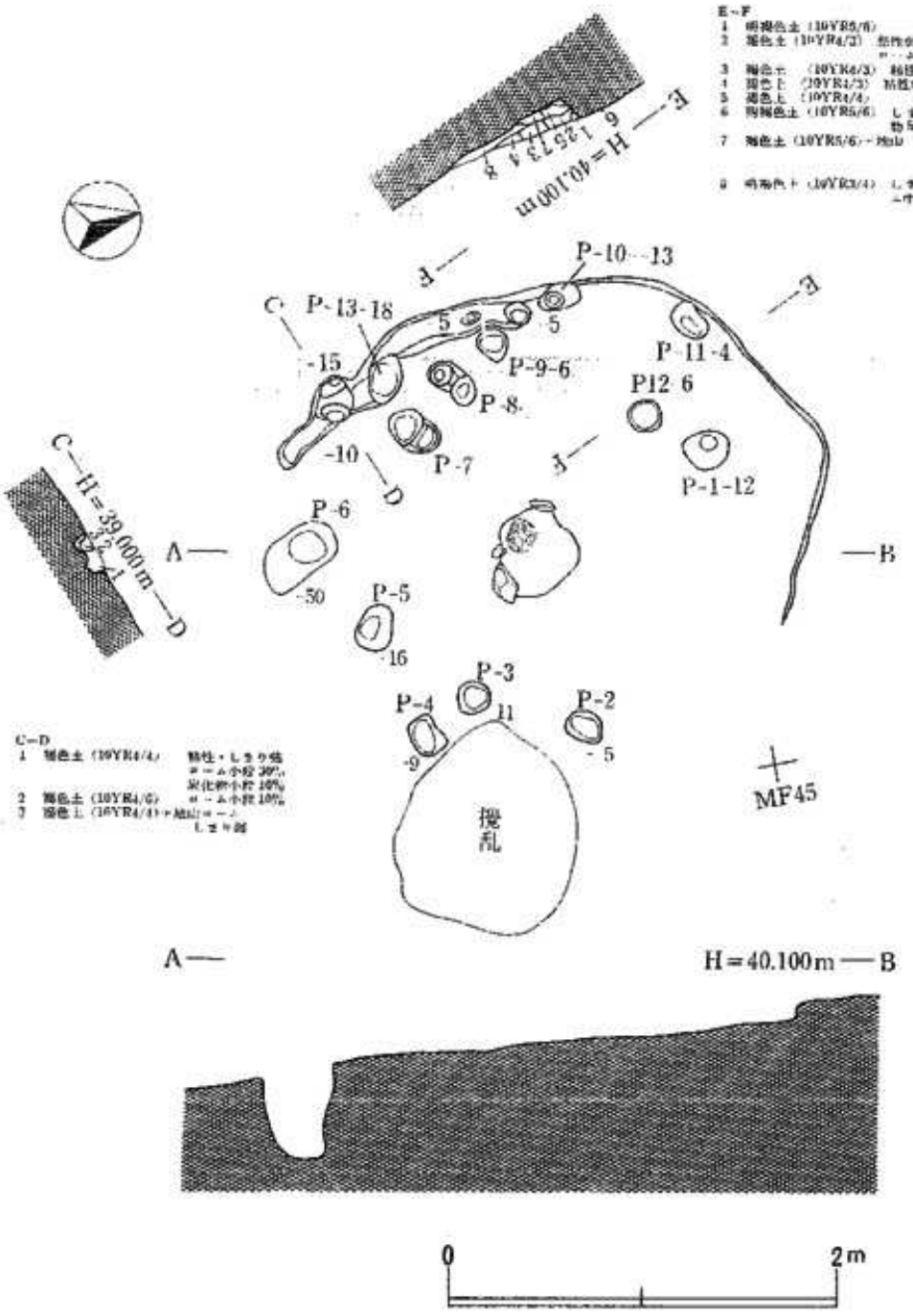
のほぼ中央に位置する。床面を拳大から人頭大の石にあわせて5～10cm掘り込んで石を据え、径40～50cmの円形に配したと考えられる石囲炉である。燃焼面は加熱を受けて著しく硬化しており、残存する石も脆い状態を呈している。

遺物は埋土及び床面から出土しているが、本住居跡の検出時にすでに南東側が床面に達していたため、埋土が残っていた北西側に遺物が集中している。番号を付して取り上げた縄文土器片が8点、石器・フレイク等6点である。このうち土器片は全て同一個体である。第21図1は、RP1～7が接合した粗製の深鉢形土器である。平口縁で底部から口縁部にかけてほぼ垂直に立ち上がる器形を呈し、推定径21cm、器厚4～5mmを測る。口唇部は文様を施文したのち平坦に整形されている。胎土は0.5～1mmの砂粒を多量に混入し、焼成は良好である。文様は原体LRの縄文を横位回転施文し、その後、段違いに綾絡文を施している。内面は丁寧なミガキが施され、内外面ともに煤状炭化物がかなり付着している。また口縁部下4.5cmところに補修孔が穿たれている。第46図1はRQ1として取り上げた石皿で、カンラン石と思われる。約半分欠損していると考えられるが、残存する最大長20.7cm、最大厚9.4cm、最少厚7cmを測り、両側面も研磨されている。その他は図示できなかった。RQ2・3・5・6は石質が頁岩のフレイクである。遺物の出土状況から、少なくとも深鉢形土器と石皿は本住居跡廃絶時に一括遺棄されたものと考えられる。

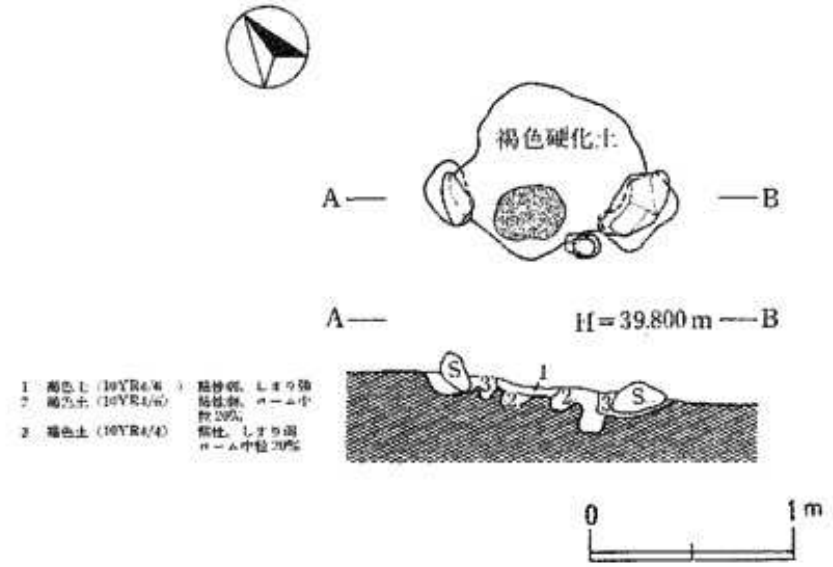
SI10竪穴住居跡（第9・10・19図、図版11～14）

東西に馬の背状となったA区の南東斜面MB・MC42・43グリッドにて検出し、標高37.0～37.5mに位置する。炉跡の確認面はレベル的にはⅡ層中に位置し、周辺はすでに北西から南東に向かって緩傾斜するⅣ層（ローム）上面まで掘り下げてしまった。したがって炉跡の検出面を考慮するとⅡ層中で構築された可能性が高く、また床面は北西部分でⅣ層（ローム）上面に達するが、Ⅳ層を掘り込んだ形跡はない。しかし、Ⅳ層上面にて、本住居跡の構造上の痕跡を確認できたため、規模・形態を把握することが可能となった。

本住居跡は径370cm～380cmの略円形プランを呈し、北西部分に出入口と考えられる張り出し部と中央よりやや南東寄りに石囲炉を付設する竪穴住居跡と考えられる。主軸方向はN－64°－Wで、これを軸として相対するほぼ弧状の壁溝を有する。壁溝は幅8～14cm、深さ4～14cmを測り、底面には径5～10cmの小ピットを伴う。埋土は暗褐色土・にぶい黄褐色土が主体で、しまりがあり炭化物・ローム粒子を混入する。柱穴は全部で27本穿たれている。径20～35cmの略円形を呈し、深さ7～30cmを測る。埋土は暗褐色土・褐色土・にぶい黄褐色土が主体でしまりがあり、炭化物・ローム粒子を混入する。P－1・6・10・15・22・24には焼土粒子を少量混入する。主柱穴はP－12・13・15・16・24・28の6本、壁柱穴はP－2～6・8～10・14・22の10本と考えられる。壁溝及び柱穴の配置から北西部分のP－1・26は平面形のプランからや



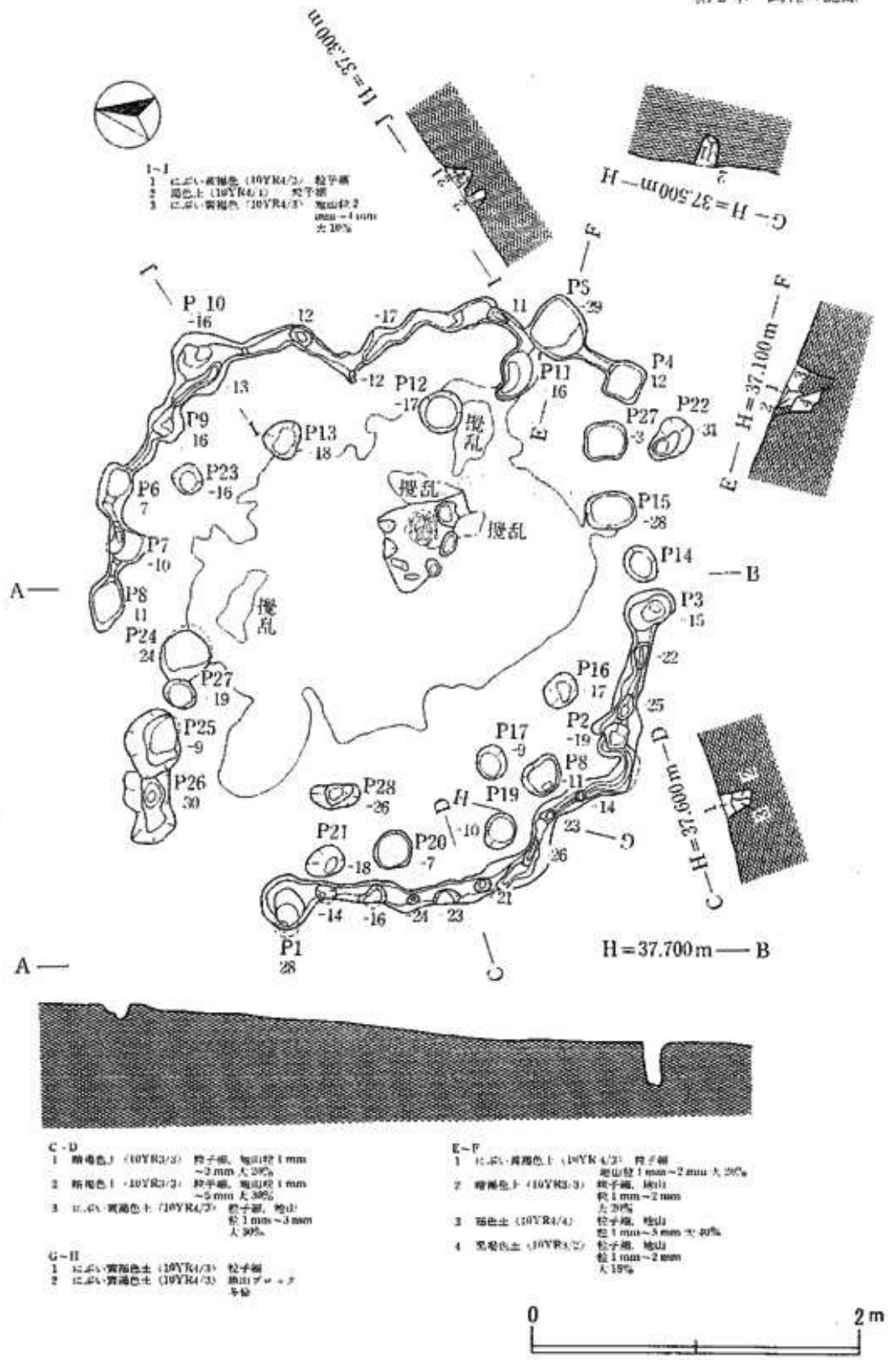
第7図　SI01竪穴住居跡



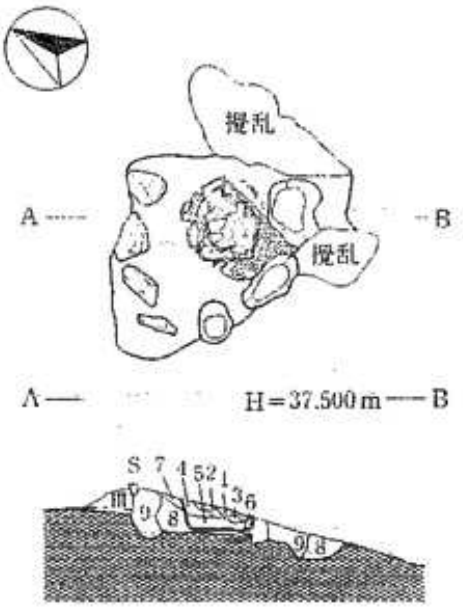
第８図　SI01竪穴住居跡・炉

や外側に位置し、これとＰ－21・25とが対を成して、所謂出入口にともなう張り出し部と想定される。外側に向かって「ハ」の字形を呈し、最大幅130cm（Ｐ21・25間）、最少幅100cm（Ｐ１・26間）で、主軸方向と一致する。床面は前述のように、炉跡の周辺及び北西部分に残存し硬さは普通である。床面積は推定10㎡ほどで、床面のレベルは、炉跡及び北西部分のレベルから標高37.3mと推定する。炉跡は中央よりやや南東寄りに付設され、主軸線上に位置する石囲炉である。南東部分が攪乱を受けているため全体の様相は不明であるが、残存する石及びぬきとり痕から拳大の石を径50cmの円形に石組し、中央部には深さ10cmほど掘りくぼめて粗製の深鉢形土器を据えている。埋土は９層に分層できたが、９層は石組みの掘り方、７・８層は加熱により赤変、硬化した暗褐色・褐色土である。土器内の１～５層は炭化物・焼土粒を多量に混入する褐色土を主体とし、１～４層にはサラサラした灰状を呈する灰白色粒子・ブロックを混入する。

遺物は炉で使用された土器の他に、Ｐ－１・22・23及びＰ－１・２，２・３間の壁溝内から縄文土器の胴部破片が数点出土している。接合後、図示できた遺物は炉で使用された第19図２の縄文土器のみである。口縁部から胴上部にかけて欠損しているが、底径7.6cm、残存器高12.7cm、器厚0.4cmで、底部から口縁部に向かってほぼ垂直に立ち上がる粗製の深鉢形土器と思われる。胎土は0.5～2mm大の砂粒を多量に含み、焼成は良好である。外面は原体LR縄文を横位回転施文し、底部付近から底面には丁寧なナデ調整が施されている。内面は横方向のナデ調整が施されている。炉で使用された土器ではあるが、二次焼成痕は看取できない。



第9図　SI10竪穴住居跡



1　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　粒子細い
しまりあり
焼土灰白色状
粒子ブロック
状50%
2　褐色土（7.5YR4/4）　粒子細、しまりあり
焼土粒・炭化物混入
3　褐色土（7.5YR4/4）　粒子細、しまりあり
ブロック状あり
2層より黒味あり
4　酸褐色土（10YR3/3）　粒子細、炭化物混入
5　暗褐色土（7.5YM3/4）　粒子細、炭化物混入
6　暗褐色土（10YR3/4）　粒子細、炭化物混入
7　暗褐色土（10YR3/3）　粒子細、しまりあり
焼土ブロック状
8　褐色土（10YR4/4）　粒子細、しまり強
炭化物混入、焼土体変
9　にぶい黄褐色土（10YR5/4～4/4）
粒子細、しまり強
炭化物混入、焼土にぶ
く赤変

0　50 cm

第10図　SI10竪穴住居跡・炉

(2)　土坑

遺物の記述がない土坑は周辺の遺物出土状況や遺構の重複関係などから縄文時代に属すると判断したものである。出土した遺物のうち土器は小破片が多く、しかも風化して脆いものが多い。したがって、表面がザラザラしたり、剝落したりして文様不明のものが主体で、図示できたものは少ない。

SK02土坑（第13図）

A区のMB42・43グリッドで検出した。平面形は円形で、浅く、壁は底面から緩やかに立ち上がる。東側は平坦で直ぐに立ち上がる。遺構の規模は径72cm、深さ18cmで、底面はやや凹凸がある。

埋土は4層に分層した。黒褐色土、暗褐色土、褐色土でいずれの層にも炭化物小粒がわずかに混入する。2と4の間にローム ブロックの層があり、4にもブロックが混じる。以上のことから本遺構は埋められたものであろうと判断した。

遺物は縄文土器の破片と石器のフレイクが数点出土したが、土器は風化して脆く、図示できなかった。

SK03土坑（第12・20図、図版25）

A区のMB43グリッドで検出した。SK20～23の4遺構と重複しており、SK23より新しく、SK20～22より古い。そのため、新しい遺構に大分壊されており詳細は不明であるが、平面形は円形か、楕円形かと思われる。遺構の規模は現存部で径60cm、深さ16cmで、底面はやや凹凸がある。埋土は4層に分層した。1・2層に炭化物が少量、2・4層にローム粒子が多く混入し、1層中には火山灰ブロックが若干混入していた。遺構の重複・埋土の状況から、本遺構は埋められた後に火山灰が流れ込んで二次堆積したと判断した。

遺物は縄文土器が5点出土した。7は縄文のみを施した土器である。

SK04土坑（第11・20・25図、図版25）

A区のME42グリッドで検出した。平面形は円形で、断面形は鍋底形である。遺構の規模は径92cm、深さ38cmで、底面はほぼ平坦である。

埋土は11層に分層した。6・11層以外の全ての層に炭化物粒子が若干混入し、1～5層は褐色系で粘性・しまりにやや欠ける。6～11層はローム粒子、ブロックが多く、6・10層はローム主体層で10層は粘性・しまりが強く、貼られた感があり、8・9・11層も似た様相を呈する。人為的に埋められたものであろう。

遺物は縄文土器と石器がわずかに出土した。6は鉢形土器の口縁部で、地文は縄文地で3条の沈線とその間に羊歯状文を施す晩期前半の土器である。8・10は縄文のみを施し、8は内面に調整痕をのこしている。9は無文で皿形土器かと思われる。108はスクレイパーで、主要剥離面に刃部は作出されず、背面の右側縁の刃部は丸味をもち、中ほどには二次調整痕、左側縁には自然面が残る。

SK05土坑（第11図）

A区のMD42・ME42グリッドで検出した。平面形は不整楕円形で、浅く壁は底面から緩やかに立ち上がる。遺構の規模は径154cm、深さ22cmで、底面に著しい凹凸がある。

埋土は1～14層に分層できる。1・8・11・13層は攪乱されており、2・6・10層に炭化物粒子が微量混入する。4・5・9・12層にはローム粒子を多く混入し、人為的に埋められた可能性があると考えられる。

遺物は縄文土器の細片がごくわずかに出土した。文様は風化していて不明である。

SK06土坑（第11・20図、図版15・25）

A区のMD42グリッドで検出した。平面形は円形で、断面形は鍋底形である。遺構の規模は径138cm、底面径60cm、深さ56cmで底面はほぼ平坦である。周囲の壁際に円形か楕円形の4本のピットが対角線上にあり、径は18～31cm、深さは5～16cmである。

埋土は17層に分層した。2層は焼土塊で、4層は焼土と暗褐色土の混合土で大変よくしまり、炭化物粒子も混じる。9・12・14・15・17層はローム・ローム・ロームと暗褐色土の混合層もしくはローム・ローム主体層で、明らかに埋められたものであろう。

遺物は縄文土器、石器がわずかに出土した。11は口縁部で、口縁はわずかに刻目が入り、細かい縄文上に浅い沈線を1条施文している。器厚は薄く、内外とも煤状炭化物が付着している。13・15も薄手の土器で、縄文地に緩い弧状の浅い沈線を1条施文し、無文帯とを区画しているものである。12・14・16は前者に比し、やや厚手の土器で、14は縄文地に平行な沈線を施し、その間と上を磨消して無文としている。縄文時代晩期の土器である。

SK07土坑（第12・20図、図版15・25）

A区のMD42グリッドで検出した。平面形は円形で、断面形は鍋底形に近い形である。遺構の規模は径102cm、深さ28cmで、底面はやや凹凸があり、比較的良くしまる。壁際に2本のピットがあり、その規模は径25～29cm、深さ15～31cmである。

埋土は7層に分層した。1・2・4・5層に炭化物粒子が混入し、特に2層に10%と多く含まれている。3・5・6層にはローム粒子・ブロックの混入が多く、埋められたものと判断した。

遺物は縄文土器がわずかに出土した。18は少破片で詳細は不明であるが、羊歯状文を施文した薄い土器である。20も薄手で、縄文地に沈線を施文し、その間を無文としたものである。縄文時代晩期前半の土器である。294は基部が突出する凸基有茎鏃で先端部が折損している。

SK08土坑（第11・19・21・25図、図版15・24～26・29）

A区のMD41グリッドで検出した。平面形は円形で、断面形は底面から外に向かって緩やかな丸みをもって立ち上がる。規模は径176cm、深さ62cmで、底面は良く締まるが、凹凸がある。

開口部の壁際にはピットが4本（P1～P4）、底面には2本（P5～P6）があり、壁際のP1～P3は円形、もしくは楕円形で、径18～37cm、深さ10～17cmでほぼ等間隔に配置されるが、P2の向かいの対角線上にピットは検出されなかった。底面にはやや中央（P5）と壁寄

り（P6）の2本があり、P5は径29×36cm、深さ15cm、P6は径10cm、深さ24cmである。P1～5は上屋の存在を想起させる。

埋土は23層に分層した。1～10・13・16・18・19・23層に炭化物が混入し、7～10にその量が多い。ローム粒子が8・9・18・23層に多く、12・17層はローム主体層となる。つまり、中位～下位の8・9・18層に炭化物・ローム粒子の混入度が大変高く、堆積状況なども考え合わせると中位～下位は埋められたもので、上位はレンズ状の堆積をしていることから自然堆積と判断した。

遺物は縄文時代晩期の土器片石器とそのフレイクが多量に出土した。3は胴下半部が欠損しているが、口頸部が外反する鉢形土器である。口縁部には、「B」字状の小突起があり、その数は12単位と推定される。口縁部と頸部直下には浅く短い沈線が2本1組で横に孤状となって展開し、その下に2条の平行沈線とLR縄文が施文される。晩期前半の土器である。27は口縁部で、口縁に細かい刻目が入り、その直下に羊歯状文を施す。28・30は三叉状入組文を、29・30は口縁部に小突起を有する。33～37は粗製土器の破片で、33・37は口縁がわずかに外反する。31は無文地に浅く太い沈線を有し、35とともに小波状を呈する。39は無文で、皿か注口土器の底部であろうか。109～112は石匙である。109・111は横型で、110・112は定形的な形態ではないが、抉りを入れてつまみ部を作出していることから、横型石匙の仲間とした。114は縦長の剝片で、1側縁の上にわずかな抉りを入れたつまみ部らしい痕跡があることから、縦長石匙としていいものかも知れない。115はスクレイパーで、116は縦長のフレイクで、下端に新しい剝離痕があるが、二次調整痕は両面ともに見られない。118は小形の磨製石斧である。

SK09土坑（第12・20・21図、図版25）

A区のMD44グリッドで検出した。基本層位の土層断面図を作成中に確認したもので、1－b層（遺物包含層）を掘り込んで構築されている。平面形は不整円形で、壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。遺構の規模は径96cm、深さ52cmで底面は凹凸がある。

埋土は6層に分層した。1・6層には炭化物粒子が混入する。1・2・4～6層にはローム粒子が混入し、4・5層はローム主体層となる。

遺物は縄文土器が少量出土した。22は小波状となっている口縁部の波頂部に刻目を入れ、その直下に三叉状入組文を施文するものである。23・25も同類の土器であろうか。24は鉢形の土器と思われ、口縁部に細かな刻目が連続的に入り、その直下の平行沈線間に羊歯状文を施すものである。内外面に煤状炭化物が著しく付着する。縄文時代晩期前半の土器である。

SK12土坑（第12・21図、図版26）

A区のMF46グリッドで検出した。平面形は円形で、断面形は鍋底形である。遺構の規模は径74cm、深さ28cmで、底面はほぼ平坦である。

埋土は8層に分層した。各層に炭化物が混入し、上位～中位の2・4層に混合度が高い。焼土粒子は1・2・4～6層に混入し、中位に多い。ローム粒子は各層に混入し、その度合も高く、5・8層にはブロックも多い。人為的に埋められたものであろう。

遺物は、縄文土器と石器のフレイクが出土した。40～43はいずれも縄文を施文した土器で、40は平口縁で細かな縄文を施す土器である。

SK14土坑（第13図、図版16）

A区のMB43グリッドで検出した。平面形は不整円形で浅く、壁は底面から緩やかに立ち上がる。遺構の規模は径50cm、深さ12cmで、底面はほぼ平坦である。

埋土は2層に分層した。1・2層ともロームが混入し、2層にはローム粒子・ブロックが40%混入する。堆積は自然か人為的か判然としないが、1・2層にロームブロックが混入しており、その堆積状況を見ると後者の可能性がある。

遺物は縄文土器の細片と石器がごく少量出土した。

SK15土坑（第13図、図版16）

A区のMA43グリッドで検出した。平面形は楕円形で浅く、壁は底面から緩やかに立ち上がる。断面形は浅皿形である。遺構の規模は径76cm、深さ18cmで、底面はほぼ平坦である。

埋土は5層に分層した。1～4層には炭化物粒子、いずれの層にもローム粒子が混入するが、3・5層にはロームがブロック状に混入する。本遺構は埋められた可能性がある。

遺物は縄文土器と石器のフレイクがごく少量出土した。土器は風化してボロボロしており、図示できなかった。

SK16土坑（第13図）

A区のMC43グリッドで検出した。平面形は楕円形で、断面形は鍋底形である。遺構の規模は径64cm×52cm、深さは34cmで、底面は凹凸がある。

埋土は5層に分層した。1～4層に炭化物粒子が少量、いずれの層にもローム土が混入し、4、5層はロームが多量もしくは主体となる層である。以上のことから、本遺構は明らかに埋められたものであろうと判断した。

SK17土坑（第13図、図版17）

A区のMA43グリッドで検出した。平面形は楕円形で、壁は底面から緩く外に開きつつ立ち上がる。遺構の規模は径76cm×55cm、深さ20cmで底面はかなり凹凸がある。

埋土は6層に分層した。ほとんどの層に炭化物やロームの粒子が混入しているが、4・6層にはローム粒子やロームブロックが多量に混入していることから、埋められた可能性が高いと考えられる。

遺物は縄文土器がごく少量出土したが、細片で風化して脆く、図示できなかった。

SK18土坑（第13図、図版17）

A区のMA44グリッドで検出した。平面形は楕円形で浅く、壁は底面から緩やかに立ち上がる。遺構の規模は径62cm、深さ10cmで底面はわずかに凹凸がある。

埋土は4層に分層した。各層に炭化物やローム粒子が混入しているが、2層にはロームブロックが含まれる。

遺物は縄文土器の細片と石器のフレイクがわずかに出土した。風化して脆く、図示できなかった。

SK19土坑（第13・22図、図版17・26）

A区のMB44グリッドで検出した。平面形は円形で、壁は底面から緩く外に開きながら立ち上がる。遺構の規模は径66cm、深さ22cmで、底面はわずかに凹凸がある。

埋土は3層に分層したが、底面には他にロームブロックが混じる。1層には焼土粒子が混入し、2層にはローム粒子も多く、ロームブロックも混じる。自然か人為的堆積かは判然としない。

遺物は縄文土器がわずかに出土した。44～46は粗製土器である。47は口縁部で、羊歯状文を施す晩期前半の土器である。

SK22土坑（第12図）

A区のMB43グリッドで検出した。4遺構と重複しており、SK03・SK23よりは新しくSK20・SK24よりは古い。平面形は楕円形で浅く、壁は底面から緩やかに立ち上がる。遺構の規模は148cm×72cm、深さ24cmで、底面はやや平坦である。

埋土は3層に分層した。いずれも炭化物粒子・ローム粒子が混入し、2層はローム粒子とブロックが主体である。

遺物は縄文土器と石器のフレイクがごくわずか出土した。48・49は胴部で、縄文のみ施文した土器である。

SK23土坑（第12図）

A区のMB43グリッドで検出した。2遺構と重複しており、SK03・SK22より古い。平面形は南東半分は不明であるが、楕円形か円形になると思われる。遺構の規模は径82cm、深さ24cmで、底面はSK22寄りで落ち込み、北西側はやや平坦である。

埋土は3層に分層した。いずれも炭化物・ローム粒が混入し、3層にローム粒が50%混入している。

遺物は縄文土器と石器のフレイクがごくわずか出土したが、細片で図示できなかった。

SK25土坑（第13図、図版18）

A区のMC44グリッドで検出した。平面形は楕円形の小ピットが2つ合わさって、中のすぼまった長軸106cmの長楕円形を呈する。埋土の状況から、同時に埋ったもので、新旧関係もない

ことから、同一遺構として扱った。北側の小ピットは径50cm、深さ40cmで、底面から壁に向かって緩やかに立上がる。南側の小ピットは径45cm、深さ52cmで、底面のほぼ中央に径6cm、深さ6cmのピットを伴う。底面は平坦で、断面形は袋状となる。

埋土は11層に分層した。全層に炭化物、8・9層にはローム が混入し、中位から下位にかけてローム粒子・ブロックが多く、8・10層はローム が主体となることから、埋められたものと判断した。

出土遺物はないが、周囲の遺構や遺物出土状況、埋土の観察から縄文時代の土坑と判断した。

SK26土坑（第14・26図、図版19・29）

A区のMC43グリッドで検出した。平面形は楕円形で、断面形は浅皿形である。遺構の規模は径77cm×48cm、深さ24cm、底面は凹凸がある。

埋土は3層に分層した。1～3層とも炭化物・ローム粒・ブロックが混入し、3層には焼土ブロックが若干混入する。

遺物は、縄文土器と石器が1点ずつ出土した。122は凹石で、表裏に凹みをもつ。

SK27土坑（第14図、図版19）

A区のMD43グリッドで検出した。平面形は不整円形に近く、断面形は浅皿形である。遺構の規模は径88cm、深さ26cmで底面はかなり凹凸がある。

埋土は4層に分層した。2～4層に炭化物が少量混入し、3層にはローム粒子・ブロックが、4層には焼土粒も混入していることから、人為的な堆積状態と考えられる。

遺物は縄文土器が数点出土したが、ボロボロして脆く、図示できなかった。

SK28土坑（第14図、図版20）

A区のMD43グリッドで検出した。平面形は円形で、断面形は鍋底形である。遺構の規模は径66cm、深さ18cm底面は平坦である。

埋土は4層に分層した。1～4層とも炭化物粒を少し混入し、2～4層はローム粒を多く混入し、4層はロームブロック主体層となる。したがって人為的に埋められた状況と考えられる出土遺物は縄文土器と石器のフレイクがごく少量出土したが、ボロボロして脆く図示できなかった。

SK29土坑（第14・22図、図版20・26）

A区のMD43グリッドで検出した。平面形は不整円形で、断面形は鍋底形である。遺構の規模は径77cm、深さ26cm底面はやや凹凸がある。ピット4本と重複しているが、配置や規模が不規則なことから、本遺構に伴うものではないと思われる。

埋土は6層に分層した。いずれも良くしまり、1～5層に炭化物粒が少量、2・4層には焼土粒が少量混入し、6層はロームブロックが主体である。自然堆積か、二次堆積かは判然とし

ない。

遺物は縄文土器・石器とそのフレイクが出土した。50は縄文のみを施すもので、51は条痕文を施すものである。123は背面の1側縁に二次調整を施すスクレイパーで、124・125は石棒で、小破片のため詳細は不明である。

SK30土坑（第14・22図、図版21・27）

A区のMD43グリッドで検出した。平面形は円形で、断面形は鍋底形である。遺構の規模は径90cm、深さ32cm、底面はやや凹凸がある。Pit 4本と重複しているが、うち2本は本遺構に伴う可能性がある。

埋土は6層に分層した。5層を除く他の層にいずれも炭化物粒子が、1・2・5層に焼土粒子が少量混入し、全体にローム粒子・小ブロックの混入度が高い。したがって、人為的に埋め戻されたものと判断される。

土層断面の観察によれば、Pit 2は本遺構に伴うものと判断される。したがって対面にあるPit 4も同様に本遺構に伴う可能性がある。

遺物は縄文土器と石器が出土した。52・53は胴部破片で、52は羽状縄文を施すものである。126は凹石、127は石匙である。128は破片であるが石剣と思われる。出土遺物から本遺構は晩期に属すると思われる。

SK31土坑（第14・22図、図版21・27）

A区のMD44グリッドで検出した。平面形は円形で、断面形は浅い鍋底形である。遺構の規模は径72cm、深さ16cmで底面はやや凹凸がある。

埋土は2層に分層した。いずれも炭化物が少量、1層に焼土が少量、2層にロームブロックが30%混入している。2層のロームブロックの混入状況から埋め戻されたものかと思われる。

遺物は縄文土器と石器のフレイクがごくわずか出土した。54は胴部破片で、縄文のみを施す土器である。

SK32土坑（第15・26図、図版21・30）

A区のMD44グリッドで検出した。平面形は円形で、断面形はすり鉢状である。遺構の規模は径70cm、深さ34cmで、底面はやや凹凸がある。

埋土は5層に分層した。1～4層には炭化物粒子を若干含み、いずれにもローム粒子が混入する。3～5層にはロームブロックが多く混入し、5層はロームブロック主体である。その状況から埋土は2方向以上から埋戻されたものと判断される。

遺物は縄文土器の細片が数点と石器が出土した。130は凹石で表裏に凹部を残す。

SK33土坑（第15・22・26図、図版27・30）

A区のME44グリッドで検出した。平面形は円形で、断面形は袋状である。遺構の規模は径72

cm、底面径93cm、深さ43cmで底面はやや凹凸がある。

埋土は19層に分層した。3・5・7・9～11・13～15・17層には炭化物粒子が若干と、3・4・12層には焼土粒子が微量混入し、6～8層はローム主体層で、坑底面の17・19層はローム層下の軟質岩盤ブロックが主体の層である。以上の混入物や、堆積層の層相から人為的に埋められたものと判断する。

遺物は縄文晩期土器片、石器のフレイクが出土した。55は縄文のみを、57・58は撚糸文のみを施文しており、56は無文地に浅く細い沈線を2条1組で、弧状に描くものである。131は円石で、縦に半分に割れている。出土遺物から本遺構は晩期に属すると思われる。

SK34土坑（第15・22図、図版22・27）

A区のMD43グリッド、SK35・36の北東に位置する。平面形は円形で、断面形は鍋底形で、底面中央部に径20cm、深さ7.5cmの落ち込みが1箇所ある。遺構の規模は径59cm、深さ30cmで、底面はほぼ平坦である。

埋土は8層に分層した。3層に焼土粒子、いずれの層にも炭化物粒子が混入され、3～7層にはローム粒子・ブロックが多く混入し、6・7層はロームブロック主体層となる。他に9層にはローム大ブロックも混じる。以上の混入物や堆積状況から人為的に埋められたものと判断した。

遺物は縄文土器が少量出土した。59～62はいずれも胴部破片で、59は撚糸文、61・62は縄文のみの施文で、60は縄文と綾絡文を施したものである。

SK35土坑（第15図、図版22）

A区のMD46グリッドで検出した。SK36と重複しており、SK35を掘り下げて確認した。したがってSK35が新しい。平面形は円形で、断面形は底面から壁の中ほどまで直に立ち上がり、それから上にやや開く。遺構の規模は現存部で径48cm、深さ30cmで、底面は平坦である。

埋土は4層に分層した。1・2・4層には炭化物粒子が若干混入し、いずれにもローム粒子を混入する。3・4層にはロームが多く、3層はローム主体層である。したがって埋土の堆積状況から埋められたものと判断した。

出土遺物はないが、周囲の遺構や遺物の出土状況より縄文時代の土坑と判断した。

SK36土坑（第15図、図版22）

A区のMD46グリッドで検出し、SK35を掘り下げて確認した。したがって本遺構のほうが古い。平面形は円形で、開口部の径が20cmで北東方向に斜めに掘りくぼめている。底面の規模は径20cm×49cm、深さ38cmで、底面は平坦である。

出土遺物はないが、周囲の遺構や遺物の出土状況より縄文時代の土坑と判断した。

SK37土坑（第15図）

A区のMG47・48グリッドで検出した。平面形は楕円形で浅く、壁は底面から緩やかに立ち上がり、断面形は浅皿形である。遺構の規模は径72cm×57cm、深さ18cmで、底面はやや凹凸がある。

埋土は2層に分層した。いずれもしまり強く、炭化物・ローム粒子が微量に混入している。出土遺物はないが、周囲の遺構や遺物の出土状況より縄文時代の土坑と判断した。

(3)　フラスコ状土坑

SKF38フラスコ状土坑（第15図、図版22）

B区のMH55グリッドで検出した。ローム下の軟らかい岩盤層を掘り込んで構築されている。平面形は上が円形、底面が不整楕円形、断面形がフラスコ状である。遺構の規模は坑口部の径117cm×109cm、頸部の径90cm×106cm、坑底部の径150cm×137cm、深さ86cm、面積1.23m²で、底面はやや凹凸がある。

埋土は21層に分層した。壁際もしくは底面近くでは、ローム主体層もしくはロームの混入度が高い層で、壁際は特にロームとの区別がつけ難い。17～19層はしまりがなくややボソボソしているが、18層は粘性が強く貼られた可能性がある。明らかに埋められたものであろう。

出土遺物はないが、近接するMJ58グリッドより、後期初頭の門前式土器が出土していることから、該期とさほど時間差はないものかも知れない。

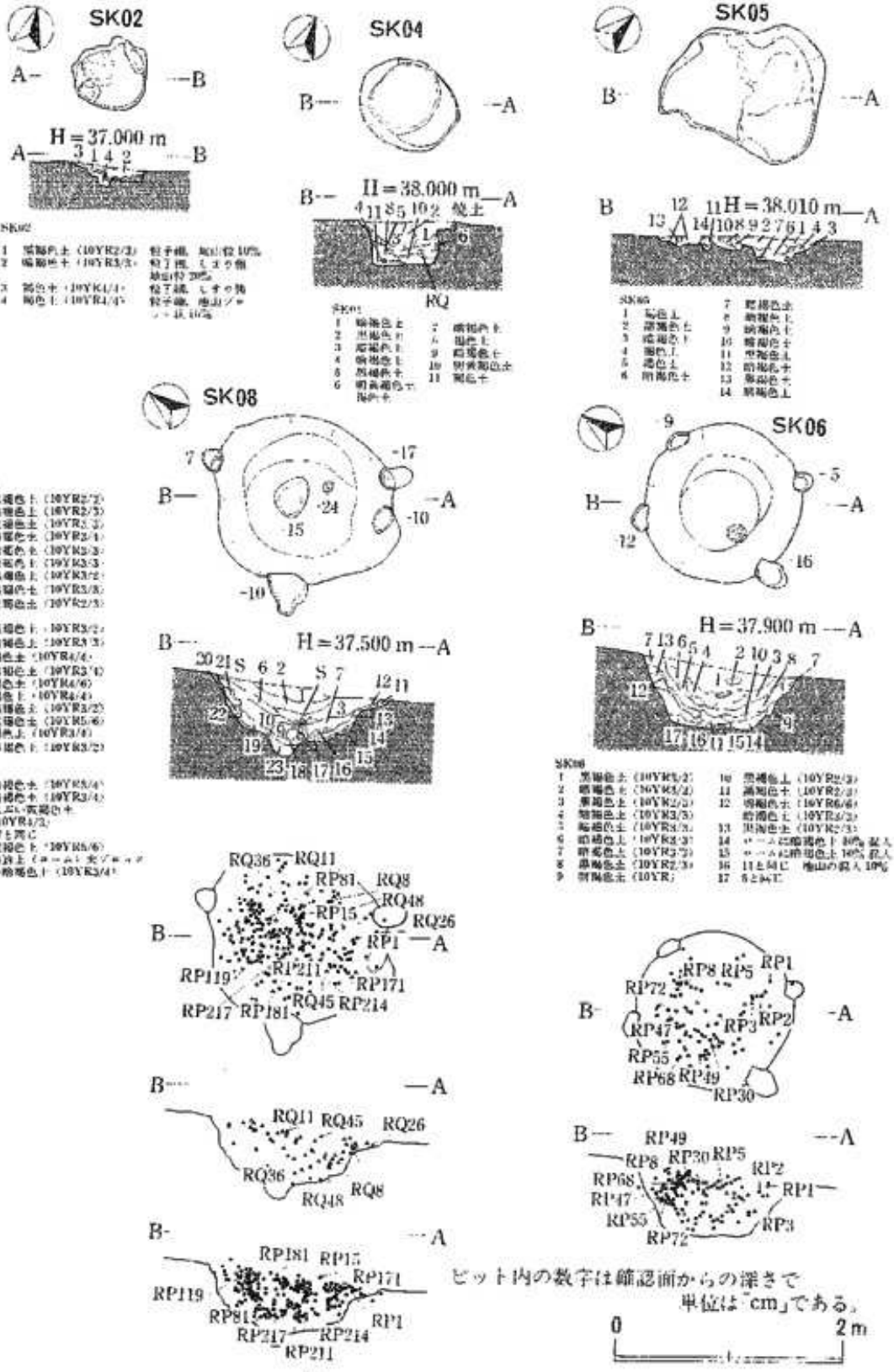
(4)　焼土遺構

SN13焼土遺構（第15図）

A区のMF46グリッドの北斜面の尾根の近くで検出したもので、ほかの遺構集中箇所とやや離れる。平面形は円形で、遺構の規模は径38cm、厚さ6cmである。

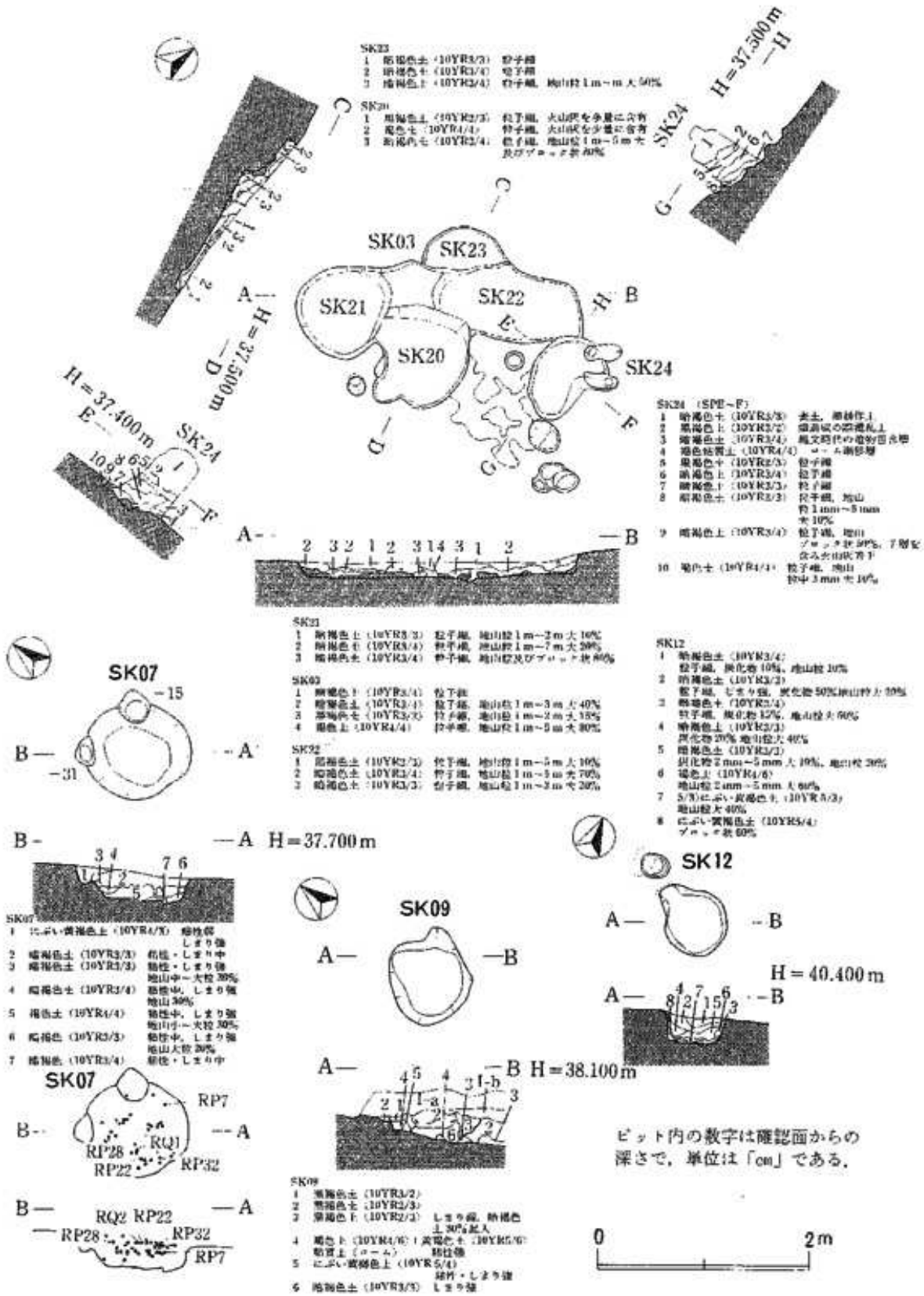
(5)　柱穴様ピット（第16～18・24・26・44図、図版22・28・29・46）

A区南側斜面のMC43・MD43グリッド周辺と中央の馬の背状となった頂部のMC46・MD46グリッド周辺に多くのピットが検出されたが、前者は南北5.30m×東西7.60m、後者は南北4.70m×東西3.0mの拡がりをもち、前者の範囲が広い。その平均値は径が33cm、深さ32cmである。埋土の状況から埋められた様相を呈するものが多い。これらのピットの平面形は円形を主体にしているが、全体的に見ればその径や深さ・断面形においては規格性がないようである。しかし、部分的には規模がほぼ同じで、ピット間が線上に並び距離も等しいピット群もある。例えば南側斜面のMD43グリッドのピット3～6のように線上に並び、その間の距離がほぼ50cmを計る



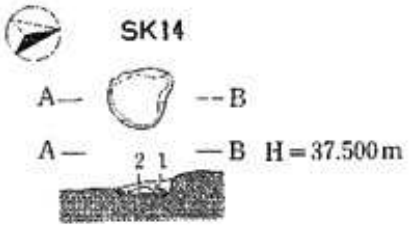
ピット内の数字は確認面からの深さで
単位は「cm」である。

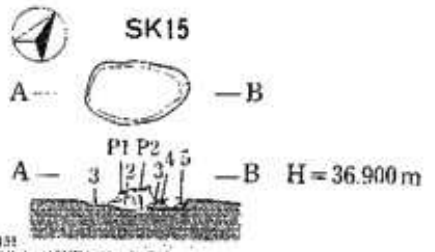
第11図　SK土坑(1)



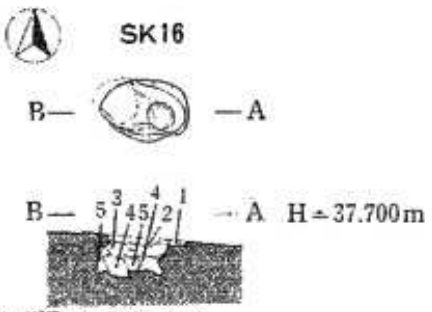
ピット内の数字は確認面からの深さで，単位は「cm」である．

第12図　SK土坑(2)

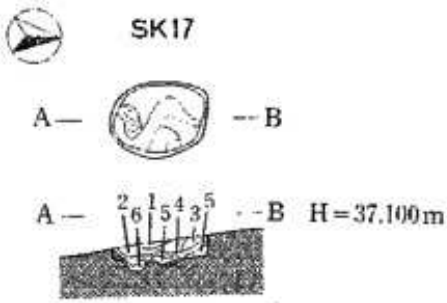


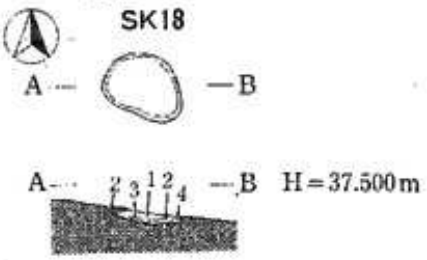


SK15
1 黒褐色土（10YR2/3） 粒子細
2 黒褐色土（10YR3/2） 粒子細，地山粒 1mm～5mm 大 30%
3 暗褐色土（10YR3/4） 粒子細，しまり強 地山粒ブロック状 30%
4 黒褐色土（10YR2/3） 粒子細，しまり強
5 黒褐色土（10YR2/2） 粒子細，地山粒ブロック状 50%

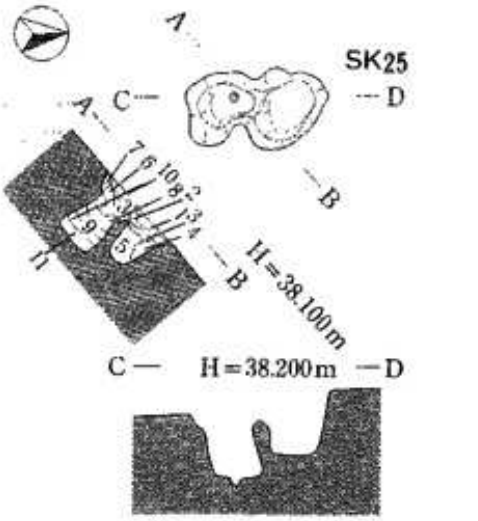


SK16
1 暗褐色土（10YR3/4） 粒子細，地山粒 1mm～2mm 大 10%
2 暗褐色土（10YR3/3） 粒子細，地山粒 1mm～3mm 大 20%
3 黒褐色土（10YR3/2） 粒子細，炭化物 1mm～5mm 大 10%，地山粒 1mm～3mm 大 20%
4 暗褐色土（10YR3/3） 粒子細，地山ブロック状 30%
5 暗褐色土（10YR3/3） ブロック，含む 地山土

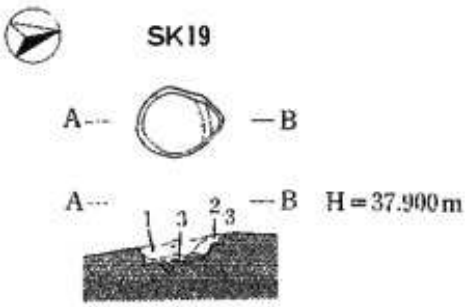




SK18
1 黒褐色土（10YR2/3） 地山粒 1m～2m 大 10%
2 暗褐色土（10YR3/4） 粒子細，地山ブロック状 10%
3 暗褐色土（10YR3/3） 粒子細，地山粒 1m～5m 大2
4 褐色土（10YR4/4） 粒子細



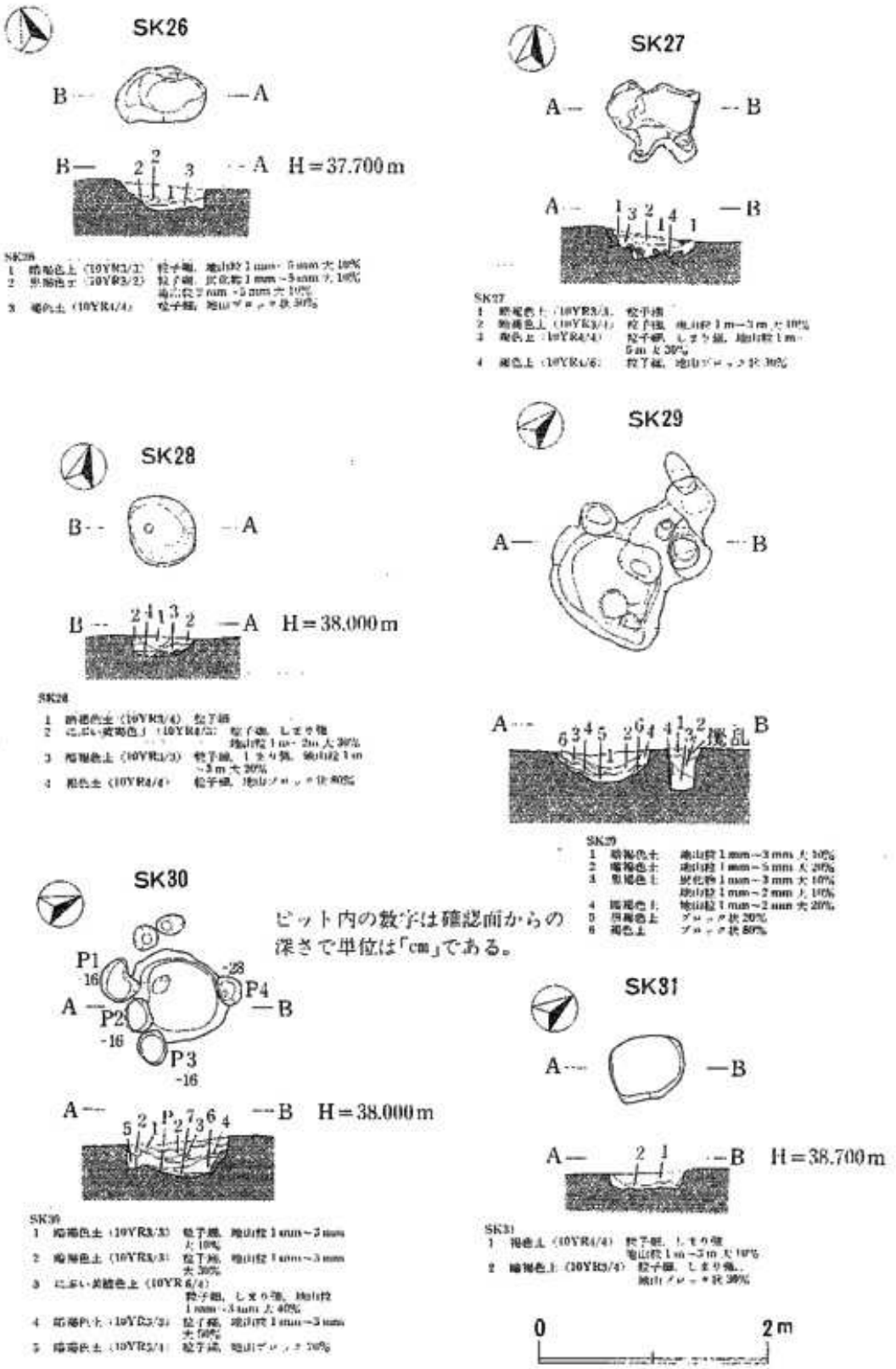
SK25
1 暗褐色土（10YR3/4）
2 にぶい黄褐色土（10YR6/3）
3 暗褐色土（10YR3/3）
4 褐色土（10YR4/4）
5 暗褐色土（10YR3/4）
6 暗褐色土（10YR
7 にぶい黄褐色土（10YR6/3）
8 にぶい黄褐色土（10YR6/3）
9 黒褐色土（10YR2/3）
10 褐色土（10YR4/4）
11 にぶい黄褐色土（10YR6/4） 粒子細



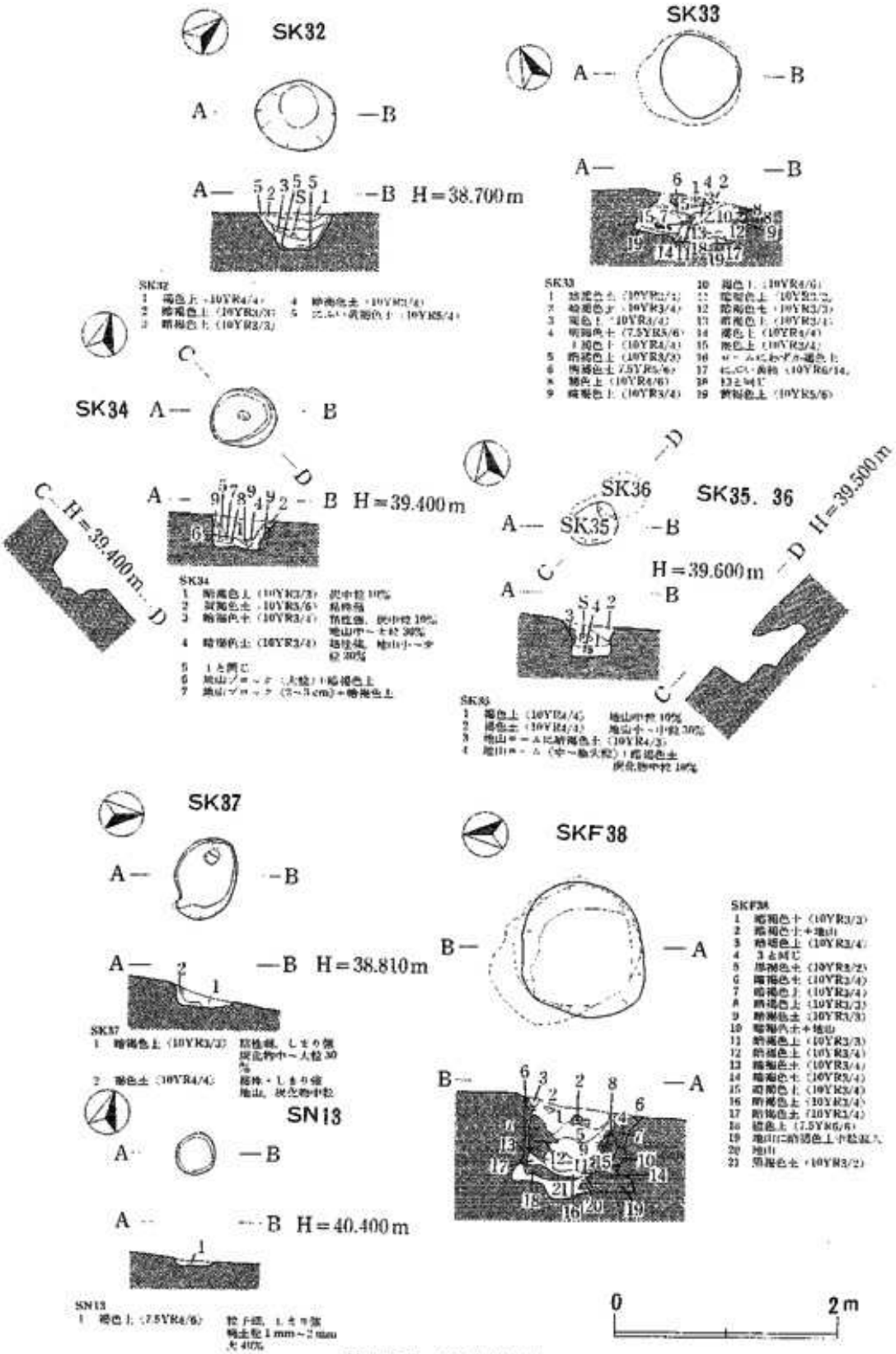
SK19
1 黒褐色土（10YR2/2） 粒子細，しまり強 炭化物 1m～3m 大 10% 地山粒 1m～3m 大 10%
2 暗褐色土（10YR2/3） 粒子細，地山粒 1m～2m 大 10%
3 暗褐色土（10YR3/3） 粒子細，しまり強，地山粒 1m～2m 大 30%

0 2m

第13図 SK土坑(3)


SK26
B
A
H=37.700m
SK27
SK28
H=38.000m
SK29
SK30
ピット内の数字は確認面からの深さで単位は「cm」である。
P1
P2
P3
P4
SK31
H=38.700m
0
2m

第14図　SK土坑(4)


SK32
A
B
H=38.700m
SK33
SK34
H=39.400m
C
D
SK36
SK35. 36
SK35
H=39.600m
SK37
SKF38
SN13
0
2m

第15図　SK土坑(5)

ことから、これらは柱穴列として把え得るものかも知れない。頂部のMD47グリッド杭周辺にはP1～P3の他に4本のピットが円形に配されているので、遺構の可能性を探ってみたが、並びが不規則で、規模や深さに規則性がなく、建物跡などの遺構とするまでには至らなかった。

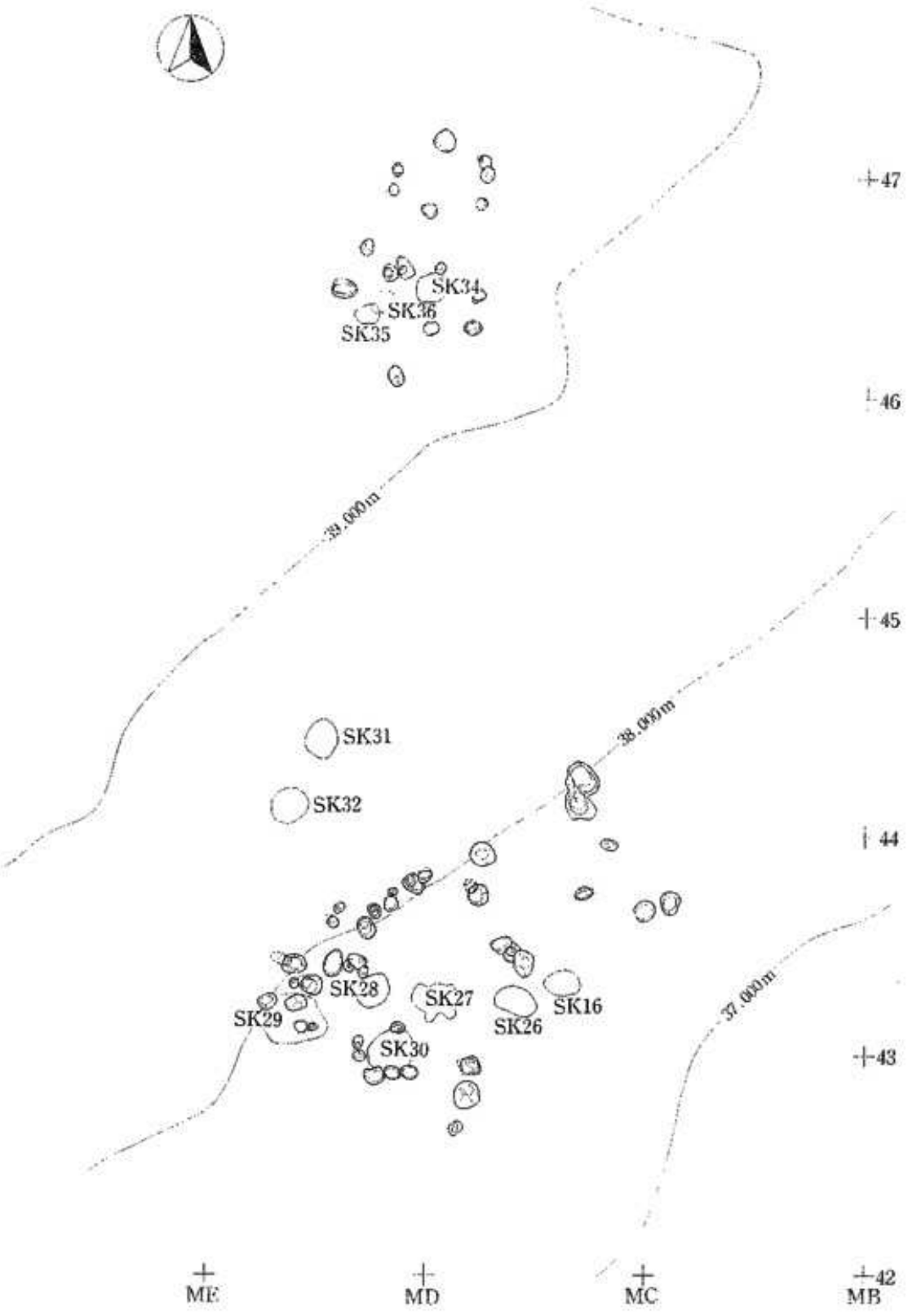
遺物は10箇所のピットから縄文土器が出土しているが、細片でもろいものが多く、図示できたものは少ない。83・87は2条の平行沈線をもつもので、やや薄く、無文で器面に光沢があり、胎土・焼成とも良好である。87は地文が無文で鋭い深めの沈線を施すものである。89・90は口縁部で、薄く、胎土・焼成は良好である。皿形土器であろうか。106・107は底部で、いずれも薄く、胎土・焼成は良好である。106は地文が縄文で、胴部下端に1条の沈線を描き、その下を無文帯とするもので、鉢形土器と思われる。その他の土器は胴部で、98以外は縄文のみを施文するものである。石器はスクレーパー（129）、凹石（351）、擦石（352）が出土している。83・89・94・106・107の土器の特徴から、これらは縄文時代晩期に属し、周囲の土器出土状況なども勘案すれば時期は晩期前半と考えられる。

(6)　その他の遺構

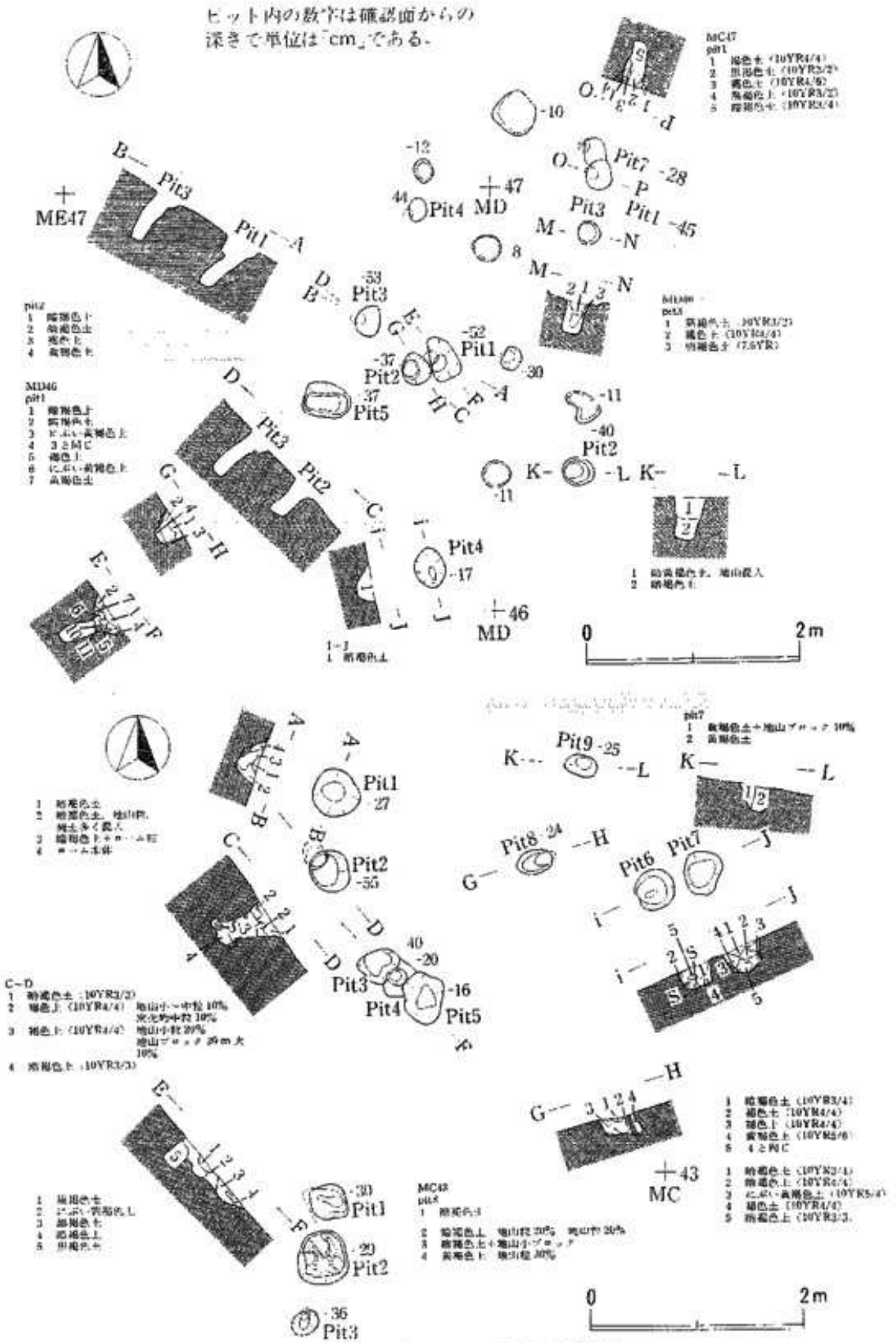
SX11その他の遺構（第23・23図、図版24・27・29）

A区のMB45・46グリッドで検出した風倒木痕で、埋土中から縄文時代の土器、石器、土製品が出土した。

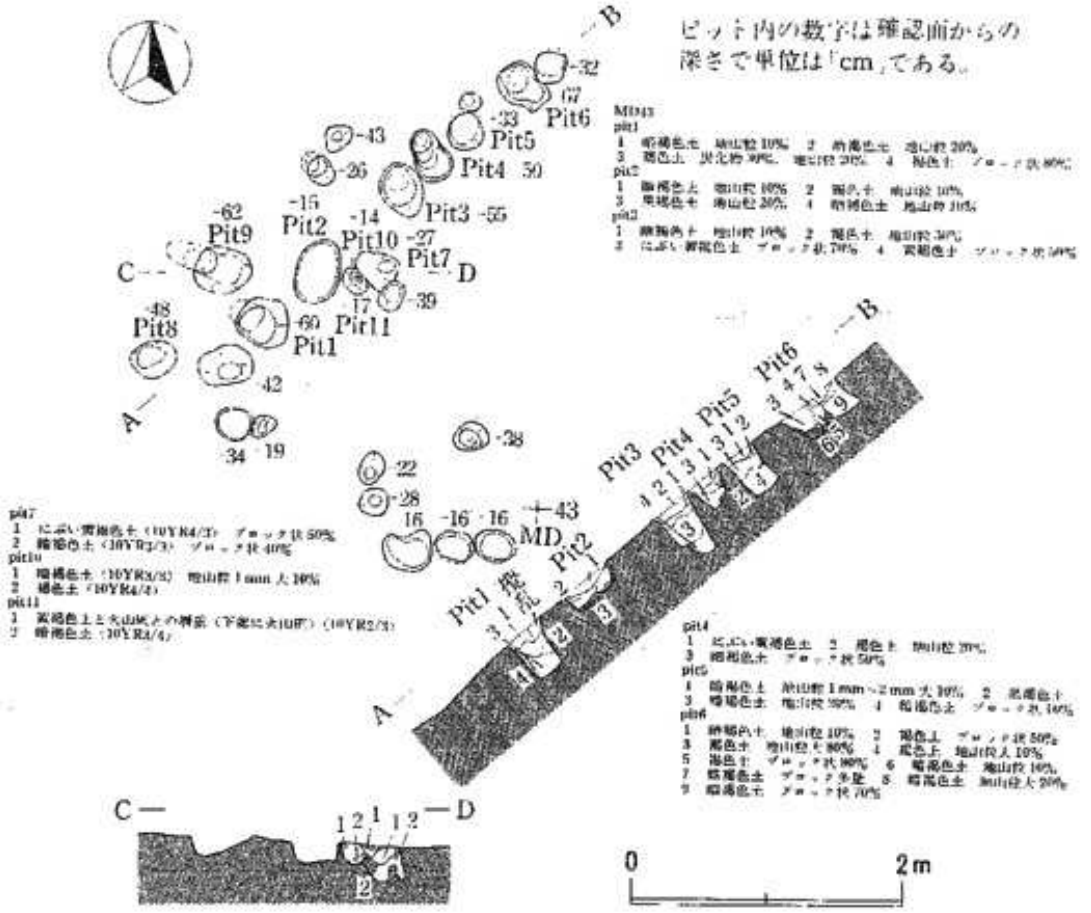
63・66・69～72は縄文地または無文地に平行沈線を施すもので、69～72は63・66に比較し胎土に砂粒が混入し、やや器厚がある。69・72は同一個体であろう。73は無文地に平行沈線を浮彫的に施すもので、赤色塗彩の土器である。注口土器の頸部で、おそらく82と同一個体であろう。64・65は羊歯状文を施文する土器で、64の口縁部にはB突起が付き、65は羊歯状文が2段にかみ合う形で配される。64は器厚が薄く、65はやや厚い。64には内外面とも煤状炭化物が付着する。74～75は口縁部で平口縁である。80・81は縄文と綾絡文を施文している。4は土製品か、土器のある部分かと思われるもので、現存部の長さ5.3cm、高さ3.0cm、最大幅3.5cmである。両端の頂部は突起状に高まり、その周縁がだいぶ欠けているが、わずかに縁が残っている。本体の両側縁には三叉状入組文が配され、両端の外側から内に向かってやや上がり気味に径4㎜の穴を貫通させている。片側の外端下部には内に向かってわずかに切り込みが入る。また、外端下部はいずれも欠けているが弧状となっていることから、丸みをもった土器についていた可能性が大きく、あるいは香炉形土器の頂部のつまみかも知れない。色調は淡い橙色で、胎土は精選され、焼成は良好である。5は垂飾品で、周辺は縁取りされ、中に4㎜の穴をあけている。長さ2.3cm、幅1.65cmである。石器は横形の石錘1点(119)、磨製石斧1点(120)、スクレイパー1点（121）が出土している。



第16図　柱穴様ピット配置図（全体）



第17図　柱穴様ピット配置図（部分）



第18図　柱穴様ピット配置図（部分）

2　平安時代

SK03・20～24の6遺構は重複しており、SK23→03→22→20・24→21の順に新しくなる。埋土中に火山灰が混入していることや、重複関係から、SK20・21・24は平安時代の遺構と思われる。

(1)　土坑

SK20土坑（第12図、図版18）

A区のMB43グリッドにて検出した。平面形は不整楕円形で、断面形は浅皿形である。遺構の規模は現存部で径114cm、深さ12cmで底面がやや平坦である。

埋土は3層に分層した。2層の色土に、ローム粒とともに火山灰を少量含む。自然堆積か人為堆積か判然としない。

遺物は縄文時代の土器と石器のフレイクが数点出土したが、細片でボロボロしており図示できなかった。二次的に流れ込んだものであろう。

SK21土坑（第12図）

A区のMB43グリッドで検出した。SK20は平安時代の火山灰が混入し、SK03と重複し、SK20より新しいので平安時代に属する。平面形は不整円形で、壁は底面から緩やかに立ち上がる。遺構の規模は現存部で径110cm、深さ19cmで、底面はほぼ平坦である。

埋土は3層に分層した。1～3層ともローム粒の混入度が高く、1・2層には炭化物粒子が若干混じり、3層はロームブロックが主体となる。

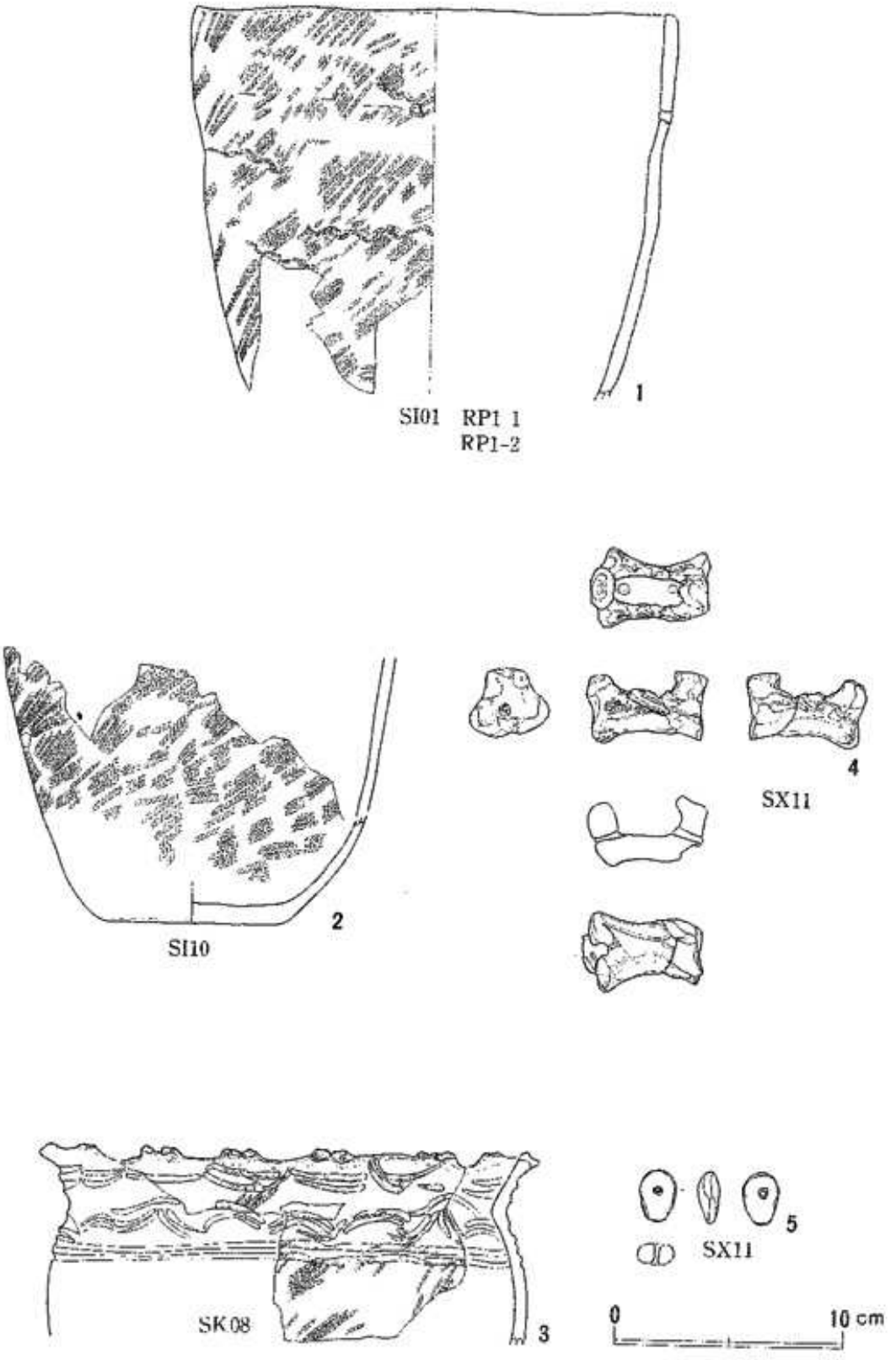
遺物は縄文時代の土器が数点出土したが図示できなかった。二次的に流れ込んだものであろう。

SK24土坑（第12図、図版18）

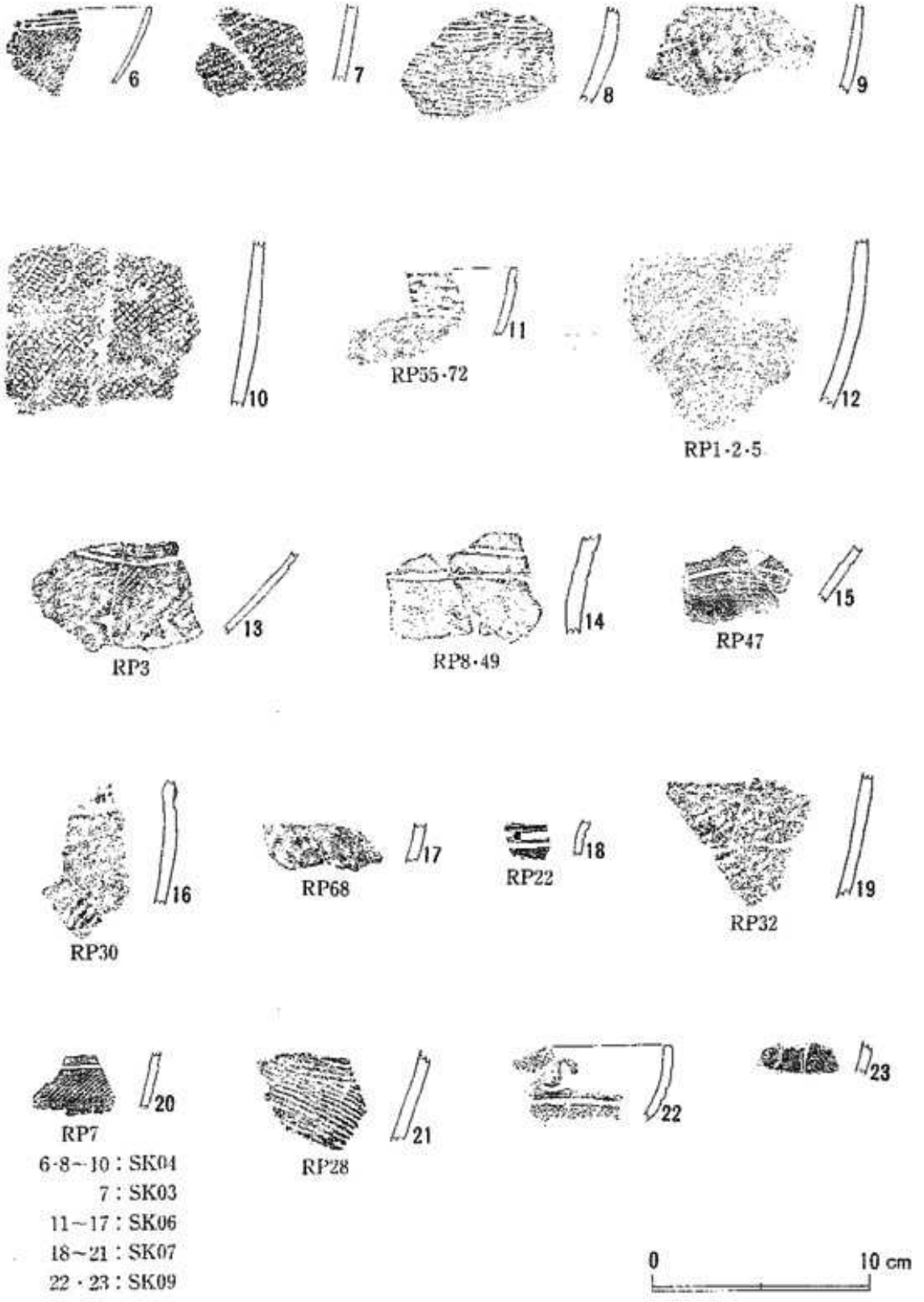
A区のMA43・MB44グリッドで検出した。SK22と重複しSK22より新しい。平面形は不整楕円形で、壁は底面から緩やかに立ち上がる。遺構の規模は現存部で長軸80cm、短軸55cm、深さ34cm、ローム面からの深さ10cmである。

埋土は10層に分層した。しかし、1層が表土、2層が畑造成時の撹乱、3層が縄文時代の遺物包含層、4層がローム漸移層で遺構は第3層より掘り込まれる。遺構内は6層に分層され、SP. E～Fの土層断面図によれば、9層には火山灰が若干混入している。

遺物は土師器の細片が1点出土したが図示できなかった。

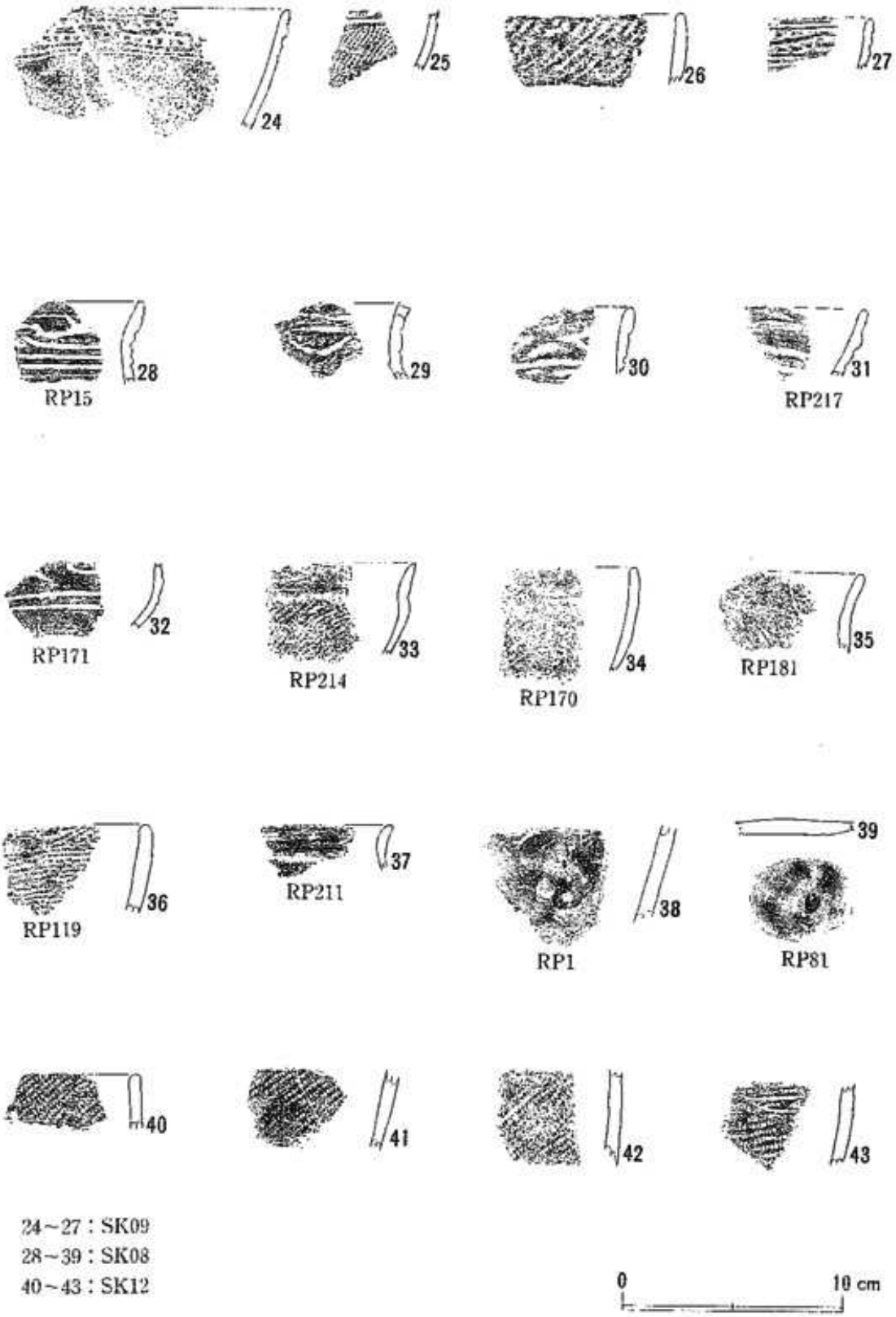


第19図　遺構内出土土器(1)



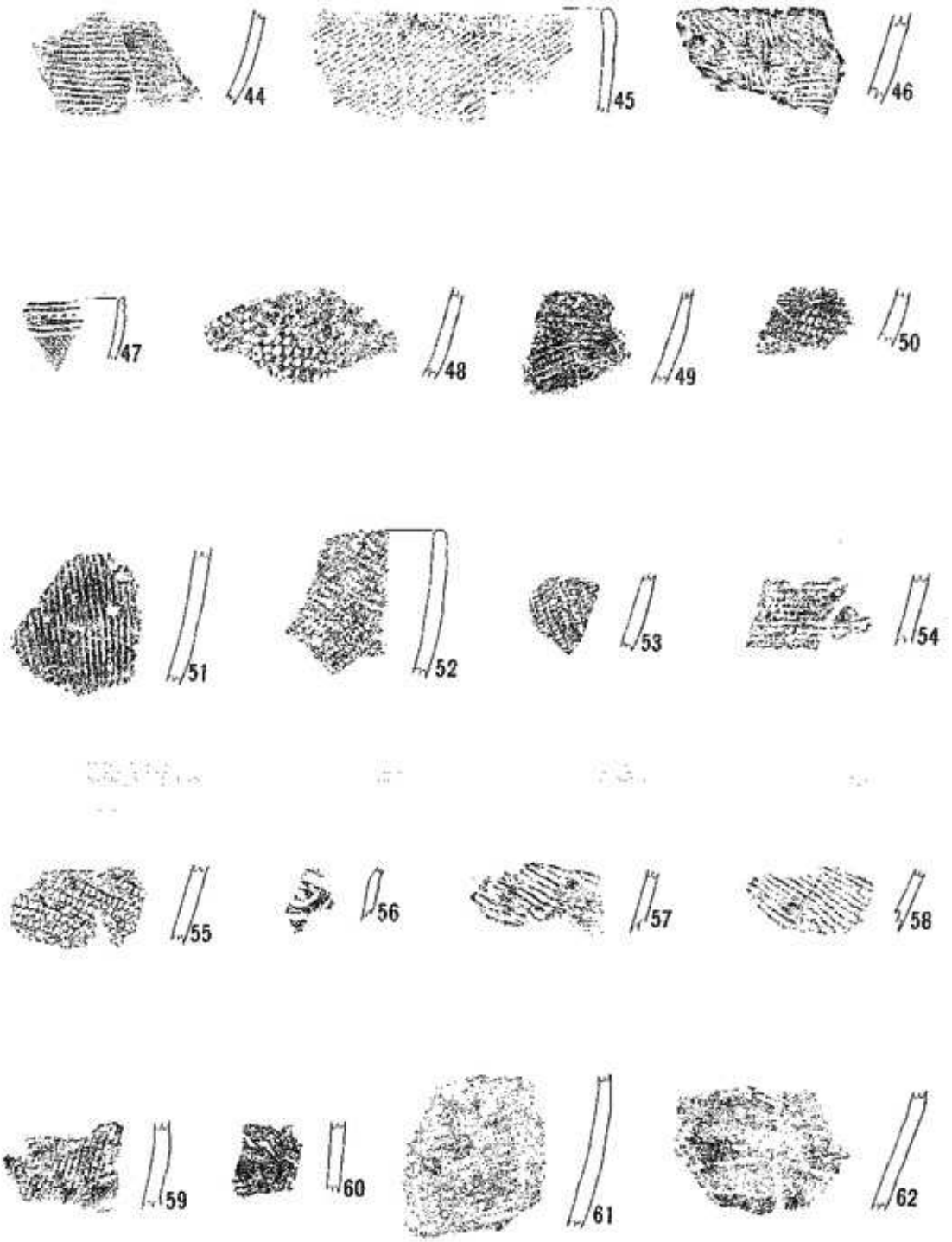
6・8～10：SK04
7：SK03
11～17：SK06
18～21：SK07
22・23：SK09

第20図　遺構内出土土器(2)



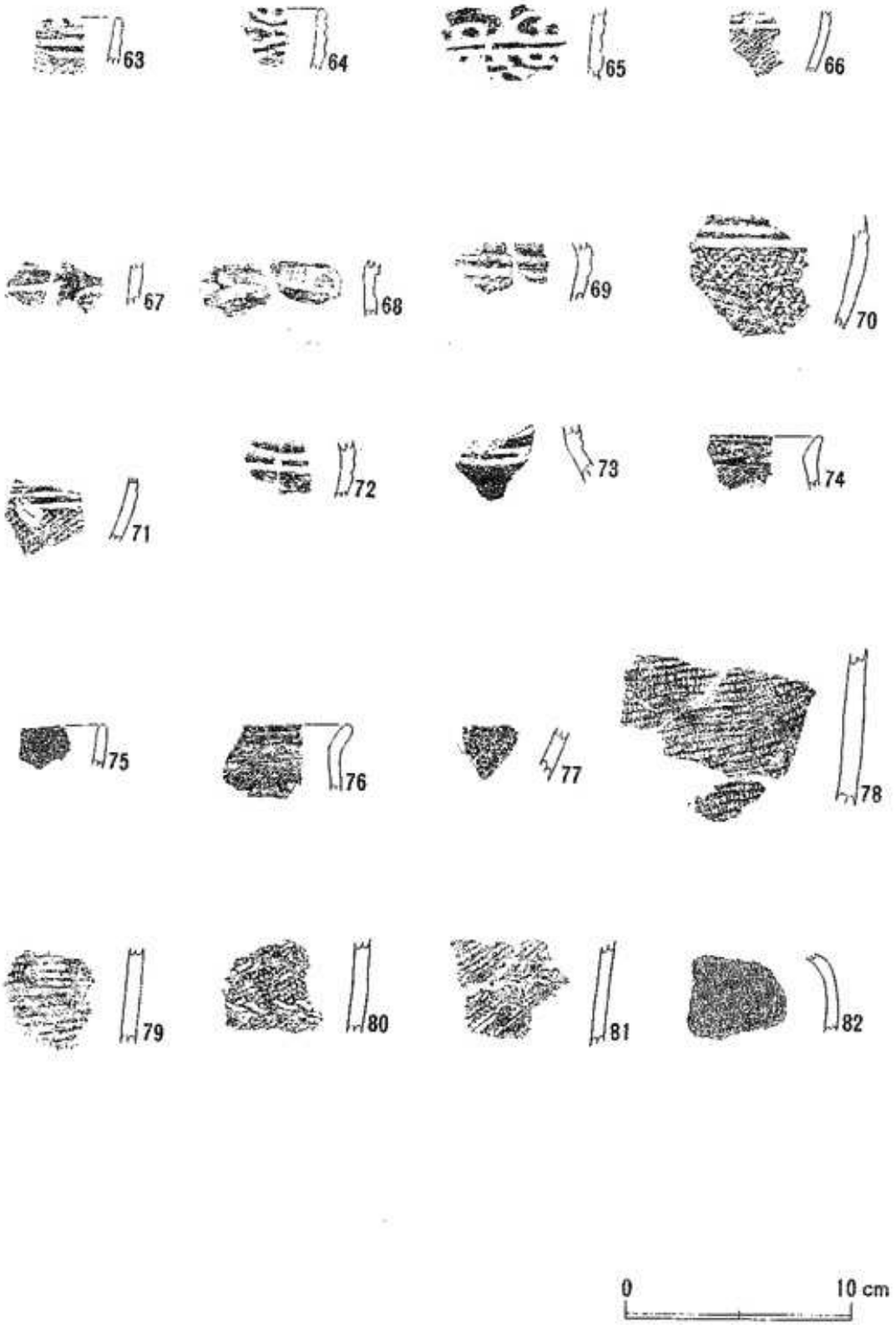
24～27：SK09
28～39：SK08
40～43：SK12

第21図　遺構内出土土器(3)

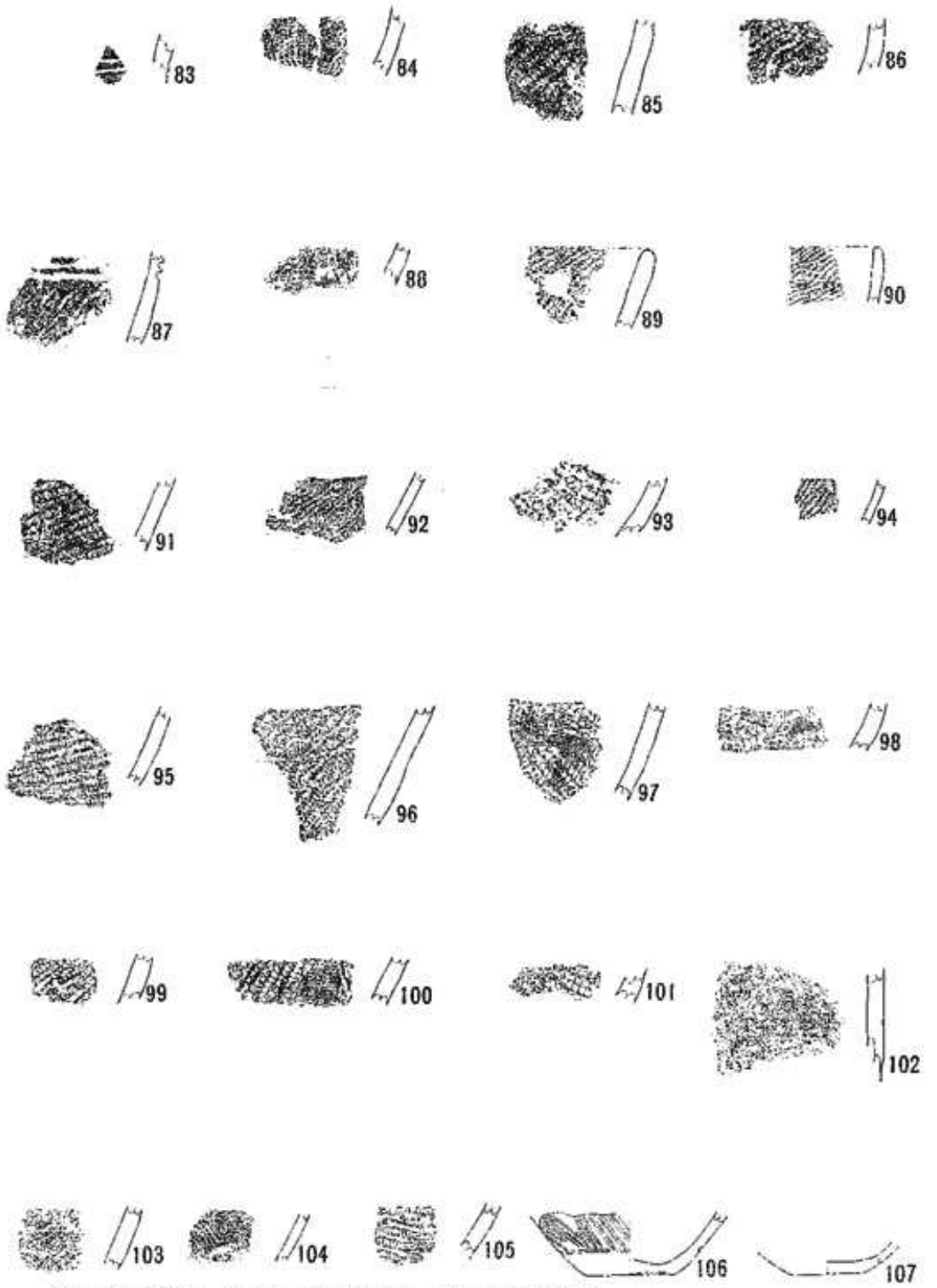


44～47：SK19
48・49：SK22
45～51：SX29
52・53：SK30
54　　：SK31
55～58：SK33
59～62：SK34

第22図　遺構内出土土器(4)



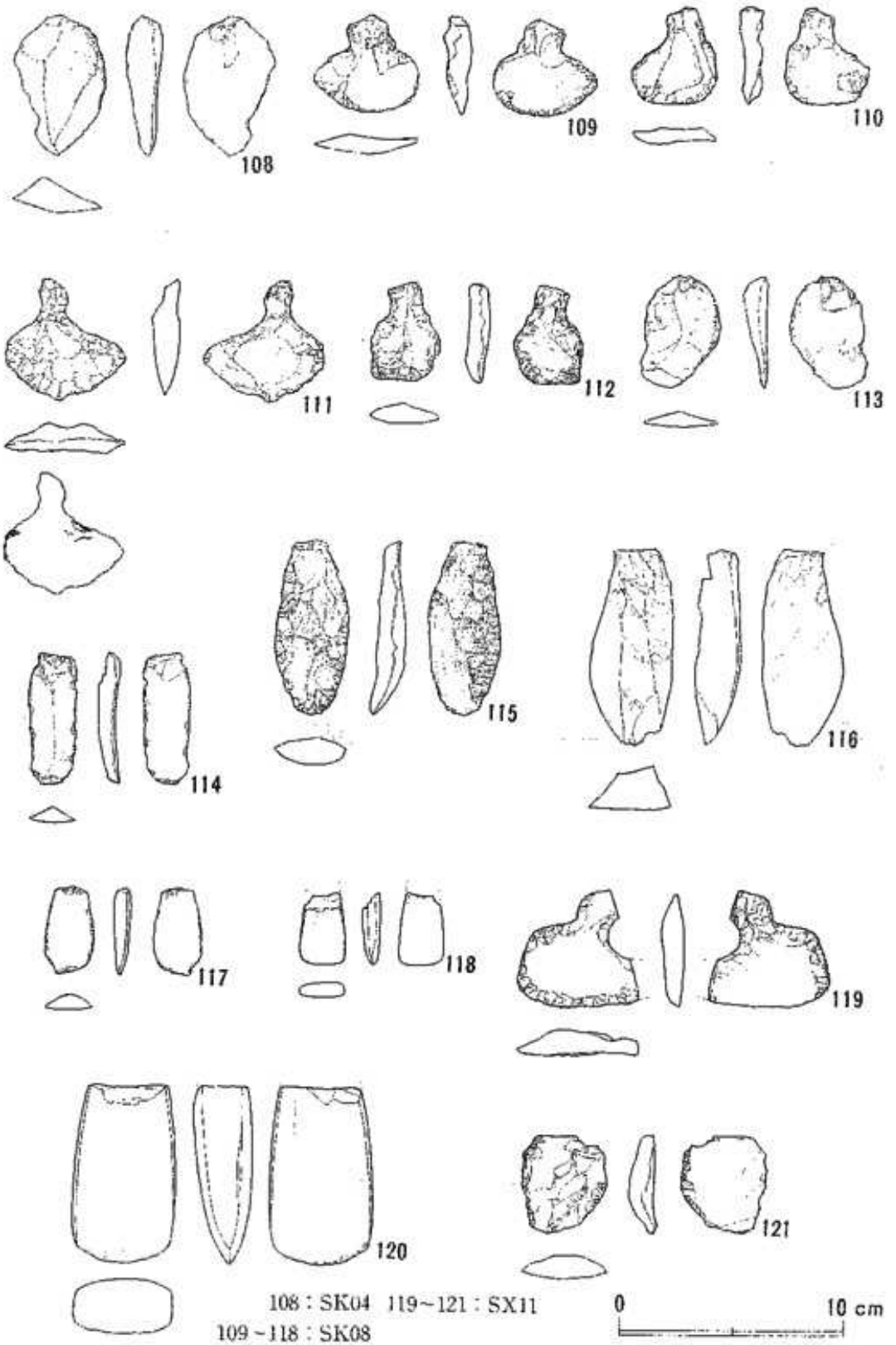
第23図　遺構内出土土器(5)



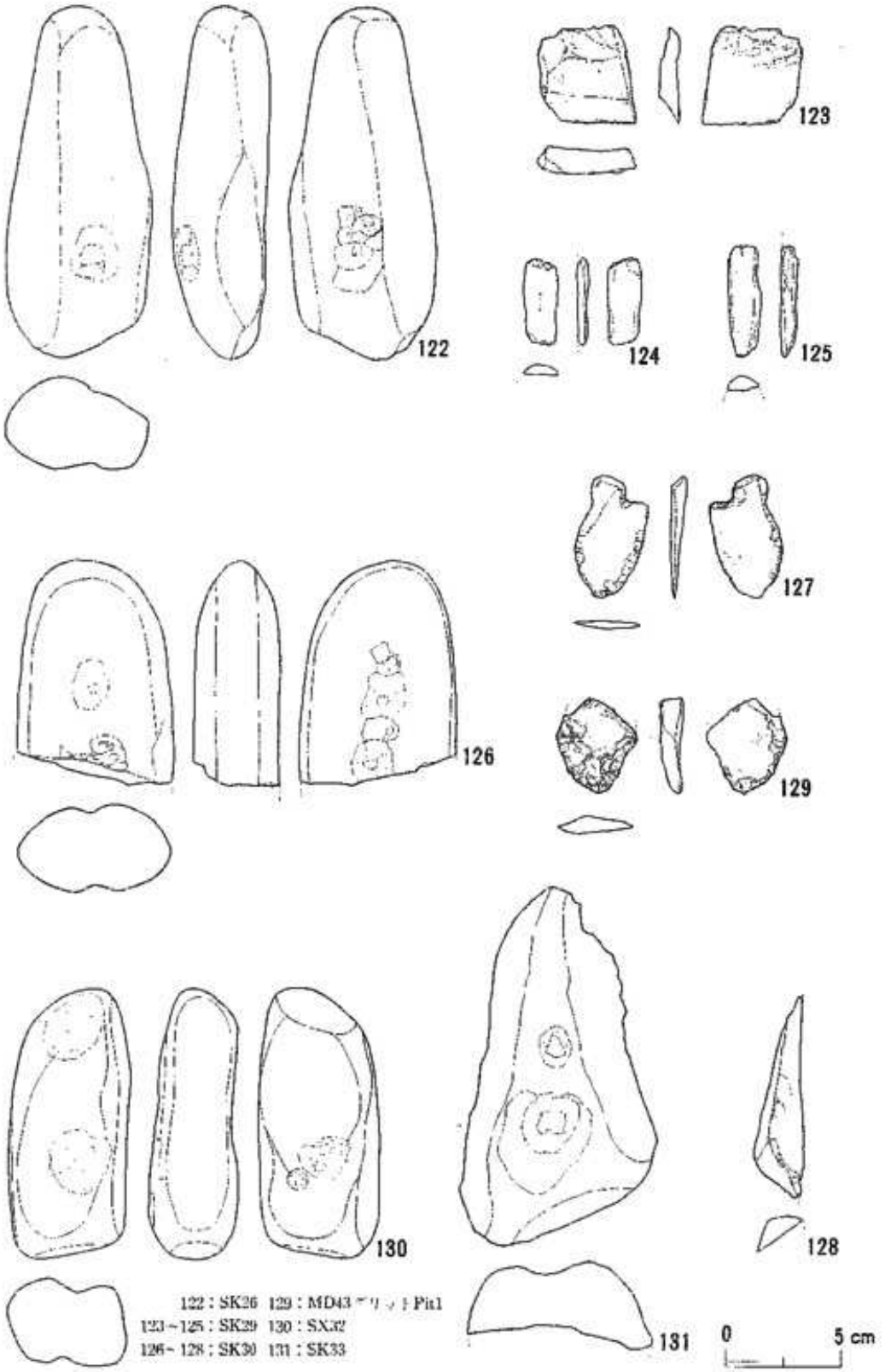
87・106：MC42　91・92・107：MC46　103～105：MD46
83・89・90：MC43　88：MC48
84～86・93：MC44　94～102：MD43

0　10 cm

第24図　遺構内（ピット）出土土器(6)



第25図　遺構内出土石器(1)



122：SK26　129：MD43 ﾃﾘｯﾄ Pit1
123～125：SK29　130：SX32
126～128：SK30　131：SK33

第26図　遺構内出土石器 (2)

第2節　遺構外出土遺物

遺構外出土の土器は遺構の集中しているA区南側斜面の第2層（遺物包含層）から多く出土しているが、細片でしかも、風化してもろい土器が多く、復原できたものは少ない。縄文時代の土器は器形を基本として分類したが、時期的にまとまった資料が乏しく相当大まかな分類となっている。分類は下記の様にした。

Ⅰ群土器：縄文時代後期の土器である。

1類土器　後期初頭～後期前葉の土器である。

2類土器　後期後葉の土器である。

Ⅱ群土器：縄文時代晩期の土器である。

1類土器　晩期前半の土器である。

2類土器　晩期前半の皿形土器や注口土器を一括した。

Ⅲ群土器：粗製土器の口縁部資料を一括した。

1類土器　小波状を呈する土器である。

2類土器　口縁部の断面形の両端が丸みをもつ土器である。

3類土器　口縁部の断面形が平坦になる土器である。

4類土器　口縁部に刻目をもつ土器である。

Ⅳ群土器：粗製土器の胴部を一括した。

1類土器　綾絡文を施文する土器である。

2類土器　条痕文を施文する土器である。

3類土器　羽状縄文を施文する土器である。

4類土器　縄文のみを施文する土器である。

5類土器　撚糸文を施文する土器である。

Ⅴ群土器：底部資料を一括した。

1類土器　台付土器である。

2類土器　平底土器である。

1　縄文時代

(1)　土器

Ⅰ群土器（第27・28図、図版30～32）

1類（132・136～140・142・143・145～149）

132は連鎖状沈線文をもつ門前式の深鉢形土器で、底部付近は欠損しているが現存部の器高は

23.4cmである。胴部はやや外に向かって直線的に立ち上がり、胴部上半が最大径となり、口縁は緩く内湾する。口縁には「ノ」字の太い沈線を有する4単位の橋状把手が付き、それらの中間に小突起がある。口縁下には細かい刻目が斜めに連続的につけられた隆線が弧状になって横に展開し、把手と小突起を連結する。把手と小突起下からは連鎖状沈線文が垂下し、「S」字状に縦と横に展開するモチーフが描かれ、沈線間は磨消して、地文であるL撚糸文とを区画している。色調は浅黄橙色で胎土には黒雲母、石英粒、砂粒が混入するが、焼成は良好である。136は132と同じ時期の土器で、L撚糸文を地文として、連鎖状沈線文を描くものである。137は内傾する鉢形の土器と思われ、平行沈線下に縦の沈線と弧状の多重沈線を描くものである。138は口頸部付近と思われ、粘土紐を貼付して隆帯を作り、横から小孔を穿つ赤色塗彩の土器である。139・140・142・143は口縁部で、胎土・焼成はあまり良くない。140は平口縁で、他は小波状を呈する。139・140は平行沈線を施すもので、142・143は沈線で曲線的な文様を描く。145～149は縄文地で、平行沈線を施しその間を磨消している。149は沈線で曲線的な文様を描き、沈線間を磨消している。

2類（141・144・150～152）

いずれも胎土・焼成とも良好である。141は頸部がわずかに屈曲し、縄文地に平行沈線を施す。150は屈曲部の隆帯上に突起と刻目を施すもので、他は無文である。注口土器の頸部であろうか。151は縄文地に浅い弧状の沈線を描き縄文帯と無文帯を区画している。144と152は口縁部の突起部分である。

Ⅱ群土器（第27・29～32図、図版30～34）

1類（133～135、153～184）

133～135は浅鉢形土器と思われ、133は胴下半～底部が欠損している。134は屈曲する頸部付近に羊歯状文を施すもので、135も同じ羊歯状文を施している。153～156、160～167は羊歯状文を施す土器で、154・159・160は口縁部に「B」字状の小突起が付く。161～163は太い沈線を描くもので、同一個体であろう。171～173はやや細く、深めの沈線で文様を描くもので、砂粒が多く混入し、もろい。同一個体であろう。179～182は浅い沈線で三叉状入組文を描くもので、182は内面に煤状炭化物が付着する。183・184は縄文地に隆線を付すもので、色調は黄橙色を呈する。

2類（185～191、195～202）

185は注口土器の頸部で、縦・横に三叉状入組文が描かれる土器である。大変もろくなっている。187は羊歯状文を施すもので、注口土器の口縁部であろう。胎土・焼成とも良好である。201・202も注口土器で、注口部の上と下に三叉状入組文が描かれる。198～200は無文で、注口土器の体部かと思われる。190・191・196・197は皿形土器かと思われるもので、190、191は口縁

部で、191は羊歯状文を施したものである。197は細かい撚糸文を施した後に赤色塗彩した土器である。

Ⅲ群土器（第31～35図、図版33～38）

1類（203～212・216・217）

203・204・206～209・211は口縁部端まで全面に縄文を施すもので、胎土に砂粒を少し含むが、焼成は比較的良好である。205・210は文様が口縁部端までおよばないものである。215～217は無文の土器で、216・217は口縁部が花弁状を呈するものであろう。

2類（213～215・218～229・241）

213～215は無文で、口縁部がわずかながら外に屈曲する。218～229は口縁部端まで縄文を施文すもので、外に直線的に立ち上がるものと、わずかに内傾するものが主体であるが、227・229はわずかに外に屈曲する。241は細く、浅い沈線を施す土器である。

3類（194・230～240・242～246・249・250）

いずれも口縁部端まで縄文を施文し、外に直線的に立ち上がるものと、わずかに内傾するものが主体だが、194のように器厚が薄く、外に屈曲するものも含まれる。239・240は特に胎土・焼成とも良好で、黄橙色を呈する。

4類（192・193）

192は器厚が薄く、口縁部が外にわずかに屈曲し、連続的な刻目がつく。193は厚く、刻目の間隔がある。

Ⅳ群土器（第34～38図、図版36～40）

1類（252～255）

253～255は横に展開する綾絡文が1列であるが、252は2列である。胎土・焼成などから252と253は同一個体であろう。

2類（251・256～260）

251は口縁部下半～胴部下端まで約1/4残存しており、上から胴下半部まで細かい条痕を施すもので、砂粒が少し混入するが、胎土・焼成とも良好で、黄橙色を呈する。260も同じ仲間であろう。256～259は前者に比較し幅広の条痕で、その間隔も広い。256は器厚が厚い。258・259は橙色で胎土・焼成も似ていることから同じ仲間であろう。

3類（247）

1点のみで、単節の異なる原体を回転させて羽状縄文を施している。

4類（244、248）

244は細かい縄文を施す底部付近の土器である。248は胴の半ばから底部付近まで約1/2が残存している土器で、少しいびつである。胴部全体に直前段反撚の縄を横・斜めに施文してい

る。胎土には細砂粒が混入し、ややもろく、色調は淡色～淡黄橙色である。

5類（261）

1点のみで、燃糸文を縦および斜めに施文している。器厚が厚く、砂粒をやや含むが、焼成は大変良好で、色調は淡黄色である。

V群土器（第36・37図、図版40・41）

1類（267・268・271～276）

271・272は底径の大きい台の付くもので、271は台部から外に向かって緩やかに、丸味をもって立ち上がる器形で、浅鉢形を呈するものであろう。残存している外面には細かい撚りの縄文が、全面に施文され、内面には煤状炭化物の付着が著しい。271・272とも底部が台内面で外に向かってわずかに弧を描く。237～276は台の径が小さい土器で台部のみの小破片である。器形などの詳細は不明だが、底部が台内面で平らになり、内側に向かって弧を描いており、前者とその作りは異なる。

2類（262～266、277～288）

266・279・288は径の小さい底部で、鉢形土器であろうか。他は径の大きい底部で、底部から外に直線的もしくはわずかに丸味をもって立ち上がるものであるが、284・285は底部から胴下端にかけてやや屈曲する。

(2)　石器（第39～46図、図版42～48、第4・5表）

石鏃（299～303）

5点出土しており、301は凹基無茎鏃、他は凸基有茎鏃である。299の基部両面にアスファルトが付着している。

石匙（304～314）

304～312はつまみが刃部にたいして直交する横型石匙で、313・314はつまみが刃部に平行になる縦型石匙である。横型石匙のつまみの位置が中央に位置するものが主体であるが、306・310・311は片側縁か片側縁寄りに位置する。311は腹面の基部にアスファルトが付着する。縦型石匙の313は身が幅広である。

石錐（315～317）

315は棒状の尖基鏃と似るが、中央部がややふくらみ、尖端部が摩滅している。316・317は大形で、317は先が欠損しているが、316と同じような形態と思われることから石錐とした。

石錘（318）

318は両面の両側縁に二次加工を施し、下端両側からの剥離によって片刃となる刃部を作出している。

石槍様石器（319～322）

縦長の剥片で、周縁の両面に二次加工を施したものを一括して本器種とした。32は中ほどから折損しているが、やや薄いながら319と似た形態となるものであろう。321・322は前者に比較すると小形でやや幅広となり、中央部が素材のまま平坦面となる。322は先端部が鋭利である。

スクレイパー（323～326）

剥片の縁辺に二次加工が施され、刃部が作出されたものを包括した。323・325は縦長で、両側縁の両面に二次加工を施されたもので、325は片側縁の両面に刃部が作出されたものである。324は三角形に抉りを入れた形状を呈し、周辺に二次加工を施し、「V」字状となった縁辺に敲打痕を残す。

磨製石斧（327・329～336）

331～336は横断面形が隅丸長方形となる定角式磨製石斧で、両刃である。330は前者とほぼ同形態の磨製石斧であるが、磨って整形した後に、両側縁中央を敲打して抉りを入れている点が異なる。329は約半分もしくは1/3が欠損しているが、撥形に近い形状を呈するもので、全面を敲打によって丁寧に成形し、横断面形が隅丸長方形であることから磨製石斧の仲間とした。幅広となった中央部は磨って平坦にし、現存する先端部は使用してできたと思われる敲打痕が残る。327は破片であるが、弧を描く刃部を「V」字状に仕上げているので、ここでは斧として使用されたと考えて磨製石斧の仲間とした。

打製石斧（337～343）

338～340はいずれも撥形を呈するもので、341～343も部分的に欠損しているが、同じ形態であろう。中央部のくびれは338・341・343が強く、339・340・342は弱い。339・340は側縁の角が丸味をもっており、339は片面の刃部付近を部分的に磨いている。328は打製石斧を縦に切断したもので、約半分に折れており、部分的に煤状炭化物（図中の黒ベタ部分）が付着する。折れた部分は新しい。337は上より下がやや広いが、短冊形に近い形状を示す。両側縁と下端部には後世のものと思われる剥離痕が残る。石質は頁岩で、他の打製石斧と異なるが、全体および刃部の形態から打製石斧の仲間とした。

石錘（344・345）

344は薄い円形の礫に対になるように2箇所を打ち欠いている。345も同じ形態のものであろう。

凹石（346～350）

346～350は楕円形の礫で凹みをもつものである。

擦石（353～355）

いずれも全面的に擦った痕跡があり、353・354は敲打痕を残す。

石棒（356～359）

いずれも折損している。全面研磨され、359の頭には浅く細い沈線が1条めぐる。357・358の先端は尖る。

石皿（364・365）

いずれも小破片で、板状を呈する。364は擦られて平坦に、365はやや凹みをもつ。

(3)　**土製品**（269、270）

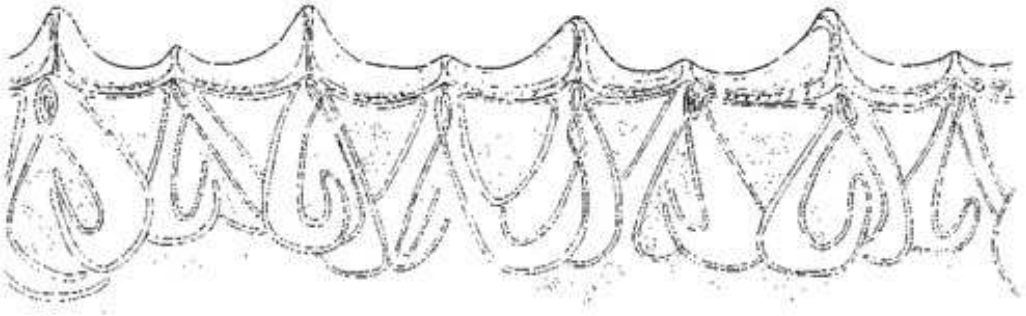
いずれも土器片を円形に加工した、円盤状土製品である。

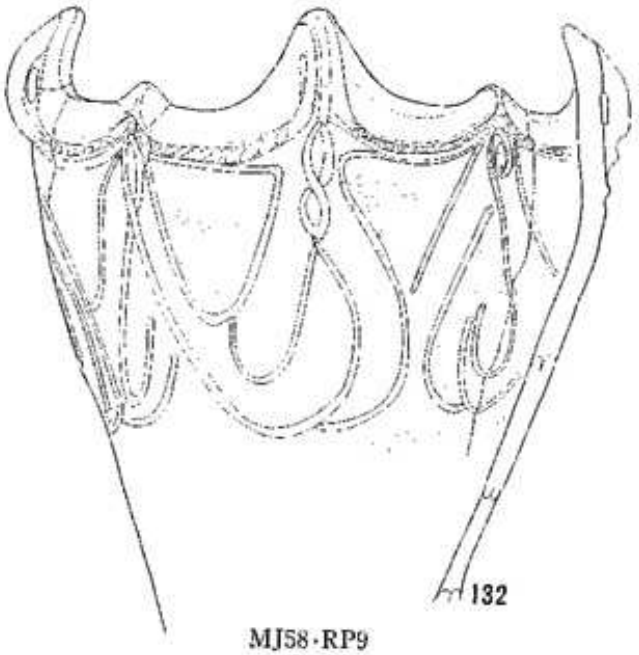
(4)　**石製品**（360～362）

360は2条の沈線をめぐらしたものであるが、折損している。石質は緑色凝灰石である。361は薄く長楕円形の礫を擦切りにより切断したものである。362は円盤状石製品である。

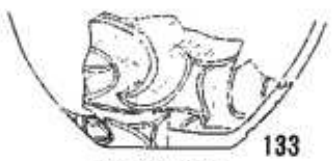
2　平安時代（第38図、図版41）

土師器・須恵器が6点出土した。289は須恵器甕の胴部で、外面に平行タタキ目、内面に丁寧なカキ目を施している。290～293は土師器坏で、淡黄色～浅橙色を呈し、291～293は糸切り底である。293は約1/2の残存で、法量は高さ5.3cm、口径12.7cm、底径5.2cmで、二次調整はない。

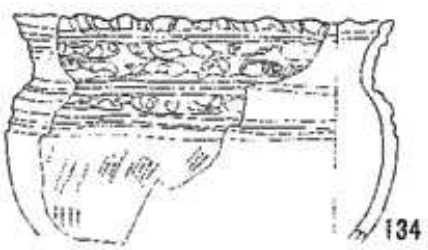




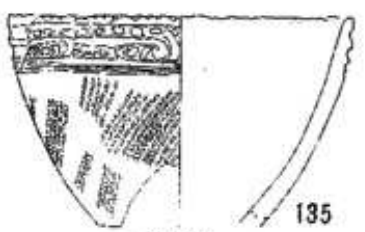
MJ58・RP9



ME48・RP3



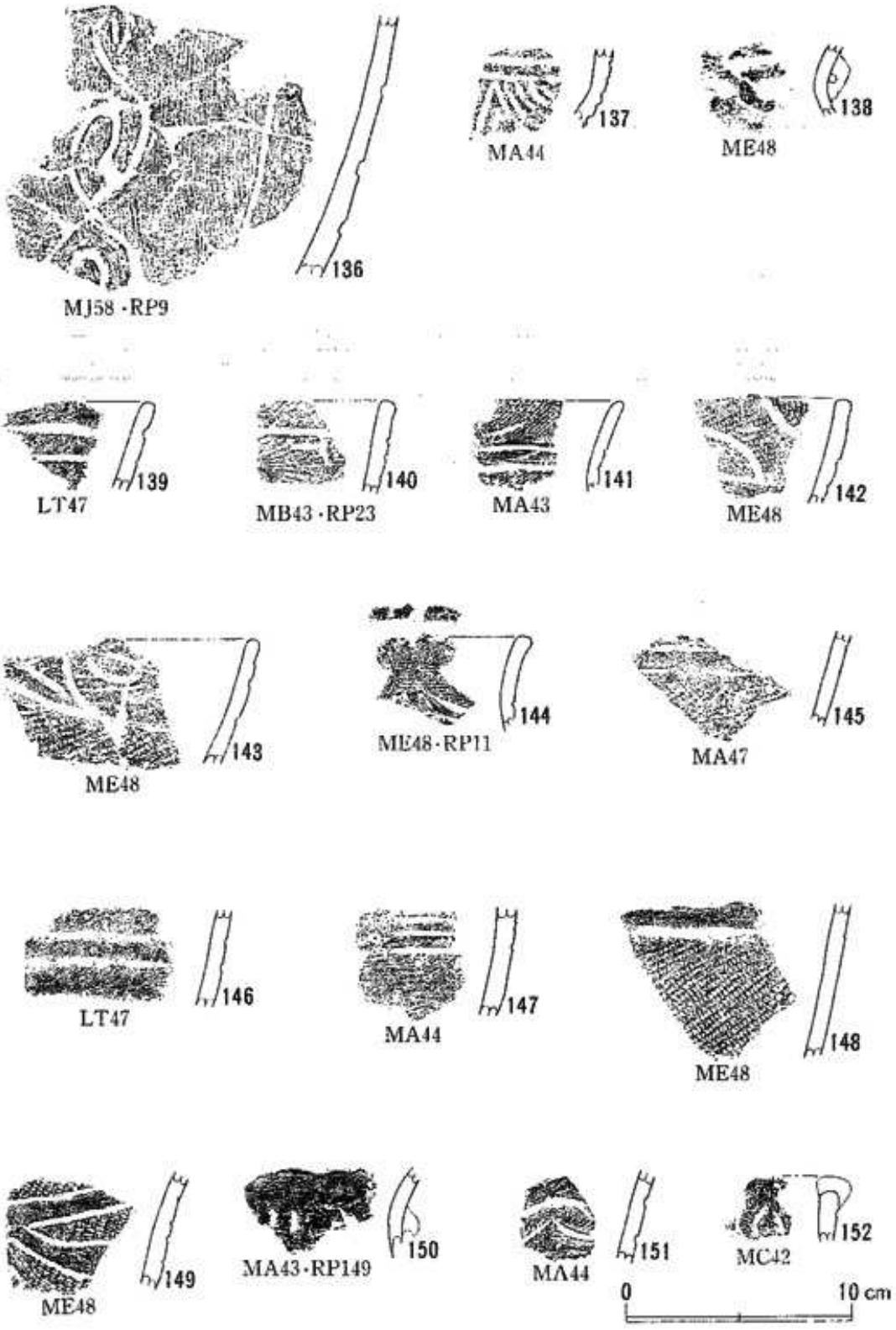
MB43



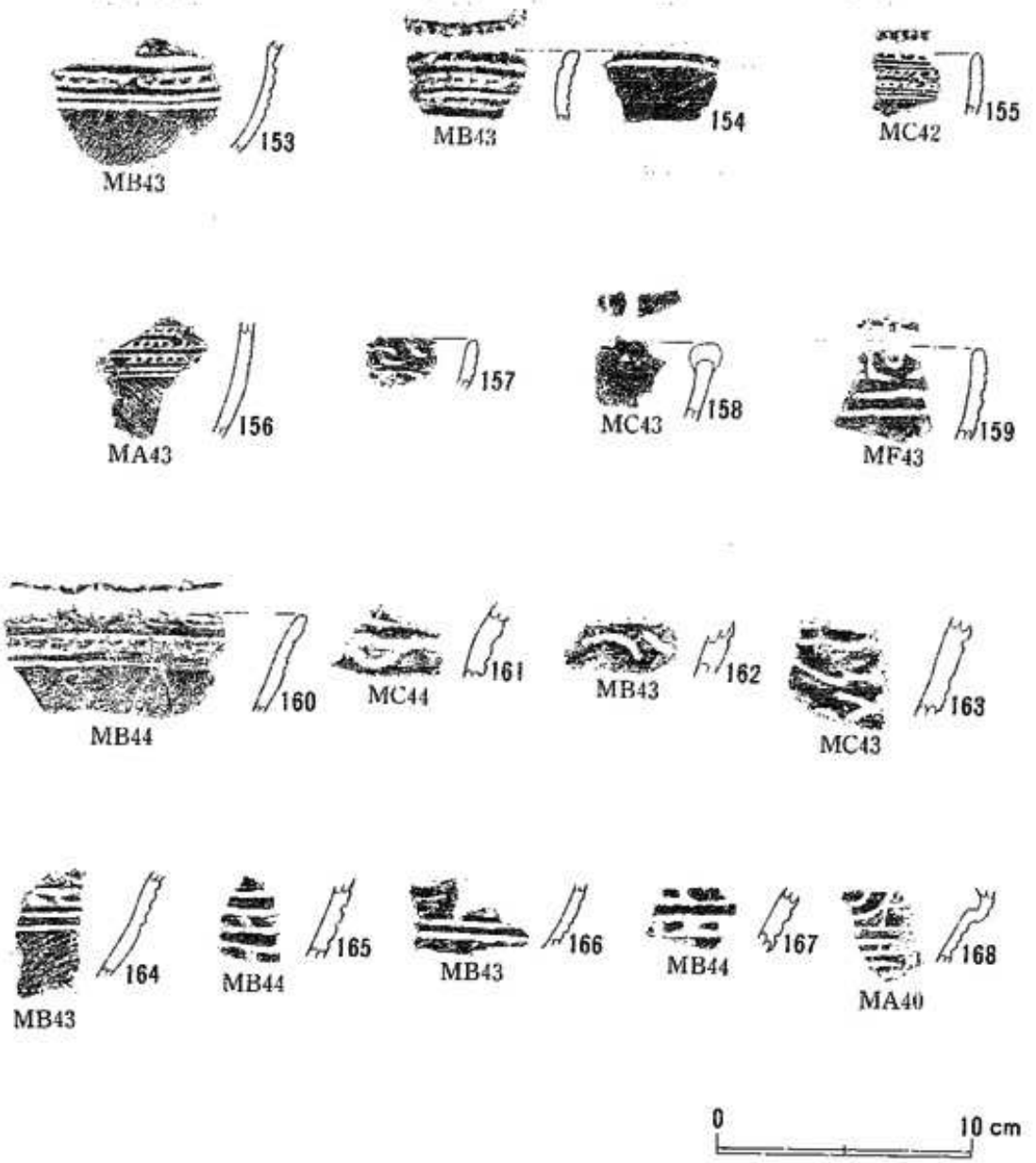
MA44

0 10 cm

第27図　遺構外出土土器(1)

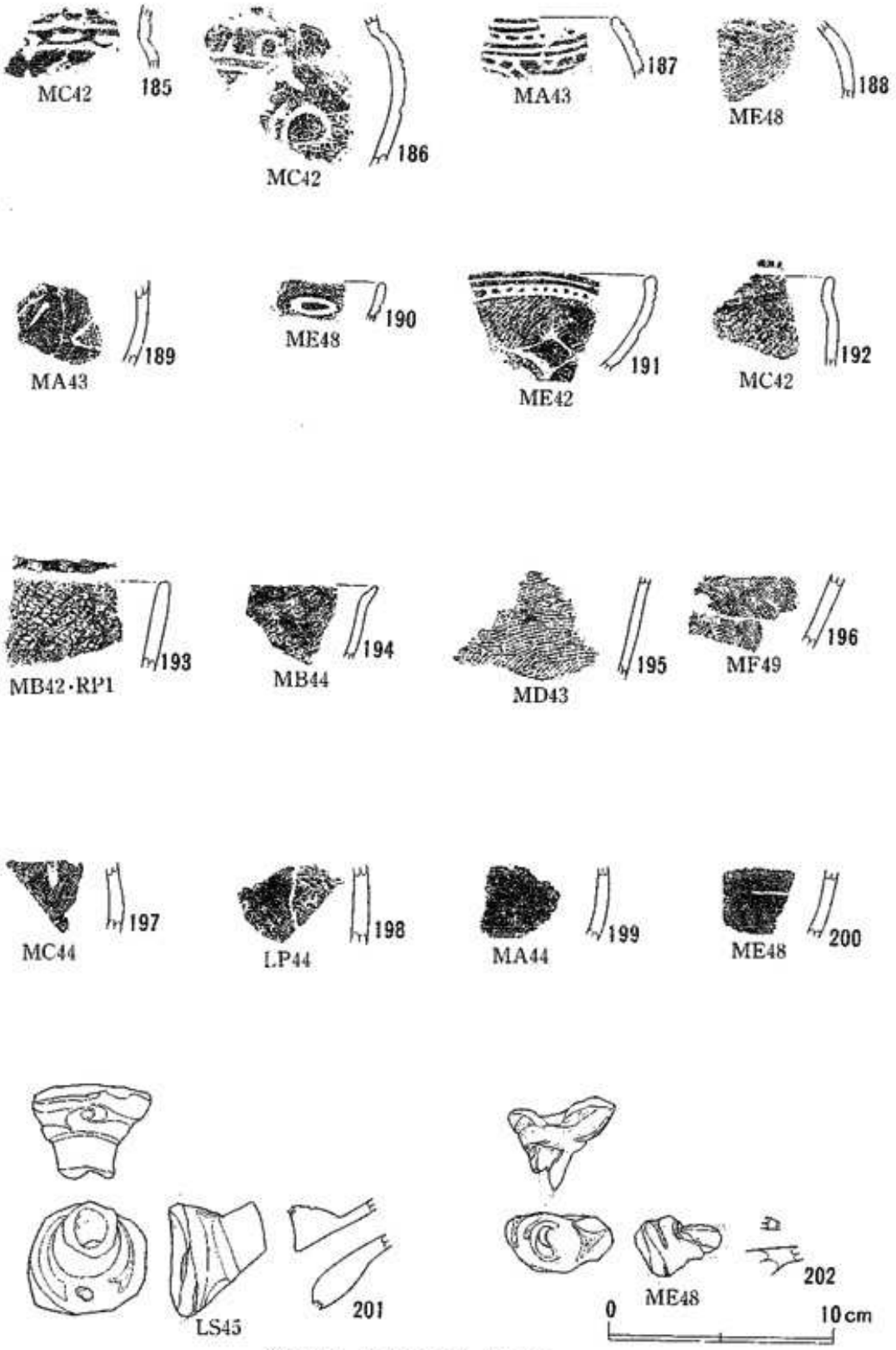


第28図　遺構外出土土器(2)

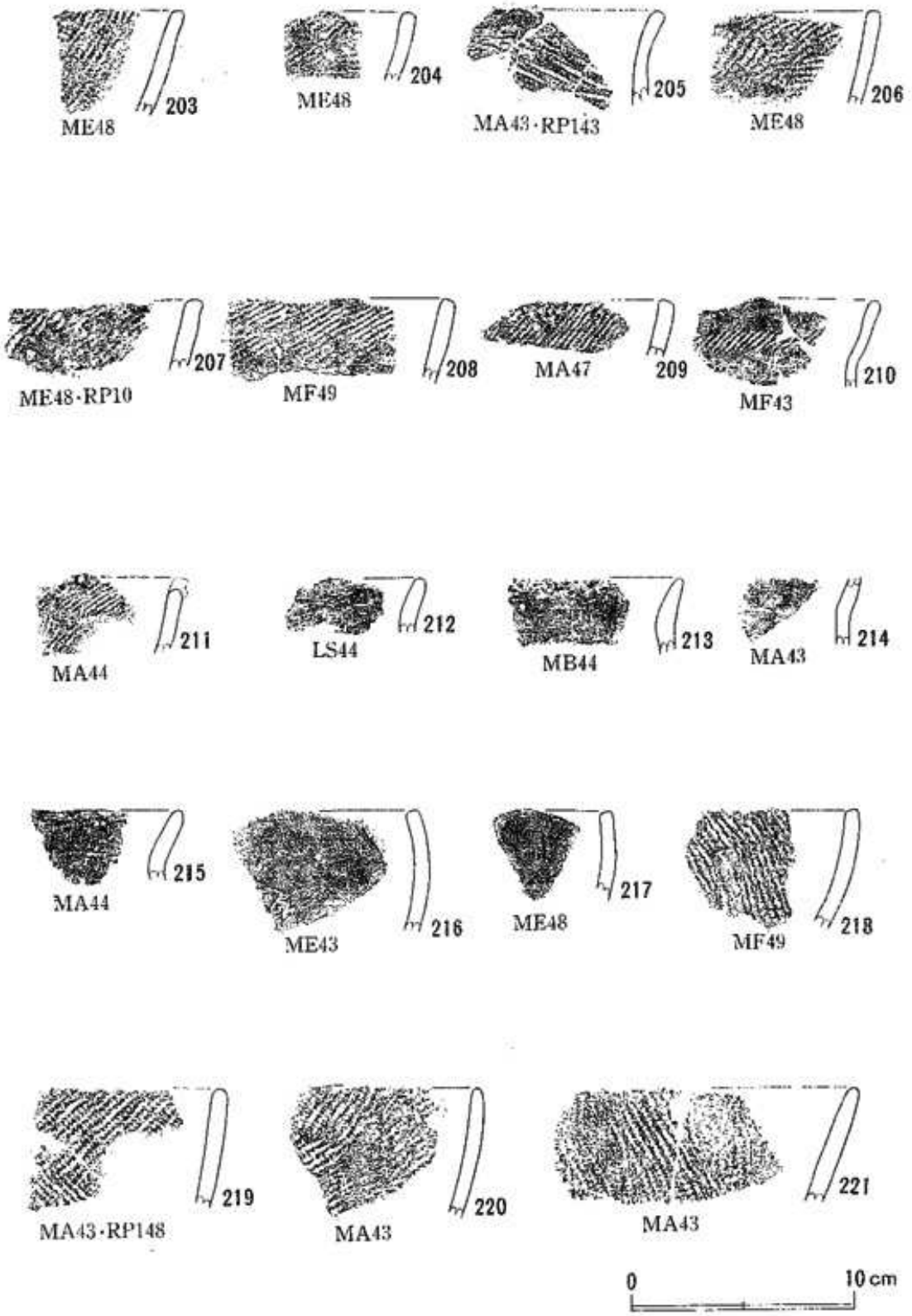


第29図　遺構外出土土器(3)

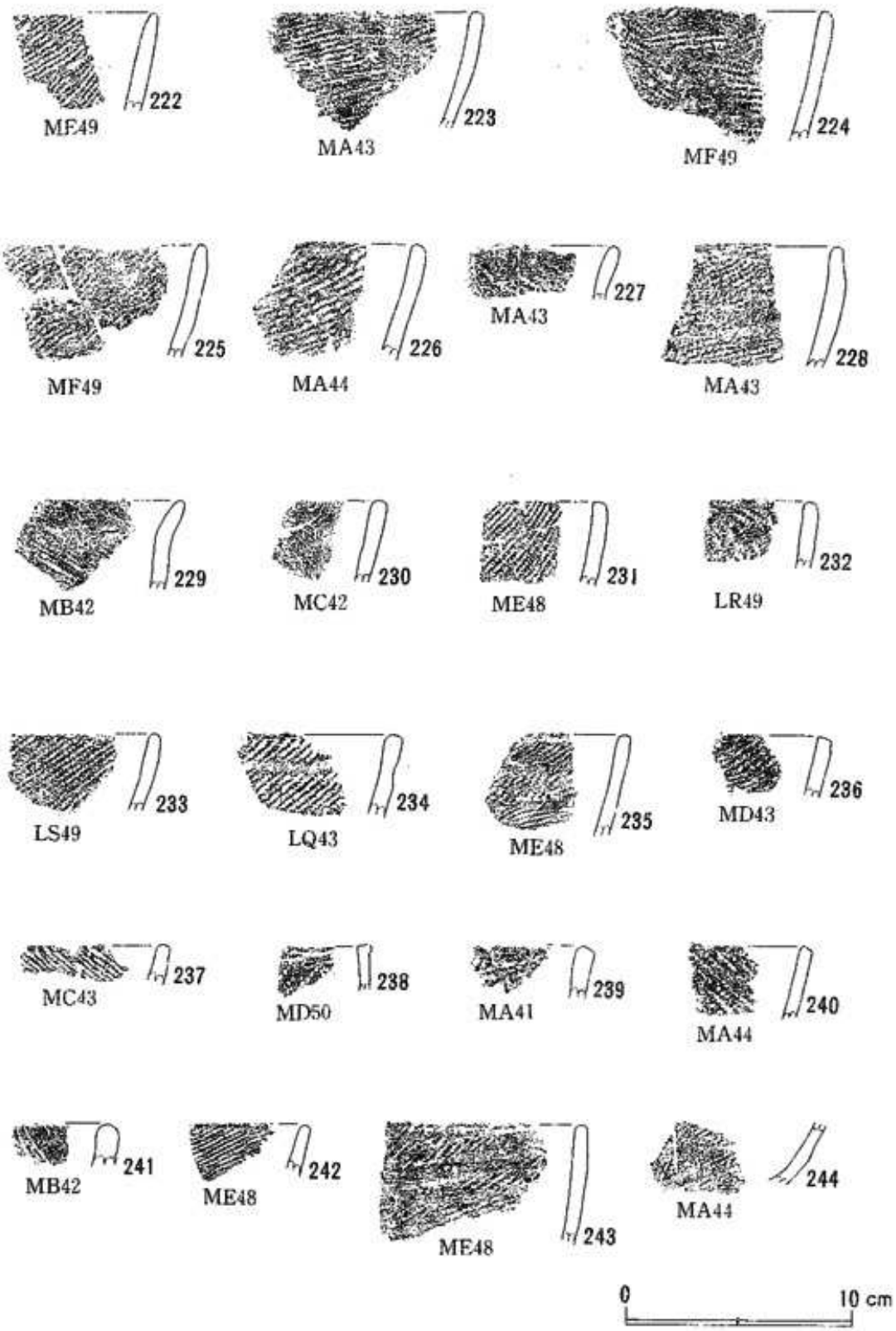
第30図　遺構外出土土器(4)



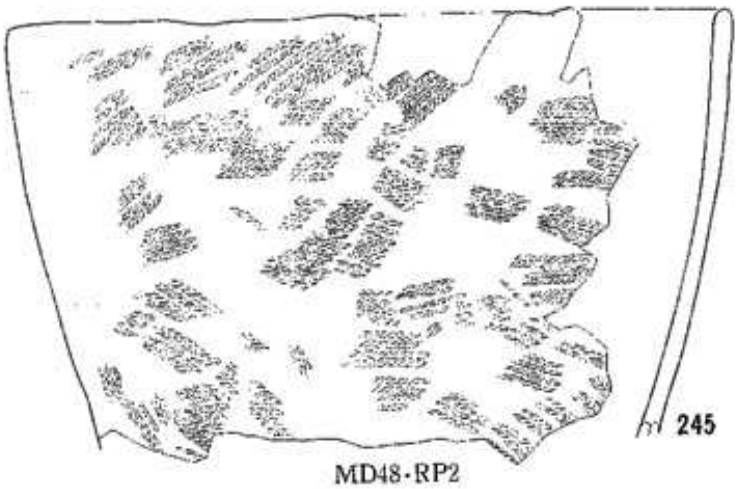
第31図　遺構外出土土器(5)



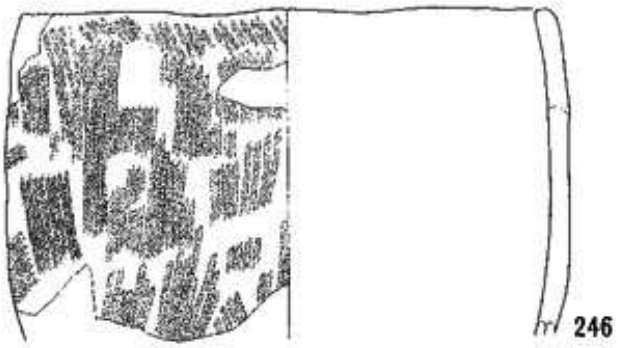
第32図　遺構外出土土器(6)



第33図　遺構外出土土器(7)

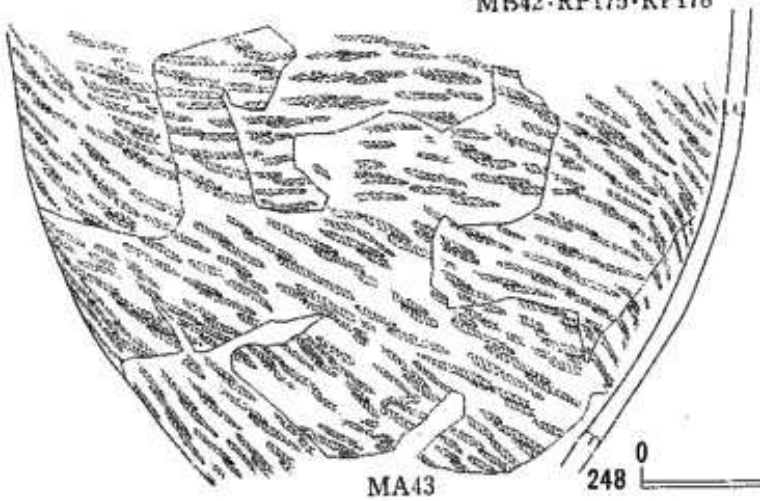


MD48・RP2



ME48・RP1

MB42・RP175・RP178

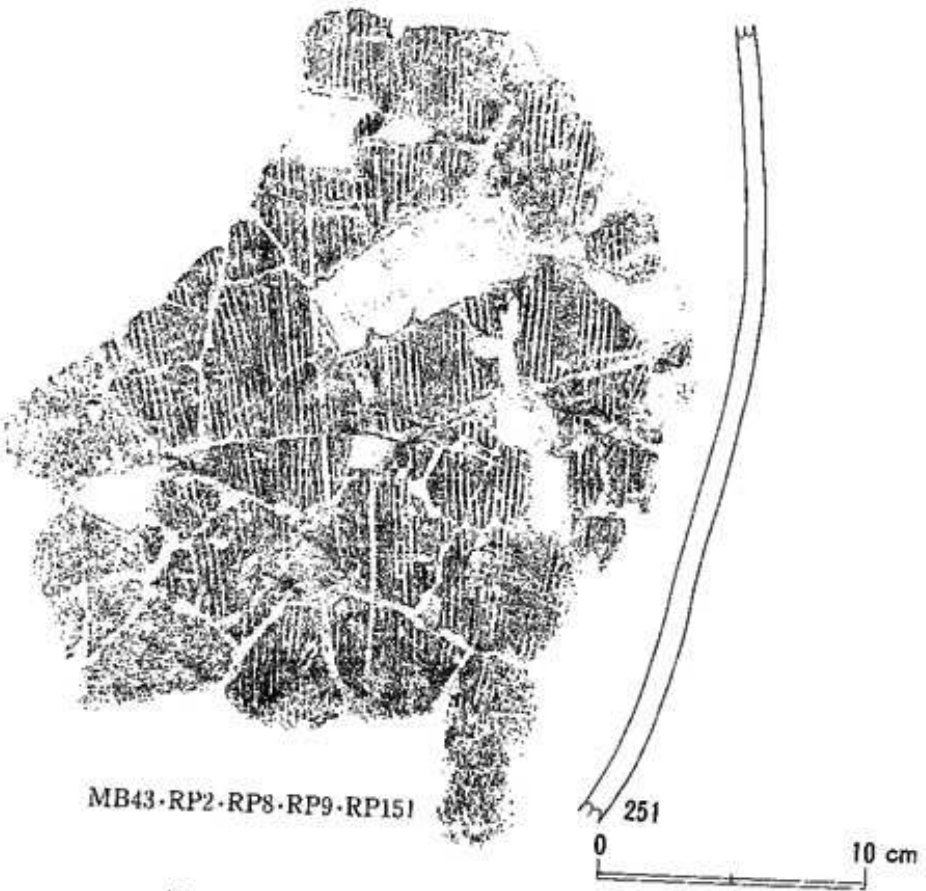


MA43

第34図　遺構外出土土器(8)

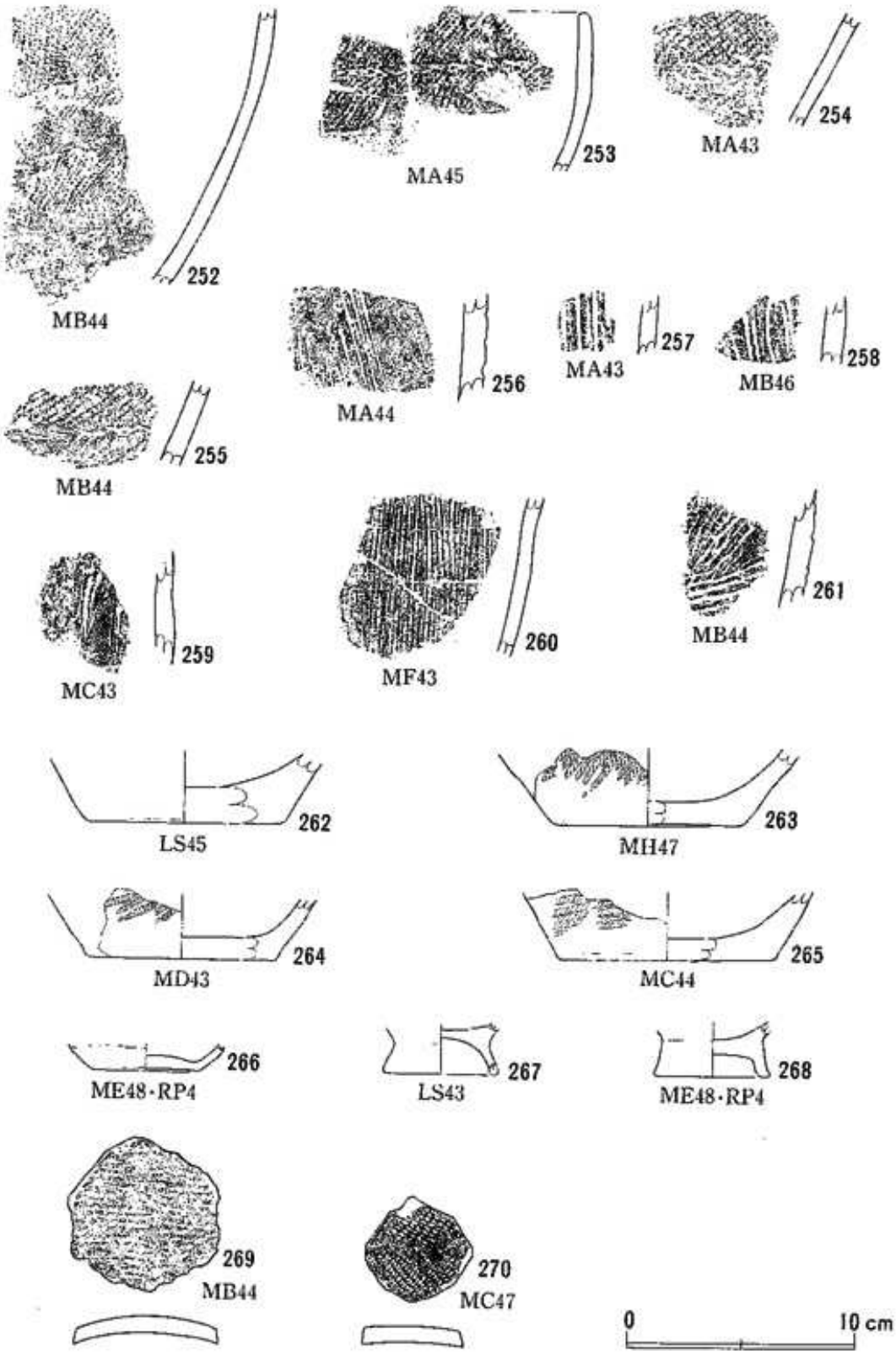
SK29・RP1

MA43・RP2・RP165

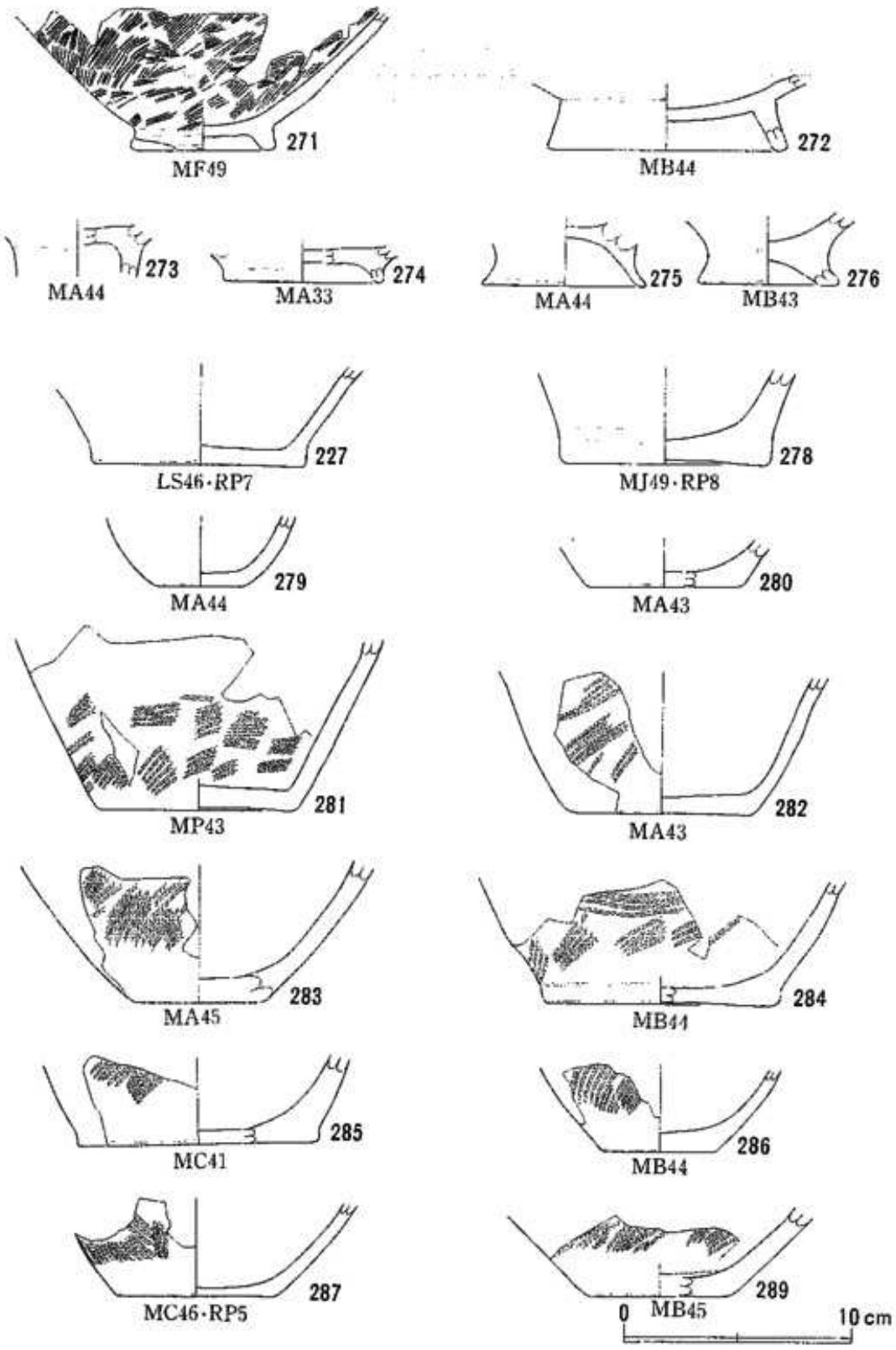


MB43・RP2・RP8・RP9・RP151

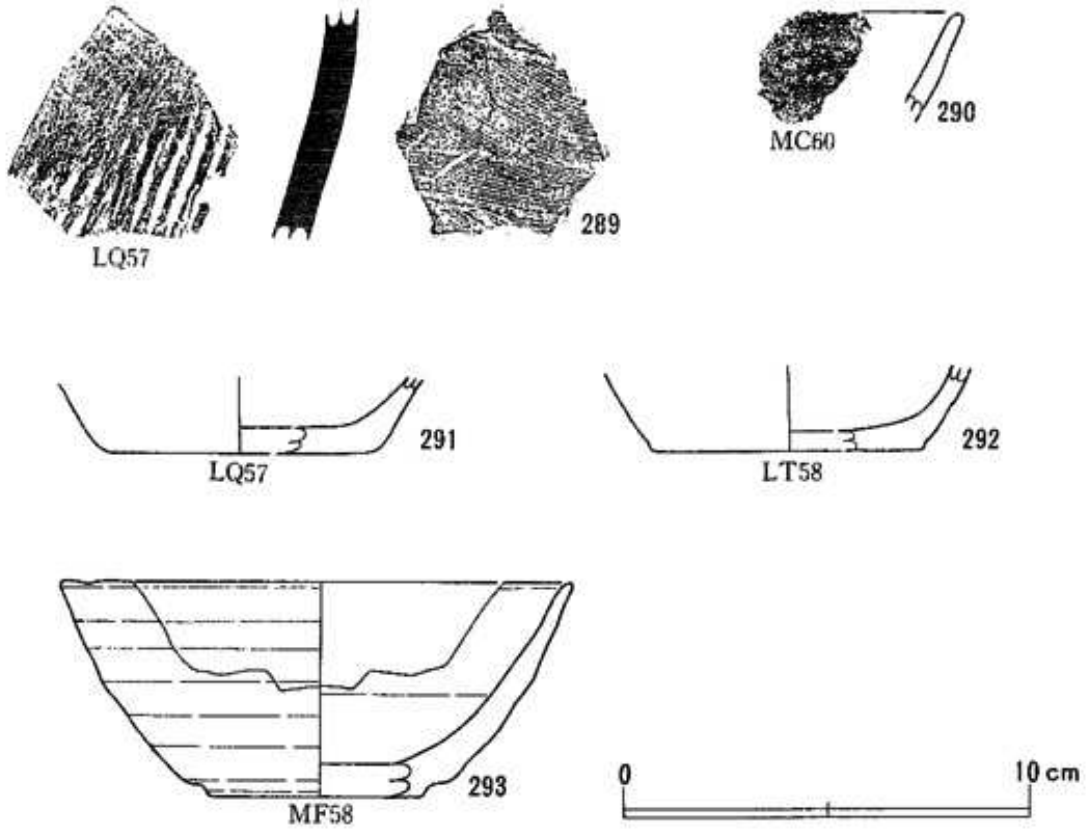
第35図　遺構内・外出土土器 (9)



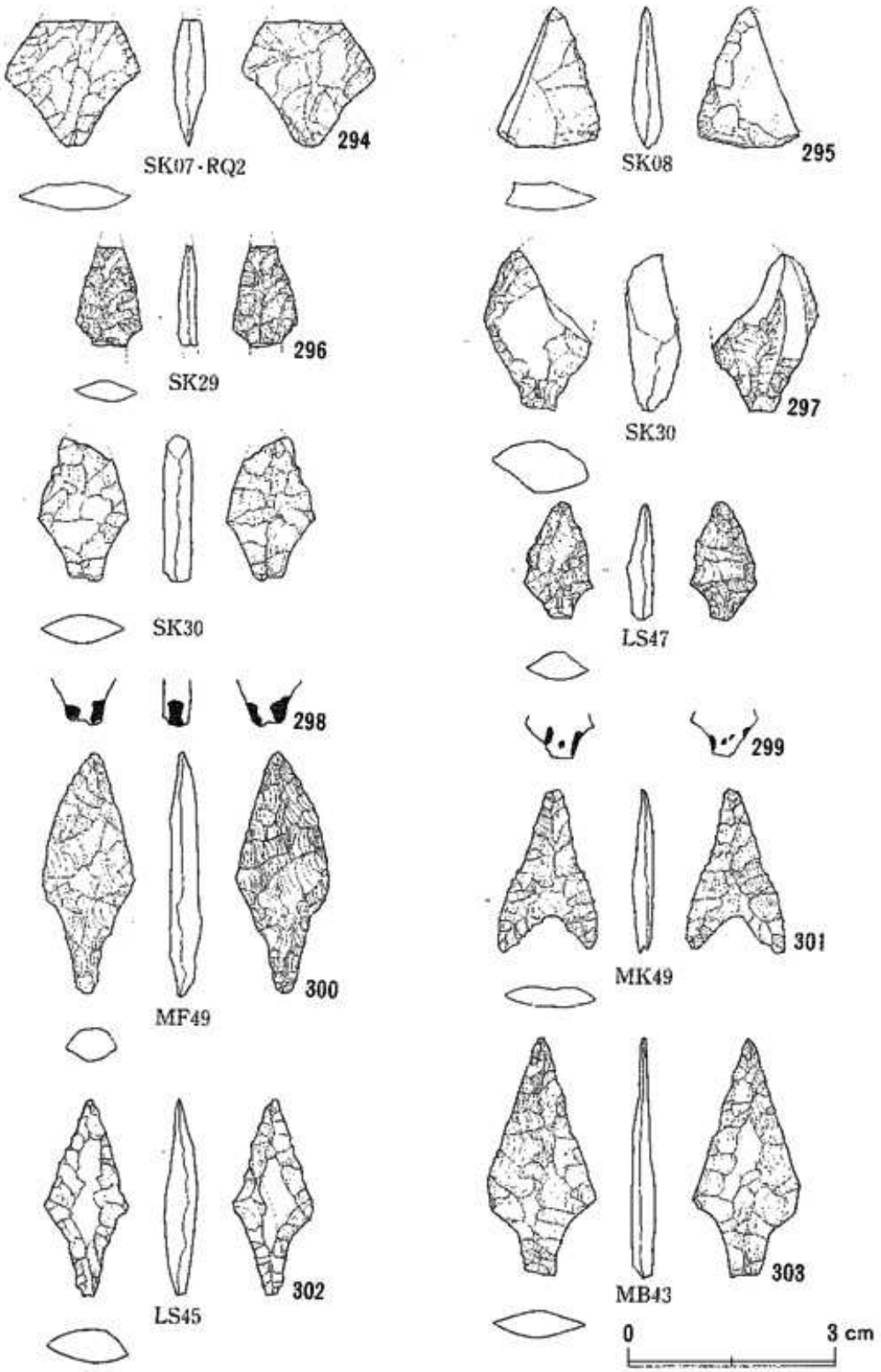
第36図　遺構外出土土器 (10)



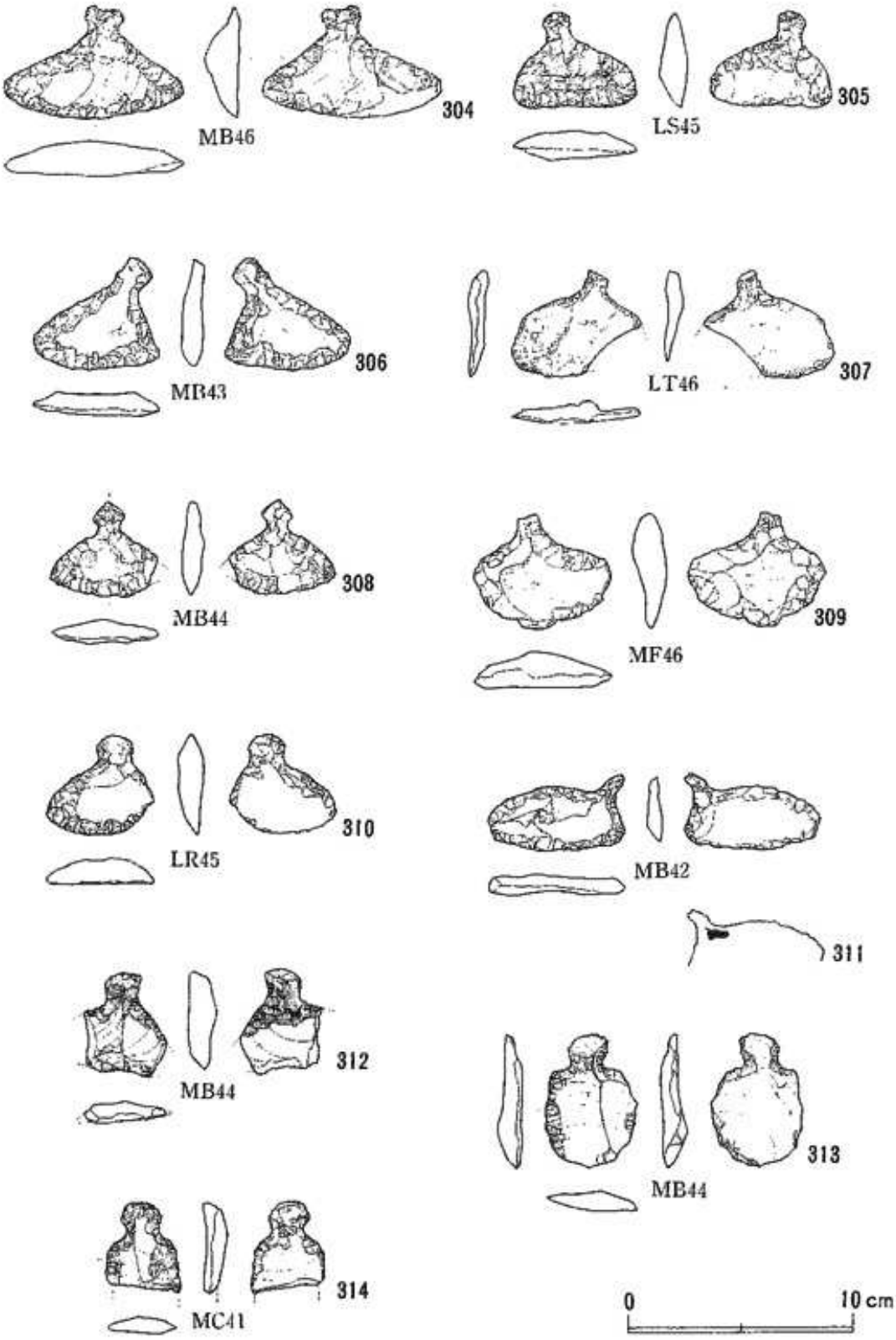
第37図　遺構外出土土器(11)



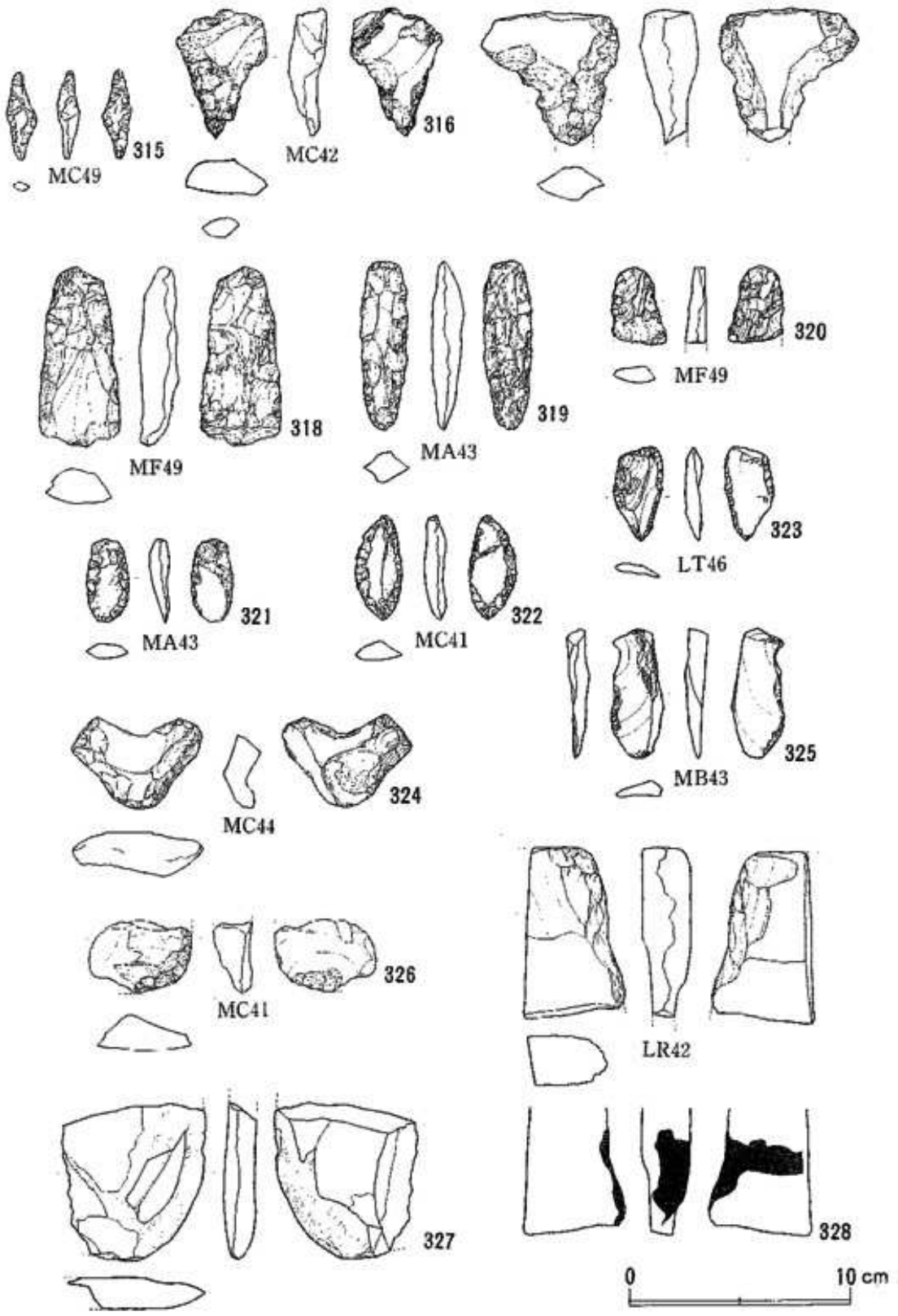
第38図　遺構外出土土器 (12)



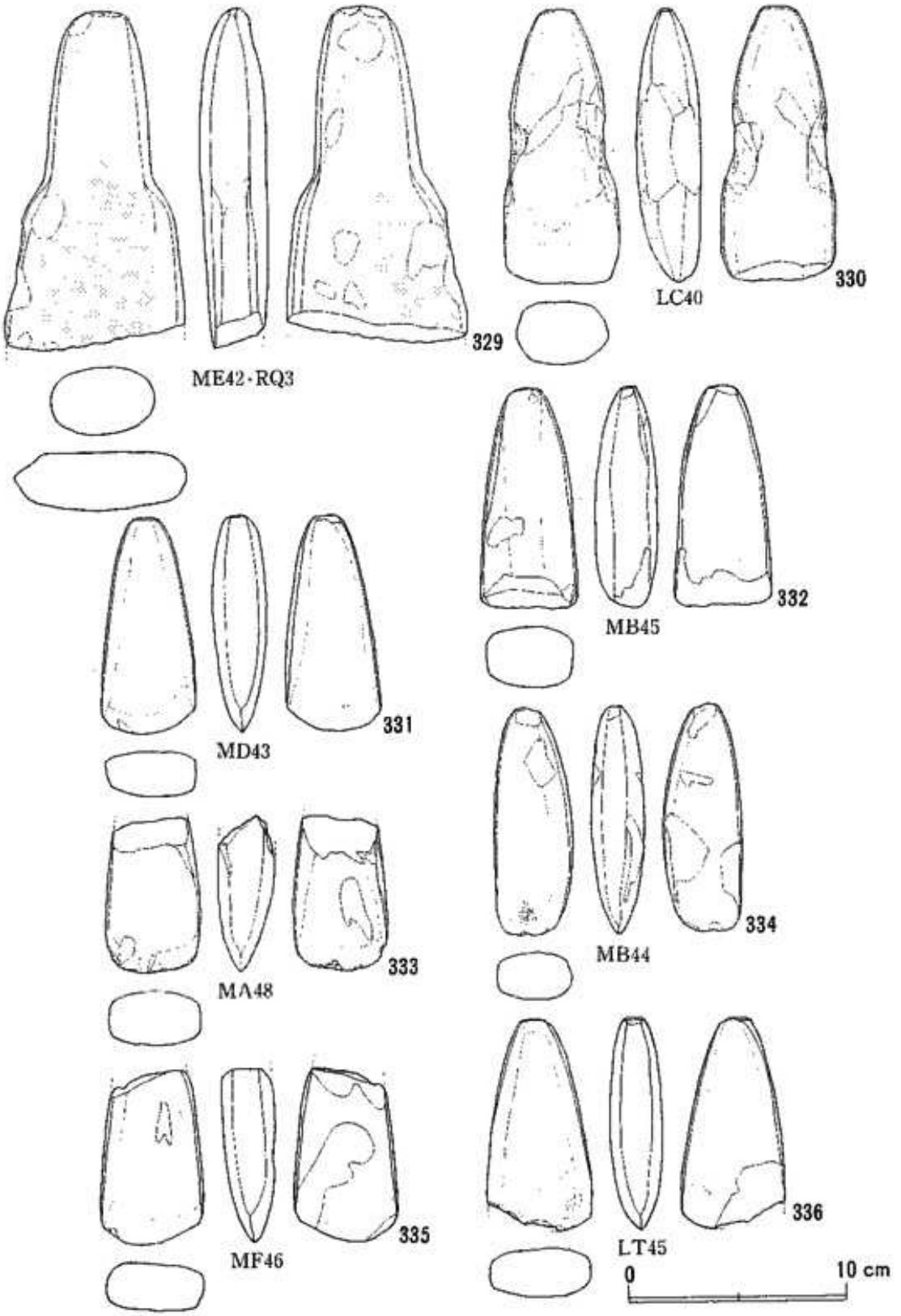
第39図　遺構内(3)・遺構外(1)出土石器



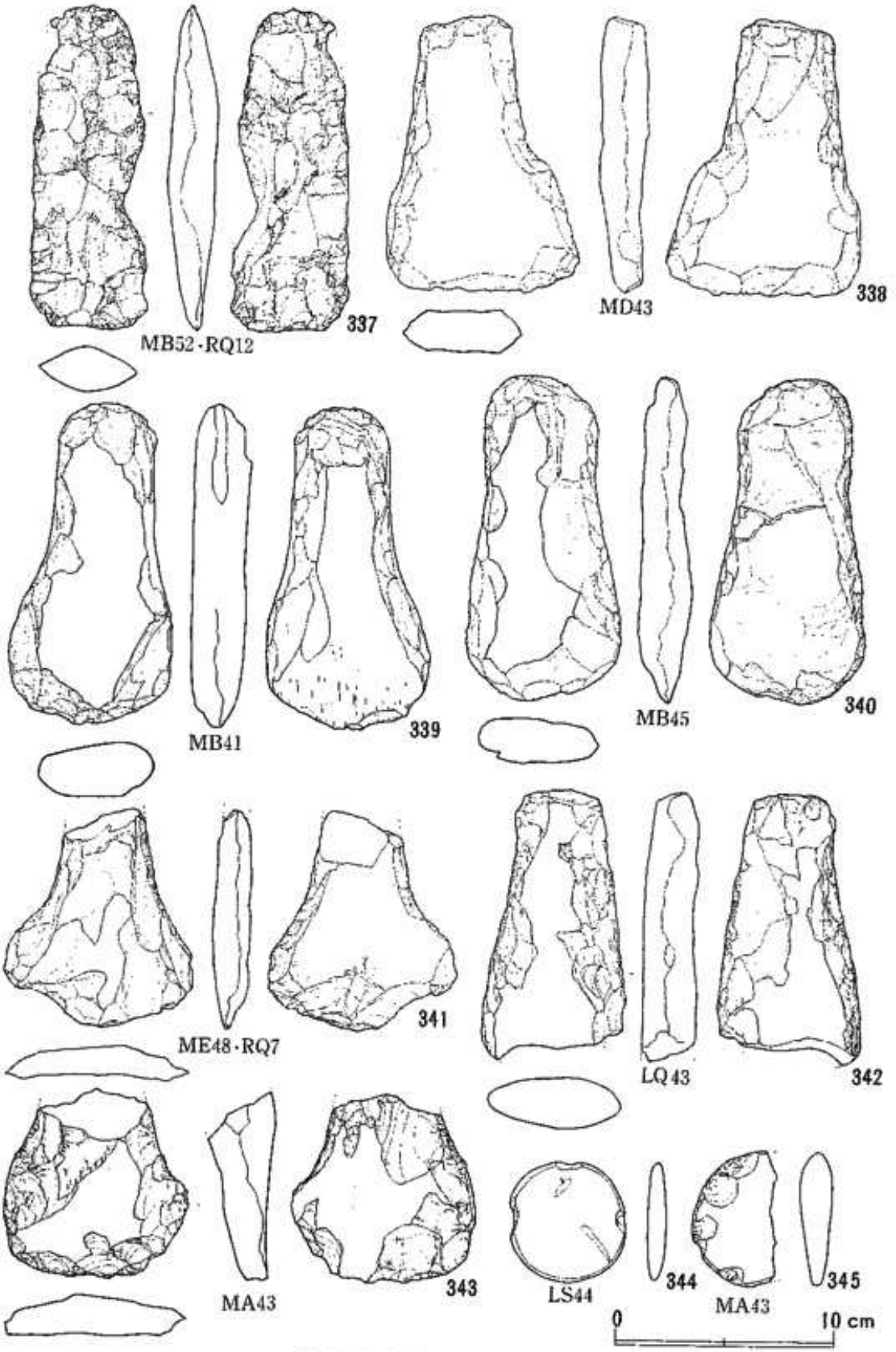
第40図　遺構外出土石器(2)



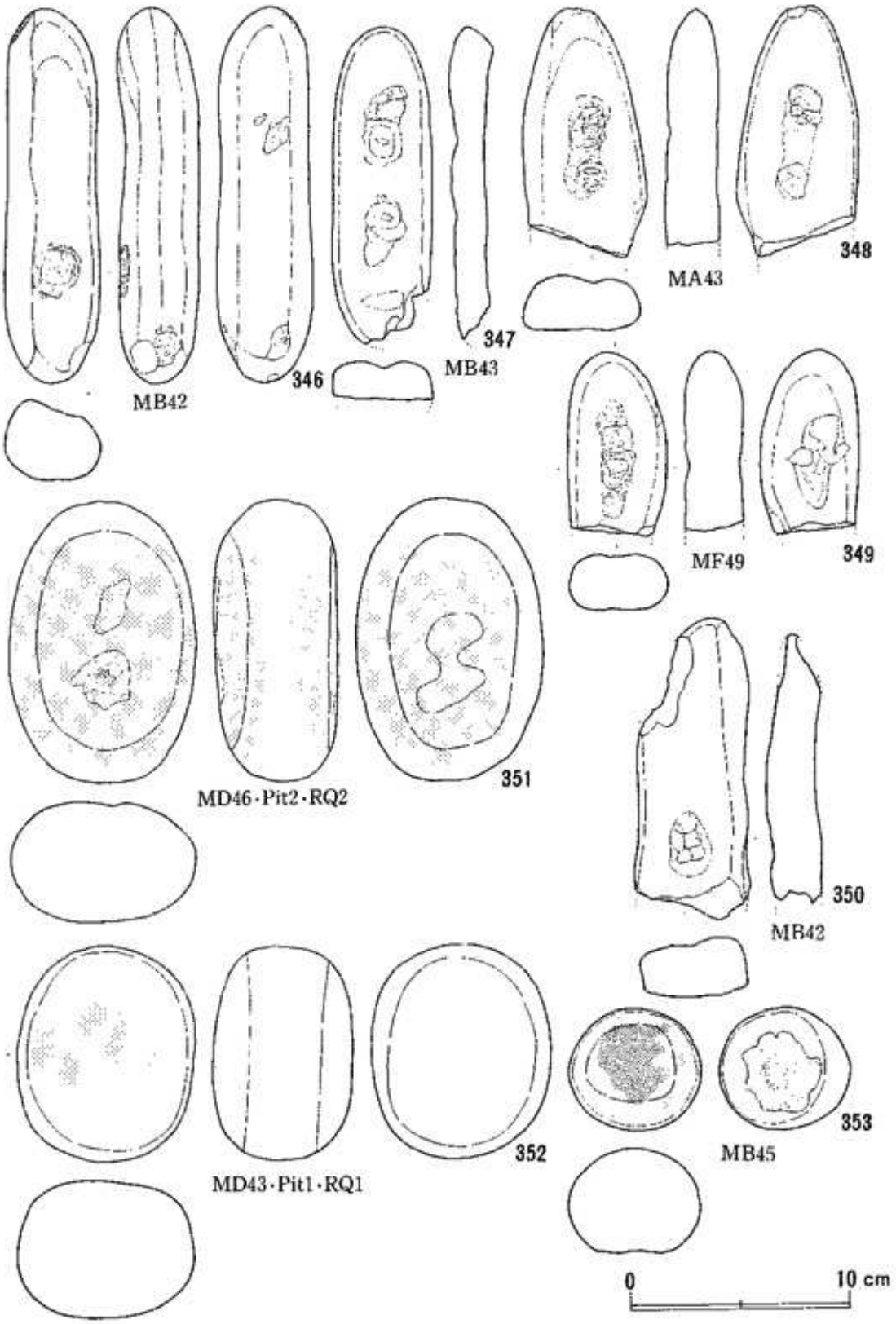
第41図　遺構外出土石器(3)



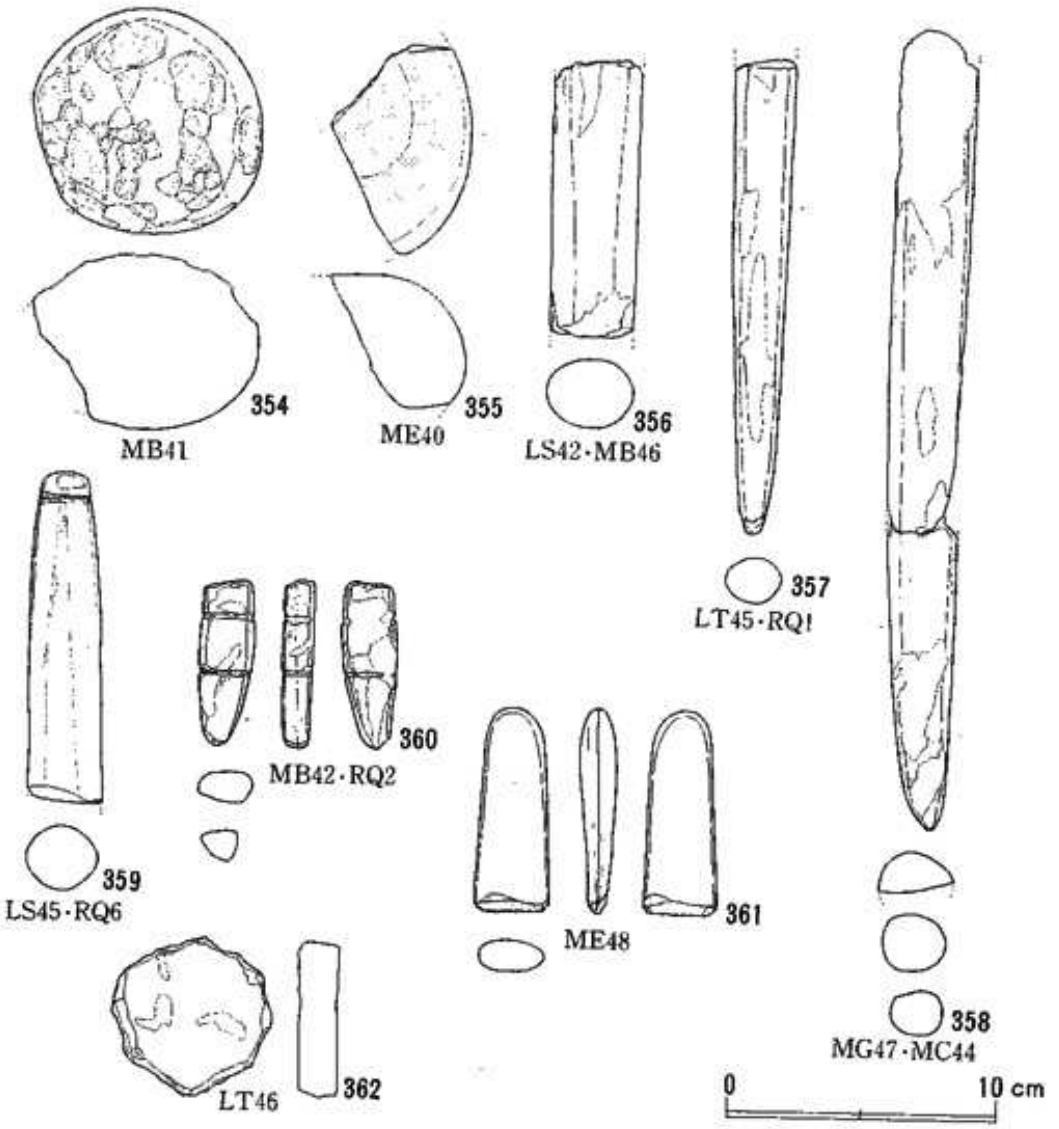
第42図　遺構外出土石器(4)



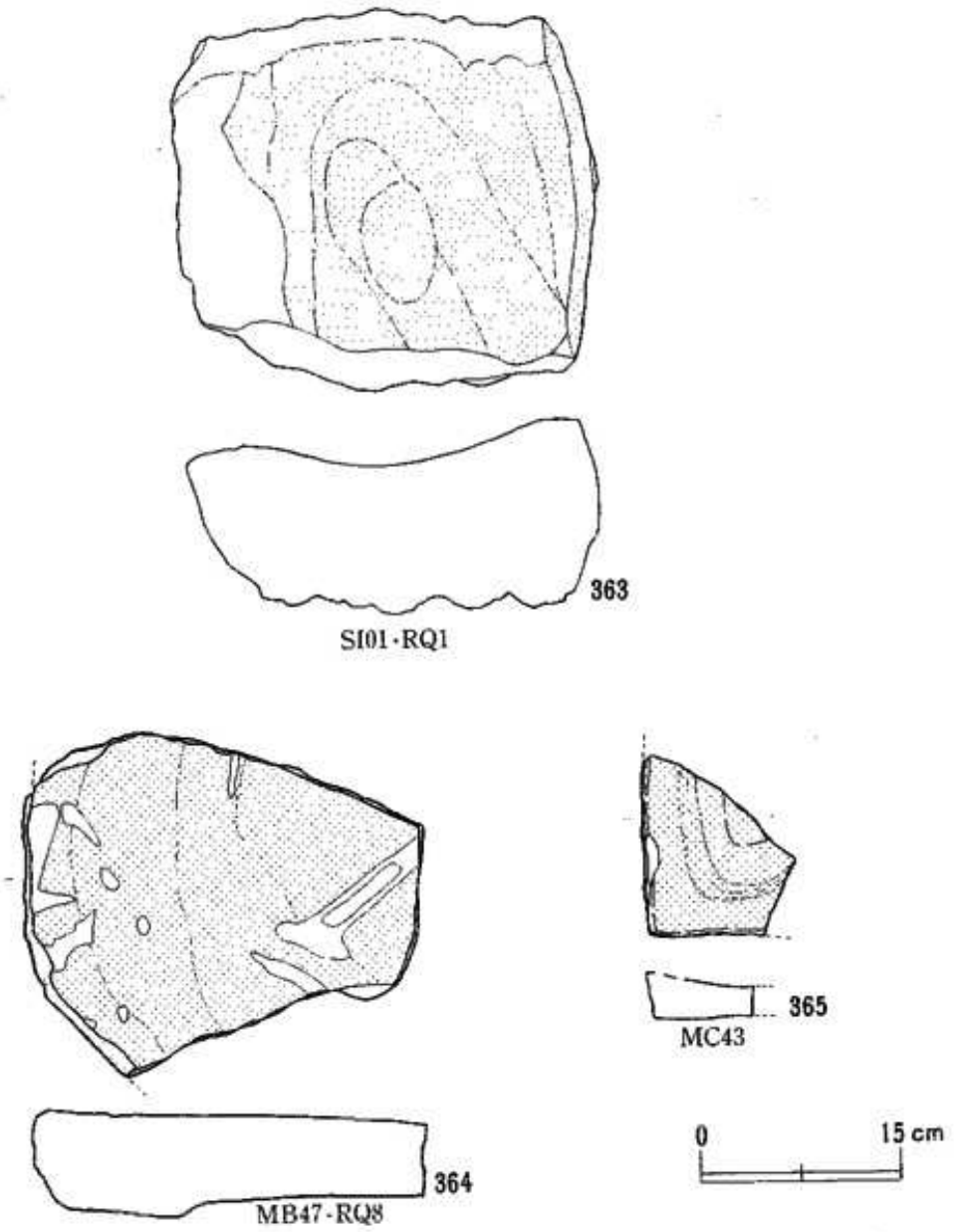
第43図　遺構外出土石器(5)



第44図　遺構内外出土石器(6)



第45図　遺構外出土石器 (7)



第46図　遺構内(4)・遺構外(8)出土石器図

第3表　石器観察表（1）

種類	挿図番号	遺構名	法量 最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	石質	備考
スクレイパー	108	SK04 RQ6	62.5	41	16	30	頁岩	
石匙	109	SK08 RQ48	43.5	46.5	8.3	14	頁岩	
石匙	110	SK08 RQ6	42	37.5	8	13	頁岩	
石匙	112	SK08 RP136	44	31	9	13	頁岩	
石匙	111	SK08 確認面	54	54	12.5	23	頁岩	
スクレイパー	115	SK08 RQ26	78	33	12	34	頁岩	
スクレイパー	117	SK08 RQ45	39	21.5	6.5	7	頁岩	
石匙	114	SK08 確認面	58.5	21	7	11	頁岩	
フレイク	116	SK08 RQ11	88	36.5	19.5	62	頁岩	
スクレイパー	113	SK08 堆土	50	35	7	12	頁岩	
磨製石斧	118	SK08 RQ36	33	20	6.5	8	安山岩	欠損有
石匙	119	SX11 RQ10	54	52.5	11.5	27	頁岩	欠損有
磨製石斧	120	SX11 RQ1	79.5	46	24	155	閃緑岩	欠損有
スクレイパー	121	SX11 風倒木	43.5	38	10.5	19	頁岩	
凹石	122	SK26 RQ1	153.5	63.5	40	425	安山岩	
スクレイパー	129	SK29 フク土一括	42.5	43	11.5	21	頁岩	
石錐	124	SK29 フク土一括	33	15	5	3	泥岩	欠損有
石錐	125	SK29 フク土一括	48	14.5	55	4	泥岩	欠損有
凹石	126	SK30 RQ3	101	68.5	38	28.3	流紋岩	欠損有
石匙	127	SK30 フク上一括	53	32	3.5	8	頁岩	
石錐（?）	128	SK30 RQ1	87	22	15	14	泥岩	欠損有
スクレイパー	129	MD42 Pit1	41.5	35	7.5	13	頁岩	欠損有
凹石	130	SK32 RQ1	117.5	53.5	38	231	泥岩	
凹石	131	SK33 RQ	155	86.5	37.5	469	石英安山岩	欠損有
石錐	294	SK07 RQ2	18	19.5	4	1	頁岩	欠損有
石錐	295	SK08 確認面	20.5	15	4	1	頁岩	欠損有
石錐	296	SK29 フク土一括	19	13	4	1	頁岩	欠損有
石錐	297	SK30 フク土中一括	23.5	15.5	7.5	2	頁岩	欠損有
石錐	298	SK30 フク土一括	21	13	4	1	玄武岩	欠損有
石錐	299	LS46	17.5	10	4	1	頁岩	
石錐	300	MF49 I層	35	13.5	5	2	頁岩	
石錐	301	MK49	18	14	2.5	1	頁岩	
石錐	302	LS45 I～II層	28.5	12	5	1	頁岩	
石錐	303	MB43 II層	35	16	4	1	頁岩	
石匙	304	MB46 I層	50	79.5	16	39	頁岩	
石匙	305	LS45 I層	43	54	13	21	頁岩	
石匙	306	MB43 I層	49.5	55	11	21	頁岩	
石匙	307	LT46 I層	47	57	10	15	頁岩	欠損有
石匙	308	MB44 II層	42	47.5	11	14	頁岩	欠損有
石匙	309	MF46 I層	61	51	16	36	頁岩	
石匙	310	LR45 I層	44	48	11.5	20	頁岩	
石匙	311	MB42 I層	34	60	9.5	16	頁岩	
石匙	312	MB44 I層	46.5	36	10	16	頁岩	欠損有
石匙	313	MB44 I層	59.5	41	9	21	頁岩	
石匙	314	MC41 I層	40	33	7.5	10	頁岩	欠損有
石錐	315	MC49 II層	40	13	4	3	泥岩	
石錐	316	MC42 II層	38	41	16	30	頁岩	
石錐	317	MA44 II層	61	62	15	76	頁岩	欠損有
石匙	318	ME49 I層	82	36.5	16	52	頁岩	
石偏刃石器	319	MA43 II層	77	21.5	14	20	頁岩	

第4表　石器観察表（2）

種別	挿図番号	遺構名	法量 最大長	最大幅	最大厚	重量	石質	備考
石錐未製品	320	MF49 II層	35	24	7	7	頁岩	欠損有
石錐未製品	321	MA43 I層	38	19	7	6	頁岩	
石錐未製品	322	MC41 I層	47	21.5	9	9	頁岩	
スクレイパー	323	LT46 I層	43	22.5	6	5	頁岩	
スクレイパー	324	MC44 II層	42	58.5	21	30	頁岩	
スクレイパー	325	MB43 II層	59	24	7	11	頁岩	
スクレイパー	326	MC41 I層	33	47	17	23	頁岩	欠損有
磨製石斧	327	MA43 I層	70	64.5	14.5	87	玄武岩	欠損有
打製石斧	328	LR42 II層	78	46.5	22	104	安山岩	欠損有
磨製石斧	329	ME42 RQ3・II層	15.6	75.5	32	507	珪岩	欠損有
磨製石斧	330	LC40 I層	125.5	52	29	293	花崗岩	
磨製石斧	331	MD43 RQ11	100	43	25	155	安山岩	
磨製石斧	332	MB45 I層	110	44.5	289	188	緑色凝灰岩	
磨製石斧	333	MA48 I層	71	42.5	24.5	117	安山岩	欠損有
磨製石斧	334	MB44 II層	105	36	22	139	珪岩	
磨製石斧	335	MF46 I層	80	47	22	141	安山岩	欠損有
磨製石斧	336	LT45 I層	97	48	22	170	花崗岩	欠損有
打製石斧	337	MB52 1-a層 RQ12	149	54	21	176	頁岩	欠損有
打製石斧	338	MD43	89	127	20	285	凝灰岩	
打製石斧	339	MB41 I層	148.5	75	25	371	輝緑岩	
打製石斧	340	MB45 I層	150	71	21	337	珪岩	
打製石斧	341	ME48 RQ7	101	86	16	144	玄武岩	欠損有
打製石斧	342	LQ43 II層	124	66	23.5	192	凝灰岩	欠損有
打製石斧	343	MA43 I層	86.5	84	19	144	凝灰岩	欠損有
石錘	344	LS44 II層	55	53	8.5	22	凝灰岩	

種別	挿図番号	遺構名	法量 最大長	最大幅	最大厚	重量	石質	備考
石錘	345	MA43 I層	62	39	15	53	凝灰岩	欠損有
凹石	346	MB42 I層	170.5	44	38.5	374	珪岩	
凹石	347	MA43 I層	45.5	144	18	179	珪岩	欠損有
凹石	348	MA43 II層	113	56	25	20	珪岩	欠損有
凹石	349	MF49 I層	54	45	27	135	凝灰岩	欠損有
凹石	350	MB42 I層	137.5	52	27	230	珪岩	欠損有
凹石	351	MD46 Pit2RQ2	128	86	55	970	安山岩	
擦石	352	MD43 Pit1RQ1	97.5	81	62	810	花崗岩	
擦石	353	MB45 I層	55.5	60	47.5	190	凝灰岩	
敲石	354	MB41 I層	83	85	65	610	閃緑岩	欠損有
敲石	355	ME42 II層	78	52	49	191	安山岩	欠損有
石棒	356	LS42 MB44 I層	103	32	25	153	珪岩	欠損有
石剣	357	LT45 II層 RQ1	177	23	17	93	粘板岩	欠損有
石剣	358	MC44 MG47 I層	297	30.5	21	200	粘板岩	欠損有
石剣	359	LS45 II層 RQ6	123	28	24	150	粘板岩	欠損有
石製品	360	MB42 I層 RQ2	61.5	21	12	15	緑色凝灰岩	
石製品	361	ME48 RQ9	76.5	27.5	12	31	粘板岩	欠損有
石製品	362	LT46 II層	59	59.5	15.5	59	凝灰岩	
石皿	363	SI01 RQ1	188.5	208	94	3280	サンサン石	
石皿	364	ME47 I層 RQ8	196.5	170	55	2530	凝灰岩	欠損有
石皿	365	MC43 I層	89	74	24	174	凝灰岩	欠損有

第3章　自然科学的分析

第1節　花粉分析・鉱物分析

1　はじめに

下田谷地遺跡は、東北横断自動車道建設にともなって発掘調査が行われた遺跡で、秋田県大曲市内小友字下田谷地130他に所在する。地形的には、小支谷の谷奥の斜面から谷内にかけて位置する。谷内の堆積層には、縄文時代と平安時代とされる2枚の泥炭層が確認されている。泥炭層中には、堆積当時の植生を考える上で有効とされる花粉・胞子などの微化石が多量に包含されている場合が多い。

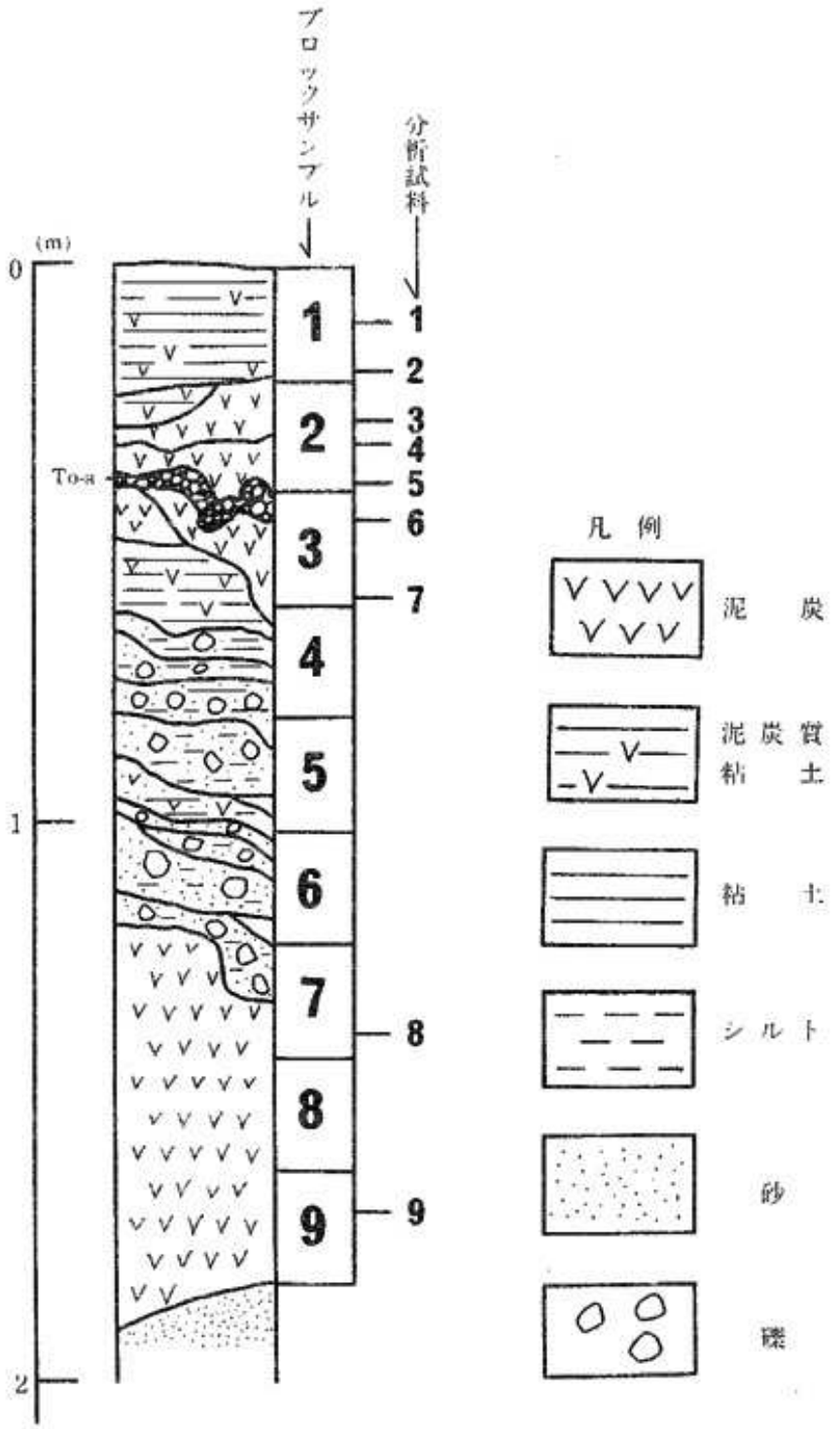
今回の調査では、水田部分第2トレンチ断面で確認された2枚の異なった時期の泥炭層試料を中心に花粉分析を行い、堆積当時の周辺の植生変遷を明らかにすることを試みた。また、当地点は現在、水田として利用されており、この稲作がいつごろまで遡れるかについても検討した。また、同トレンチ断面及び平安時代とされる土坑覆土中より採取された試料について鉱物分析と屈折率測定を行い、堆積層や遺構の年代的示標を得ることを試みた。

2　分析試料

調査区内の水田部分第2トレンチの堆積層の層相は、下位より、最下位の砂層→未分解から弱分解の泥炭層→巨礫を交えた砂層や砂まじりの泥炭層などが複雑な堆積構造を示す堆積層→未分解から弱分解の泥炭層→テフラ層→未分解から弱分解の泥炭層→表土、と変化する。また、考古学的所見から下位の泥炭層を縄文時代、上位のテフラを狭在する泥炭層を平安時代とされている。下位の泥炭層は年代学的な分析検討を行っていないが考古学的所見より縄文時代とされている。

花粉分析試料は、断面から採取された柱状ブロック試料から、層相変化などを考慮して主に上位・下位の泥炭層を中心に任意に5㎜厚で9点採取し、新たに1～9の試料番号を付した(第47図)。また上位の泥炭層と下位の泥炭層の間の堆積層からは試料を採取しなかったが、これは層相から谷斜面の崩落などの堆積物である可能性が高いと判断されたからである。なお、柱状ブロック試料の半分を将来、再検討できるように保存した。

鉱物分析試料は2点で、花粉分析用試料を採取した水田部分第2トレンチ断面の上位の泥炭層中のテフラ（試料番号10：6層）と、平安時代の土坑とされるSK20覆土中より採取されたテフラ（試料番号11）である。前者の採取層位を第51図に示した。試料番号10はにぶい黄褐色の



第47図　水田部分第2トレンチ花粉分析資料採取地点土層柱状

中粒火山灰、試料番号11は暗褐色の中粒火山灰である。

3　花粉分析

3—1　方法

試料から花粉・胞子化石を分離・濃集する方法は次のとおりである。

フッ化水素処理（48%HF）→重液分離（$ZnBr_2$・比重2.2）→篩別（250μの篩）→アセトリシス処理→KOH処理の順に物理・科学処理を行う。処理後の残渣をグリセリンで封入しプレパラートを作成する。光学顕微鏡下でプレパラート全面を観察し、種類（Taxa）の同定・計数を行う。

結果は、一覧表と花粉化石群集変遷図で示した。出現率は、各樹木花粉が樹木花粉総数、草本花粉・シダ類胞子が総花粉・胞子数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数とした百分率で算出した。なお、複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が明確でないものである。

また、栽培植物とされるイネ属花粉の有無を確認するため、ノマルスキー微分干渉装置を用いて、外膜の構造・表面模様、発芽孔の構造、粒径などを観察し、イネ属の計数を行った。結果はイネ科の中に占めるイネ属の比率で花粉化石群集変遷図に表示した。

3—2　結果

花粉・胞子化石は、全資料から良好に検出された（第5表）。検出された種類数は、樹木花粉33種類、草本花粉21種類、シダ類胞子3種類であった。花粉化石群集の変遷図を第48図に示した。花粉化石群集は、下位の縄文時代とされる泥炭層と上位の平安時代とされる泥炭層では異なっており、上位の泥炭層でも下部と中・上部では層位的に変化した。

3—3　考察

(1)　花粉化石群集の特徴

水田部分第2トレンチにおける花粉化石群集は、マツ属・スギ属・コナラ亜属などの主要樹木花粉化石の消長に基づくと、つぎのような3局地花粉化石群集帯（下位よりⅠ・Ⅱ・Ⅲ帯とする）に区分される。

Ⅰ帯(試料番号9・8)；スギ属の高率出現により特徴づけられる。これに次いでマツ属が高率に出現する。この他にブナ属・コナラ亜属などの落葉広葉樹の種類をともなうが、出現率は低率であり、種類数も少ない。構成比で樹木花粉が90%弱を占めるのも特徴の一つである。

Ⅱ帯（試料番号7）；落葉広葉樹のコナラ亜属が高率に出現することにより特徴づけられる。次いでクリ属・スギ属が高率に出現する。個の他にトチノキ属・トネリコ属といった落葉広葉

樹の種類が多い。なお、本帯とⅠ帯との境界は、その間の資料がないのでここでは明らかではない。

Ⅲ帯(試料番号6～5)；スギ属が増加し、高率に出現するようになることで特徴づけられる。ブナ属も増加する。高率に出現していたコナラ亜属は低率になる。なお、増加したスギ属は試料番号4まで増加傾向を示し、その上位で減少傾向を示すようになる。またブナ属は試料番号4から減少傾向を示す。これらの種類とは逆にコナラ亜属が上部で漸増傾向を示し、さらに、最上位の試料番号1でマツ属が漸増傾向を示す。

Ⅰ帯は、下位の泥炭層に認められる群集である。Ⅰ帯のような群集組成を示す花粉化石群集は、秋田県の低地の完新世後半の堆積物における花粉化石群集（辻・日比野，1975　辻，1981）や山地の花粉化石群集（辻，1977など）には認められていないことから、これとは異なった時期の植生を反映していることを意味するのかもしれない。しかし、一方では、本地点のみの局地的な植生を反映した花粉化石群集である可能性も考えられないことから、今後、さらに堆積物の年代学的な検討を行った上で、本群集の時間的・空間的な位置づけが再検討されるべきであろう。

一方、上位の泥炭層以浅で認められたⅡ帯からⅢ帯への変化は、スギ属の増加に特徴づけられる。秋田県の低地における花粉化石群集は、下位より、コナラ亜属－ブナ属帯(下限不明，上限は約2,700ないし2,000年前)、スギ属－ブナ属－コナラ亜属帯(上限約1,000年前)、マツ属帯に区分されている(辻，1981)。今回確認されたⅡ帯からⅢ帯の変遷は、上記のコナラ亜属－ブナ属帯からスギ属－ブナ属－コナラ亜属帯への変遷傾向に類似しているが、後述するようにⅡ帯に変遷するのがTo-a直下であることから時間的に異なっている可能性が高い。このような時間差が存在すれば、秋田県におけるスギ属の増加が、広範囲で同時に起こった現象でなく局地的であったことを意味している可能性もある。

(2)　古植生について

Ⅰ帯が認められる下位の泥炭層堆積当時は、調査区周辺にスギが多く生育していたことが推定される。一般に花粉分析結果のスギの出現率は、スギの花粉生産量が膨大であり、広域に散布されることなどから、実際の植生に比較して過大評価される場合が多い。そのことを考慮しても、本群集の出現率は周辺でのスギの存在を推定するには充分な値であるといえる。スギに次いで高率に出現するマツ属も、当時の森林構成種であった可能性があり、落葉広葉樹の種類が低率であることを考慮すると、当時の森林はスギを主とする針葉樹林であった可能性がある。また、試料番号9のマツ属には単維管束亜属が認められること、マツ属単維管束亜属の種類の多くが冷温帯から亜寒帯に分布しているものであることから、当時もそういった種類が近くに

生育していた可能性がある。さらに、草本花粉の出現率が極端に低いことから、当時の森林が近くまで迫っていたか、あるいは密度の高い森林であった可能性も考えられる。

Ⅱ帯の頃、すなわち上位の泥炭層下部が堆積した当時は、周辺にナラ類・ブナ類などを主とする落葉広葉樹林が成立していたであろう。クルミ属や虫媒花であるトチノキ属・クリ属などの種類は、谷内に生育していた植物に比較される可能性が高い。スギも当時の森林の中に生育していたものと推定される。

その後To-aが降灰する直前のⅢ帯の頃になるとスギが分布拡大したことが推定される。このような森林は基本的には現在まで継続していたものと推定される。テフラ層より上位では、構成比が大きく変化し、草本花粉が増加し、樹木花粉が低率になる。こういった変化は、谷内での草本類の繁茂や周辺の森林の減少を意味しているものと考えられる。ただ、低率になる樹木花粉の内、コナラ亜属のみが増加傾向を示しており、最上位の試料番号1ではマツ属が増加することを考慮すると、これらの変化が人類の植生干渉に起因する可能性がある。すなわち、ナラ類・マツ類などの増加が、二次林の発達を示唆するからである。この点については、周辺での遺跡数や当時の人間の活動を考慮して検討すべきであろう。

(3)　稲作について

今回の調査地点では、栽培植物とされるイネ属の花粉は試料番号3から検出されたが、そのイネ属の比率は試料番号2まで低率であり、高率になるのは試料番号1である(第48図)。花粉分析の結果でイネ属比率が30%以上を示す層位では、周辺で稲作が行われていた可能性が高いと考えてよいとしている(鈴木・中村，1977)ことから、本調査区で稲作が行われるようになったのは、試料番号1の頃、すなわち現在に近いころと考えられる。試料番号3・2でも若干検出されたが、そのイネ属花粉は、上層からの攪乱によって移動した花粉であると考えられる。

引用文献

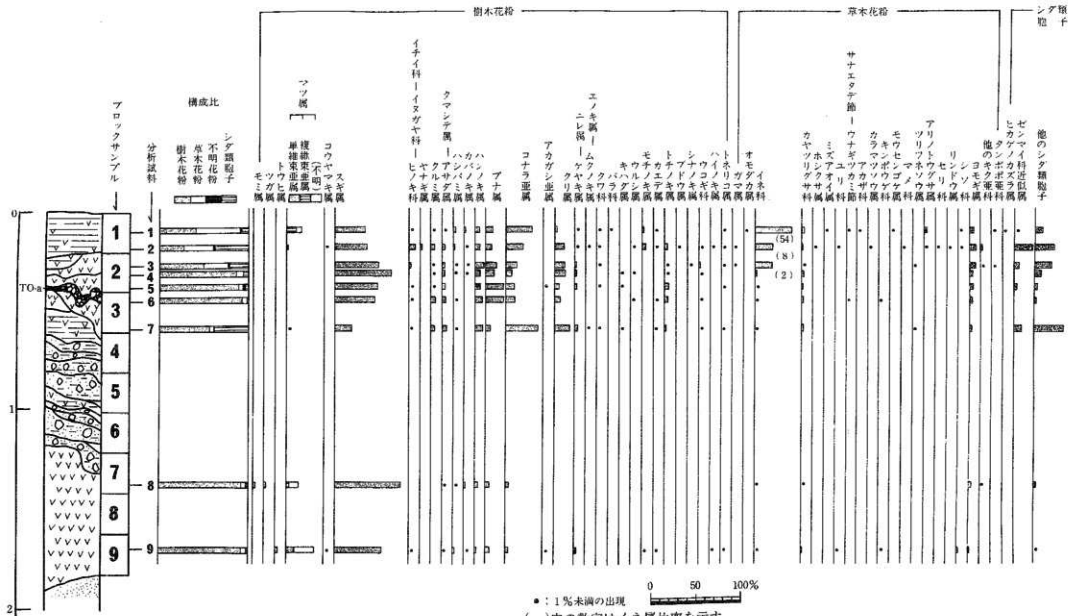
鈴木功夫・中村　純（1977）　稲科花粉の堆積に関する基礎的研究．文部省科研費特定研「古文化財」「稲作の起源と伝播に関する花粉分析的研究――中間報告――」（中村　純編）　p.1―10.

辻　誠一郎（1981）　秋田県の低地における完新世後半の花粉群集．東北地理，33―2　p.81―88.

辻　誠一郎（1977）　秋田県玉川温泉地域の沖積腐湯層の花粉分析．東北地理，29，　p.162―167.

第5表　水田部分第2トレンチ花粉分析結果

種類(Taxa)	試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9
樹木花粉										
モミ属		-	-	-	-	-	-	-	3	-
ツガ属		-	-	-	-	-	-	-	2	-
トウヒ属		-	-	-	-	-	-	-	-	5
マツ属単維管束亜属		-	-	-	-	-	-	-	-	22
マツ属複維管束亜属		19	-	-	-	-	-	-	4	-
マツ属（不明）		11	2	-	-	-	-	2	22	64
コウヤマキ属		-	1	-	-	-	-	-	-	2
スギ属		60	66	95	199	111	98	46	140	140
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科		1	11	2	-	2	1	2	-	1
ヤナギ属		-	2	-	-	-	-	-	-	-
クルミ属		1	5	1	1	2	9	8	-	-
クマシデ属－アサダ属		1	3	4	6	7	6	11	1	2
ハシバミ属		4	2	1	1	-	1	1	1	4
カバノキ属		2	1	1	1	-	-	-	2	2
ハンノキ属		8	9	19	16	13	18	20	5	4
ブナ属		13	12	22	30	47	44	14	7	10
コナラ亜属		53	36	24	19	22	22	95	6	7
アカガシ亜属		-	-	-	-	2	-	-	-	1
クリ属		4	19	22	38	13	14	45	-	-
ニレ属－ケヤキ属		1	1	2	4	4	-	8	-	5
エノキ属－ムクノキ属		-	1	-	-	-	-	1	-	-
クワ科		1	1	1	-	1	-	1	-	-
バラ科		1	-	-	-	-	-	-	-	-
キハダ属		-	-	-	1	1	-	1	-	-
ウルシ属		-	1	-	1	-	1	-	-	-
モチノキ属		2	5	-	-	-	-	-	-	1
カエデ属		1	1	-	-	-	1	2	-	1
トチノキ属		-	3	1	3	10	7	3	-	-
ブドウ属		-	1	-	-	-	-	-	-	-
シナノキ属		-	-	1	-	-	-	-	-	-
ウコギ科		-	1	2	3	-	2	1	-	-
ハイノキ属		-	1	-	-	-	-	-	-	2
トネリコ属		1	1	1	-	2	-	1	-	1
草本花粉										
ガマ属		-	2	1	-	-	-	-	-	-
オモダカ属		2	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ科		189	139	79	9	1	1	3	1	2
カヤツリグサ科		8	8	3	8	3	4	10	2	3
ホシクサ属		-	2	-	-	-	-	-	-	-
ミズアオイ属		1	-	-	-	-	-	-	-	-
ユリ科		-	1	-	-	-	-	-	-	1
サナエタデ節－ウナギツカミ節		1	-	-	-	-	1	-	-	-
アカザ科		1	-	-	-	-	-	-	-	-
カラマツソウ属		-	6	-	-	-	-	-	-	-
キンポウゲ科		-	-	-	-	-	1	-	-	2
モウセンゴケ属		1	-	-	-	-	-	-	-	-
マメ科		-	2	-	-	-	-	-	-	-
ツリフネソウ属		-	-	2	-	-	-	1	-	-
アリノトウグサ属		14	7	-	-	-	-	-	-	-
セリ科		-	2	-	-	-	-	-	-	-
セリンドウ属		-	1	-	-	-	-	-	-	-
シソ科		1	1	-	-	-	-	-	-	4
ヨモギ属		22	58	28	14	10	7	9	6	4
他のキク亜科		-	8	2	-	-	-	-	1	-
タンポポ亜科		1	-	1	-	-	-	-	-	-
不明花粉		6	5	3	1	5	1	7	5	6
シダ類胞子										
ヒカゲノカズラ属		1	-	-	-	-	-	-	-	-
ゼンマイ属近似種		3	141	21	-	7	-	37	-	-
他のシダ類胞子		37	148	72	28	7	4	154	5	2
合計										
樹木花粉		184	186	199	323	237	224	262	193	274
草本花粉		241	237	116	31	14	14	23	10	16
不明花粉		6	5	3	1	5	1	7	5	6
シダ類胞子		41	289	93	28	14	4	191	5	2
総花粉・胞子		472	717	411	383	270	243	483	213	298



第48図　水田部分第2トレンチ花粉化石群集変遷

4　鉱物分析

4--1　分析方法

分析は、次の手順で行われた。

(1)　40gを秤量。

(2)　超音波洗浄と分析篩（1/16㎜）による篩別を繰り返し、泥分を除去。

(3)　80℃で常温乾燥。

(4)　分析篩により、1/4—1/8㎜の粒子を篩別。

(5)　テトラブロモエタン（比重2.96）で比重分離。

(6)　重鉱物・軽鉱物それぞれ250粒について偏光顕微鏡で同定し、重鉱物組成および軽鉱物を求める。

(7)　火山ガラスについて、新井（1972）の方法に従い屈折率を測定する。

4—2　分析結果

重鉱物組成ダイヤグラムを第50図に、その内訳を第6表に示した。また軽鉱物組成ダイヤグラムを第51図に、その内訳を第7表に示した。

・試料番号10

この試料に含まれる重鉱物は、量の多い順に斜方輝石、単斜輝石、不透明鉱物（おもに磁鉄鉱）である。わずかにカンラン石や角閃石が含まれる。

比較的分厚いバルブ型（平板状）火山ガラスや分厚い中間型火山ガラスも少量認められるものの、軽石型火山ガラスが占める割合が大きい。軽石型火山ガラスのなかでは、スポンジ状に発泡したものが特に多く、繊維束状に発泡した火山ガラスも認められる。なおその他に含めた粒子のなかには、風化が進んだ軽石も多く含まれており、実際に試料中に火山ガラスが占める割合は、より大きい。

火山ガラスの屈折率（r）1.499—1.508であるが、ごくわずかに1.508より高い屈折率をもつ火山ガラスも認められる。

・試料番号11

この試料に含まれる重鉱物は、量の多い順に斜方輝石、単斜輝石、不透明鉱物（おもに磁鉄鉱）である。わずかにカンラン石や角閃石が認められる。

比較的分厚いバルブ型火山ガラスや、分厚い中間型火山ガラスも少量認められるものの、軽石型火山ガラスの占める割合が大きい。軽石型火山ガラスのなかでは、スポンジ状に発泡した

ものが特に多く、繊維束状に発泡した火山ガラスも認められる。なお、その他に含めた粒子のなかには、風化が進んだ軽石も多く含まれており、実際に試料中に火山ガラスが占める割合は、より大きい。

火山ガラスの屈折率（r）は1.498—1.508である。またわずかに1.508より高い屈折率をもつ火山ガラスも認められる。

4—3　示標テフラとの対比

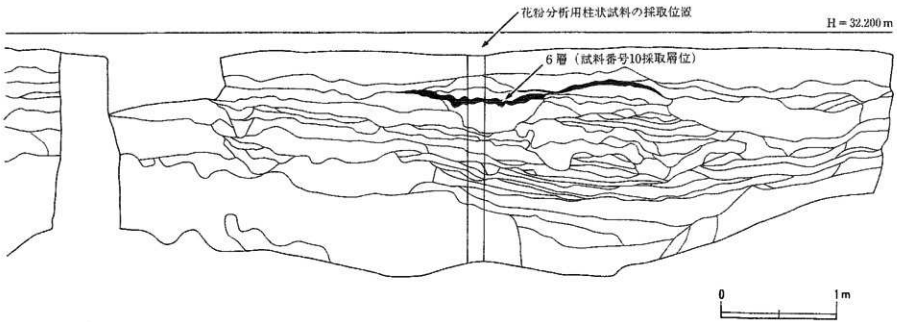
重鉱物組成上の特徴、特に斜方輝石や単斜輝石に富み、角閃石をわずかしか含まないことや、火山ガラスの形態さらに屈折率から、2つの分析試料は同じテフラと考えられる。これらのテフラは、A.D. 915年に噴出したと考えられている十和田a火山灰（To-a：町田ほか，1981，町田ほか，1984）に対比され、考古学的所見と調和的である。なお1.509より高い屈折率をもつ火山ガラスがごく少量認められているが、これは11—12世紀に朝鮮半島の白頭山から噴出した白頭山—苫小牧火山灰（B-Tm：町田ほか，1981，町田ほか，1984）あるいはその他にテフラに由来する可能性も考えられる。軽石の風化が比較的進んでいることや、角閃石が含まれること、さらにB-Tm起源と考えられる火山ガラスが含まれることなどから、この試料には混入物が多く含まれている可能性もある。確実な火山灰層位学的な研究を行うためには、詳細な野外観察を基にした分析が必要である。

引用文献

新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定——テフロクロノロジーの基礎的研究—．第四紀研究，11，p. 254—269

町田　洋・新井房夫・森脇　広（1981）日本海を渡ってきたテフラ．科学，51，p. 562—569

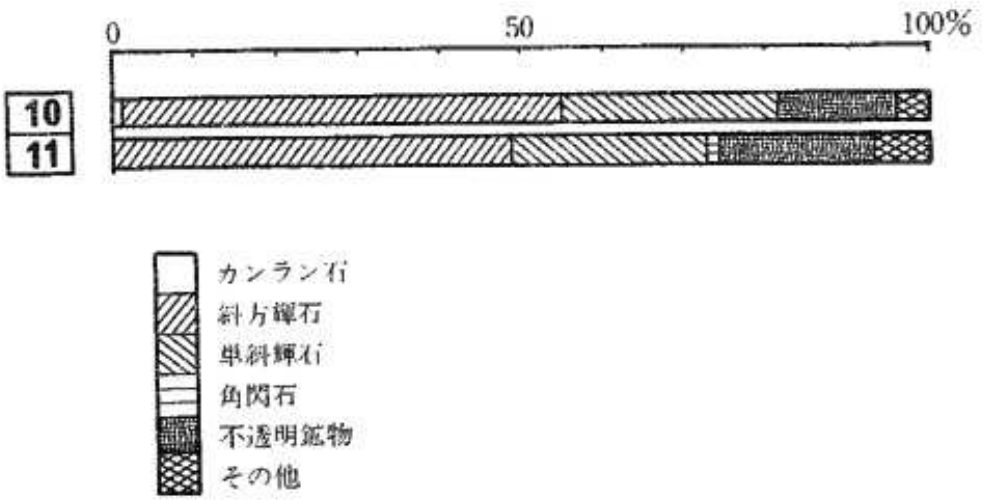
町田　洋・新井房夫・小田静雄・遠藤邦彦・杉原重夫（1984）テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ—．古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」，p. 865—928



第49図　水田部分第2トレンチの断面

試料番号	重鉱物組成						同定鉱物粒数
	カンラン石	斜方輝石	単方輝石	角閃石	不透明鉱物	その他	
10	3	134	67	1	35	10	250
11	1	121	60	4	47	17	250

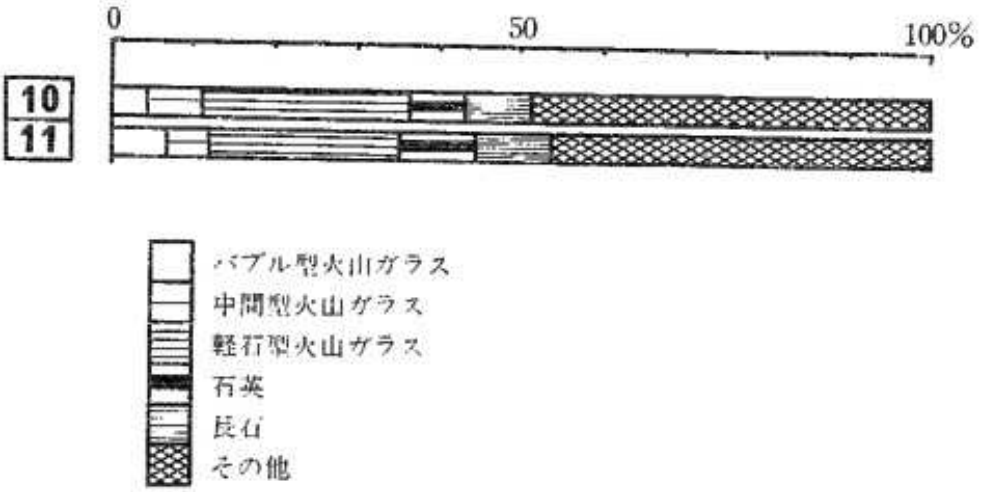
第6表　重鉱物組成の内訳



第50図　分析資料の重鉱物組成ダイヤグラム

試料番号	軽鉱物組成						同定鉱物粒数
	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	石英	長石	その他	
10	11	17	63	17	20	122	250
11	17	13	58	23	23	116	250

第7表　軽鉱物組成の内訳



第51図　分析資料の軽鉱物組成ダイヤグラム

第4章　まとめ

本遺跡は、西方の出羽山地から連続して延びる標高30～42mの丘陵上にある。丘陵の北西部と南西部は小谷によって区切られ馬の背状となっており、横手盆地を眼下に見渡すことができある大変眺望の良いところである。A区南側斜面下の小沢であった水田を隔てた向かい側には下田遺跡が存在する。

調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡2軒、土坑30基、フラスコ状土坑1基、焼土1基とその他に多くの柱穴様ピットがあり、他に平安時代の土坑3基を検出した。これらの遺構はほとんどA区の尾根部から南側斜面にかけて存在し、B区ではフラスコ状土坑1基のみで、C区では遺構は検出されなかった。以下に、検出した遺構とその時期などについて、若干の整理をしてまとめに変えたいと思う。

平安時代の土坑2基（SK20・24）からは火山灰が検出された。また、水田部分においても上位泥炭層に火山灰が挟在されているのが確認され、分析により両火山灰とも「A.D 915年に噴出したと考えられている十和田a火山灰（To—a）」という分析結果を得た。また、火山灰より下位の礫層中などから石器の原材料になりそうな礫が多く採集された。これらはいずれも頁岩性で、ややもろくなっているものが多いが、実際にこれらの礫が本遺跡のみならず、下田遺跡内にも持ち込まれて使用された可能性がある。

前記のようにA区の尾根部から南側斜面にかけて遺構が集中して検出されたが、縄文時代の土器・石器（含・フレイク）、礫（S）の分布をみると、第52図～第55図のようになる。土器は1・2層では遺構の多いA区南側斜面にまとまっており、次いで南東斜面に比較的多く、北斜面では少量しか出土していない。B・C区では分布範囲も数グリッドで、量はきわめて僅少である。遺構のないA区の急な南東斜面と北斜面の2層（遺物包含層）中に土器の出土が比較的多かったのは、尾根部寄りから斜面に流れたものであろうし、何よりも1層（表土）中からの出土が多かった事は、後世の畑地造成時における攪乱が激しかったことを示しているものと考えられる。また、B・C区は畑地造成により2層がほとんどなく、1層も浅く、土器の出土がきわめて少なかったが、遺構はB区のフラスコ状土坑1基のみで、生活の場としては使われていなかった事が大きく起因しているものであろう。石器や礫の分布状況もほぼ土器と同様である。礫は上記の礫層中から採集されたような角礫だけでなく、円礫などその形はバラエティに富んでいることから、他地域から運ばれたものも多く入っていると思われる。

さて、土坑は出土遺物から縄文時代に属するものが多く、その中でも晩期に属するものが8基（SK04・06～09・19・30・33）あり、いずれも晩期前半に属するものであろう。その他の土坑に

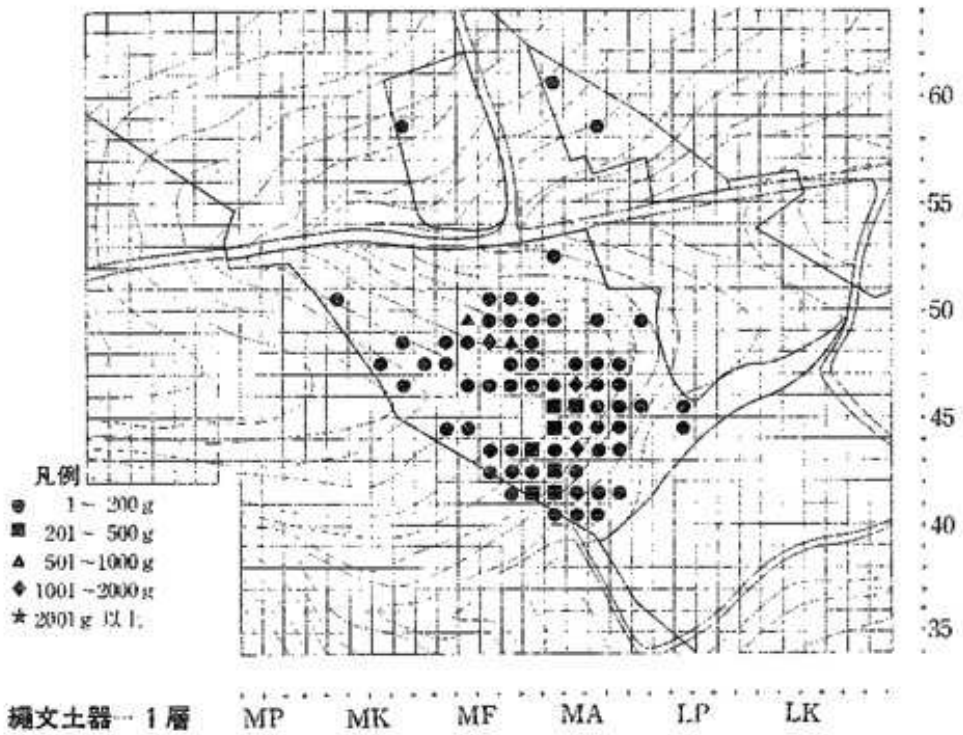
ついては、時期を明確にできなかったが、遺跡内の出土遺物から後期から晩期に属するものであろう。このうち、SK06・08は開口部の壁周囲にピットを伴い、SK08には中央にもピットがある。両遺構は規模や断面形・底面の状態は異なるが、平面形は円形で周囲にピットを伴う点では共通しており、それらのピットは上屋の存在を想起させる。県内での類例は、鹿角市・用野目川向Ⅲ遺跡のSK101竪穴遺構(註1)(縄文時代晩期--大洞C_2式期)に求められるが、規模や断面形において違いがみられる。

柱穴様ピット群は土坑とかなり重複して複雑な様相をしており、その性格を明らかにはできなかった。一部を除いてほとんど柱痕が認められず、埋められた状況を呈するものが多く、建物跡とするにはいたらなかった。近年、県内でも縄文時代の建物跡の検出例は増えつつあり、祭祀施設あるいは住居として捉らえられている。

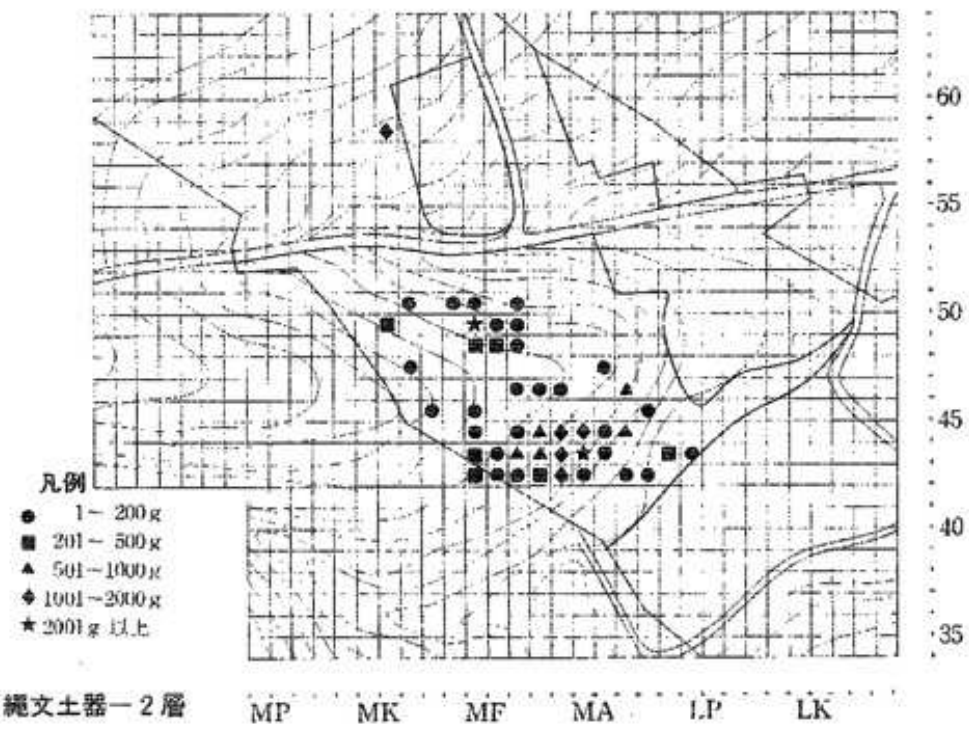
2軒の竪穴住居跡は、住居跡内の出土遺物からは明確に時期を特定できなかった。しかし、竪穴住居跡の形態・周辺の遺物出土状況などからある程度、時期を窺うことはできるように思える。SI10竪穴住居跡は平面形は略円形のプランを呈し、中央寄りに石囲炉と、小ピットを伴う壁溝をもつ。また、出入口とおもわれる「ハ」の字形の張り出し部が付設されている。このような形態をもつ竪穴住居跡の類例は、県内では小坂町・白長根館Ⅰ遺跡(註2)の縄文時代後期中葉のSI06・SI07が挙げられ、SI10より規模は小さいが形態は似ており、「関東地方を中心に、中期末から後期初頭にかけてみられる所謂柄鏡形住居跡に類似する」ことが指摘されている。次にSI01はほぼ中央に石囲炉をもっているが、SI10竪穴住居跡とは平面形・規模・張り出し部が無いなどの点で異なる。出土土器は胴部に綾絡文を施文する粗製の深鉢形土器で、これだけでは時期を特定する決め手を欠くが、他の遺構内の遺物出土状況から、後期から晩期前半に属するものと考えられる。

註1　秋田県教育委員会　『西由地区農免道路整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅳ--用野目川向Ⅲ遺跡一』　秋田県文化財調査報告書第182集　1989（平成元年）

註2　秋田県教育委員会　『東北縦貫自動車道発掘調査報告書XII』
秋田県文化財調査報告書第120集　1984（昭和59年）

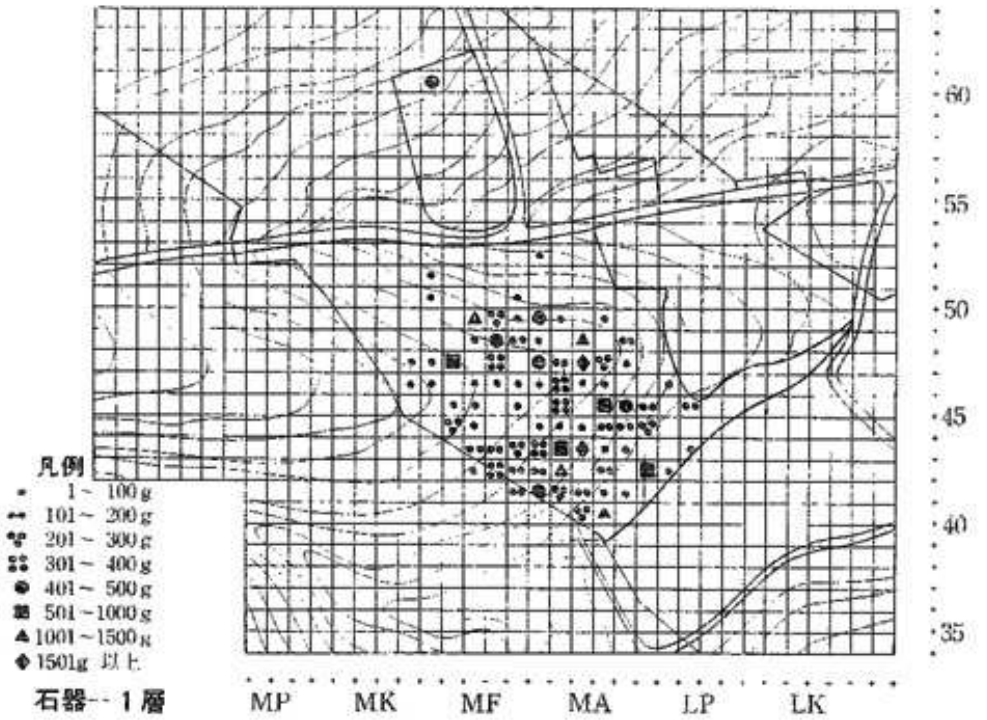


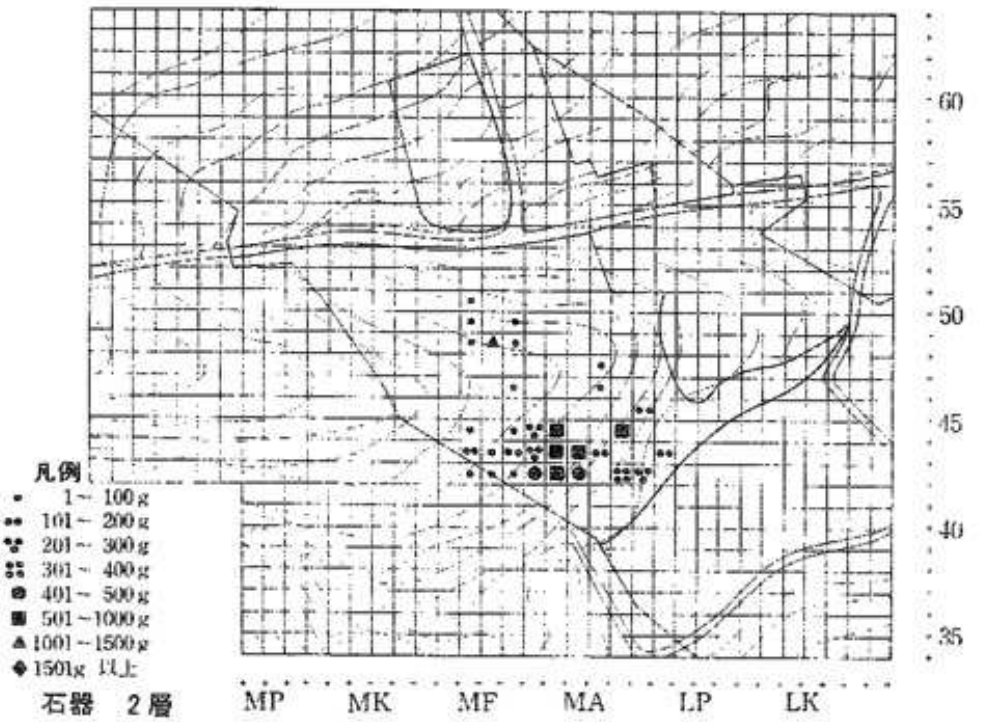
縄文土器一1層



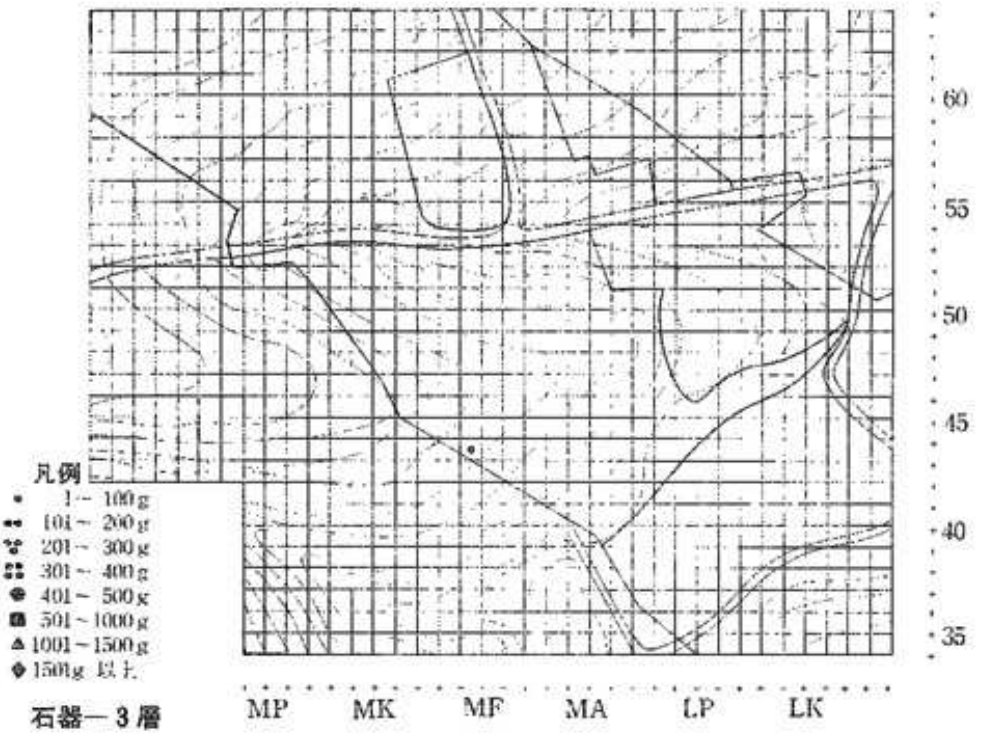
縄文土器一2層

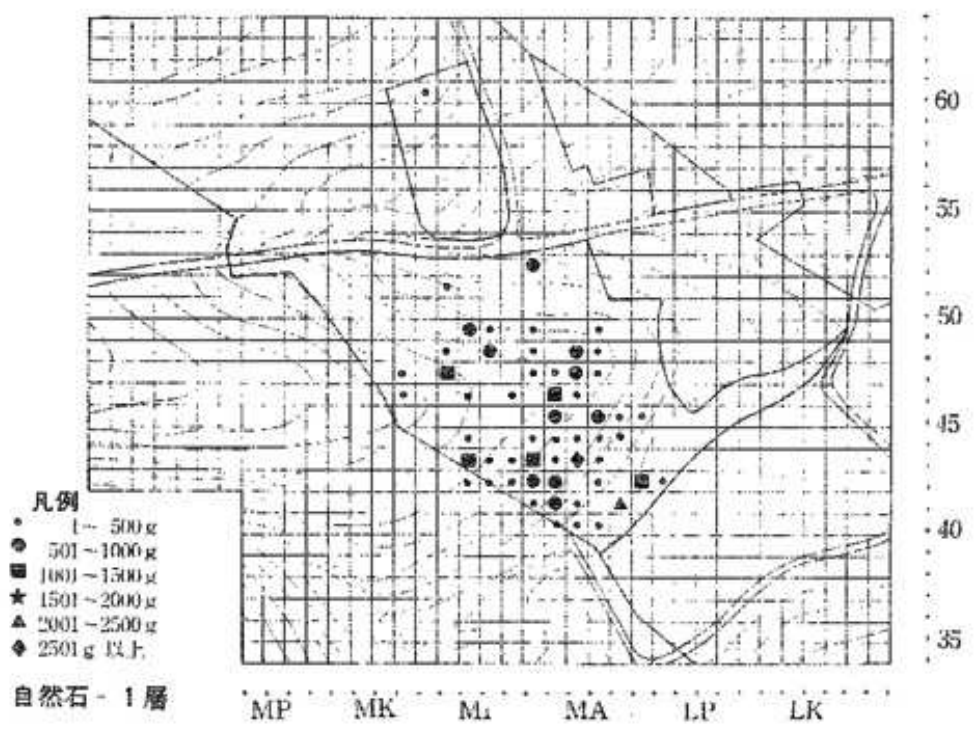
第52図　出土遺物分布図(1)



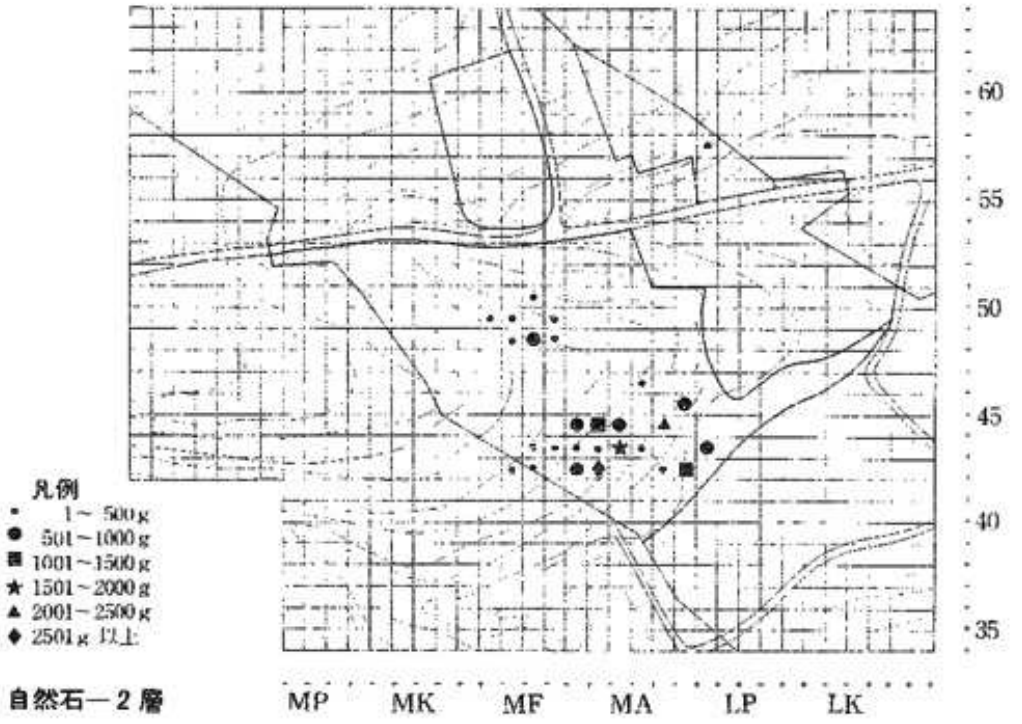


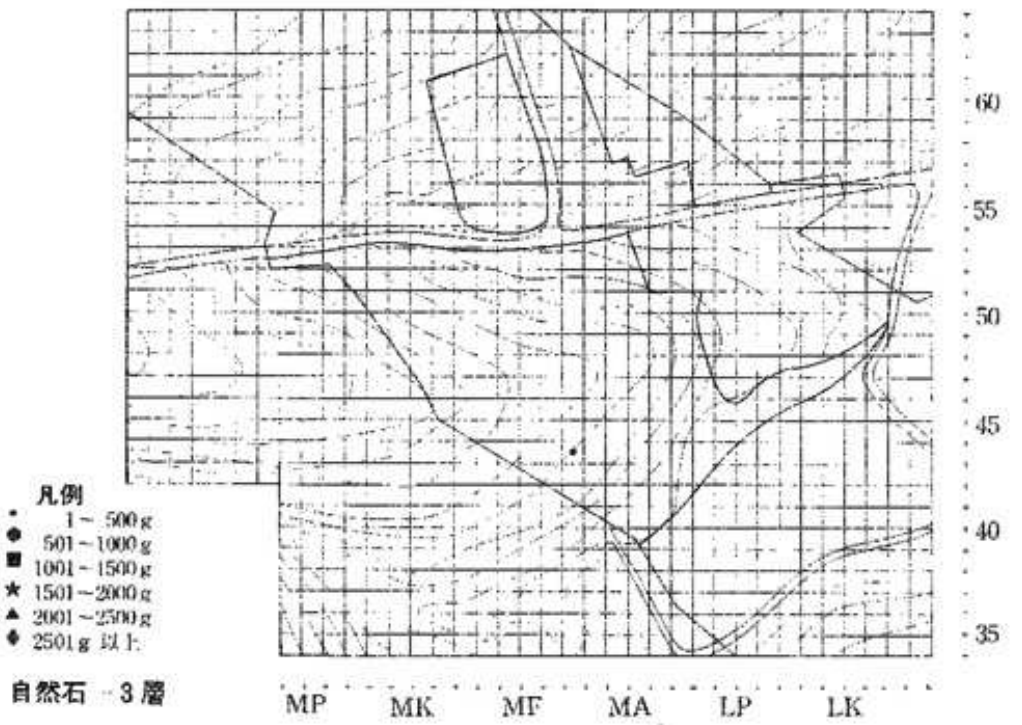
第53図　出土遺物分布図(2)





第54図　出土遺物分布図(3)





第55図　出土遺物分布図(4)

1　遺跡遠景　（東▷西）

2　A区（右）と水田部分の調査前　（北東▷南西）

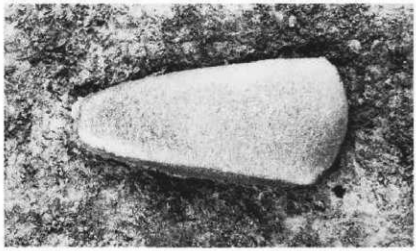
1　A区南側斜面調査後（南西▷北東）

2　A区北側斜面調査後（東▷西）

1　A区北側斜面調査後（東▷西）

2　B・C区調査後（南▷北）

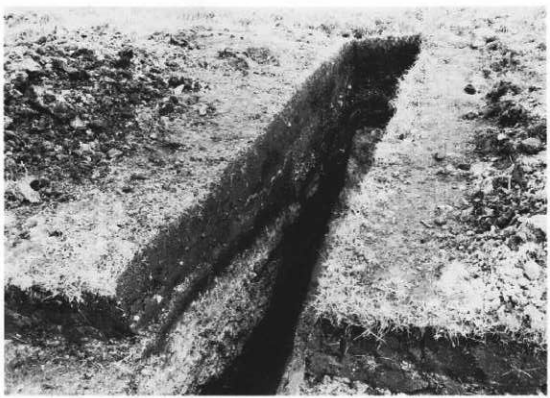
1　MJ58 グリッド RP9 遺物出土状況（南▷北）



2　MC42 グリッド RQ5 遺物出土状況（北▷南）

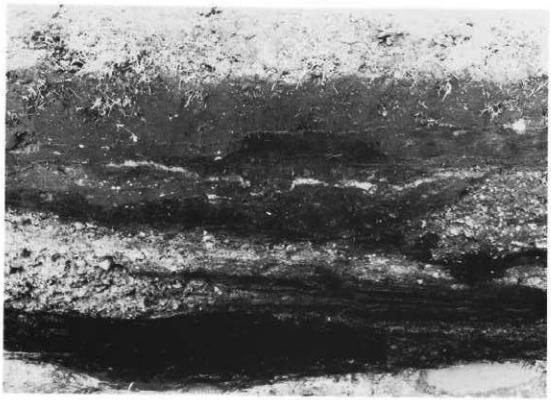
3　MB43 グリッド RQ3 遺物出土状況（南▷北）

1　水田部分第1～3トレンチ（南西▷北東）

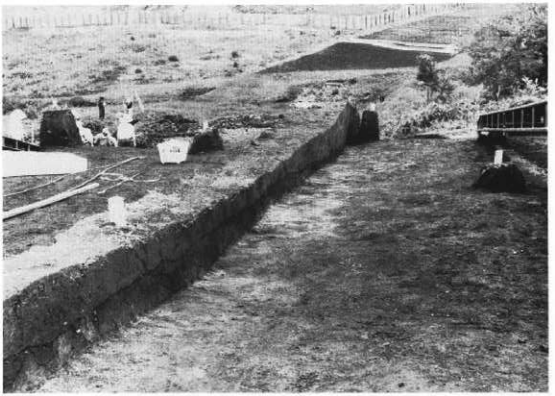


2　水田部分第2トレンチ南東部（南西▷北東）

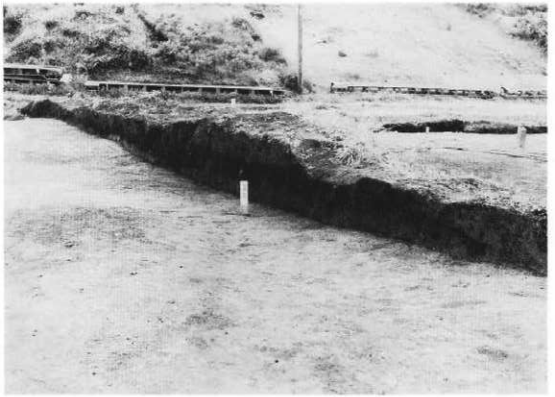
1　水田部分第2トレンチ南東部状況（北西▷南東）



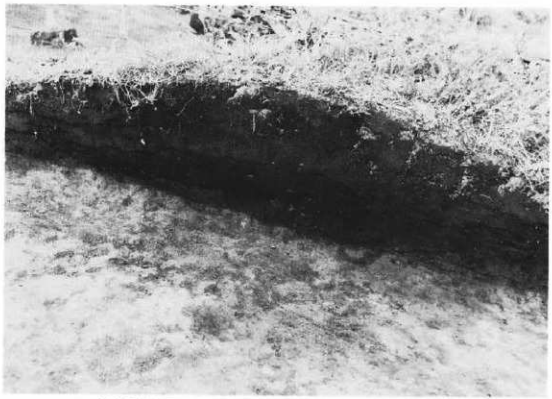
2　水田部分第2トレンチ南東部（南西▷北東）



1　基本層位土層断面―A区北側斜面―（南西▷北東）



2　基本層位土層断面―A区北側斜面―（南▷北）



1　基本層位土層断面—A区 LT42・MA42 グリッド—（北西▷南東）

2　深掘箇所土層断面—B区 MH57 グリット西壁—（東▷西）

1　SI01 竪穴住居跡検出状況（南▷北）

2　SI01 竪穴住居跡完掘後（東▷西）

1　SI01 竪穴住居跡炉検出状況（東▷西）

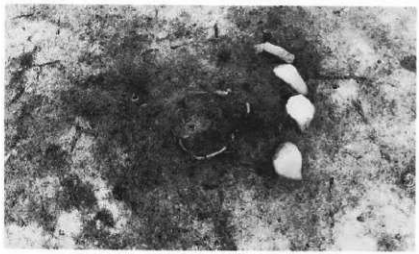
2　SI01 竪穴住居跡炉土層断面（東▷西）

3　SI01 竪穴住居跡石皿・土器出土状況（南東▷北西）

1　SI10 竪穴住居跡完掘状況（南東▷北西）

2　SI10 竪穴住居跡炉土層断面（北東▷南西）

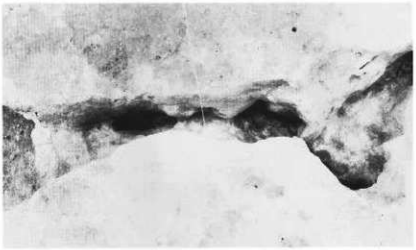
1　SI10 竪穴住居跡炉検出状況（南西▷北東）



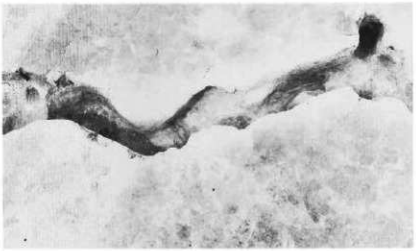
2　SI10 竪穴住居跡炉検出状況（北東▷南西）

3　SI10 竪穴住居跡炉土層断面（北東▷南西）

1　SI10 竪穴住居跡 pit21・pit1（東▷西）



2　SI10 竪穴住居跡 pit2.3 間の壁溝（北▷南）

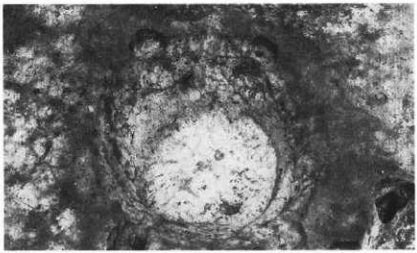


3　SI10 竪穴住居跡 pit5 以北の壁溝（東▷西）

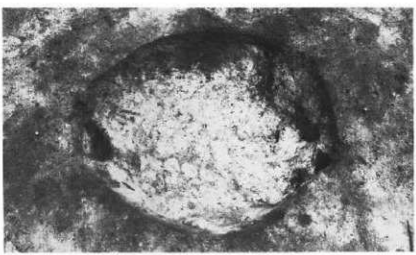
1　SI10 竪穴住居跡 C-D 土層断面（北西▷南東）

2　SI10 竪穴住居跡　壁溝 pit G-H 土層断面（南▷北）

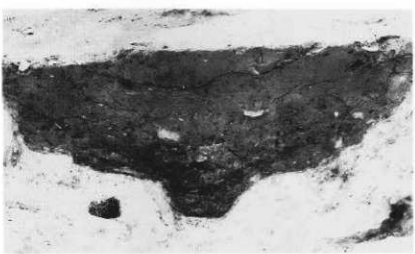
3　SI10 竪穴住居跡　壁構内 I-J 土層断面（南東▷北西）



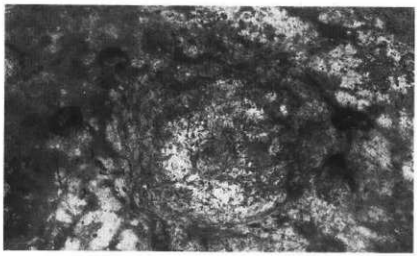
1　SK06 土坑完掘（南▷北）



2　SK07 土坑完掘（西▷東）

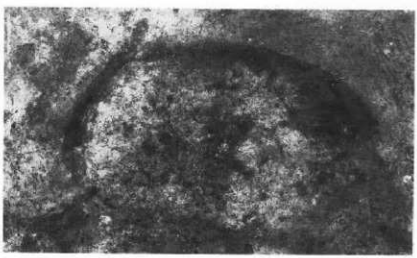


3　SK08 土坑土層断面（北東▷南西）



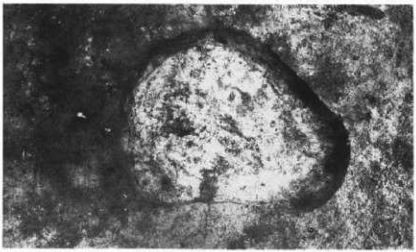
1　SK08 土坑完掘（西▷東）

2　SK14 土坑完掘（東▷西）



3　SK15 土坑完掘（南東▷北西）

1　SK17土坑完掘（東▷西）



2　SK18土坑完掘（南▷北）

3　SK19土坑完掘（東▷西）

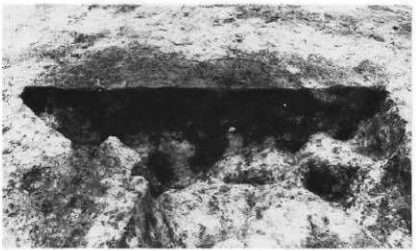
1　SK20 土坑火山灰検出状況（南東▷北西）

2　SK24 土坑火山灰検出状況（南▷北）

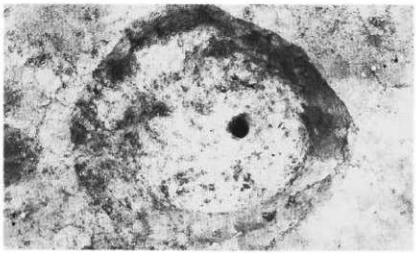
3　SK25 土坑完掘（東▷西）

1　SK26 土坑完掘（北▷南）

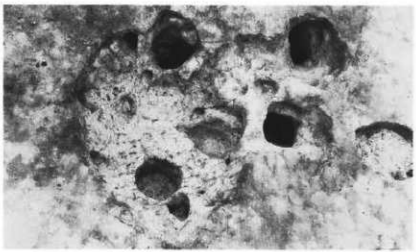
2　SK27 土坑完掘（南▷北）



3　SK27 土坑断面（南▷北）

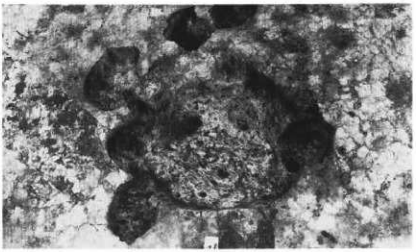


1　SK28 土坑完掘（東▷西）

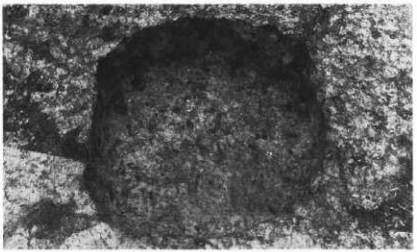


2　SK29 土坑 MD43 グリッド pit1・9・8（南▷北）

3　SK29 土坑 MD43 グリッド pit1～11（西▷東）



1　SK30 土坑完掘 pit 群（東▷西）

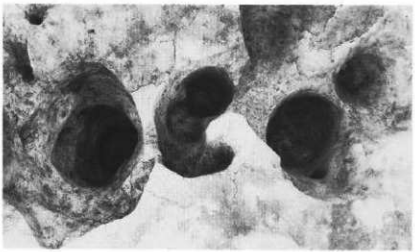


2　SK31 土坑完掘（南東▷北西）

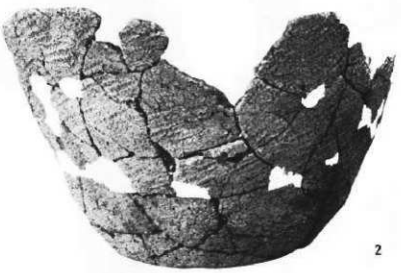
3　SK32 土坑完掘（南東▷北西）

1　SK34・35・36 土坑 MD46 グリッド pit 群（西▷東）

2　SKF38 フラスコ状土坑完掘（南▷北）

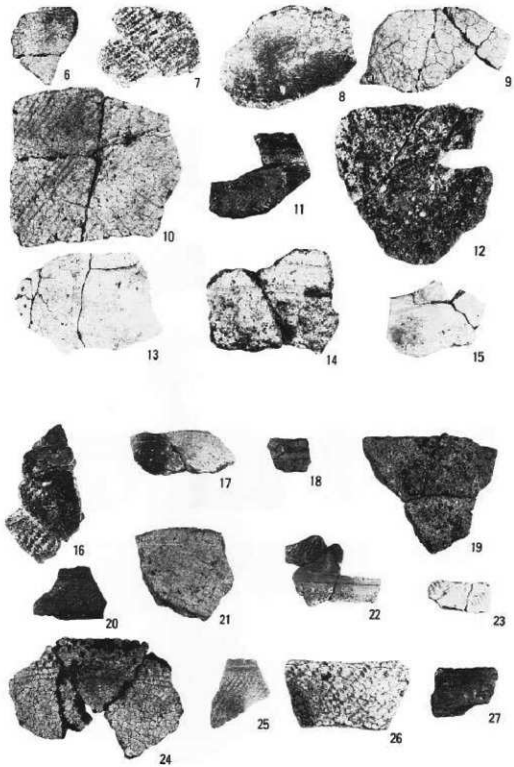


3　MD43 グリッド pit3, 4, 5 完掘（南▷北）

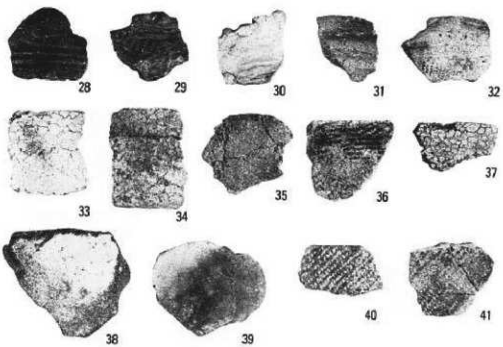


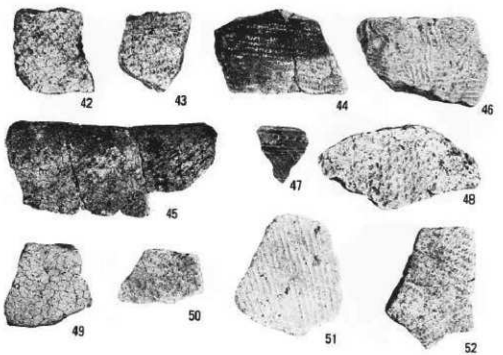
遺構内出土土器（1）

遺構内出土土器（2）

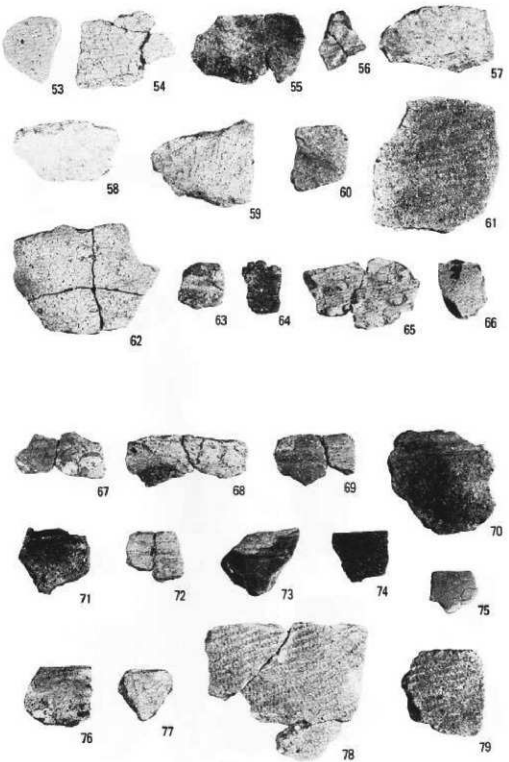


遺構内出土土器（3）

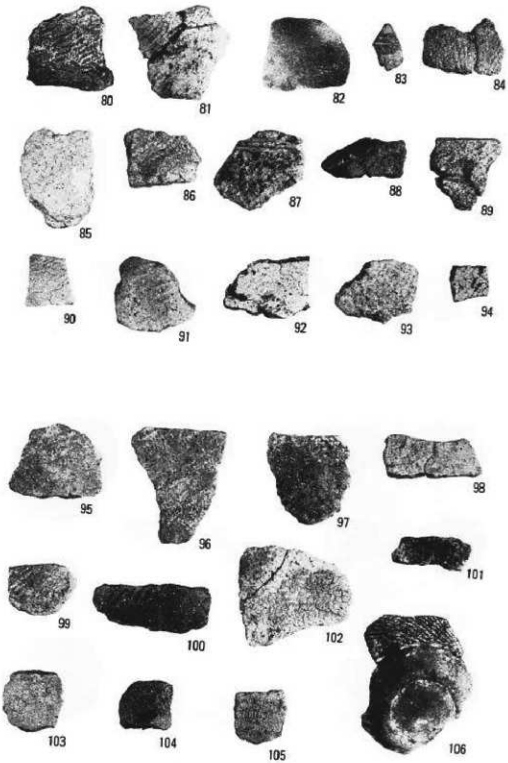

28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41


42
43
44
46
45
47
48
49
50
51
52

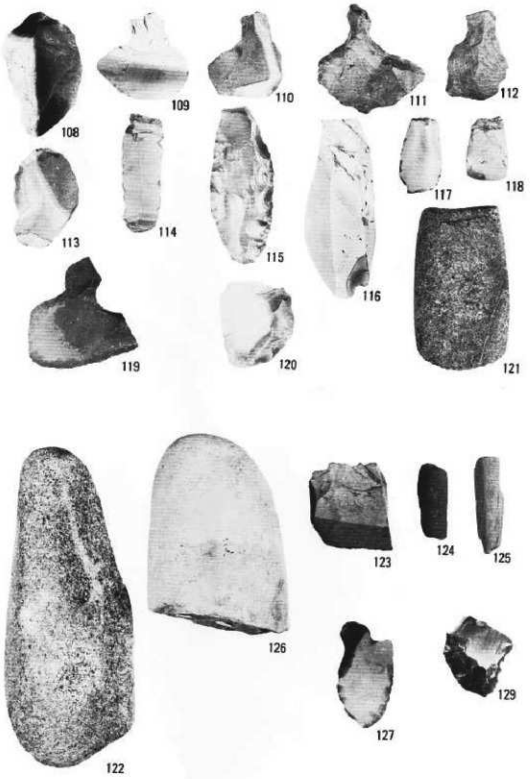
遺構内出土土器（4）


53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79

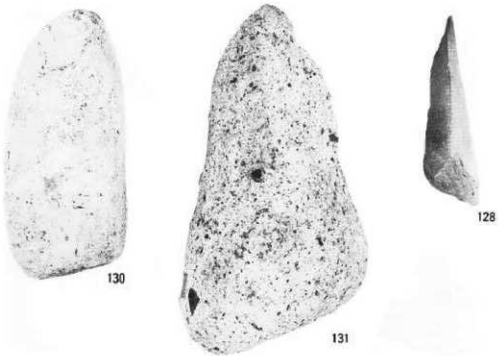
遺構内出土土器（5）


80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106

遺構内出土土器（6）

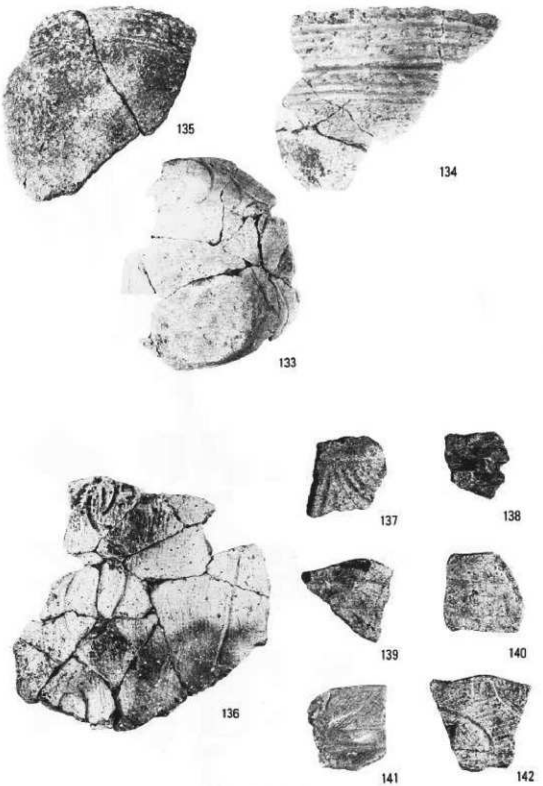

108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
129

遺構内出土石器（1）

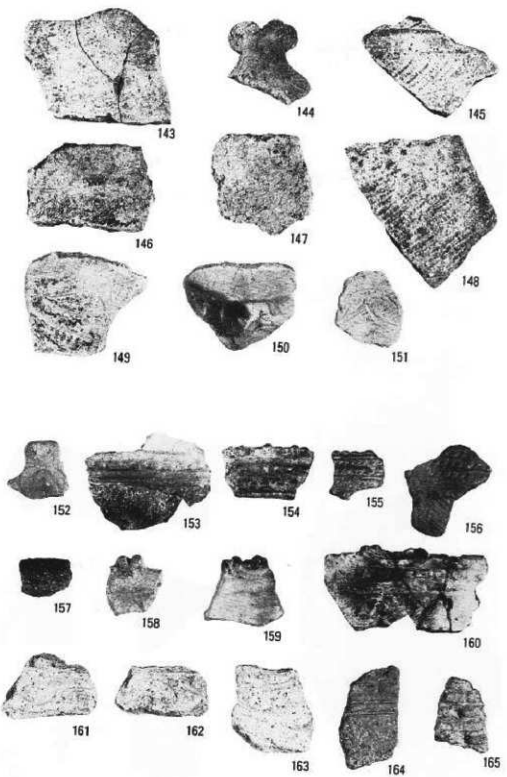


遺構内出土石器（2）

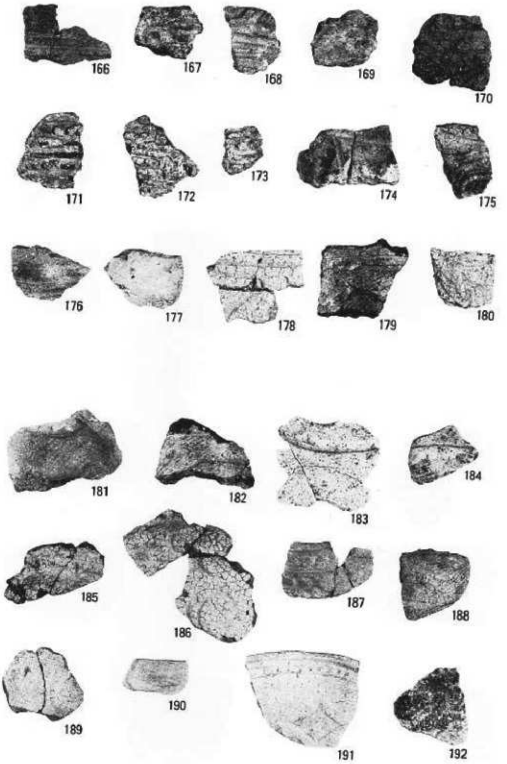
遺構外出土土器（1）



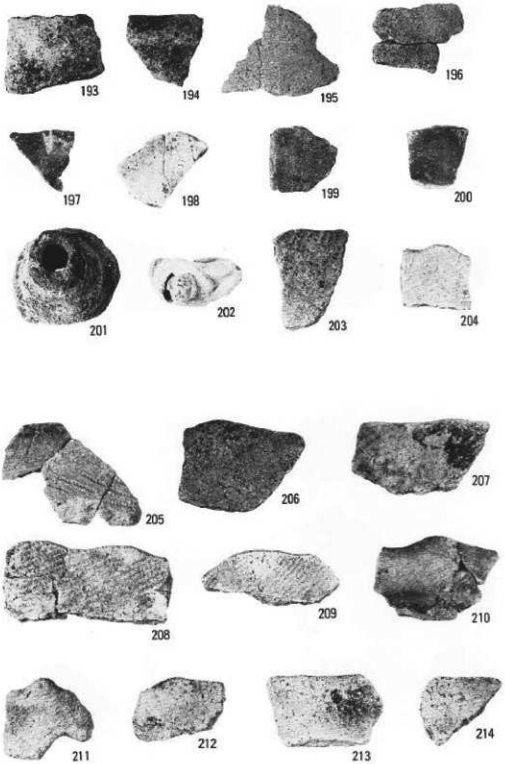
遺構外出土土器（2）


143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165

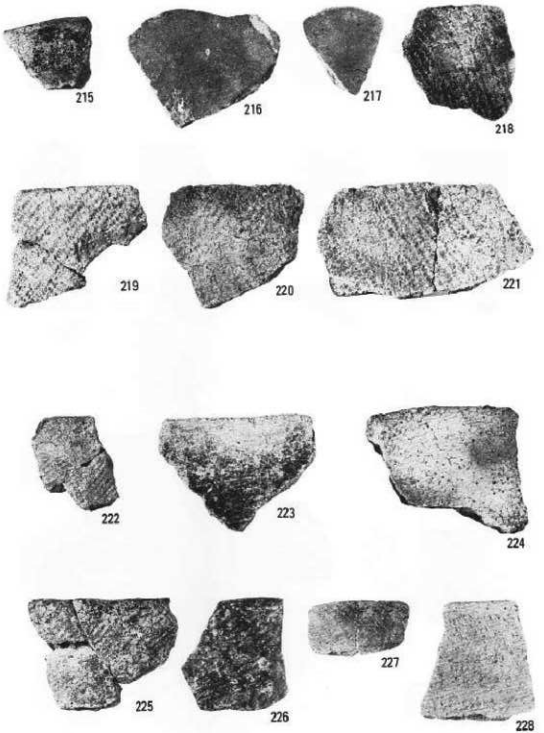
遺構外出土土器（3）


166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192

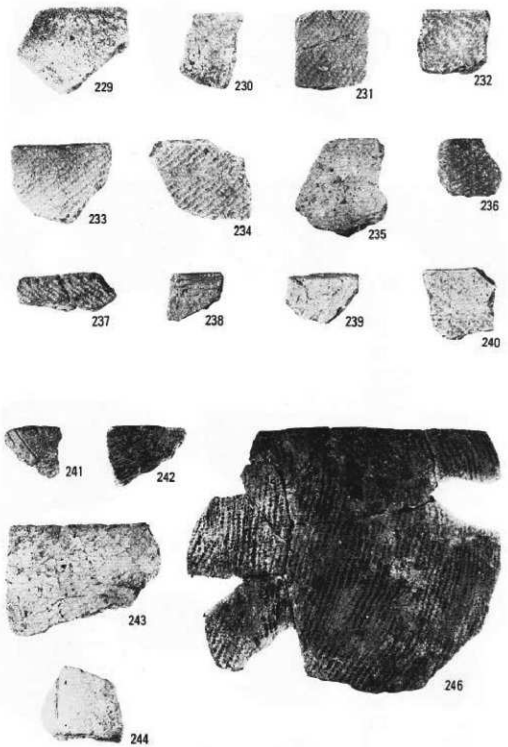
遺構外出土土器（4）


193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214

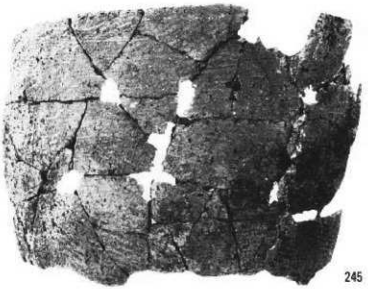
遺構外出土土器（5）



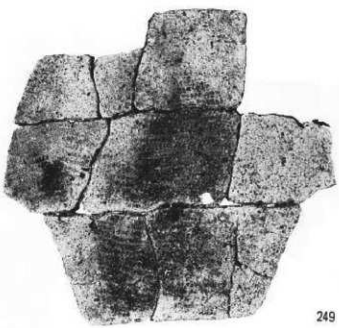
遺構外出土土器（6）


229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
246

遺構外出土土器（7）

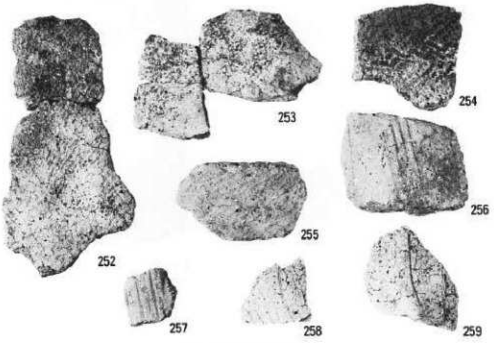


遺構外出土土器（8）



249

遺構外出土土器（9）



遺構外出土土器（10）

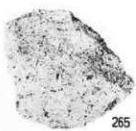
260

261

262

263

264


265

269

270

271

272

277

遺構外出土土器(11)

281

284

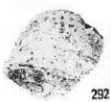
286

287

289

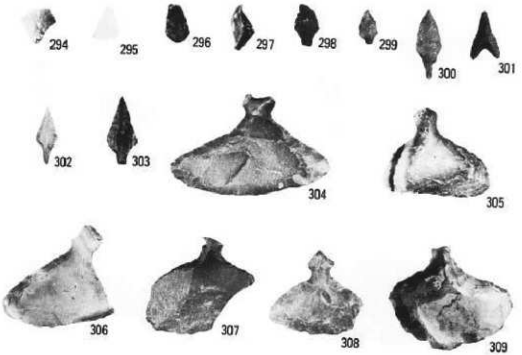
290

291

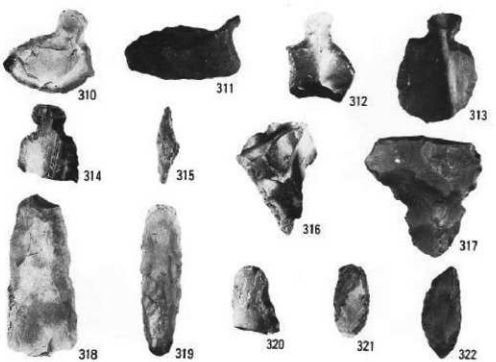

292

293

遺構外出土土器（12）



遺構内・外出土石器

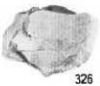


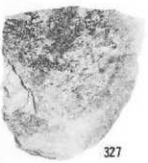
遺構外出土石器（1）

323

324

325


326


327

328

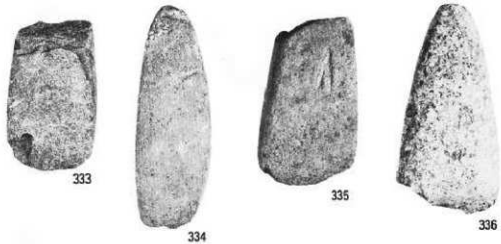
329

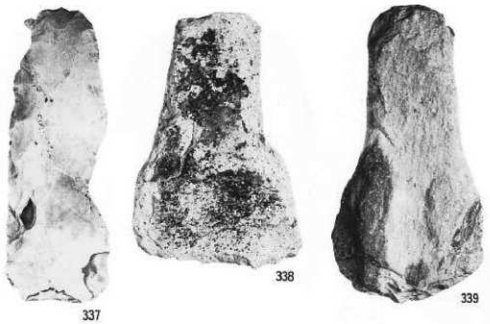
330

331

332

遺構外出土石器（2）





遺構外出土石器（3）

340

341

342

343

344

345

遺構外出土石器（4）

346

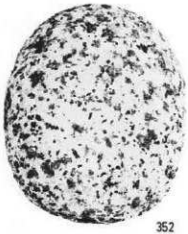
347

348

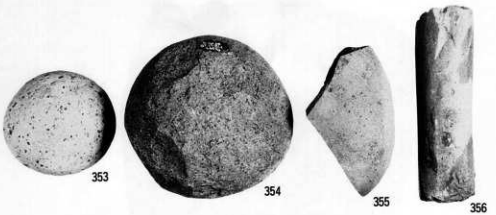
349

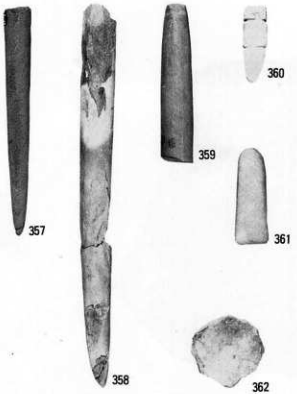
350

351


352

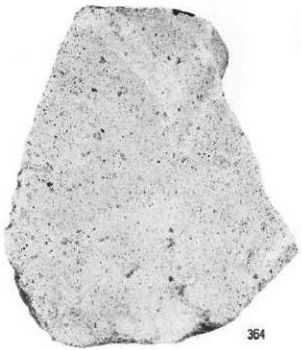
遺構外出土石器（5）



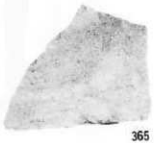


遺構外出土石器（6）

363

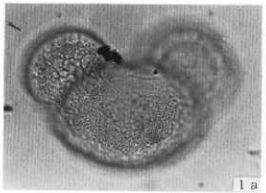


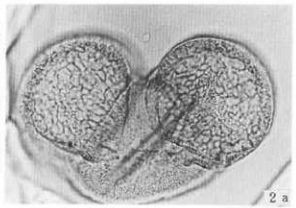
364

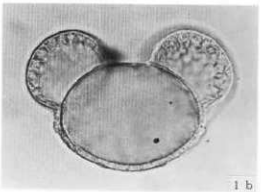


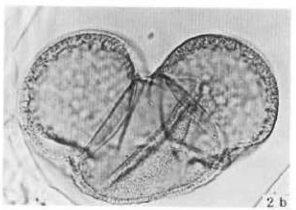
365

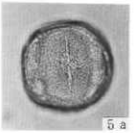
遺構内・外出土石器









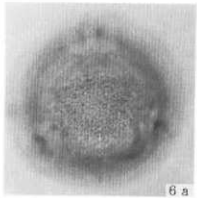


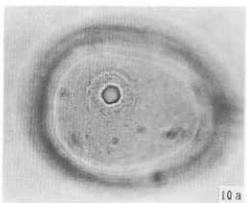
50μ（1，2，5）

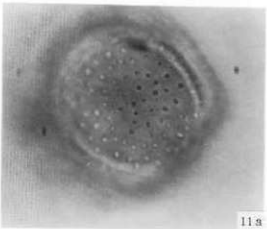
50μ（3，4）

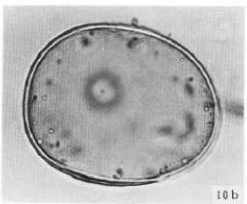
1a, b　マツ属複維管束亜属　試料番号 1　4a, b　スギ属　試料番号 9
2a, b　マツ属単維管束亜属　試料番号 9　5a, b　ブナ属　試料番号 5
3a, b　スギ属　試料番号 1

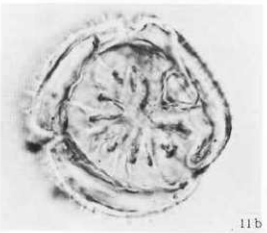
花粉顕微鏡写真（1）





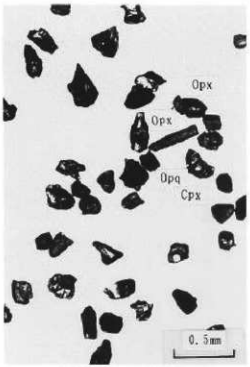






6a, b　ブナ属　　試料番号 5　9a, b　トチノキ属　試料番号 5
7a, b　コナラ亜属　試料番号 7　10a, b　イネ科　試料番号 1
8a, b　クリ属　　試料番号 5　11a, b　モウセンゴケ属　試料番号 1

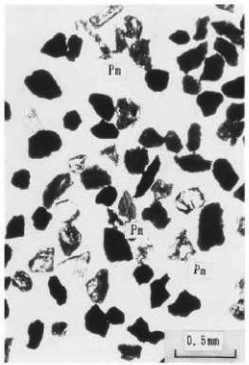
花粉顕微鏡写真 (2)



試料番号10　重鉱物

試料番号10　軽鉱物

試料番号11　重鉱物



試料番号11　軽鉱物

Opx：斜方輝石　Cpx：単斜輝石　Cpq：不透明鉱石　Pm：軽石型ガラス

鉱物顕微鏡写真